

# 武庫川女子大学紀要

人文・社会科学編

第 60 卷

武庫川女子大学

2012

# 武庫川女子大学紀要

人文・社会科学編

第 60 卷

THE BULLETIN OF MUKOGAWA WOMEN'S UNIVERSITY

Humanities and Social Science

LX

## 目 次

## CONTENTS

幼少期の読書とその効果

—1990 年代生まれの女子大学生の場合—

設樂 馨, 平井 尊士

The effects of reading during early childhood:

A study of women's university students born in the 1990s

Kaoru Shitara, Takashi Hirai (1)

王治本の周防訪問および地元文人との文藝交流

柴 田 清 継

An introduction to Wang Zhiben (王治本, 1835~1908)'s visits to the area of Suo at Meiji

18(1885), 19(1886) and the literary exchanges with the local literati done by him

Kiyotsugu Shibata (9)

Managing Successful Internet-based Distance Learning Programs

—From the Viewpoint of the History—

Toru Sasabe (17)

ハプスブルク領ネーデルラントの防衛と

フェリペとイングランド女王メアリー 1 世の結婚

—1550 年代の西ヨーロッパ国際関係—

山 田 慎 人

The defence of the Habsburg Netherlands and the marriage

between Philip of Spain and Mary I of England:

western European international relations in the 1550s

Norihito Yamada (23)

Raymond Carver “Why Don’t You Dance?” *Beginners* 版を読み解く  
—第1段落における間テキスト性及び冠詞の使用例

山 根 明 敏

An Analysis of the First Paragraph of “Why Don’t You Dance?”

(*Beginners’ Version*): Intertextuality and a Definite and an Indefinite Article

Akitoshi Yamane (33)

Designing Assessment Tools: The Principles of Language Assessment

Mitaka Yoneda (41)

English and Discourses of Identity in Japan

Nathanael Rudolph (51)

Kestenberg Movement Profile の記譜における  
学びの過程と分析対象者への調律に関する検討

崎山ゆかり, 中 めぐみ

A Study of Learning Process and Attunement to Clients  
in Notation of Kestenberg Movement Profile

Yukari Sakiyama, Megumi Naka (63)

固有名詞の識別性に基づく文の構造的曖昧性の処理

井 上 雅 勝

The effect of distinctiveness of proper nouns  
on processing structural ambiguity in comprehending Japanese sentences

Masakatsu Inoue (71)

「精神保健福祉」をめぐる概念・理論研究数の推移

大 西 次 郎

Shifts in Concept and the Number of Studies on Psychiatric Social Work Practices

Jiro Ohnishi (81)

自閉症エコラリアと健常児の音声模倣における自動性と意図  
—ジャクソニズムの立場からの考察—

萱 村 俊 哉

Automatism versus intention on the autism echolalia and vocal imitations in normal children:  
A consideration from Jacksonistic point of view

Toshiya Kayamura (89)

室内装飾における西洋風の受容と葛藤

待鳥 邦会, 横川 公子

Acceptance and conflict of Westernization in interior decoration

Kunie Machidori, Kimiko Yokogawa (95)

コミュニティ再編に果たす食育の役割と意義

福 田 也寸子

The significance of food education in the regional community

Yasuko Fukuda (107)

スマートフォンの普及による若者の電車内行動の変化  
—OOH への影響を考察する—

山川由起子, 赤岡 仁之

The spread of smartphones and the change of young people actions in a train

A consideration of the influence on OOH

Yukiko Yamakawa, Hiroyuki Akaoka (115)

桐園蔵版『御代の花』について

管 宗 次

On *Miyo no Hana* published by Tôen

Shuji Suga (130)

## 幼少期の読書とその効果 —1990年代生まれの女子大学生の場合—

設 樂 馨, 平 井 尊 士  
(武庫川女子大学文学部日本語日本文学科)

### The effects of reading during early childhood: A study of women's university students born in the 1990s

Kaoru Shitara, Takashi Hirai

*Department of Japanese Language and Literature, School of Letters  
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

#### Abstract

Reading is said to be important to the development and education of children. Moreover, fact-finding surveys performed on children are being cited, mainly by various local governments (i.e. boards of education).

This study examines students who hope to become librarians, a profession which connects children with reading, and investigates the context for practicing reading in early childhood. What sort of reading experiences did these students have during early childhood, and what encouraged them to practice reading? This study analyzes the investigation that these students filled out reading experience during early childhoods, from their current perspective as adults, focusing on this context.

Specifically, a descriptive survey was performed on students taking the librarian curriculum at Mukogawa Women's University over the two years of FY 2011 and 2012. The librarian curriculum is taken by about 150 to 200 students in the School of Letters Department of Japanese Language and Literature, and Junior College Division Department of Japanese Language. Students enrolled in the curriculum have a generally positive attitude toward reading. How does an appreciation for books, combined with the primary content and aims of the librarian curriculum, affect the disposition of the librarian?

Differences became clear, corresponding with the development of the students during preschool, lower elementary school, upper elementary school, and onward. For example, a variety of contexts corresponding with development were seen, such as influence from early childhood living situations that conferred on the children a desire to read, contact with family members who encouraged reading, and momentum toward reading imparted by relationships.

In summary, the study confirmed that the richness of early childhood experiences with reading among students in the librarian curriculum is important to their appreciation for reading, encouragement of appreciation for reading in others, and application of reading in learning activities. Finally, based on these results, promotion and enhancements of initiatives aimed at establishing reading during early childhood were proposed.

#### 1. はじめに

##### (1) 本研究の背景と目的

読書は、「子どもの成長にとって欠かせない大切な営みであり、「言葉の力」を育てる上でも大きな支

えになっている。また、子どもたちの読書習慣を確立させることは、学力を保障する上でも大切な役割を果たしていると考えられる<sup>1)</sup>と言われて久しい。こうした読書の必要性は、数々の地方自治体(教育委員会)や実践研究者が中心となって読書習慣定着の実態調査や実践報告を行っていることから明らかである。

本学では毎年、約 150 名から 200 名の学生が図書館司書課程(全学共通資格)を履修する\*。例えば図書館司書課程において必修で修得する科目「図書館概論」や「児童サービス論」\*\*は、本来の科目の内容やねらいに加えて、読書をすることの重要性とともに「利用者が本を好きになる」、「読書は楽しい」、「他者へも読書を推薦しようという態度」を育成する。

そして、履修学生自身は実際に本が好きであったり、読書を敬遠する人に本の魅力を知ってほしいと思っていたりする者が少なくない。こうした現状は、司書の役割として、科目修得によってそうした態度を醸成する一方、司書課程を修得する以前に、元来「本好き」が図書館司書課程を履修して資格保持者となって読書活動の推進を図ろうとする場合もあると考えられ、実際に授業を通じて学生を観察していると、読書の魅力を認識したうえで、その魅力を広めようという意識が感じられる。そうした学生が図書館司書になり、図書館で利用者に様々なサービスするようになった場合、どのような社会的効果が見込めるだろうか。

そこで、本稿では読書に魅力を感じる感性や読書活動を推進しようとする態度が、学生(図書館司書課程受講生)自身にいつごろからどのように培われたのかを意識調査によって分析し、学生が理想とする子どもたちへの図書館サービス、特に幼少期の児童(就学前や小学校低学年)へのサービスに照らしてどのような効果をもたらしているのか、考察する。

本研究では、学生たちが読書に接するようになった時期を「幼少期」と仮定し、幼少期の読書傾向と読書環境、および、現在のサービス傾向を調査し、幼少期の読書が司書の資質にどのような影響を及ぼしているのか、明らかにしたい。

## (2) 方法

2011 年度に「児童サービス論」を履修した 49 名と、2012 年に「図書館概論」を履修した 78 名の計 127 名の学生に、7 回に分けて記述による調査を行った。調査内容は、自分自身の読書経験の振り返りや、現在の児童観、自身が読解した本を児童にどうやって薦めるかの提案などで、本論文に關係する具体的な質問項目は、下記のとおりである(なお、便宜上、質問項目を問 1 から問 5 としているが、実際の調査の時系列はこの並びではない)。

---

\*司書について文部科学省<sup>5)</sup>は、「司書は都道府県や市町村の公共図書館等で図書館資料の選択、発注及び受け入れから、分類、目録作成、貸出業務、読書案内などを行う専門的職員です。司書補は司書の職務を補助する役割を担います。

司書・司書補になるための資格は司書講習を受講するほか大学・短大で単位を履修することで取得できますが、司書・司書補として活躍するには当該自治体の採用試験を受けて図書館に配属されないとはいけません。」としている。また、司書の主な職務内容は次の 1 から 6 にまとめられている。「1 図書館資料の選択、発注及び受け入れ 2 受け入れ図書館資料の分類及び蔵書目録の作成 3 目録からの検索、図書館資料の貸出及び返却 4 図書館資料についてのレファレンスサービス、読書案内 5 読書活動推進のための各種主催事業の企画、立案と実施 6 自動車文庫による巡回等の館外奉仕活動の展開など」

\*\*「司書資格取得のために大学において履修すべき図書館に関する科目の在り方について」<sup>6)</sup>の報告によれば、「図書館概論」とは「図書館の機能や社会における意義や役割について理解を図り、図書館の歴史と現状、館種別図書館と利用者ニーズ、図書館職員の役割と資格、類縁機関との関係、今後の課題と展望等の基本を解説する。」、また、「児童サービス論」とは「児童(乳幼児からヤングアダルトまで)を対象に、発達と学習における読書の役割、年齢層別サービス、絵本・物語等の資料、読み聞かせ、学校との協力等について解説し、必要に応じて演習を行う。」とされている。

~~~~~質問項目~~~~~

- 問1 あなた自身、絵本あるいは本を意識するようになったのは、何歳ぐらいで、どういった理由からか。
- 問2 あなた自身、図書館あるいは図書室を意識するようになったのは、何歳ぐらいで、どういった理由からか。
- 問3-1 幼稚園までに自分で読んだ本・読んでもらった本で印象に残っているものは何で、どういった理由からか。
- 問3-2 小学校低学年までに自分で読んだ本の中で印象に残っている本は何で、どういった理由からか。
- 問3-3 小学校高学年までに自分で読んだ本の中で印象に残っている本は何で、どういった理由からか。
- 問4-1 学校に通うようになってから、読書(活動)が教科学習に役立つとすれば、どういった科目で、どういった理由からか。
- 問4-2 国語、算数、理科、社会等の教科で役に立った本は何で、どういった理由からか。
- 問4-3 司書の魅力について説明している絵本・童話・児童書はどのようなものがあるか。本と、選んだ理由を説明してください。
- 問4-4 教師の魅力について説明している絵本・童話・児童書はどのようなものがあるか。本と、選んだ理由を説明してください。
- 問5 現代の子どもたちの児童観について書いてください。

問1の回答より読書の開始時期を確認する。問1から問3の回答には、成長に即して移り変わる読書の有様が描かれている。そこで、問1と問3の回答から読書傾向を、問1と問2の回答から読書環境を分析する。ここまでを次章「2. 幼少期の読書」で述べる。問4の回答には児童にとって役立つ読書の姿、問5の回答には児童をどのように捉えているかが描かれている。この回答より、児童サービスの傾向を分析して「3. 児童サービス」で述べる。

以上の結果を総合的に考察して、幼少期の読書が児童サービスにどのような効果をもたらしたのか「4. 読書の効果」を述べる。

## 2. 幼少期の読書

### (1) 図書を意識するようになる時期

学生は、いつから図書を意識するようになったのか。問1の回答内容から、図書を意識するようになった年齢についてまとめたものが図1である。年齢は「就学前」「小学校低学年」「小学校高学年」「中学以上」の四段階に区分した。回答の全数は126名である。

図1の分布を見ると、就学前の幼児期に集中している。就学前と小学校低学年を含めて「幼少期」とすると約9割である。多くは、幼少期に図書を意識し始めることが確かめられた。

このころの読書について、回答を読む限りでは読み聞かせが多い。発達心理学の手法を用いた実証研究から「読書の発達過程モデル」を提唱する秋田(1997)でも、「乳幼児期初期」に「読み聞かせという形式による参加」<sup>2)</sup>が位置づけられている。

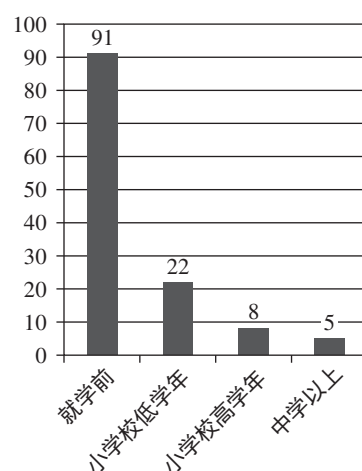


図1 図書を意識するようになった年齢の分布



就学前で文字を習得していない時期の子どもたちは、読み聞かせやお話会に参加する、紙芝居を見るなどの体験から図書を意識する。読む対象としてではなく、周囲のおとなとかかわり合うツールとして、図書を意識するのである(2011年の回答をまとめた設樂(2012.7)に詳述<sup>3)</sup>).

## (2) 初期の読書傾向

問 3-1 の回答内容から、就学前の読書傾向について、読書の魅力となった要因別に具体例をまとめたものが次ページの表 1 である(回答の全数は 125 名).

表の 1) に挙げるように、色使いに注目したものが多く、多色による美しさ(「にじいろのさかな」)や鮮やかさ(「はらぺこあおむし」)を指摘するものが見られた. 2) は、登場人物の挿絵が備えるかわいらしさや華やかさといった女の子らしさ(「ティモシーとサラシリーズ」), ユーモアや素朴な印象からくる子どもらしさ(「のんたんシリーズ」)を指摘するものである. 3) 食べ物(挿絵)は、それだけでインパクトを備えている. 豊富なパン(「からすのパンやさん」)や、香りを想像させる温かい料理(「ぐりとぐら」), 丁寧な調理や家庭の雰囲気がおいしさに直結したような菓子(「しろくまちゃんのほっとけーき」)など、思わず食べたくなるような衝動をもたらしめるものなのである. ビジュアルとして、細部まで描き込まれた緻密な絵に引き込まれるという 4) もあった. まずは、ビジュアルに訴える魅力が大きな要因となっていることがわかる.

ほかには、本そのものに作りこまれた仕掛けによる楽しさがある. 絵本の中には、5) のように、読者である子どもが描き込む(色を塗る)ことによって完成するもの(「わたしだけのはらぺこあおむし」)や、絵の配置によって「めくり」そのものが遊びになるもの(「パパ、お月さまとって!」「いないいないばああそび」)など、様々な趣向を凝らしたものが存在する. また、6) のように、擬音語(「じゃあじゃあびりびり」)やかかけ声(「おおきなかぶ」)の繰り返しによってリズムを生み出すといった、音声による楽しさもある.

ここで注目したいのは、1990 年代に発行された、当時、最新の絵本だけでなく、1960 年代や 1970 年代といった、既に 30 年以上読み継がれている作品も少なくない、という事実である. それらは、子どもの周囲にいる親や保育園の先生が子どものころ親しんだ絵本を、目の前の子どもへ読み聞かせていると考えられる.

表 1 絵本の魅力

| 印象に残った点         | 「本の題またはシリーズ名」作者(出版年)出版社                                                                                                     |
|-----------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1) 色使い          | 「にじいろのさかな」マーカス・フィスター作・絵 谷川俊太郎訳(1995)講談社<br>「はらぺこあおむし」エリック・カール作・絵 もりひさし訳(1976)偕成社                                            |
| 2) 登場人物<br>(挿絵) | 「ティモシーとサラシリーズ」芭蕉みどり作・絵(1989～2007)ポプラ社<br>「のんたんシリーズ」キヨノサチコ作・絵(1976～)偕成社<br>「シンデレラ」「白雪姫」「人魚姫」「親指姫」など(回答から書誌は特定できない)***        |
| 3) 食べ物<br>(挿絵)  | 「からすのパンやさん」かこさとし 文と絵(1973)偕成社<br>「ぐりとぐら」中川季枝子作 山脇百合子絵(1967)福音館書店<br>「しろくまちゃんのほっとけーき」わかやまけん作(1972)こぐま社                       |
| 4) 緻密な絵         | 「14 ひきのシリーズ」いわむらかずお作・絵(1983～1997)童心社<br>「ミッケ!シリーズ」ジーン・マルゾーロ作 ウォルター・ウィック絵 糸井重里訳(1992～)小学館                                    |
| 5) 仕掛け          | 「わたしだけのはらぺこあおむし」エリック・カール作・絵 もりひさし訳(1990)偕成社<br>「パパ、お月さまとって!」エリック・カール作・絵 もりひさし訳(1986)偕成社<br>「いないいないばああそび」きむらゆういち作・絵(1988)偕成社 |
| 6) 音声           | 「じゃあじゃあびりびり」まついのりこ作・絵(1983)偕成社<br>「おおきなかぶ」A・トルストイ作 佐藤忠良絵(1966)福音館書店                                                         |

\*\*\*「シンデレラ」ほか、ドレスを着た「お姫様」が登場する本の人気は高い. これらはディズニー・アニメを元にしたものや、絵本画家の挿絵によるものなど同じ題名で様々な絵本が出版されている. 回答は題名だけだったため、書誌を特定できなかった.



### (3) 就学後の読書傾向

小学校入学後は、家族に買ってもらった本や家にあった本だけでなく、教科書や学級文庫、図書館など、学校や学外でも図書に接することとなる。この小学校低学年での読書傾向は、絵や仕掛けによって親しみやすさがあった絵本だけでなく、物語やシリーズものの文庫本などが持つ、文章が生み出す魅力を備えたもの、そして教科を通じての出会いのものも含まれてくる。問 3-2 の回答内容を表 2 にまとめた（回答の全数は 125 名）。

まず人気が高い物語として、1) に示す冒険ファンタジーやシリーズものなどがある。これらは、一場面の把握だけで楽しめる絵本に比べ、展開を追って長く読み進めるなかで面白さが味わえる。シリーズ化しているものが好まれ、それらの全てを読むという回答がある一方で、シリーズのなかでお気に入りの数冊を何度も読むという回答もあった。「かいけつゾロリ」は挿絵が多く、マンガのように楽しめる要素を持つ。しかし、自己投影しやすい主人公や、身近にいたら楽しいのにと思わせる登場人物（擬人化された動物を含む）は、マンガ（絵）であれ物語（文章）であれ、容姿ではなく、状況を切り開く行動や物事に当たる際の考え方など、筋に即して読解することでその魅力を発揮する。

表 2 図書の魅力

| 印象に残った点            | 「本の題またはシリーズ名」作者(出版年)出版社                                                                                                                                                        |
|--------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1) 展開や登場人物<br>(文章) | 「かいけつゾロリ」原ゆたか作・絵 (1987～) ポプラ社<br>「エルマーのぼうけん」「エルマーとりゅう」「エルマーと 16 ぴきのりゅう」ルース・スタイルス・ガネット作 ルース・クリスマン・ガネット絵 渡辺茂男訳(1963～1965) 福音館書店<br>「ハリーポッターシリーズ」J.K. ローリング作 松岡佑子訳(1999～2008) 静山社 |
| 2) 教科(国語)          | 「おてがみ」「ふたりはともだち」アーノルド・ローベル作・絵 三木卓訳(1987) 文化出版局<br>「スイミー 小さなこいさかなのはなし」レオ・レオニ作・絵 谷川俊太郎訳(1986) 好学社                                                                                |
| 3) 料理              | 「わかったさんのおかしシリーズ」寺村輝夫作 永井郁子絵(1987～1991) あかね書房<br>「おはなししょうりきょうしつ」(こまったさんシリーズ) 寺村輝夫作 岡本颯子絵(1982～1990) あかね書房                                                                       |
| 4) ノンフィクション        | 「シートン動物記」「ファール昆虫記」(回答から書誌は特定できない)                                                                                                                                              |
| 5) 交友(絵)           | 「ウォーリーをさがせ！」マーティン・ハンドフォード作・絵 唐沢則幸訳(1997～2010) フレーベル館<br>「ミッケ！シリーズ」ジーン・マルゾーロ作 ウォルター・ウィック絵 糸井重里訳(1992～) 小学館                                                                      |
| 6) シリーズもの          | 「かいけつゾロリ」「エルマーのぼうけん」「ハリーポッター」「わかったさん」「こまったさん」「ファール昆虫記」(上段との重複を避け、シリーズ名のみ記す)                                                                                                    |

秋田(1997)では、「3 歳頃から」という早い時期に「話の筋の展開への注目」や「本への身体的関わりから言葉での関わりへ」「閉じられた現実と離れた世界での多様な楽しみ方へ」とある。「筋」に注目すること、「離れた世界」で楽しむことが、研究者である秋田(1997)の鋭い洞察によってではなく、自己の内省によって気付くのは「3 歳頃」よりずっと後で、やや遅れて意識にのぼったのかもしれない。

第二に、学校教育のなかで教科として印象的な本に出会うこともある。教科教育のほかにも、朝の読書の時間(後述)にたまたま読んだ学級文庫、読書感想文を書くために読んだ推薦図書などがあつた。学校教育を読書経験から見れば、先生から読書の価値付け(意義)が与えられると考えられる。秋田(1997)の述べる「児童期・思春期」でも、「多様な意義の理解へ」「主題の具体的理解から抽象的一般的理解へ」とあり、この時期に読書の意義を各自で形成していくことが指摘されている<sup>2)</sup>。

被調査者が全員、女性であったために回答が集中した本には、3) に挙げた、物語のなかで菓子作りや料理を紹介するシリーズがある。「自分と似ている」女の子が登場し、「女の子の間で流行っていた」、「女の子らしい物語」<sup>4)</sup>なのである。被調査者が全員、人文系の学科に所属するために回答が少なかったと

思われる本は、4)ノンフィクションであるが、友だちと共有しにくい分野だったのかもしれない。一方で、交友を理由に選択された図書もある。5)に挙げた絵本は、指定されたものを見開きいっぱい描かれた絵の中から探し出すというゲーム性の強いもので、「友だちと競争して盛り上がった」「クラスで流行していた」<sup>4)</sup>など、図書を選択する動機として友だちとの関わりを指摘していた。

また、シリーズものだから読むという回答が多かった図書を6)にまとめた。これらは、「続きを追いかけて読む楽しさ」がある、読んでいくうちに「はまって」しまう、「入り込んで読」<sup>4)</sup>むなど、物語を想像してその世界に自己を没入させ、豊かな発想を培いながら嗜好を確立させていく様子が見えたと考えられる。

#### (4) 成長に伴う読書環境の変化

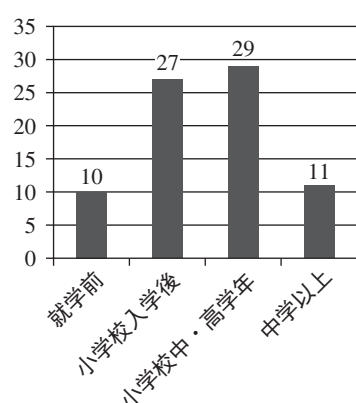


図2 図書館あるいは図書室を意識するようになった年齢の分布

まとめると、図書を意識するようになるのは就学前であり、そのころの読書傾向は就学後に大きく変化することがわかった。そこで、この時期の読書環境や子どもの内面についても回答を元に確認しておく。

就学前、幼児が手に取れる図書がある場所は、自宅(うち)や幼稚園、図書館で、本屋は存在しない。図書の選択は、保護者や保育園・幼稚園の先生などが行い、この時点で図書は大人とともに存在するものだと考えられる。この点は、「(2)初期の読書傾向」で見たように、人気のある絵本には、親や幼稚園の先生が幼少期に発行されている絵本が複数、含まれていたことも傍証になるだろう。

就学後、児童が入手可能な図書は、(本屋に行って)買ってもらえるものもあれば、学校の学級文庫や図書室にあるもの、教科書などが含まれ、選択の幅が広がる。ここで学級文庫とは、教室内で自由に手に取れる本棚であり、配架されている本については、クラス内の人気がわかる。みんなが読んでいる本だから自分も読んでおこう、ということがあるだろう。図書室は、教室外であるものの、調べ学習や友人と遊ぶために利用する場所となって、子どもの行動範囲が広がるにつれて、意識されるようになる場所である。図2で、図書館あるいは図書室を意識するようになった年齢の分布を示す(回答2より作成、回答の全数は77名)。これによれば、入学後にすぐ図書室(図書館)を意識するようになる児童ばかりではないことがわかる。そして、就学後と回答した67名の中には、調べ学習をしたり友だちと遊んだりするなかで図書館・図書室を意識するようになった、中学生・高校生・大学生になってテスト勉強や時間を持て余しているときに一人になれる環境として図書館・図書室を意識するようになったという回答が見られた。

就学を通じ、学習、流行、交友関係など、様々なものが子どもの内面に影響を与える。生活圏は家庭から学校へ広がり、学力の発達が一人で読むことや黙読を可能にし、精神的な発達も加わって交友関係を意識したりあえて一人である環境を求めたりするようになる。こうした児童の成長が、読書傾向の大きな変化につながっていることが確認された。

### 3. 児童サービス

次に、学生が理想とする児童サービスについて述べる。ここで資料とする問4の回答は、学習や個別の職業の魅力を紹介するために推薦する図書と推薦理由で、問5の回答は、学生から見た児童についてである(回答の全数は125名)。

問4-1と問4-2の回答をまとめると、学習面ではおもに国語や社会に関して役立つという(図3と図4を参照、なお各教科は複数回答で集計)。回答者がほぼ日本語日本文学専攻の学生であるので、自身の興味や関心が向く分野(国語や社会、社会の中では特に歴史)に回答が集中したものと考えられる。ただし、自己に限定しない一般論として推定(図3)では国語に集中するのに、経験(図4)では伝記や歴史

## 幼少期の読書とその効果

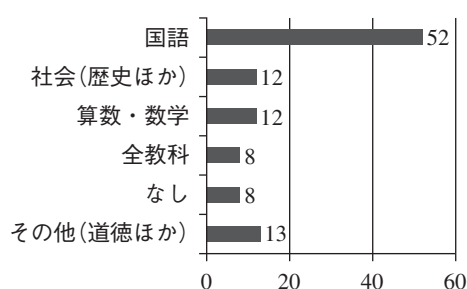


図3 読書が役立つ教科(推定)

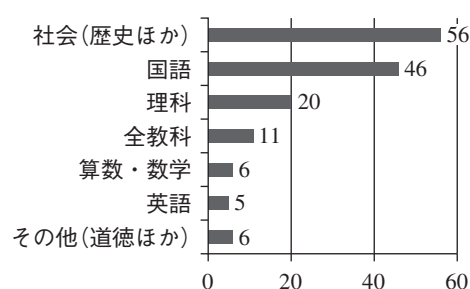


図4 読書が役立つ教科(経験)

小説を踏まえた回答として社会が最多で、自己の嗜好と一般論を区別しようとしているようだ。これは、嗜好に合った図書を読み、それが学習にも役立つということであり、例えば、物語として読むことで社会(特に歴史)がわかりやすくなる、一度読んだ物語や小説が国語で取り上げられて読解がしやすくなる、マンガの伝記や語彙集(ことわざや四字熟語などを集めたもの)を読むと覚えやすいといった内容の回答があった。読書が予習となり、未習事項の導入を果たしていたと考えられる。なお、教科ではないが、学校教育として「朝の読書」\*\*\*\*の時間があることで、授業への取り組みに役立ったとする回答が複数あった。読書の姿勢は、教科書を読む姿勢につながるのだろう、現在の学校教育のような一斉学習を開始する直前に行くことは有効であることが確かめられた。

職業紹介に関し、問4-3と問4-4の回答を表3にまとめた。この表では、当該の職業をしている人物を元に書かれたものや、当該の職業をしている人物が作者として自分自身の職場を書いたものを「実話」、当該の職業に就いている登場人物を含む物語やマンガなどを「フィクション」、職業の実務を見せる図鑑や実務遂行に直接、必要となる知識が説明されたテキストなどを「実務」として集計した結果である。実話とフィクションが多く、実務は少数であった。つまり、学生が推薦する図書として、職業実態を正確に伝えようとするものよりも、まずは読む楽しさを備えたものが重視されている。読む楽しさを備えたものとは、感動的な物語や娯楽性が強い小説、そしてマンガである。

表3 推薦する図書の魅力

| 種類             | 「本の題」作者(出版年)出版社                                                                        |
|----------------|----------------------------------------------------------------------------------------|
| 1) 実話(71本)     | 「おんちゃんは車いす司書」梅田俊作 作・絵(2006)岩崎書店<br>「くまのこうちょうせんせい」こんのひとみ作・いもとようこ絵(2004)金の星社             |
| 2) フィクション(67本) | 「図書館戦争」有川浩(2011)角川書店<br>「ごくせん」森本梢子(2000)集英社                                            |
| 3) 実務(31本)     | 「ただいまお仕事中」越智登代子 作 秋山とも子絵(1999)福音館書店<br>「おしごと図鑑7 はばたけ!先生」くさばよしみ著 なかさこかずひこ!画(2005)フレーベル館 |

この結果を生み出す背景として、問5の回答に数多く見られた言葉がある。それは「本離れ」である。活字離れ、本を読まなくなった子どもたち、本よりもゲームを楽しんだりインターネットで調べたりするといった児童に対し、まずは本を読む楽しさを知ってもらいたい、と思っているのである。

児童サービスにおいて図書を推薦する際には、サービスの対象者として本に親しんでいない児童を含めて考え、本(物語や小説)を読む楽しさやビジュアルに訴えるわかりやすさを備えた図書を提供しよう、と意識しているのであった。

\*\*\*\*朝、授業開始前に毎朝10分、読書をする時間。1988年から始まり、回答者が中学生・高校生だった平成19年には全国の小・中・高で24,800校、63.18%の実施率という記録がある(林公(2007)<sup>7)</sup>。平成24年7月31日現在では、27,420校となっている(朝の読書推進協議会 推奨ホームページ<sup>8)</sup>より)。

## 4. 読書の効果

### (1) 図書の魅力を感じる力

回答を通じて改めて、読書が楽しい、本が好きだ、と感じる学生が多数、存在することが確かめられた。彼女らには、幼少期の読書体験が楽しかったり、就学後の読書体験で本に「はまる」という経験があったりする。絵本の読み聞かせや陶酔できる本との出会いによって、「本好き」が形成されていくのだと考えられる。

### (2) 図書から学ぶ力

読書体験が学習に役立ったと感じている学生が多かったことも、今回の調査が明らかにしたことの一つである。それは、改めて学習のために(意識的に)読んだからではなく、日頃の楽しみ(個人の嗜好)や学校での習慣形成(一斉学習や朝の読書)によって読書が日常化し、そのなかで得た知識が学習にも活用された、というものであった。つまり、「学習のための読書」ではない。読書が学力に直結するというより、読書を楽しむことで結果的に学ぶ力となる、ということである。読書を通じて、その楽しみと図書から学ぶ力の相乗効果を実感するとき、「読書が学習に役立つ」と言えよう。

### (3) 図書の魅力を伝える力

本好きの学生にとって、児童サービスという司書の仕事では、まず本を読む楽しさを伝えることで、図書や図書館に親しんでもらいたい、と考える傾向が見られた。これは、鮮やかな色使いや挿絵による絵本の魅力から読書を始めた記憶に対し、筋に即して読解する物語やマンガ・小説の魅力を伝えようとしている点で、少々違和感を残す結果となった。ただしこの点は、調査の質問項目で、推薦図書の提示を求めていることが影響し、絵本を読む時期を過ぎた子どもたちへのサービスを想定して回答したとも考えられ、調査方法に課題を残すものとなった。

## 引用文献

- 1) 西田晋, 研究紀要, 京都市総合教育センター研究課(533) p.1 (1998)
- 2) 秋田喜代美, 読書の発達過程, 風間書房, 東京(1997)
- 3) 設樂馨, 言語と交流(15), 85-96 (2012)
- 4) 「 」内の引用部分は問3の回答
- 5) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shougai/gakugei/shisyo/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/gakugei/shisyo/index.htm)
- 6) これからの図書館の在り方検討協力者会議, 司書資格取得のために大学において履修すべき図書館に関する科目の在り方について, pp.14-15 (2009)
- 7) 林公, 朝の読書その理念と実践, リベルタ出版, 東京, p.3 (2007)
- 8) <http://www.mediapal.co.jp/asadoku/>



## 王治本の周防訪問および地元文人との文藝交流

柴 田 清 継  
(武庫川女子大学文学部日本語日本文学科)

Wang Zhiben (王治本, 1835-1908)'s visits to the Suô area in the 18<sup>th</sup> and 19<sup>th</sup> years of Meiji (1885-86) and his literary exchange with the local literati

Kiyotsugu Shibata

Department of Japanese Language and Literature, School of Letters  
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan

### Abstract

Wang Zhiben, a Chinese poet who stayed in Japan in the Meiji era, visited the Suô area, the southeast of present Yamaguchi Prefecture, twice during his long journey around Western Japan for almost two years. In this paper I describe several significant aspects of his literary exchange with the local literati of Suô at that time, by examining the related materials I have compiled.

### はじめに

王治本(号漆[泰]園, 1835 ~ 1908)は, 明治 18 年<sup>1)</sup>7 月から 2 年近くに及ぶ西国大旅行の中で 2 度, 周防地方を訪れている。18 年と 19 年のいずれも秋冬である。本稿では『防長新聞』の記事や地元文人の詩文集, その他を資料として, それぞれの訪問時の地元文人との文藝交流の様相を描き出してみたいと思う。

## I 明治 18 年の訪問

### (1) 山口にて

18 年の秋を藝備地方で過ごした王治本<sup>2)</sup>は, 秋もかなり深まったころ, 周防山口を訪れていた。そのとき交流した相手は, 吉田松陰(1830 ~ 1859)の甥で, その後教育者として名を成す吉田庫三<sup>くらぞう</sup>(1867 ~ 1922)である。彼の詩集『梅城遺稿』上巻<sup>3)</sup>所載の 18 年作と見られる「菜香亭席上王治本詩先成, 見示, 次礎却寄」詩二首の其の一に「節過重陽存晚菊, 秋深三径落衰葭[節 重陽を過ぎて 晩菊存し, 秋 三径に深く 衰葭落つ]」という 2 句のあることによって知られる。庫三は 15 歳の時に上京して二松学舎に入学, 2 年間漢学を学んだ。23 年, 22 歳の時に学習院で初めて教鞭を執ることになるが, それ以前, 17 年には山口に帰っていた模様である。菜香亭は 10 年ごろ創業の料亭である。当時僅か 18 歳の日本人の若者が 50 歳の清国人男性と料亭に行って, どんな時間を過ごしたのだろうかとも思われるが, それはともかく, 庫三にはもう一作, 王治本との交流の跡を示す詩がある。それを紹介しておこう。それは, 大内政弘(1446 ~ 1495)が雪舟(1420 ~ 1506)に命じて造らせたと言われる「雪舟庭」がその本堂の北にある潮音寺(現在は常栄寺)をとともに訪れて詠んだ詩である。

同清客王治本至潮音寺, 寺中卒賦

喬木参天翠映門, 高僧說法寺猶存。水光松影城東路, 來訪雪舟遺愛園。〔喬木 天に参じ 翠 門

に映ず。高僧 説法し 寺 猶お存す。水光 松影 城東の路、来訪す 雪舟 遺愛の園〕  
池鱗逐隊自相親、山鳥去来与客馴。欲画不知身入画、潮音寺裏聴泉人。〔池鱗は隊を逐いて 自ら  
相親しみ、山鳥は去来して 客と馴る。画かんと欲して 知らず 身の画に入るを。潮音寺裏 泉  
を聴く人〕

## (2) 柳井にて

18年の周防における資料のもう一つは、柳井市柳井津の「商家博物館 むろやの園」に保存されている長さ2間の書幅で、白楽天の「題洛中宅」詩の一句「春榭籠煙暖」と王治本自作の詩が書かれている。「むろやの園」は元禄初年創業の商家「室屋」の屋敷で、南北119m、面積2,561m<sup>2</sup>、建坪1,500m<sup>2</sup>で、「わが国に現存する町屋のなかでは最大のものといわれて」いる。また、「18室もある主屋をはじめとする屋敷内の建物は全部で11棟35室あり」、1979年に多くの生活用品や文書とともに山口県有形文化財に指定され、邸内は現在一般に公開されている<sup>4)</sup>。小田家の現在の当主、善一郎氏によれば、その広大な屋敷にはかつて多くの文人墨客が訪れ滞在したとのことであり、王治本に揮毫を頼んだ祖父の滴翠(名伴輔、1862?～1943)は、20代で衆議院議員になった人であるが、半面、遊芸にたけた人でもあったようである。

白楽天の詩は洛陽の大邸宅を詠んだものであり、王治本が揮毫したその中の1句は、その大邸宅内の春の霽の立ち込めた東屋の中が暖かいということを表現したものであるが、彼にとって小田邸はこの白詩のイメージと重なり合う場所だったのであろう。王治本自作の詩も、その識語とともに示すことにしよう。

画堂煙暖有常春、琴石山前風月新。坐対茶鑪歌一曲、此中間散半僊人。〔画堂 煙 暖かく常春有り、  
琴石山(柳井にある山)前 風月新たなり。坐して茶鑪に対し 一曲を歌う、此の中 間散(ゆったりくつろいでいる)たり 半僊人〕 時在光緒乙酉仲冬 小田滴翠君属 瀨東王治本

これは、言うならば、白詩のイメージを下敷きにしつつ、小田邸で過ごしている自らの、たいそうのんびりとした心境と重ね合わせて表現し直したものである。光緒乙酉仲冬は明治18年12月6日から19年1月4日までの間に当たる<sup>5)</sup>。

さて、現在判明しているところでは、王治本は19年の4月中旬ごろ高知を訪れ、2ヶ月ほど滞在したのである<sup>6)</sup>が、19年の1～3月ごろはどこにいたのか、今のところ不明である。引き続き周防内に滞在もしくは漫遊していたことも考えられるが、関係資料未発見のため、確認できないのが現状である。一方、高知を去った後の王治本は、この年の中秋(陽暦9月12日)を松山で迎え、その後再び周防を訪れた。19年秋冬の周防訪問について、次節で述べることにする。

## Ⅱ 明治19年の訪問

当時、松山の三津浜と防府の三田尻との間には毎日、船の定期便があった<sup>7)</sup>から、王治本がまずは防府に滞在したのは、極めて自然なことであつたろう。そして次に彼は山口へと赴く。本節では、現在防府市に属する地域と山口市に属する地域とに分け、王治本が行った文藝交流の跡をそれぞれのどってみることにしよう。

### (1) 防府にて

『防長新聞』19年10月2日に「雅客応酬」と題して、9月26日、佐波郡右田村で土肥実香(号螺峰、1835～1899)と佐久間清緒が会主となり、宮市町の藤井和兵衛方に滞泊している王治本を招待して、同村の西雲寺(現在は徳性寺と称されている)で設けた、書画会の事が報じられている。「同日会する者近傍の諸先生を始め無慮三十有餘名あり頗る盛会にして席上土肥、王両先生応酬の句あり」として、七絶二首が紹介されている。そのうち、土肥螺峰の作は、

邂逅相逢齡亦同、一談一笑吐真衷。大兒索菓小兒乳、不似君家双碧桐。〔邂逅して 相逢い 齡も

亦同じ。一談一笑 真衷を吐く。大児は菓を索め 小児は乳。似ず 君が家の 双碧桐(二人の素晴らしい息子さん)に]

というもので、自分の二人の息子がまだ幼く、王治本の二人の息子に及ばないことを述べているが、詩の後に「先生曰、余有二子、入於東京某校、<sup>8)</sup>亦有兩兄、故及之」との説明が付け加えられている。この説明によれば、王治本にはこの当時、東京の学校に通う二人の息子があったことになる。一方、王治本の作は、

文同況復齒相同、酔裡高談見寸衷。雛鳳声清於老鳳、双々飛上碧梧桐。〔文同じ 況や復た 齒相同じきをや。酔裡 高談 寸衷を見す。雛鳳(才能のある若者)は声 老鳳より清し。双々 飛び上がる 碧梧桐に]

というもので、子供の将来性へと内容を転じるとともに、螺峰との同文同年の間柄にも触れて、親しみを示している。

螺峰は「廢藩の際一時学校訓導たりしが後に義塾を設けて後進を導き更に山口中学校教諭周陽学舎長等に歴任し身教育に在勤する前後数十年薫陶の功多」<sup>9)</sup>かった人で、その遺著『螺峰遺稿』<sup>10)</sup>にも王治本との交流の跡を示す作品が掲載されている。次にそちらに目を転じることしよう。なお、佐久間清緒については未詳である。

『螺峰遺鈔』に窺うことのできる王治本との交流の跡は、まず、防府か若しくはその近辺にある「双泉」という所へ出かけた時の次の一首である。

一日与今川岳南・長松掬翠諸子誘王泰園遊双泉、賦以眎泰園(王泰園来遊盖十九年也)

雖無千仞凌空勢、有松蓊鬱陰可蔽。其間怪巖左右懸双泉、水雖不多清且涓。洗心崖前半椽屋、聊以相坐張清筵。時非寒夜茶当酒、汲水烹泉有山叟。先生胸次若江湖、不尤薄物情却厚。先生笑語入興深、劈箋援筆發高唸。先生高懷清如水、使人一洗鄙吝心。〔千仞 空を凌ぐの勢い無しと雖も、松の蓊鬱なる有り 陰 蔽う可し。其の間 怪巖 左右に双泉懸かり、水 多からずと雖も 清くして且つ涓たり。洗心崖前 半椽の屋、聊か以て相坐し清筵を張る。時に寒夜に非ず 茶をば酒に当て、水を汲み泉を烹るに山叟有り。先生は胸次(胸の中) 江湖の若く、薄物を尤めず 情 却って厚し。先生は 笑語 興に入ること深く、箋を劈き筆を援りて高唸を發す。先生は 高懷 清きこと水の如く、人をして鄙吝の心を一洗せしむ]

今川岳南(1827? ~ 1896)は、名は吉利、岳南はその号。右田の人で、「維新後学制頒布ありて明治六年右田小学校教師となり二十九年辭職してその十月十七日歿、年六十九。また詩書を能く」<sup>11)</sup>したという。長松掬翠については未詳である。

次は「寄王泰園」と題する作で、上引の王詩同様、同文同年の親しみにも触れている。

東海遙從奉使臣、衣冠當日傍風塵。敲金擊石詩餘韻、臥虎騰竜筆入神。駢路仰瞻富嶽雪、旅窓歸夢洞庭春。十年游跡臨寒境、幸結同文同齒親。〔東海 遙かに奉使に従う臣、衣冠 當日 風塵に傍えり。金を敲き石を撃ちて 詩 韻を餘し、臥虎騰竜 筆 神に入る。駢路 仰ぎ瞻る 富嶽の雪、旅窓 歸夢 洞庭の春。十年の游跡 寒境に臨み、幸いにも結ぶ 同文同齒の親〕※第2句の後に「泰園明治八年来東京入公使館為属吏、故云」との自注がある。

ところで、王治本は10月18日には山口へ赴くことになっていたようで、次に掲げるのは、その前日に筆屋楼なる料亭で催された送別会での作である。

十月十七日夜与吉田恕菴翁及村上・大田・佐久間・川辺諸子邀王泰園干筆屋楼而飲、泰園將以明朝赴山口、席上賦之

紅燭高烧欲雨時、筆屋楼頭筯酒卮。流水潜声山匿影、猶助吾儂送別悲。殺雖不佳如丘嶽、酒雖不美如淮泗。玉織女子須作画、泰園先生須賦詩。此殺此酒真風味、唯有賓主寸衷知。〔紅燭 高く焼ゆ 雨ふらんと欲する時、筆屋楼頭 酒卮を筯ぐ。流水は声を潜ませ 山は影を匿し、猶お助く 吾儂が送別の悲しみを。殺は佳からずと雖も 丘嶽の如く、酒は美からずと雖も 淮泗(中国の淮水と泗水)の如し。玉織女子は須く画を作るべく、泰園先生は須く詩を賦すべし。此の殺 此の酒こそ 眞の風味、唯賓主の 寸衷を知る有らんのみ]



やや稚拙な感じのする作品であるが、それはともかく、詩中に見える玉織女子(史)は王治本が16年以来道連れにしていた加賀出身の日本人女流画家横井(もしくは野(埜)田)玉織のことで、年齢はこの当時30歳くらいであったと考えられる<sup>12)</sup>。この送別会に出席した日本人のうち、村上・大田・佐久間(清緒か?)・川辺については未詳であるが、王・土肥の兩人よりも17歳も年長の吉田恕菴(1818?～1901)は、『恕庵詩文集』<sup>13)</sup>の「例言」(河辺寛之助執筆)によれば、「夙に長藩公族、海北毛利氏に仕えて、其の邑宰と為り、奥羽に于役(使い)し、京摂に往来し、明治維新の後、群馬熊谷<sup>14)</sup>二県に奉職」した人で、晩年は「佐波郡右田村」に住んでいたようである<sup>15)</sup>。『疑問録山陽先生垂誨』、『上野国地誌概略』<sup>16)</sup>等、その編著書は少なくない<sup>17)</sup>。

さて、土肥螺峰と王治本との交流の跡として取り上げるべき最後の作は、次の一首である。

訪黍園旅寓、此日雨甚、故阻山口行、黍園饗酒、寓主召妓、戲賦一絶

松月軒中挙別杯、明宵望月独徘徊。豈図三疊陽関曲、乍入三絃声裏来。〔松月軒中 別杯を挙ぐ。明宵は 望まん 月の 独り徘徊するを。豈図らんや 三疊 陽関の曲、乍ち三絃声裏に入り来らんとは〕

詩題と詩句から分かるように、10月18日に予定していた王治本の山口行きが雨のため延期になり、彼の宿泊先松月軒で送別会のやり直しとなったのである。

ここでまた吉田恕菴に話が戻るが、彼の『恕庵詩文集』に収められた「辞職帰郷」後の作の後半のものに対しては、王治本の評が付されており、巻末には「披誦一過、機局高渾、手法円熟、不屑作塗粉敷脂、尤見識力〔披き誦むこと一過、機局高渾(構えがひとときわ重厚)にして、手法円熟し、塗粉敷脂(表面を飾りたてること)を作すを屑しとせず、尤も識力を見る〕。 丙戌孟冬月 澗東黍園王治本拜識」との識語もある<sup>18)</sup>。

『防長新聞』19年10月20日には「清客謁菅廟の詩」と題して、王治本が松崎天満宮へ奉納した「長古一章」が紹介されている。太宰府へ流されていく途中、松崎に宿泊したという伝説のある菅原道真の事を詠んだ、次のような作品である。

吁嗟乎謂公不逢時何以明揚作帝師、謂公得逢時何以垂老謫海陲。道長道消一反手、時也命也不可知。緬想公自寛平初、超擢翰院登鼎司。濟世經綸邁管樂、匡時事業擬臯伊。猷可替否尊王室、威權未許戚臣移。相慶明良纔十載、天皇荒勁起退思。君臣之遇不終合、纔毀之言從此滋。慷慨避位三上表、從容諫獵一二詞。鄙哉博士生妄議、漫云明哲見機遲。公以此身作砥柱、一去一留盛盛衰。唯願尽瘁學諸葛、不願避禍効范蠡。海西之行亦夙料、臣罪當誅復何辭。幽廬相對唯書卷、荒徑栽植有梅枝。每日焚香拜恩賜、愁逢佳節賦新詩。悠々謫居過三載、樞星夜隕筑水湄。嘆息一蹶不復起、道之窮也命為之。聞説當年西遷過此地、三尺坐右尚留遺。建議於朝始立廟、追懷旧蹟復樹碑。人民葉世肅瞻拜、歲時祈報薦明粢。酒垂山高佐川遠、与公德沢並遐施。吁嗟乎公之遇而不遇者、力不能以破群疑。公之不伸而伸者、道直將以万古期。吾嘗讀史至昌泰延喜間、不能不為公掩卷而噫噫。〔ああ 公時に逢わざりしと謂わんか、何を以てか明揚せられて帝師と作れる。公 時に逢うを得たりと謂わんか、何を以てか老に垂んとして海陲に謫せられたる。道の長ずると道の消するは 一たび手を反し、時なりや命なりや 知る可からず。緬想す 公 寛平の初めより、翰院に超擢せられ 鼎司に登る。世を濟う經綸は 管樂(管仲と樂毅)に邁り、時を匡す事業は臯伊(臯陶と伊尹)に擬す。可を猷じ否に替えて 王室を尊び、威權 未だ許さず 戚臣の移すを。明良を相慶ぶこと 纔かに十載、天皇 荒勁 退思を起こす。君臣の遇 終に合わず、纔毀の言 此れより滋し。慷慨して位を避り 三たび表を上り、從容として獵を諫む 一二の詞。鄙しきかな 博士 妄議を生ず。云う漫かれ 明哲は 機を見ること遅しと。公 此の身を以て 砥柱と作し、一去一留 盛衰を感う。唯願わくは 尽瘁 諸葛(諸葛亮)に學ばん。願わず 禍を避くこと 范蠡に効わんを。海西の行も亦夙に料れり。臣の罪は誅に当たる 復た何ぞ辞せん。幽廬 相對するは 唯書卷のみ、荒徑 栽植して 梅枝有り。毎日 香を焚きて 恩賜を拝し、愁い 佳節に逢えば 新詩を賦す。悠々たる謫居 三載を過ぎ、樞星 夜 隕つ 筑水の湄。嘆息す 一たび蹶きて 復たは起たず、道の窮せるや 命之を為せり。聞説ならく當年 西遷 此の地(松崎)を過ぎ、三尺の坐右 尚お留遺せり。朝に建議

して 始めて廟を立て、旧蹟を追懷して 復た碑を樹つ。人民葉世 肅として瞻拝し、歳時 祈報して 明燦を薦む。酒垂山(天満宮のある天神山)は高くして 佐川(佐波川)は遠し。公と徳沢 並びに遇く施さる。ああ公の遇いて遇わざるは、力 以て群疑を破る能わざればなり。公の伸びずして伸ぶるは、道の直きこと 將に万古を以て期せんとすればなり。吾嘗て史を読みて 昌泰延喜の間に至り、公の為に巻を掩いて噫噫たらざる能わず]

この作品は高知の詩人三浦一竿(1834～1900)の『江漁晩唱集』にも「謁防府菅右相廟謹賦」と題して、全くの同文が掲載され、かつ「光緒丙戌重九日拝謁防府／菅右相廟得觀旧藏詩冊、謹賦長古一章／聊以抒仰慕之忱 瀨東王治本拜稿」との識語も付載されている<sup>19)</sup>。その中の日付により、この奉納詩の作成は陽暦の10月6日であったことが知られる。『江漁晩唱集』には山田天籟<sup>20)</sup>の「(前略)先生以海外游客能諳悉延喜時、事切真發、尤為難得(後略)〔先生は海外の游客を以て能く延喜の時を諳悉せり、事切にして真發するを、尤も得難しと為す〕」との頭評も付されているが、全く同感と言うほかはない。識語には「防府の菅右相の廟に拝謁した際に、旧藏の詩冊(『菅家文草』『菅家後集』か)を見ることができた」ことが詩を賦した動機のように書かれているが、実際は平素から日本の歴史に関心を寄せ、相当深い知識を蓄えていたものと見て間違いあるまい。

さて、19年の1月25日には右田と小鯖とを結ぶ鯖山(佐波山)洞道が竣工していた<sup>21)</sup>が、『防長新聞』同年10月30日には「清客の二絶」と題して、彼の「鯖山洞道乃口占二絶」が「読者の瀏覽に供」されている。

鑿破雲崖隧道寬、洞嶺殘石似刀攢。霎時穿過佐波嶺、不復当年行路難。〔雲崖を鑿破して 隧道寬く、洞嶺の殘石 刀もて攢てるに似たり。霎時 佐波の嶺を穿ち過し、復たは当年のごと行路難からず〕／百尺危巖誰劈開、仙原有路任人來。為愁洞裏天昏黑、幾盞明燈照鏡台。〔百尺の危巖 誰か劈き開ける。仙原 路有り 人の來るに任す。洞裏 天 昏黒なるを愁うるが為に、幾盞の明燈 鏡台を照らす〕

## (2) 山口にて

前述の通り、王治本は10月19日以後には山口へ移ったと考えられるが、『防長新聞』19年11月9日は「探韻雅会」と題し、11月6日に「博物標本製造所の日野恕介翁が会主となり井上、上領、伊藤、岡村、新山、馬島等の諸先生方と共に清客王漆園氏を大殿大路の朧菴に請して探韻の雅会を開かれた」ことを報じ、その時の王治本の「小春小集 分得東韻」と題する七絶二首を紹介している。ただ、第一首は、印刷ミスか、結句の韻が合わない。杜甫の「漏洩春光」(「臘日」詩)の典故を用いた第二首のみ挙げることにする。

夕陽影淡暮山空、絶好詩情半醉中。漏洩春光曾有信、梅花数点小墻東。〔夕陽 影淡くして暮山空なり、絶好の詩情 半酔の中。春光を漏洩して 曾て信有り、梅花数点 小墻の東〕

日野恕介(1827～1909)は医師、本草学者で、改名前の宗春を以て称されることが多い。孫の日野巖著『日野宗春』によれば、「(宗春は)明治十九年一月八日に願によつて山口県御用掛を免ぜられてからは、山口駆働所、済生会山口支会産婆養成所などに勤め、傍ら防長女子教育協会理事をも勤めた」。また、「詩文の号は鷗洲、白鷗、沙鷗などといい、また、茶を好んだので茶翁、茶禪、茶狸々などとも号した」<sup>22)</sup>。

さて、この「雅会」に参加した人々のうち、日野恕介以外は、姓しか記されていないため、特定は難しいが、同定できる可能性のある人物を挙げてみることにする。上領は上領頼軌(1825?～1895)か。『増補近世防長人名辞典』に「乾堂と号す(中略)最も詩文を能くし嚶鳴社員たり、遺稿若干あり、(中略)維新後浜田藩に出仕しのち東京に移り明治二十八年十月廿一日歿、年七十」とある。岡村は岡村圭三(1845?～1910)か。『増補近世防長人名辞典』に「黒城または筌斎と号す(中略)維新の後父を助けて敬止塾を經營せしが学制頒布の際山口第一小学校長となり、尋いで家塾をこの地黒谷に創立し黒城塾と名づく、子弟の入って学ぶ者前後数千に及ぶ、その間また書道を山口師範学校に授く」とある。新山は新山忠(1823?～1896)か。『増補近世防長人名辞典』に「球湖また楽山と号す、萩藩士なり(中略)維新後家に教授し、また山口師範学校教諭となる、明治廿九年三月十六日歿、年七十三。遺著に乾島略志あり」とある。馬島は馬島春海(1839?～1905)か。『増補近世防長人名辞典』に「名は春海、北溟と号す、(中略)維新後

山口県に出仕せしが、のち退いて萩に帰り子弟に教授し誘掖才器を成すもの多し、晩に東京に移居し明治三十八年十一月十六日歿す、年六十六」とある<sup>23)</sup>。井上と伊藤については未詳。

『防長新聞』19年11月12日には「又た詩」と題して、記者が入手した王治本の七律二首が「読者の瀏覧に供」されている。彼が雪舟(1420～1506)の旧居跡雲谷庵に遊んだ時の作である。

#### 游雲谷庵

游到雪師旧法筵，荒林賸得屋三椽。維摩戲作丹青筆，好事追尋翰墨緣。花落山空人寂々，雲迷谷閑水涓々。他年我返四明棹<sup>24)</sup>，欲向天童問老禪。〔遊び到る 雪師の旧法筵。荒林 賸し得たり 屋三椽。維摩(維摩詰。雪舟を喩えた)戯れに作す 丹青の筆，好事追ひ尋ぬ 翰墨の縁。花落ち 山空しくして 人寂々たり，雲迷い 谷閑かにして 水涓々たり。他年 我 四明に棹を返しなば，天童に老禪を問わんと欲す〕 雪師曾入天童寺為僧

王治本自身の付記にもある通り、雪舟は中年になってから明に渡り、寧波の古刹、天童山景德禪寺で「四明天童山第一座」という高位の称号を受け、その後このことを誇りとしていた。この詩の尾聯はその故事を踏まえ、四明がたまたま王治本の古里でもあることから詠出されたものである。

もう一首は大安楼の酒席での作である。

#### 大安楼酒間分得江韻

短筇一一屐双々，快上旗亭倒玉缸。写此胸懷憑醉筆，知農抑鬱有吟缸。高情擬托先生柳，雅鑒元推居士龐。黃菊花前聊倚檻，数声驚聽莫鐘撞。〔短筇(短い杖)は一一 屐は双々，快く旗亭に上り 玉缸(徳利)を倒にす。此の胸懷を写くは 醉筆に憑り，農が抑鬱を知るは 吟缸(ともしび)有ればなり。高情は 托せんと擬す 先生柳(陶淵明)，雅鑒は 元推す 居士龐(唐代の仏教者龐居士)。黃菊花前 聊か檻に倚り，数声 驚きて聴く 莫鐘(晩鐘)の撞かるを〕

ところで、上述の日野家に残っていた王治本の書や詩文などは、その後山口県立文書館(現山口県文書館)に寄贈された<sup>25)</sup>。現在、同館所蔵の文書に王治本関係のものが3点確認できる。そのうちの一つ、請求番号「日野家 144」の文書は、維新後山口県庁のものとなっていた陳元賛(1587～1671)自筆の萩藩伝来『長門国志』を王治本が借覧し、二絶句を題したものである<sup>26)</sup>。『近世 防長人名辞典』によれば、「陳元賛は明末余杭の生なり、万暦中国乱を避けて本邦に帰化し、元和七年長州侯毛利輝元に依って萩に來り、居ること歳余『長門国誌』一卷を編して献ず時に元和九年なり、その稿本現存す(後略)」<sup>27)</sup>とあり、その「現存」している「稿本」がほかでもなく王治本が借覧したものである。王治本が書きつけた文句は、さねとう氏がすでに初めの絶句のみ紹介してくださっている<sup>28)</sup>が、ここではあらためてその全体を紹介することにしよう。初めの絶句にはさねとう氏の訓読を、後のそれには筆者の訓読を付することにする。

#### 題陳元賛長門国志後

喜是同文氣誼連，載将游筆紀山川。脩成一卷長州志，伝到于今三百年。〔喜ばしきは是れ同文氣誼連ること，游筆を載せ将て 山川を紀す。脩成一卷の 長州志，伝えて今に到ること 三百年〕／感彼萍踪知遇奇，為揚徳沢表威儀。姚江亦有文章在，無此称堯頌舜詞。〔感ず 彼の萍踪 知遇奇なるは，徳沢を揚げ威儀を表すが為なるに。姚江にも亦 文章の在る有り，此き称堯頌舜の詞は無けれども〕 光緒丙戌孟冬月游次鴻城。此志蔵山口県庁，乞得借閱一過，為題二絶以還之。瀨東王治本 ※第二首第四句の後に「姚江朱舜水也」との自注がある。

この二首を通して王治本が言わんとする所は難解であるが、筆者は次のように解釈する。第一首は陳元賛が長門、ひいては日本の人々と「同文」のおかげで、気持ちを通じ合い、藩内の各地を取材して回って書き上げた『長門国志』を、完成後 300 年(実際は 263 年)の時を隔てて目の当たりにした感動である。第二首は、表面上の意味は〈余杭出身の陳元賛は、日本で放浪の後半生を送ることになったにもかかわらず、日本の人々から手厚い知遇を受けた。それは彼が徳沢を揚げ威儀を表したからであり、そのことに感動を覚える。陳元賛に対するほどの絶賛の言葉は見られぬものの、姚江出身の朱舜水にも実はそれなりの才能や学問はあるのですぞ〉というようなことかと考えられる。一般的な知名度から言えば、朱舜水が陳元賛に劣るはずはないにもかかわらず、このような表現がなされたのはなぜか。作者自ら、姚



江は朱舜水(1600～1682)なりとの注を付している点が重要であろう。というのは、余杭、姚江のいずれも浙江省に属するとはいうものの、姚江は王治本の出身地慈溪と地理的に重なり合い、したがって彼は朱舜水の名を借りて自らを語っていると見られるからである。すなわち、自分も今後とも日本国内を經巡り、ぜひ陳元賛並みに日本の文化に対する貢献を成し遂げたいという気持ちを表明しているのである。

山口関係の資料の締めくくりは、再び土肥螺峰の詩に戻る。螺峰はいったん防府で王治本と別れた後、山口に出てきて再会を果たしている。その時の詩二首が『螺峰遺鈔』に載っている。

在山口与王泰園飲

錦水橋頭訣飲時、今宵再会不相期。果然万事塞翁馬、何憾人間生別離。〔錦水橋頭にて 訣飲せし時、今宵の再会 相期せざりき。果然 万事 塞翁が馬、何ぞ憾まん 人間の生別離〕／樓頭喚酒酒來遲、幾度開窓立索詩。八坂祠前半宵月、閑情唯有兩人知。〔樓頭 酒を喚ぶも酒の來ること遅く、幾度か窓を開き 立ちながら詩を索めたる。八坂祠(大内弘世が京都から勸請した八坂神社)前 半宵の月、閑情は 唯兩人の知る有らんのみ〕

山口を去った王治本は翌 20 年丁亥の元旦を長門の下関で迎え、丁亥の 2 字を各句の初めに付けた次のような詩を日野宗春へ郵送した。

丁簾飄動曉風輕、亥雪初収又轉晴。丁日応脩尼父奠、亥年曾說絳儂生。丁香宝結聯華勝、亥既明珠照寿觥。丁卯集中新得句、亥章歩裏遠游程。

これは山口県文書館請求番号「日野家 59」の文書中に見えるもので<sup>29)</sup>、その識語には「杏村君春海君望代道 禧／附頓野少府賀詩乞転呈為荷」とも記されている。杏村は当時山口始審裁判所長の任にあった古莊一雄(1848～1931)の号。頓野<sup>とみの</sup>は山口県書記官の頓野馬彦。王治本は山口滞在時、これらの人物とも何らかの交流のあったことが知られる<sup>30)</sup>。

## おわりに

以上、明治 18 年と 19 年の二度にわたる王治本の周防訪問とその間に行われた地元文人との詩文交流の様子を紹介した。

次稿では、20 年前半の筑前・筑後・肥後・豊前(耶馬溪)・讃岐(寒霞溪)訪問を取り上げ、今回と同様、地元文人との詩文交流の跡を追ってみたい。

## 注

- 1) 以下、本稿の本文では見出し等、一部の箇所を除き、「明治」の年号は省略することにする。
- 2) 拙稿「王治本の藝備訪問および地元文人との文藝交流」(『武庫川国文』第 77 号、2012 年)。
- 3) 子弟有志者編『梅城遺稿』(1929 年 4 月)上巻(吉田庫三先生著 詩)。
- 4) 「商家博物館 むろやの園」パンフレットによる。
- 5) むろやの園所蔵の王治本の書幅の存在は山口文書館副館長金谷匡人氏のご教示により知った。また、その実地調査に当たっては小田善一郎氏のお世話になった。なお、小田家については『山口県文書館諸家文書目録 1 柳井市金屋小田家文書 第一分冊』(山口県文書館、1994 年)の「解説(その一)」に詳しい。
- 6) 柴田清継・蔭海波「明治期高知における日中文人の交流－旅の詩人王治本を中心として－」(『日本語日本文学論叢』第 7 号、2012 年)。
- 7) 例えば河崎源太郎編『山口県豪商早見便覧』(明治 19 年 8 月、『明治期山口県商工図録』に収録、マツノ書店、1993 年)「大坂商船会社三田尻出張店」の項。
- 8) 按ずるに「亦」字の前に、一人称を表す「余」等の字を脱していると思われる。
- 9) 吉田祥朔『増補 近世防長人名辞典』(マツノ書店、1976 年) p.165。
- 10) 安部民治編輯兼発行『螺峰遺鈔』、明治 43 年。

- 11) 『増補 近世防長人名辞典』p.39-40.
- 12) 玉織女史について詳しくは拙稿「王治本 越佐の旅およびその間の詩文交流—明治十六、七年を中心として」(『新潟県文人研究』第15号, 2012年)で取り上げた.
- 13) 吉田恕庵著・河辺寛之助編『恕庵詩文集』(河辺寛之助, 明治24年).
- 14) 熊谷県は現在の埼玉県と、群馬県のほぼ全域に当たる. 明治6～9年の間存在.
- 15) 吉田恕庵『天野氏譜録』(明治24年)奥付記載の住所による.
- 16) 『疑問録山陽先生垂誨』(博文堂, 明治9年), 『上野国地誌概略』(誠之堂, 明治10年).
- 17) 吉田恕庵については『増補 近世防長人名辞典』p.270も参照.
- 18) 丙戌孟冬は陽暦の明治19年10月27日から11月25日に当たり、その頃には王治本は既に山口へ移動していたはずである. 執筆月の記載はさほど正確を期するものではなかったのかもしれない.
- 19) 三浦漁『江漁晩唱集』(三浦万里, 明治42年)附録29丁オ～30丁オ.
- 20) 山田天籟(1863～?)は、『百花欄』11集(明治36年)の「作家姓氏」欄によれば、本名は重光, 字は儀卿または伯敬, 東京の人.
- 21) 『防長新聞』明治19年2月1日「雑報」.
- 22) 日野巖著『日野宗春』(日野稔彦, 1958年)p.2,4.
- 23) それぞれ『増補 近世防長人名辞典』p.82,75,186,222.
- 24) この「棹」字は「棹」の誤りではないかと疑われる. 「棹」に改めて訓むことにする.
- 25) さねとうけいしゅう「王治本の日本漫遊」(同氏『近代日中交渉史話』, 春秋社, 1973年)p.188.
- 26) 王治本が文字を題した部分は、その写真が小松原壽『陳元賛の研究』(雄山閣, 1972年)p.276に掲載されている.
- 27) 『増補 近世防長人名辞典』p.158.
- 28) さねとう「王治本の日本漫遊」p.189.
- 29) 山口県文書館所蔵の王治本関係の文書にはもう一つ、佐渡の竹田村で日野重相を弔って書いた詩を日野宗春の嘱により揮毫したものがある(請求番号「日野家24」)が、防長の日野家と日野重相、すなわち日野邦光(1320～1363?)との関係等が依然不明であるため、本稿では取り上げない. 拙稿「王治本 越佐の旅およびその間の詩文交流—明治十六、七年を中心として」(注12)で詩句を紹介し、言及した.
- 30) この詩は実は『高知日報』明治20年1月8日の「雑録」にも「陽暦丁亥元旦毎句戯用丁亥字冠首賦成小詩、郵賀高城相知諸翁先生新禧 泰園王治本初稿 時游次馬関」として載っている. 明治19年の前半の2ヶ月を過ごした高知の文人たちへの賀詩としても使われたわけである.

## Managing Successful Internet-based Distance Learning Programs —From the Viewpoint of the History—

Toru Sasabe

*Department of English, School of Letters,  
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

### Abstract

The purpose of this paper is to provide some insight into what it takes to create a successful Internet-based distance education program from the beginning of the system. The problem with most of the existing programs is that they lack proper administration and the technological infrastructure support. By addressing these facts early on, institutions can insure their success in the distance education race.

### Introduction

Hundreds of articles about distance learning and the technology involved in it have been published. Most of them have been published in last years. There are hundreds of sources citing what distance learning is and how both the faculty and students are reacting to it. Few articles, however, are dedicated to providing details on implementing and managing successful Internet-based distance education programs. To attempt to describe every aspect involved in implementing and managing a distance education program would be a magnificent task. That description would consume hundreds of pages and, like most technology-related books, be out of date by the time it would be published. Distance education is one of the fastest growing areas in higher academic institutions today. Moreover, like the technology that drives it, distance education is evolving, as are the skills required of program managers. The terms “distance education” and “distance learning” have been applied interchangeably by many different researchers to a great variety of programs, providers, audiences, and media. Its features are the separation of teacher and learner in space and/or time (Perraton, 1998, p.76). Distance education is not a new invention. In fact, it began when the first correspondence opened its doors in Cape Town in 1906.

Today, distance education has developed beyond the limits imposed on traditional correspondence schools by using the Internet as a delivery medium. Moreover, Virtual worlds of Second Life through the Internet have potential to compensate the situation of residing non-English speaking counties, giving students more interaction with English speaking people in the world (McKay, 2009, p.78). Formal, acceptable, distance education began in the United States in the early 1980's in the forms of tele-courses and video courses. Institutions obtained licensing rights to air programs on Public Broadcast stations and designed courses could be offered for credit to degree-seeking, financial aid students (Dervarics, 1998, pp.3-5). It was also during this time that local cable broadcast stations began to program for tele-courses. However, it was not until the 1990's that distance education programs became a viable institutional investment. For example: Think about how difficult it would be to organize an effective training program if both your teachers and your students were spread across the globe and moving constantly from place to place (Apicella, 1998, pp.77-78). The solution to this problem, the combination of students and instructors in a cost-effect manner via the Internet or corporate intranet, is providing institutions with the means of increasing student enrollment despite geographic location. More importantly, effective management of distance education programs will prove to be an over-riding factor in the success of those programs.

Distance education or learning speeds the process of transferring the knowledge of expert instructors to their

students, enabling learning to take place more efficiently than ever before. Implicit in the term “distance learning” is the concept of education that can occur without the need for the instructor and student to be present in the same location at the same time.

## 1. Internet-based Distance Education in Higher Education

Recently distance education has grown in popularity with higher education institutions. New delivery methods such as satellite, the World Wide Web (WWW) , and intranet technologies have made distance education a growing means to increase student enrollment, an important factor for virtually every post secondary institution. By offering virtual classes and Skype classes (McKay 2011, p.21) , institutions can increase their full time head count considerably, which in turn provides them with more funding. In addition, distance education meets the current goal for producing technologically well-informed students, by giving students hands on experience with computers and networking technologies. “As we approach the millennium, the virtual classroom will become the norm, not the exception” (Sonntag, 1998, p.69) . According to Nortel Networks (1999) , distance learning has been shown to produce the following potential benefits by several industry studies:

- **Reduced learning time** - typically 30-40 percent less time is required for learning to be achieved compared to classroom instruction.
- **On-demand learning** - instruction is available when and where the learner needs it, eliminating the need to wait for, travel to, a scheduled class. In addition, distance learning increases access to learning for the disabled.
- **Increased motivation** - students frequently report that they find technology-based interactive learning more interesting and enjoyable than classroom lectures.
- **Better quality control** - since learning experiences are delivered in the same way each time, they are much more consistent and reliable than classroom instruction.
- **Increased safety** - students can learn about dangerous procedures with reduced safety concerns.
- **Greater flexibility** - fluctuations in the number of learners, or their backgrounds, can be accommodated more easily than with classroom instruction.
- **Improved accountability** - automatic collection of data on learner performance can verify that learning has been accomplished and identify learning problems.
- **Faster revision** - learning experiences are delivered via a networked system, simplifying the process of making changes and updates to the curriculum.
- **Reduced delivery costs** - once developed, technology-based interactive learning is likely to cost less when compared to traditional, labor-intensive classroom instruction.
- **Learner controlled** - each learner is able to review topics or to skip the information they already know.

## 2. How are Post-secondary Institutions Delivering Distance Education?

It seems that the most popular mode of delivery is rapidly becoming the World Wide Web, but traditional delivery methods such as VCR tapes, telecourses, fax, and independent study remain in favor. However, distance learning is quickly becoming ‘Internet Learning’ [as] the most popular form of non-traditional education delivery (Rudich, 1998, p.73) . Furthermore, as the bandwidth issue has been resolved in recent years, the Internet has also allowed for face-to-face instruction via videophone or video camera. A technology that is currently available and can cost for free. When institutions consider using an Internet-based distance education program as a part (or whole) of their ordinary curriculum having a qualified, skilled distance education manager or program coordinator is imperative. A study by the United States Department of Education stated that only 36% of colleges and universities who offer distance education courses have a separate office for distance education (Rudich, 1998,



p.15) . Higher Education institutions tend to “dip their toes in the water, before taking the plunge” . Over the past four years, Internet courses have tended to emerge from the primordial soup of a faculty member’s web site designed to supplement their courses, not to teach it. This approach has left many institutions without adequate support or technological resources. For public and private institutions of higher education to be successful in the distance education market, skilled and capable managers are a vital part of the success of the program.

### **3. Management of Internet-based Distance Education Programs**

With the growth of distance education curricula the management of Internet-based distance education programs has become an increasingly important issue. Administrators are faced with technological questions, which were not high on their priority list in recent years. Those questions include such things as: how to develop and maintain the infrastructure needed to maintain the curricula; how to staff key positions, such as support and instructor coordinator; how to budget effectively for equipment and support personnel, and how to combine the talents of their Information Technology Department with that of the faculty members, and institution administrators. Implementing and managing a successful Internet-based distance education program requires the manager to be aware of the necessary equipment required to maintain and implement an Internet-based curriculum. This is a new role for educators and Information Technology professionals. It combines industry specific skills with educational design skills.

### **4. Managing the Infrastructure**

Most colleges and universities maintain an extensive Information Technology staff as well as campus wide web sites. For most students it would seem absurd to consider attending a college without a presence on the WWW in the wake of the “Information Technology Revolution” . However, just thirty years ago computers in higher education were relatively rare and so was technological expertise (Ringle, 1998, p.211) . Today computers are a common place in both the classrooms and in the hands of most faculty, but technological expertise is still not a commodity. Managers face the task of not only choosing and implementing the right technology but also ensuring that the faculty has the ability to use it. When managers are deciding on which technology to choose that are faced with two decisions: to maintain the equipment on site for Internet courses or to outsource and rent the space on server. The basic networked learning system involves interactive video-conferencing that supports two way video and audio communications to multiple locations using IP, T1 connections, ISDN or an Asynchronous Transfer Mode (ATM) backbone (Rudich, 1998, p.25) . That infrastructure should also consist of web servers (main and mirror sites) , server-side software, a dependable Internet connection, accounts and e-mail for both faculty and students. While courses can be conducted without students and e-mail accounts, it has a tendency to create problems for both the instructors and the students. Furthermore, most state institutions have access to the Internet backbone provided through their governing boards. These institutions typically maintain T-1 lines to their provider, and are then routed through their provider’s modem pool to a dedicated DS-3 or ATM. Distance education managers, instructors, and administrators alike are concerned about the level of interactivity involved in on-line classes. Many institutions have considered using streaming video format, as well as, streaming audio to provide interactivity to their courses. The problem lies within the fact that the majority of institutions lack the “Information Technology Infrastructure” to deliver this content (national Center for Higher Education Statistics, 1998, p.78) . Limited bandwidth means slower performance for sound, video, and graphics, causing long waits to download that can affect the learning process. Internet may hold the answer for institutions with limited bandwidth, but as of recent only 100 research institutions have joined the project and fewer have been awarded the “very high speed network” (Rudich, 1998, p.55) . Moreover, Internet is not available to post-secondary institutions that do not perform

research; thus, those institutions will not see the effects of Internet for some time.

The alternative to providing on-campus housing of Internet-based courses is outsourcing the server space, personnel, and software to an outside vendor. This option is particularly attractive to institutions, which lack the necessary information infrastructure to support their projects. Local or national companies can be contracted to provide the course development software, server space, and continuous technical support. They may or may not support the multi-media aspects of the course. It is important for the program manager to have a clear understanding of costs and benefits of both programs.

## **5. Financing the Program**

With the high cost of Information Technology, budget properly for equipment and personnel is imperative for a successful program. Internet-based distance learning programs can be extremely expensive. Equipment and training cost can rise as institutions struggle to keep up with new technological developments. Most colleges and universities have consistently reported net increases in staffing and budgets as a direct consequence of the proliferation of technology (Ringle, 1998, p.33) . As note previously, the equipment itself can be an exuberant expense to the institution. Among the factors frequently reported as keeping institutions from starting or expanding their distance education course offerings to a “major extent” were program development cost (43 percent) , limited technological infrastructure (31 percent) , and equipment failures and costs of maintaining equipment (23 percent) (National Center for Higher Education Statistics, 1998, p.84) . Following those categories is often the cost of support staff: Webmasters, System Administrators, and Training Specialist. Not to mention the incentives offered to faculty to design the courses such as off-loads and stipends. However, the costs involved in developing Internet-based distance learning are expected to circumvent the costs of building new academic buildings, dorms, and other resident student activities. For example, Carty states: The cost of building new classrooms, dorms, or even whole new campuses is unbelievably high (tens of billions of dollars, according to one source) (Carty, 1998, p.6) . Even though the cost of Internet-based distance education requires a large capital outlay at the onset of the program, those costs can be offset by the magnitude of new grants and laws currently being enacted by the federal government and the private sector. New changes in student financial aid rules may help two-year colleges expand the number and scope of distance learning programs nationwide The law also allows community college students to get financial aid for non-degree distance learning programs. Previously, students had to participate in a program leading to at least an associate’s degree to gain access to aid. Among other changes, the higher education bill will factor either the purchase or lease of a computer into the cost of attendance for students in distance learning programs (Dervarics, 1998, p.5) . There are also a number of new federal government grants available for post-secondary institutions that are engaging in “ground breaking” activities (National Center for Higher Education Statistics, 1998) . This funding begins at \$75 thousand per year and goes up to \$5 million per year. There are also a number of grants available for faculty development concerning technology (National Center for Higher Education Statistics, 1998, p.122) .

There are four truths that every Internet-based distance education program manager should know. The four cardinal truths of financing information technology are these: (1) it is expensive, (2) it is additive to existing budgets, (3) its benefits are difficult to assess, and (4) and it is her to stay (Ringle, 1998, p.40) . Depending on the mission of the institution, these truths should be considered carefully. One of those truths however cannot be denied: Information technology is here to stay. By 2001, analysts predict the market for distance-learning ... will reach \$1.1 billion (Schwartz, 1998, p.84) . By 2050, the face of education will have changed completely.

## 6. Combining Human Resources

The most important task for a manager, concerning distance education, is their ability to combine the talents of their Information Technology professionals, faculty members, and institutions administrators. One of the greater challenges is in bringing together groups of people who normally do not work with each other. In higher education, that means integrating faculty members, and information technology staff-people who rarely collaborate in a normal university setting. (Hagendorf, 1998, pp.85-87) . In the past, the primary role of the information technology staff has been to ensure the equipment and software integrity of the institution by which they have been employed. Not until recently did that role include supporting the multitude of questions from the faculty teaching or preparing to teach courses via the Internet. Supplementing the problem is the fact that academic courseware applications are a relatively new invention, thus creating a learning curve for staff members. Having those employees trained and prepared to assist the faculty should be a priority for program managers. Faculty members are the most important resources available to the project manager. They design and teach courses/ a tremendous amount of their time is devoted to bringing the project to fruition while historically, the professor's role has ... been that of an expert who lectures or 'professes' (Phillips, 1998, p.120) . With the dynamic nature of the electronic age, information changes rapidly and professors who teach Internet-based courses must double the amount of time they take in preparation for their classes, though convenient, the outline program isn't easier than traditional on-site classroom education (Jackson, 1998, p.41) .

The final link in the human resource chain is institutional administration. For the program manager this link may be the hardest to make. Institutional administrators must be convinced of the costs involved, the amount of dedication from the faculty and the necessity for the support staff. Many institution administrators are mandating the implementation of Internet-based curricula without regard to the infrastructure, training or costs involved. "Chief among these are uneducated school administrators and a resistance to paying fair market value for distance-learning technology" (Schwartz, 1998, p.87) . They realize the importance of keeping up with technology but fail to recognize the importance of proper management of the program.

## Conclusion

Proper management of distance education programs is of the utmost importance. "Done correctly with the proper resources, preparation, and executive support, organizations will find that outline training will increase attendance and save costs" (Edelman, 1998, p.72) . By offering students alternatives to traditional classroom education, institutions do not have to allocate classroom or laboratory space. Managers must know how to create a working infrastructure, finance the program, and hire and keep technology professionals. They must be able to combine the skills possessed by their faculty and the information technology staff in a manner that is productive and lucrative. By adding to the institutions existing infrastructure and planning growth, the cost of distance education programs can be offset by as much as half. Distance education programs have a propensity to grow exponentially if they are done well. Many institutions begin their distance education programs by offering a limited number of courses and they use the technology they already have in place because they are unsure of how well the courses will work or how many students will enroll. By comparison, institutions that have good distance education programs plan them from the ground up. They implement the information technology infrastructure before they begin building their classes. This helps to solve the problems before they begin. Successful distance education programs also have the necessary support staff in place before beginning course development. By providing faculty with training and technical support the quality of teaching materials is improved. The thing for faculty, managers, and administrators alike to remember is this: with the increasing availability of the Internet to most potential students, Internet-based distance courses are booming (Zhang, 1998, p.398) with the advent of new

technologies such as Virtual worlds of Second Life and Skype (McKay, 2011, p.22) . Everyone related to education should wish to give convincing qualitative and quantitative evidence to prove newly developed technologies ready for inclusion in today's educational curriculum.

## References

- Abernathy, D. (1998) . The WWW of distance learning: Who does what and where? *Training and Development*,52, 29-32.
- Apicella, M. (1998) . Technology for the classroom and the battlefield. *InfoWorld*,20, 77-78.
- Carty, S. (1998) . The challenge of the educated web. *Searcher*,6. 32-39.
- Dervarics, C. (1998) . Distance learning programs gain ground. *Community College Week*,1. ,3-5.
- Edelman, R. (1998) . Distance learning works. *Internetweek*,72. 30.
- Emmer, M. (1997) . Distance learning tests America's higher education dominance. *Connection: New England's Journal of Higher Education & Economic Development*,12. 20-23.
- Hagendorf, J. (1998) . Distance learning comes to forefront as service source. *Computer Reseller News*, 800. 85-87.
- Jackson, L. (1998) . Campus convenience. *Network World*, 1. 41-44.
- Jason, B. (1998) . Teaching technology technique: Educators contemplate the appropriate use of technology in the post secondary environment. *Black Issues in Higher Education*, 15. 48-50.
- Lee, C. (1998) . Virtual U. *Training*, 35. 81-83.
- Lewis, L., Alexander, D., and Farris, E. (1998) National Center for Higher Education Statistics. Distance Education in Higher Education Institutions: Incidence, Audiences, and Plans to Expand. *U.S. Department of Education*.
- McKay, D. (2009) .Virtual language labs: A four year curriculum and implementation process. In A. M. Stoke (Ed.) , *JALT2008 Conference Proceedings. Tokyo: JALT*, 47.78-79
- McKay, D. (2011) . Motivating Language Learners through Virtual Worlds: Second Life, Moodle, and SLOODLE. *JALT PAN-SIG2010 Conference Proceedings*,54.22-23
- Perraton, H. (1988) . A theory for distance education. *Distance education: International perspectives*.
- Phillips,V. (1998) . Online universities teach knowledge beyond the books. *HRMagazine*, 4. 120-128.
- Rudich, J. (1998) . Internet learning. *Medford*, 15, 23-25.
- Schwartz, K. (1998) . Distance learning: An education in patience. *Reseller Management*,21. 84-88.
- Smith, M. (1998) . Education poised to go the distance. *National Underwriter*,102. 19-20.
- Sonntag, E. (1998) . The competitive edge of satellite-based-education. *Satellite Communications*, 22. 38-40.
- Uiterwijk, J. (1998) . Long distance learning. *Infoworld*,20. 72-76.
- Zhang, P. (1998) . A case study on technology use in distance learning. *Journal of Research on Computing in Education*,30. 398-420.

# ハプスブルク領ネーデルラントの防衛と フェリペとイングランド女王メアリー 1 世の結婚 —1550 年代の西ヨーロッパ国際関係—

山 田 慎 人  
(武庫川女子大学文学部英語文化学科)

## The defence of the Habsburg Netherlands and the marriage between Philip of Spain and Mary I of England: western European international relations in the 1550s

Norihito Yamada

*Department of English, School of Letters,  
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

### Abstract

The 1550s was a period of great transition in western European international relations, during which the "Habsburg Empire" of Emperor Charles V was divided into two parts. This article examines the motives and strategies of Habsburg leaders behind this division of the empire and considers the attempt of Charles and his son Philip to enhance the defence of the Habsburg Netherlands through the latter's marriage with Mary I of England in 1554.

### はじめに

1494 年のフランス国王シャルル 8 世のナポリ遠征を重要な契機として明確に姿を現した西欧国際体系が、その最初の半世紀にどのような特徴を持ったのか、すでに検討を重ねてきた。その第 1 の特徴は、近世史家が「王朝国家」や「複合王政」と呼ぶ、国際関係の主要なアクターとしての国家の非近代性である。第 2 に、非近代的な国家の外交政策は、必然的に、近代的な国益の観念を伴わず、王朝による土地の継承権や君主の個人的名誉を重視する、非近代的な性格を帯びた。しかし第 3 に、当時の支配者達の対外的行動は、自らの個人的な信仰や宗教的熱情に支配されていたわけではない。彼らの多くは、宗教を政治的共同体の安定の重要な礎と捉え、この観点から理性的な宗教政策を追求した<sup>1)</sup>。

この 16 世紀の西欧国際体系は、1540 年代末から 1560 年代半ばにかけて、大きな転機を迎える。第 1 に、1547 年にイングランド国王ヘンリー 8 世とフランス国王フランソワ 1 世が相次いで死去し、1556 年にはハプスブルク家のカールが隠遁生活に入るなど、16 世紀前半に主要な役割を果たした指導者達が表舞台から消え、支配者の世代交代が実現した。第 2 に、ハプスブルク家のカールは、引退に際して息子フェリペと弟フェルディナントに領土や神聖ローマ皇帝位を分け与え、当時の西欧国際体系の要とも言える所謂ハプスブルク帝国が分裂した。第 3 に、1555 年のアウグスブルクの和議によってドイツでの宗教対立に一応の解決が得られたが、フランスやネーデルラントなど他の地域では 1550 年代から 1560 年代半ばにかけて宗教対立が高まり、西ヨーロッパは所謂「宗教戦争の時代」<sup>2)</sup>へと突入していく。

本稿の目的はこの転換期の西欧国際関係を概観し、その特徴を大きく掴むことだが、その際に、1550



年代のハプスブルク帝国の分割、そして、ハプスブルク領ネーデルラントとイングランドの関係に焦点を当てる。検討すべきは、(1)カールの治世末期の帝国分割は、前近代的な遺産の分割にすぎなかったのか、戦略的計算に基づいてなされたのか、(2)1554年のハプスブルク家のフェリペとイングランド女王メアリー1世との結婚の背景にあったのは、王家の威信か戦略的考慮か、(3)イングランドの不安定な宗教的状况に対応する際に、カールやフェリペは信仰と王朝の利益のいずれを指針としたのか、(4)スペイン系ハプスブルク家とイングランドの連合は上手く機能したのか、といった点である。

## 1. ハプスブルク帝国の分割

カールが自らの遺産の継承について真剣に思いを巡らせるようになったのは、彼が40歳になった1540年頃のことであったと思われる。カールが、母方の祖父母から受け継いだスペインやナポリ、シチリア、そして新大陸の植民地を息子フェリペに譲ろうと長く心に決めていたことは疑いない。彼は、1543年にネーデルラントでの戦争に向かう際、16歳のフェリペをスペインでの摂政に任命した<sup>3)</sup>。

これに対して、父から継承したネーデルラントに関しては、1人の君主がスペインと同時に支配する困難を経験し、1530年代末に、他の領土と切り離して長女マリアに与えることを決めた<sup>4)</sup>。マリアはカールの弟フェルディナントの息子マクシミリアンと婚約しており、この決定は弟の家系への譲歩も意味した。カールは、1516年と1519年に母方の祖父アラゴン国王フェルナンド2世と父方の祖父神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世が死去した際に、後に兄弟で領土の分割を協議するという了解の下ですべての土地を継承し、帝位も獲得したが、オーストリアのハプスブルク家世襲領以外に弟に何も譲らず、これにフェルディナント父子は大きな不満を持っていた<sup>5)</sup>。

しかし、その後婚姻によりヴァロア家との対立を解消するという考えに一時的に心を奪われたカールは、1544年のフランスとのクレピエの和約で、フランソワ1世のその時点で生存していた2番目の男子オルレアン公シャルルが、自分の娘マリアか弟フェルディナントの娘アンナと結婚し、前者の場合にはネーデルラント、後者の場合にはミラノを与えることを約束した。カールは熟考の末ミラノを与えることを決め、さらにクレピエの和約の規定そのものが1545年のオルレアン公の死により反故になったが、その後もネーデルラントの将来について迷った。最終的にカールは、1548年にネーデルラント17州を神聖ローマ帝国の他の部分から分離して単一の政治体とし、翌年フェリペを後継者に指名した<sup>6)</sup>。

フェルディナント父子はこれに不満を持ったが、カールはさらに多くをフェリペに残そうとした。カールは1531年に、自分が不在の間も弟が神聖ローマ帝国で指導力を発揮できるよう、弟のために、戴冠されていない皇帝選出者を意味する「ローマ王」の称号を得た。しかし、カールは、温厚な弟と違い性格の激しいマクシミリアンが皇帝となった際に、皇帝の封土であるネーデルラントやミラノをフェリペから奪うことを恐れ、1550年に弟に帝位を諦めるよう迫った。結局、翌年カールは弟に、皇帝就任後にフェリペをローマ王に選出し、ハプスブルク家の両系統が交互に皇帝となるという妥協を強いた。もっとも、この取り決めは実現しなかった。選帝侯達は、長い間皇帝の代理を務め、宗教問題で妥協的な態度をとったフェルディナントとその子をサポートし、彼らが熱烈なカトリック信仰を持つ外国人とみなしたフェリペに強い拒絶反応を示した。フェリペは、1555年にローマ王への要求を自ら取り下げた<sup>7)</sup>。

こうして、マクシミリアンとその子孫がオーストリアと帝位を継承し、フェリペとその子孫がそれ以外を継承するという形で、カールの帝国は2系統に分割された。この分割には、どれほどの戦略性があったのか。歴史家達は、ハプスブルク家が帝国の防衛について考えた時、ネーデルラントが最大の焦点となったと合意しているが、彼らがどのような計算からネーデルラントの問題に対処したのかについて、いまだ意見の一致を見ない。例えば、M. J. ロドリゲス＝サルガドは、分割された帝国は、ハプスブルク家内部の継承をめぐる争いの結果にすぎず、そこに戦略性を見出すことはできないと断じたが、彼が問題としたのは、ネーデルラントの防衛が神聖ローマ帝国の資源に依存しており、また、北ヨーロッパと地中海世界という全く異なる地域に属するネーデルラントとスペインの利害が調和不可能であるにもかかわらず、ネーデルラントを神聖ローマ帝国から切り離してスペインと合同したことである<sup>8)</sup>。

これに対して、ヘンリー・ケイメンは、カールが両地域のつながりを維持した理由として、自らが幼少期を過ごした土地への愛着という感情的な要因に加え、ネーデルラントの経済的重要性を挙げ、カールの決断が合理的であったと示唆した<sup>9)</sup>。ネーデルラントの経済的重要性に関する評価は難しい。一方で、カールの治世において、その財政的貢献は、絶対額で言えば帝国の諸地域の中で一番大きかったと思われる。事実、1544 年のフランスとの和約の後に、カールの重臣達がネーデルラントとミラノのどちらをオルレアン公に与えるか議論した際、多数は前者の経済的重要性を理由にその維持を主張した<sup>10)</sup>。しかし他方で、カールの戦役と財政を詳しく分析したジェームス D. トレーシーが示すように、ネーデルラントはその多大な財政収入にもかかわらず、スペインにおけるピレネー山脈のような堅固な自然の障壁を持たないため防衛が困難であり、その財政は自らの防衛にも十分でなかった。特に、ヴァロア家との対決の重心がイタリア半島から北ヨーロッパへと移動した 1530 年代以降、恒常的にカスティーリャからの財政援助を必要とするようになり、財政的にはむしろ重荷となった<sup>11)</sup>。

しかし、いかに重荷でも、殊更名誉を重視したカールにとって、自ら領土を放棄することは考えられず、その防衛のための最善の方法が求められる。こう考えると、カールが、スペインの軍事財政資源なしに帝国を防衛できないという信念から、スペインとネーデルラントのつながりを維持したというウィリアム・モルトビーの見解には、説得力がある<sup>12)</sup>。たしかに、ケイメンが特にその著作 *Spain's Road to Empire* で示したように、近代初頭の世界におけるスペイン帝国の華々しい業績は、スペイン人のみならず、イタリアやドイツ、ネーデルラントなど他の支配地の人々の軍事的、財政的協力に負っていた<sup>13)</sup>。しかし、ケイメン自身を含め多くの研究者が指摘するように、戦費負担という点では、カールは、その治世の後期にはスペイン、中でも課税への議会のコントロールが弱く、新大陸から大量の銀が流入し始めたカスティーリャへの依存を強めていった<sup>14)</sup>。カールが、スペインの資源なしに、神聖ローマ帝国におけるハプスブルク家のリーダーシップもネーデルラントの支配も維持できないと考え、スペインを中心とする帝国の一体性を維持したいと考えたとしても、不思議ではない。

さらに、1544 年のクレピーの和約の履行をめぐる協議の中でカールの顧問達が指摘したように、ハプスブルク家がネーデルラントからフランスを脅かすことで、その行動を抑制できたことも重要である<sup>15)</sup>。オランダ史の大家ジョナサン I. イズレイルによれば、ネーデルラントの防衛は地形上の困難を伴ったが、この問題はフランス側でより大きかった。ネーデルラント側では、地域に特徴的な数多くの河川や堤防や運河を要塞と組み合わせてある程度防衛を強化できたが、フランス側には同様の自然の障壁はなく、ネーデルラントからフランス領を脅かすことは容易であった<sup>16)</sup>。

もちろん、そもそも祖父母の遺産を弟に分け与えようとしなかったカールが、心情的な理由から、自分の遺産を直系の子孫にできる限り残そうと望んだことに疑いはない。カールはその治世において、家の権利や自らの名誉の防衛、キリスト教世界の統一といった非近代的な目的を、常に重視してきた。しかし彼は、長い治世の中で、これらの目的を実現するためには相応の外交、軍事、財政戦略が必要なことを学んだ。ジェフリー・パーカーは、スペインによる後のネーデルラントの反乱鎮圧の失敗を、スペインが軍事技術においては時代の変化に上手く対応した一方で、軍隊展開の背後にある政治目標が騎士道と十字軍の時代から進歩しなかったことに帰したが<sup>17)</sup>、これに先立つカールの時代にも、対外政策の目標が中世的でありながら、それを実現するための軍事、財政戦略は徐々に合理的で近代的になりつつあるという、目的と手段の近代性における差はすでに見られた。この意味で、カールの治世末期の帝国の分割にも、一定の戦略的計算が働いたと考えるのが妥当であろう。事実、スペインとの結合によってもネーデルラントの防衛が容易でないことを認識したカールは、より大胆な外交戦略に打って出る。次節では、まさにその戦略、つまり息子フェリペとイングランド女王メアリーの結婚について検討する。

## 2. フェリペとイングランド女王メアリーの結婚

前節の検討から明らかなように、ヨーロッパ南部の領土から離れたネーデルラントの防衛は、ハプスブルク家の軍事外交戦略において重要な位置を占めた。問題は、距離に加え、長期にわたる君主の不在



にあった。近世ヨーロッパでは、人々の忠誠を維持するために、地域で生まれ育った君主がその地に居住することが望ましいと考えられた。1548年にカールがネーデルラントをフェリペに与えることを決意した際、カールは、将来フェリペの第2子がネーデルラントを継承することを定めたが、これはネーデルラントをスペインと結び付けつつ独自の忠誠の対象を与える目的を持った<sup>18)</sup>。この規定は、最初の妻でポルトガル国王ジョアン3世の娘マリア・マヌエラを、1545年の長男カルロスの誕生後すぐに亡くしていたフェリペが<sup>19)</sup>、1553年に、父カールの妹レオノールと、マリア・マヌエラの祖父で先代のポルトガル国王マヌエル1世の間に出来た子マリアとの結婚を考えた際にも、カールの頭に浮かんだようである。1552年春にフランス国王アンリ2世とドイツの新教派諸侯の同盟を相手とする戦争が始まると、ネーデルラントでは戦費負担のための増税への不満が高まり、カールは1553年春にフェリペに急ぎネーデルラントに赴くことを命じたが、その際彼が新たな妻を連れてくることを望んだ。2人の滞在中に将来地域の支配者となるフェリペの第2子が誕生すれば、その政治的安定に寄与するからである。しかし、夏にフェリペとイングランドの新女王メアリーとの結婚の可能性が急浮上すると、カールはネーデルラント防衛のためのさらに魅力的な方法を思いつく。ネーデルラントとイングランドの連合である<sup>20)</sup>。

メアリーは、よく知られているように、ヘンリー8世とその最初の妻キャサリンの娘であるが、この2人の結婚にもネーデルラントはかかわっている。キャサリンは、カトリック両王の末子として1487年末に誕生したが、まさにネーデルラントを含む各地におけるフランスの拡張を阻止したいアラゴン国王フェルナンド2世とイングランド国王ヘンリー7世の同盟を強化するため、1501年11月にイングランド王太子アーサーと結婚した。アーサーは1502年4月に急死したが、縁戚関係を維持したい2人の父親は、翌年、アーサーの弟ヘンリーとキャサリンの婚約に合意した。この結婚は長く実現しなかったが、その理由にもネーデルラントは関係している。1504年にフェルナンドの妻カスティーリャ女王イサベルが死去した後、フェルナンドとその娘婿でネーデルラントの支配者フィリップ(カールの父)が、カスティーリャの支配権をめぐる争ったが、ネーデルラントのフランスからの防衛を重視するヘンリー7世はフィリップとの協力を優先して、フェルナンドとの関係が悪化したからである<sup>21)</sup>。

しかし、1509年にヘンリー7世が死去すると、息子ヘンリーは自らの意思で即座にキャサリンと結婚した<sup>22)</sup>。2人の間には1516年にメアリーが誕生したが、その後子供に恵まれず、男子を欲したヘンリー8世は、1533年にアン・ブーリンと結婚し、キャサリンとの結婚は無効であったと宣言する。メアリーはこの後庶子扱いされたが、ヘンリーはアンとの間にも娘エリザベスしか得られず、1537年になって3人目の妃ジェーン・シーモアとの間によりやうくエドワードを得た。1543年の王位継承法によって、メアリーは、エドワードとその子に次ぐ継承の権利を得たが、この法はメアリーの庶子の立場を変えず、さらに1547年にヘンリー8世が死去してエドワードが国王となり、英国国教会のプロテスタント化を推し進めると、メアリーは自分のカトリック信仰に制限を受け、彼女の苦境はさらに深まった<sup>23)</sup>。

カールはメアリーの処遇についてエドワードの摂政政府に外交的に抗議し、1550年にはメアリーのイングランドからの救出作戦まで試みたが、他方で、フランスとの対決においてイングランドを敵に回さないよう注意を払い、メアリーが信仰の問題で弟と過度に対立しないよう説いた<sup>24)</sup>。このような中、1553年にエドワードの健康が急速に悪化したことは、カールにとって期待と不安を共に抱かせるものであった。エドワード自身、そして1549年以降若い王を補佐して実権を掌握してきたノーサンバーランド公は、女王メアリーの下でのカトリック回帰を恐れ、ノーサンバーランド公の6男と結婚したヘンリー7世の曾孫ジェーン・グレイによる王位継承を画策した。メアリーが従兄カールに依存することを恐れるフランス国王アンリ2世も、彼女による継承を嫌い、ノーサンバーランド公に支援を申し出た。カールは、メアリーによる継承を望みながら、自分がそのために介入する力がないことを認識し、エドワードを見舞う名目でイングランドに派遣した特使に、中立の立場をとり、ジェーン・グレイの王位継承が実現しそうな場合には、ノーサンバーランド公との友好を求め、フランスの影響力を排除するよう指示した。カールの側近達の中には、さらに、アンリ2世が、自分の影響下にある、ヘンリー8世の妹マーガレットの孫でスコットランド女王のメアリー・スチュアートを王位につけようと狙っていると疑

う者もいた。1542 年生まれのメアリー・スチュアートは、1548 年にイングランドからの保護を約束したアンリの申し出を受け入れてフランス王太子フランソワと婚約し、それ以来フランス宮廷で暮らしていた。カールとその側近達は、アンリが、彼女にイングランド王位を獲得させ、将来的には、彼女とフランソワの子をフランスとスコットランド、イングランドの支配者にする野心を持つと疑った。これが実現した場合、スペインからネーデルラントへの海上ルートは断たれ、後者の防衛は困難になる<sup>25)</sup>。

結局、7 月 6 日にエドワードが死去すると、ノーサンバーランド公はジェーンの王位継承を宣言するが全く支持を得られず、18 日にメアリーを新女王として認めた<sup>26)</sup>。メアリーにとって最初の重要な課題の 1 つは、後継者を得るための結婚であった。彼女はカールの助言を求め、カールは慎重にフェリペとの結婚を切り出したが、カール及びハプスブルク側で結婚の交渉を担当したブルゴーニュ出身の大臣グランヴェルやカールの妹でネーデルラント総督のマリアは、両者の結婚を主にネーデルラント防衛の観点から考え、イングランド側と、フェリペとメアリーの間に生まれた子が、ネーデルラントとイングランドを併せた国の支配者となるという合意に達した。将来イングランドが自動的にネーデルラントの防衛に関与することが期待されたのである。結婚条約は、フェリペはイングランドをハプスブルク家の他の支配地での戦争に巻き込まないこと、メアリーがフェリペより先に死去すれば、フェリペはイングランドでの権利を失うこと、カルロスが後継者なく死去すれば、彼の所領もフェリペとメアリーの間に生まれた子が継承することを定めた。また、フェリペは国王の称号は得るが、メアリーと共同でしか主権を行使しないこと、フェリペはイングランドの法と慣習を尊重すべきでパトロネージの権利を持たないことも定められた。イングランド国内の外国の君主との結婚への反対に配慮したこれらの規定は、カールが、ネーデルラントの防衛のために、いかに強く 2 人の結婚を望んだのかを示している<sup>27)</sup>。

フェリペは父親に押し付けられた条約を嫌い、秘密裡にそれを拒絶する宣言を行った後、1557 年 7 月にイングランドに到着し、メアリーと結婚した<sup>28)</sup>。フェリペが最も強く嫌ったのは、おそらく自分の遺産の分割に関する条項であり、事実、1557 年に、メアリーとの間に生まれた子はイングランド王位のみ継ぎ、他のすべての遺産はカルロスが継承するという遺言を残した<sup>29)</sup>。父カールが自分に対してそうしようとしたように、フェリペも自分の息子 1 人にすべての遺産を残そうとしたが、これは当時の君主の多くに共通する態度であった。他方で、フェリペがイングランド国王としての自分の権限に課された制限をどのように考えたのか、議論の余地がある。ロドリゲス＝サルガドは、フェリペがこれらの制限を名誉に反すると考えた主張するが、ケイメンは、メアリーとの結婚条約はフェリペの祖父母カトリック両王が結婚した際の条件と大きく変わらず、フェリペが強く反対したはずはないと考える<sup>30)</sup>。後者の見方をとるなら、フェリペのイングランド王位獲得はハプスブルク家の威信を増大させたという見方もできるであろう。しかし、交渉の過程を見る限り、威信の増大が結婚の主要な目的であったとは考えられない。少なくともハプスブルク側では、結婚は主にネーデルラントの防衛という戦略的な目的のために追求され、まさにその目的を達するために、フェリペは自らの権限への制限を受け入れる必要があった。もっとも、帝国の防衛という戦略的目的を君主間の結婚という前近代的な手段で実現しようとしたことに、この時代の西欧国際関係の過渡期的性格がよく表れているとは言えるかもしれない。

### 3. フェリペとイングランド

カールやフェリペがメアリーとの結婚を望んだ、前節で触れなかった理由として、国王フェリペの下でイングランドのローマ教会への復帰を実現するという願望があった。しかし、この願望は彼らの信仰から来るものではない。それはむしろ、1552 年夏にドイツの新教派諸侯と和解し、宗教的譲歩を余儀なくされる中、イングランドのローマ教会復帰を助けて、彼らのキリスト教世界における威信と教皇庁での影響力を回復するという、非宗教的な動機を持った。実際に、メアリー自身ローマ教会への復帰を心に誓ったが、カールは、それがフェリペとの結婚前に実現しないよう、そのために派遣された教皇特使レジナルド・ポールを、大陸で足止めした<sup>31)</sup>。ポール足止めのもう 1 つの理由は、メアリーが、売

却されたカトリック教会の土地の返還に関するポールの要求を認め、それがイングランドで反乱を招き、メアリーとフェリペの王位を脅かすという危惧にあった。フェリペはイングランド到着後、教皇及びブリュッセルに足止めされたポールと交渉し、土地の返還なしにローマ教会への復帰が認められるという確信を得てから、11月にポールを受け入れ、イングランドはローマ教会へと復帰した<sup>32)</sup>。イングランドの宗教的解決に関するカールやフェリペの態度は、ハプスブルク家の政治的利害によって決定された。

しかし、宗教問題を除き、フェリペの1度目のイングランド滞在は成果を挙げなかった。議会によるフェリペの戴冠の拒否は、彼が重視した名誉を損なった。この問題も、メアリーとの間に跡継ぎが誕生すれば、次期国王の父親としてフェリペの権威は高まり、自然と解決したかもしれない。しかし、妊娠していると思われたメアリーが実は妊娠していなかったことが1555年夏には明らかになる。フェリペは9月に、予てからの父カールの要請に従い、メアリーを残してネーデルラントに向かった<sup>33)</sup>。目的の1つは、カールからネーデルラントの支配を受け継ぐことであり、これは10月末に実現した。翌1556年に、カールは、すでにメアリーとの結婚を機にフェリペに譲ったナポリ王位に加え、スペインやシチリアの領土も譲渡し、正式の退位は2年後のことであったが、実質上神聖ローマ皇帝位からも退いた<sup>34)</sup>。

さて、この間も、アンリ2世との戦争は続いた。イタリアでは、1555年5月に反ハプスブルク派のジョヴァンニ・ピエトロ・カラファが新教皇パウルス4世となって10月にアンリと同盟を締結し、ハプスブルク側は守勢に立たされた。キリスト教世界の盟主を自認するハプスブルク家にとって教皇との戦争は益ないものであり、フェリペは自らの権利と名誉を損なわない和平を得ることを望んだ。1556年2月にアンリは財政的困難から休戦に応じたが、パウルスはハプスブルク家への挑発を繰り返し、アンリも1557年1月にはネーデルラント国境で休戦を破った。いまだ戦場で軍を率いた経験のないフェリペは、満足できる和平を得るためにも、軍事的成功によって自分の威信を確立する必要を強く感じた。このような中、フェリペは、北部戦線でネーデルラントとイングランドの共同作戦によってフランスに打撃を与えるという戦略に傾倒していく。フェリペは、1542年の対仏同盟条約を根拠に、イングランドの対仏宣戦布告を迫ったが、枢密院は1554年の結婚条約の規定が優先すると主張し、これを拒否した<sup>35)</sup>。

1557年3月、イングランドの参戦を得るため、フェリペはイングランドに帰還する。枢密院は再び宣戦布告を拒否したが、4月に、フランスに亡命していたプランタジネット朝の血をひくトマス・スタッフフォードが僅かな兵力と共にスカーバラに上陸して反乱を試みたことは、その惨めな失敗にもかかわらずフェリペを助け、6月にメアリーはアンリに対して戦争を宣言した。フェリペは、英仏海峡の制海権を確保するためのイングランド海軍の協力、そして、ペンブローク伯率いる7千の陸上兵力も得て、7月にブリュッセルに戻る。8月には、サヴォイ公率いるハプスブルク軍は、サン＝カンタンの救援に訪れた総司令官アンヌ・ド・モンモランシー率いるフランス軍に圧勝した。カレーからのイングランド軍の到着をカンブレーで待ったフェリペは戦闘に加われなかったが、この勝利は彼の威信を高めた<sup>36)</sup>。

しかしながら、フェリペとイングランドの戦争協力が円滑に進んだとは言えない。フェリペはネーデルラントや北フランスでの作戦へのイングランド海軍の協力を重視したが、1557年8月に、アンリ2世の同盟者スコットランドの軍がイングランドに侵入した後、イングランドは海軍を英仏海峡から北方に移動させる。逆に、イングランドはフェリペがスコットランドに宣戦布告することを期待したが、戦線を拡大したくないフェリペはこれを拒否し、イングランド側に大きな失望を与えた<sup>37)</sup>。

また、サン＝カンタンでの勝利の後、フェリペは、アンリがカレー攻撃を計画しているとイングランド側に警告したが、適切な措置は取られず、1558年1月にカレーは陥落した。フェリペはカレー奪回のための軍事協力を申し出たが、枢密院は兵力と資金の不足を理由に挙げ、熱意を見せなかった。フェリペは、イングランド側が、カレー奪回の責任を自分に押し付けようとしていると疑うようになる<sup>38)</sup>。

さらに、フェリペが対スコットランド宣戦を拒否した1つの理由は、ネーデルラント商人とスコットランドの貿易にあり、彼がイングランドよりもネーデルラントの経済利益を優先したことも、摩擦の原因となった。例えば、イングランドでの商業上の権利をめぐるイングランドの商人とハンザ都市の商人の争いでは、ネーデルラントが後者による中東欧からの穀物輸入に依存しているため、フェリペは前者



の肩を持たなかった。また、ネーデルラント商人が陥落後のカレーでフランス軍に物資を売り、フェリペが、フランスでの商業活動に関してネーデルラント商人にすでに与えた許可を取り消さなかったことも、怒りを買った<sup>39)</sup>。逆に、増税に加え、数年先までの税収や王領地を担保にして、国際金融家から高利の借金をして戦争を戦うのが常であった当時の西ヨーロッパで、健全財政にこだわるイングランド政府が、同様の方法によるフェリペのための戦費調達を拒否したことに、フェリペは不満を持った<sup>40)</sup>。

このような状況で、フェリペは 1558 年にはイングランドへの関心を失いつつあったと言われる。しかし、当時のヨーロッパで、外国生まれの、あるいは長期間不在の君主への反発、そして、同一の君主に支配される異なる地域の間での利害調整の難しさは、当然のことであり、だからこそ、ネーデルラントは帝国の弱点となった。いまや帝国の中核となったスペインでも、1520 年には、「外国人」の新国王カールに対する大規模な反乱が発生している。この点で、そもそもメアリーとの結婚交渉にあたったカールやネーデルラントの彼の側近達が、イングランドとの協力を、次世代に至る長い視点で考えたことを、忘れてはならない。フェリペとメアリーの間に生まれた子が、両国の国王になるという規定は、イングランドをネーデルラントの防衛に確実に巻き込む方策であったが、その 1 つの目的は、イングランド生まれのハプスブルク家の君主へのイングランドの人々の忠誠を確保することにあった。この計画は、当の規定を、フェリペが秘密裡に拒否したことによって、最初から半ば躓いた。しかし、例えフェリペの長男カルロスが将来ネーデルラントを継いだとしても、イングランドがフェリペの子、つまりハプスブルク家の君主によって統治される可能性はあった。

イングランドへの不満の高まりにもかかわらず、その戦略的重要性は否定すべくもなく、フェリペ自身も、問題に長期的な視点で対処する必要性を感じていた。フェリペは、1558 年には、財政破綻により和平を決意したが、イングランドも交え 10 月に始まったフランスとの和平交渉では、イングランド国王としての自身の名誉とイングランドとの同盟を維持するため、カレーの返還を得るために努力した。この交渉の最中、11 月にメアリー 1 世が死去し、フェリペはイングランド王位を失ったが、婚姻関係が失われたことによって、フェリペは、カレーを取り返してイングランドとの関係を維持する必要をかねて強く感じた。もっとも、フェリペの財政がカレー奪回のための戦争を許さないことは明らかであり、これを認識した新イングランド女王エリザベスは、アンリとの直接交渉により、フランスが 8 年間カレーを保持し、その後イングランドに返還するか金銭的補償をするかを決定するという妥協に達した<sup>41)</sup>。

フェリペがイングランドとの長期的な関係の構築に関心を持ったことは、彼が、メアリーの死の直後に、エリザベスとの結婚を考慮したことからも、明らかである。フェリペは、エリザベスと結婚した場合の一番の問題点を、イングランドへの長期の滞在、つまりスペインからの長期の不在が必要となることだと考えたが、これは彼がメアリーとの結婚の失敗から学んだことを示している。結局、フェリペは、1559 年初頭に、エリザベスがカトリック教を受け容れ、長男カルロスがネーデルラントを継承するという条件で、彼女と結婚する準備があるとエリザベスに伝えたが、エリザベスが 1 つ目の条件を拒否したことで、両者の結婚の可能性は消えた<sup>42)</sup>。しかし、フェリペがエリザベスによるカトリック受容を条件としたことをもって、彼の政策全般が主に信仰によって動機づけられたと考えることは、正しくない。フェリペは、1559 年春に、教皇パウルス 4 世が、イングランドのプロテスタント化を進めるエリザベスの破門を決定した際に、これがイングランドでの宗教的内戦とメアリー・スチュアートによる王位獲得に至ることを恐れて、強く反対した<sup>43)</sup>。結婚によるハプスブルク家とテューダー家の合同がなかったとしても、ヴァロア家によるイングランド支配を防いで、ネーデルラントの安全を守るといふ必要は残ったのであり、1550 年代末に至っても、フェリペは政治的な考慮から国際政治における宗教の問題に対処した。この点でも、世紀半ばの西欧国際関係は、その前半期との強い継続性を示していると言えよう。

## おわりに

フェリペは、1559年4月に締結されたフランスとの和平条約、カトー＝カンブレジ条約の合意に従い、アンリ2世の娘エリザベートを3人目の妻に迎えた。婚姻関係によりヴァロア家との平和を維持し、帝国の安全を守るという方策も、父カールの時代から繰り返し考慮されてきたものである。このように、1550年代の西欧国際関係は、その終わりに至っても、世紀前半と大きく変わるものではなかった。ここでは、家の権利や君主の名誉を守ることが最も重要な目的として追求されたが、これらの前近代的な目的を実現するにあたって、戦略的な思考も芽生えつつあった。しかしながら同時に、君主間の結婚に代表されるような前近代的な方策が、彼らの戦略の重要な部分を占めた。こういった観点から見れば、フェリペとメアリーの結婚はごく当たり前のことであり、2人に後継ぎが生まれた場合に、ハプスブルク家の戦略が成功しなかったと考えるべき、大きな理由はないように思われる。

しかし同時に、1550年代は、ドイツにおいて父カールが宗教的妥協を強いられたのみならず、ハプスブルク家の最大のライバルであるフランス、そして何よりもハプスブルク家の領地ネーデルラントで新教が急速に拡大し、人々が、カトリックとプロテスタントの対立を、西欧国際関係の新たな構図として強く意識するようになった時代でもあった。事実、1560年代には、ネーデルラントで宗教を1つの重要な理由とする反乱が発生し、ハプスブルク家の支配は維持できなくなっていく。このような時代に、ハプスブルク家によるイングランドの支配が可能であったのかは、大きな疑問である。フェリペ自身も、エリザベスによるカトリック教の受容を結婚の条件とした際に、おそらく、宗教が重要性を増し、宗教的な統一性の喪失が国の安定を脅かす、新たな時代の到来を予感していたに違いない。この新たな時代の西欧国際関係を検討することが、次の大きな課題となるであろう。

## 注

- 1) 拙稿「ヨーロッパにおける国際関係の出現」*Mukogawa Literary Review*, 46 (2010), 43-58.「ヨーロッパ国際関係の幕開け?—1494年のフランスのイタリア侵攻—」同上, 47 (2011), 35-73.「ハプスブルク帝国の覇権?—1510年代末～1520年代の西ヨーロッパ国際関係—」同上, 48 (2011), 49-81.「カール5世, フランソワ1世, オスマン帝国, プロテスタント教徒—16世紀前半のヨーロッパにおける宗教と国際政治—」同上, 49 (2012), 57-92.
- 2) Richard Bonney, *The European Dynastic States, 1494-1660*, Oxford University Press, Oxford, 1991, p.131.
- 3) William Maltby, *The Reign of Charles V*, Palgrave, London, 2002, p.107.
- 4) M. J. Rodríguez-Salgado, *The Changing Face of Empire: Charles V, Philip II and Habsburg Authority, 1551-1559*, Cambridge University Press, Cambridge, 1988, pp.36-7.
- 5) Maltby, *Reign of Charles V*, pp.105-6.
- 6) Maltby, *Reign of Charles V*, pp.107-8. Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, p.37.
- 7) Maltby, *Reign of Charles V*, pp.106, 108-9. Wim Blockmans, *Emperor Charles V, 1500-1558*, Arnold, London, 2002, pp.11-12.
- 8) Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, p.40.
- 9) Henry Kamen, *Spain, 1469-1714: A Society of Conflict*, Third Edition, Longman, London, 2005, pp.75-6.
- 10) Henry Kamen, *Philip of Spain*, Yale University Press, New Haven and London, 1997, pp.27-8.
- 11) James D. Tracy, *Emperor Charles V, Impresario of War: Campaign, Strategy, International Finance, and Domestic Politics*, Cambridge University Press, Cambridge, 2002, pp.53-4, 107-8, 272, 302. See also, Maltby, *Reign of Charles V*, p.70.
- 12) Maltby, *Reign of Charles V*, pp.109-10.
- 13) Henry Kamen, *Spain's Road to Empire: The Making of a World Power, 1492-1763*, Penguin Books, London, 2002.
- 14) Kamen, *Spain*, pp.90-5. J. H. Elliot, *Imperial Spain, 1469-1716*, Penguin Books, London, 1963, pp.199-207.
- 15) Geoffrey Parker, *The Grand Strategy of Philip II*, Yale University Press, New Haven and London, 1998, p.89.
- 16) Jonathan I. Israel, *The Dutch Republic: Its Rise, Greatness, and Fall, 1477-1806*, Oxford University Press, Oxford, 1995,

p.131.

- 17) Geoffrey Parker, *The Army of Flanders and the Spanish Road, 1567-1659: The Logistics of Spanish Victory and Defeat in the Low Countries' Wars*, Second Edition, Cambridge University Press, Cambridge, 2004, xv.
- 18) Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, p.78.
- 19) Kamen, *Philip of Spain*, pp.12, 20.
- 20) Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.49-50, 78-9.
- 21) R. B. Wernham, *Before the Armada: The Emergence of the English Nation, 1485-1588*, Harcourt, Brace & World, Inc., New York, 1966, pp.27-61. David Loades, *Henry VIII*, Amberley, Stroud, 2011, pp.36, 42-8.
- 22) J. J. Scarisbrick, *Henry VIII*, Pelican Books, Harmondsworth, 1972, pp.28-9. Loades, *Henry VIII*, p.56.
- 23) Loades, *Henry VIII*, pp.229-30, 317-8. David Loades, *Mary Tudor*, Amberley, Stroud, 2011, pp.93-128.
- 24) Loades, *Mary Tudor*, pp.108-17.
- 25) Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.79-80. Loades, *Mary Tudor*, pp.124-8. David Loades, *Mary Tudor: A Life*, Blackwell, Oxford, 1989, pp.171-4.
- 26) Loades, *Mary Tudor*, pp.124-35.
- 27) Harry Kelsey, *Philip of Spain, King of England: The Forgotten Sovereign*, I. B. Tauris, London, pp.51-65. Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.80-3. Loades, *Mary Tudor*, pp.139-48.
- 28) Loades, *Mary Tudor*, pp.154-60. Kelsey, *Philip of Spain, King of England*, pp.67-87.
- 29) Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, p.83.
- 30) Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, p.82. Kamen, *Philip of Spain*, p.55.
- 31) David Loades, *The Reign of Mary Tudor: Politics, Government & Religion in England, 1553-58*, Second Edition, Longman, Harlow, 1991, pp.67-9.
- 32) Loades, *Reign of Mary Tudor*, pp.166-7. Loades, *Mary Tudor*, pp.169-72. Kelsey, *Philip of Spain, King of England*, pp.97-9, 101-2.
- 33) Loades, *Reign of Mary Tudor*, pp.169-75. Loades, *Mary Tudor*, pp.180-3.
- 34) Kamen, *Philip of Spain*, pp.63-4. Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.130-1.
- 35) Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.137-53, 169-73. Kelsey, *Philip of Spain, King of England*, pp.125-8.
- 36) Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.173-9. Kelsey, *Philip of Spain, King of England*, pp.128-36. Loades, *Reign of Mary Tudor*, pp.304-13. Loades, *Mary Tudor*, pp.199-210.
- 37) Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.174-5. Loades, *Mary Tudor*, pp.216-7.
- 38) Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.179-82. Kelsey, *Philip of Spain, King of England*, pp.136-44. Loades, *Reign of Mary Tudor*, pp.316-21.
- 39) Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.174, 195-6. Kelsey, *Philip of Spain, King of England*, pp.128-38. Loades, *Reign of Mary Tudor*, pp.311, 322. Loades, *Mary Tudor*, p.224.
- 40) Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.183-8.
- 41) Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.310-18.
- 42) Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.319-22.
- 43) Rodríguez-Salgado, *Changing Face*, pp.323-4, 330-1, 334-5.

## Raymond Carver “Why Don’t You Dance?” *Beginners* 版を読み解く —第1段落における間テキスト性及び冠詞の使用例

山 根 明 敏  
(武庫川女子大学文学部英語文化学科)

### An Analysis of the First Paragraph of “Why Don’t You Dance?” (*Beginners*’ Version) : Intertextuality and a Definite and an Indefinite Article

Akitoshi Yamane

Department of English, School of Letters  
Mukogawa Women’s University, Nishinomiya 663-8558, Japan

#### Abstract

As William L. Stull and Maureen P. Carroll predicted in 2006, the publication of *Beginners* in 2009 has caused a great change in Raymond Carver studies. The purpose of this study is to participate in the change, examining *Beginners*’ version of “Why Don’t You Dance?”. Over the past few decades, a considerable number of studies have been conducted on the analysis of the edited version of the story. What seems to be lacking is careful textual examination. This study concentrates on the first paragraph of the story. In order to present a new reading of the text, the study introduces the concept of intertextuality.

The study discusses two images in the first paragraph; the one is “stripped candy-striped sheets”, and the other is “nightstand and reading lamp”. Both of them are examined in detail by rubbing together with other texts. In analyzing former expression, I refer to *The Catcher in the Rye* by J. D. Salinger and “The Flag” by Ernest Howard Crosby. In analyzing latter expression, I pay attention to “Cat in the Rain” by Ernest Hemingway. By introducing the concept of intertextuality, new reading with textual and biographical evidences will be possible. Also, I emphasize the importance of a definite and an indefinite article in the text.

Now that we can trace Carver’s biography in detail owing to *Raymond Carver* by Carol Sklenicka, intertextual reading should be done thoroughly and this study intends to be an example of such reading.

#### はじめに

Raymond Carver の研究は 2009 年に Stull と Carroll によって *What We Talk About When We Talk About Love* (1981) (以下 *WWT* と略する) のオリジナル原稿である *Beginners* が出版されたことによって大きな転換期を迎えている<sup>1)</sup>。Carver の原稿に編集者 Gordon Lish が大幅な削除・加筆を行っていたことが 1989 年に Daniel. T. Max によって明らかになって以来, Lish による改変の問題は Carver 研究において避けて通ることができない課題となっていた。 *Beginners* の出版により, オリジナルのテキストと Lish の改変を経たテキストとの詳細な比較が可能となり, *WWT* のテキストのみを対象にしてきたこれまでの読みの枠組みを超えた, 新たな読みの可能性が開かれた<sup>2)</sup>。本稿では *WWT* の中でも評価の高い “Why Don’t You Dance?” (1977) (以下 *WDD* と略する) の *Beginners* 版を取り上げ, 特に冒頭の部分の分析を中心に, 間テキスト性や冠詞の使用例を手掛かりに, 新たな読みの可能性を探る。



## 1. 隠された意匠(1) — “stripped” “candy-striped” “chiffonier”

以下の引用は *Beginners* 版の WDD の第一段落である。

In the kitchen, he poured another drink and looked at the bedroom suite in his front yard (1). The mattress was stripped and the candy-striped sheets lay beside two pillows on the chiffonier (2). Except for that, things looked much the way they had in the bed room—nightstand and reading lamp on his side of the bed, a nightstand and reading lamp on her side (3). *His side, her side* (4) He considered this as he sipped the whiskey (5). The chiffonier stood a few feet from the foot of the bed (6). He had emptied the drawers into cartons that morning, and the cartons were in the living room (7). A portable heater was next to the chiffonier (8). A rattan chair with a decorator pillow stood at the foot of the bed (9). The buffed aluminum kitchen set occupied a part of the driveway (10). A yellow muslin cloth, much too large, a gift, covered the table and hung down over the sides (11). A potted fern was on the table, along with a box of silverware, also a gift (12). A big console-model television set rested on a coffee table, and a few feet away from this, a sofa and chair and a floor lamp (13). He had run an extension cord from the house and everything was connected, things worked (14). The desk was pushed against the garage door (15). A few utensils were on the desk, along with a wall clock and two framed prints (16). There was also in the driveway a carton with cups, glasses, and plates, each object wrapped in newspaper (17). That morning he had cleared out the closets and, except for the three cartons in the living room, everything was out of the house (18). Now and then a car slowed and people stared (19). But no one stopped. It occurred to him that he wouldn't either (20).

(WDD 1) (各センテンスに付されている番号はすべて論者による)

(2)の文において“stripped”と“candy-striped sheets”という表現が一文の中に並置されていることは注目に値する。先行研究はこの問題を十分に吟味しているとはいいがたいが<sup>3)</sup> Ayala Amir はこの表現に着目し、“stripped”と“stripe”の頭韻を指摘している(54)。Carver はなぜ“stripped”と“candy-striped”の表現にこだわったのだろうか。この基本的な問いは政治的な意匠を読み取ることによって解決される。その鍵となるのは“candy-striped”という形容詞である。この語はキャンディーに見られる、明るい色と白の太い縞模様を示し、その典型的な例の一つが星条旗(Stars and Stripes)の赤と白の13本のストライプである。

“candy-striped sheets”を星条旗と解釈すると、それが“chiffonier”の上に置かれているのも偶然ではない。OED は“chiffonier”の語義に“rag picker”をあげている。また Wikipedia (英語版)の“chiffonier”の項目には“*Its name (which comes from the French for a “rag-gatherer”) suggests that it was originally intended as a receptacle for odds and ends which had no place elsewhere*”という記述がある。

“chiffonier”は J.D.Salinger の *The Catcher in the Rye* (1951)の中で数か所言及される。一度目の言及は語り手 Holden Caulfield が Spencer 先生の自宅に、退学処分になったことを告げに行く場面で行われる。Spencer 先生が Holden のエジプト人に関する歴史の答案を保管していたのが他ならぬ“chiffonier”である。

‘You glanced through it, eh?’ he said—very sarcastic. ‘Your *exam* paper is over there on the top of my chiffonier. On the top of pile. Bring it here, please.’ (9)

Holden は自分の答案を“turd” (10)と形容する。また彼は、楽しげに答案を読み上げる Spencer 先生に対して、あからさまな嫌悪感を示している。答案はこの後 Spencer 先生によってベッド目がけて放り投げられる(11)。“chiffonier”は Holden の部屋に Ackley が来る場面で再び言及され、Ackley は普段から快く思っていない Stardlater の“chiffonier”の上にあるサポーターを取り上げベッドに放り投げ(19)、“chiffonier”の上のマイナスのイメージを帯びたものがベッドに放り投げられる、というパターンは繰り返される。更に、Holden が売春婦の Sunny をホテルの部屋に呼ぶ場面において、“chiffonier”は財布の入っ

た場所として再び言及される(88)。性行為には至らなかったものの Sunny に払った 5 ドルの入った Holden の財布が“chiffonier”の中にあった事は興味深い。この後 Holden は罪悪感に苛まれ、イエスがユダを地獄に送ったはずがないと、自分に言い聞かせるように想像する。Holden はユダがキリストを金で売ったことに、自分が Sunny を金で買おうとしたことを重ね合わせ、自らの救済の可能性を探っているのである。また 5 ドルという金額は、Pencey 校の卒業生で格安の葬儀会社を経営する人物である Ossenburger が死者 1 名について 5 ドルで葬儀を行っていた金額(14)と符合する。以上のことを考えあわせるならば、この場面においても“chiffonier”に入っていた財布がマイナスのイメージを帯びていることがわかる。以上の考察から、Salinger が“chiffonier”の“rag picker”あるいは「ガラクタ入れ」という意味を念頭において作品の中で用いている可能性は大きい。

Carver の Salinger に対する言及は多くはないものの、独自のストーリーを持った作家として高く評価していたことは明らかである(*Conversations with Raymond Carver* 57)。また Lish は主催する *Why Work* の原稿依頼を Salinger に行い、本人から拒否する電話を受けたという経歴の持ち主であり、拒否されたにもかかわらず本人からの電話を喜んだというエピソードがある(Sklenicka 151)。The *Catcher in the Rye* が 1950 年代、60 年代前半のアメリカ人に与えた影響の大きさを考え合わせるならば、Carver が *The Catcher in the Rye* を読んでいたことはほぼ確実であり、“chiffonier”がマイナスのイメージを持つものと結び付けられ、繰り返し用いられていることに彼が気づき、自らの作品に取り入れた可能性は十分ある。

以上のように考察するならば、(2)の文から、「星条旗がガラクタ入れの上に置かれている」という、隠された意匠を読み取ることが可能である。それはさらに“stripped”という表現と響きあい、「剥ぎ取られた星条旗」、というイメージを喚起する。ここで二つ目のテキストを導入する。Ernest Howard Crosby の“The Flag”(1902)である。

*Who has hauled down the flag?*

Is it the men who still uphold

The principles for which it stood;

Who claim that ever as old

Freedom is universal good?

Or is it those who spurn the way

That Washington and Lincoln trod;

Who seek to make the world obey,

And long to wield the master’s rod?

Who boast of freedom, but prepare

Shackles and chains for distant shores,

Who make the flag the emblem there

Of all that Liberty abhors?

*These have hauled down the flag!* (26-27)

大井浩二はこの詩を Mark Twain の米西戦争に反対する文章と関連させて論じ、「この詩において、トウエインの場合と同じように、星条旗が専制と抑圧のシンボルとなっていることは言うまでもない」と指摘する(43)。最初と最後の行で、星条旗を引きずり下ろすという表現が繰り返し用いられ、誰が引き摺り降ろしたのかが問われている。「引きずり降ろされた星条旗」というイメージで、ベトナム戦争直後に執筆された WDD と米比戦争を批判した“The Flag”とは響き合っている。Carver のベトナム戦争に対する姿勢に関しては、Sacramento State College に滞在中詩“On the Pampas Tonight”により反戦の立場を明確にし、Gary Thompson をはじめとする反戦詩人たちとの交流を持つ一方で、反戦詩の朗読会には参加

しなかったという興味深い指摘がある (Sklenicka 124)。

Crosby は反戦詩 “The Flag” において、「自由」が米比戦争において戦争の口実として用いられたことを批判した。ベトナム戦争にアメリカが介入する主な根拠としたのが、共産主義から「自由」を守ることであったことを考慮するならば、Carver の周囲にいた反戦的な詩人たちが Crosby の詩を読んでいた可能性は十分にあり、彼らを通して Carver がこの詩の存在を知っていたとしても不自然ではない。

以上のような考察から、「引きずり降ろされた星条旗がガラクタ入れの上に置かれている」という意匠を、Carver があからさまにではなく、密かな形で忍びこませたことの原因が解明される。また 1960 年代にアメリカにおいて星条旗に対する侮辱が問題視され、1968 年には The Flag Desecration Act が成立していること (Testi 113) も考慮に入れる必要がある。Lish がこの部分を全く改変していないことは、両者が隠された意匠を密かに了解していた、言わば共犯関係にあったことを示唆するものである。

「引きずり降ろされた星条旗がガラクタ入れの上に置いてある」という隠された意匠は、一見何の変哲もない状況描写に政治的な色彩を帯びさせる。WDD 第 1 段落の (5) の部分に始まり作品の中で繰り返される現実逃避としての「飲酒」という行為は、ベトナム戦争の前線に送られたアメリカ兵の多くが、現実逃避のために酒やドラッグを常用していたことと重なる。また冒頭の部分で示唆されている離婚は (この、作品では中年男性と相手の女性が夫婦関係にあったのかどうかは明示されてはいないが) ベトナム戦争の帰還兵に多発した問題である。このように考えるならば、Carver は書き出しのわずか 5 文でベトナム戦争により疲弊しきったアメリカの姿を、“yard” という極小の空間に凝縮して表現することに成功していると言える。

Lish と Carver が政治性という問題で必ずしも一致していたわけではないことは、*Beginners* 版テキストの WDD の後半部分の分析、及びそれに対する Lish の改変を検証することで明らかとなる。中年の男 (*Beginners* 版では Max) がカップルにダンスするよう勧める場面で、“It’s my driveway. You can dance.” (5) と発言する。さらに若い女性 (*Beginners* 版では Carla) と Max が踊る部分では、近隣の住民の視線を気にする Carla に対し、“It’s my driveway. We can dance.” (5) と “driveway” という表現を繰り返している。また Carla が Max との出会いで感じたものを何とかして他者と分かち合おうとする結末の部分において Carla は、“All his belongings right out there in his yard. I’m not kidding. We got drunk and danced. In the driveway.” (6) と発言し Max のみならず Carla も “yard” と “driveway” を厳格に区分して用いていることがわかる。

何故 Carver は “yard” と “driveway” の区別にこだわったのであろうか。この問題を考察するにあたっては、作品を生み出すもとになっているエピソードを考慮する必要がある。Carver は WDD に関するインタビューに答え、作品を執筆する契機となったエピソードが Linda という bar maid が酒に酔い “back yard” にすべての家具を置いたことであったことを語っている (*Conversations with Raymond Carver* 42)。“yard” は本来、“front yard” (前庭) と “back yard” (裏庭) の両方を指す表現として用いられる。“back yard” には「縄張り」の意味があり、アメリカ合衆国の中南米諸国に対する帝国主義的な政策に対してしばしば用いられる。Carver は「自分の縄張り (影響下にある国) では何をしてもよい」という解釈が生ずることを危惧し、“yard” と “driveway” を厳格に区別し用いている可能性がある。Lish の改変を見てみよう。Lish は中年の男 (Lish は名前を明らかにしていない) がカップルに踊るよう勧める発言を “It’s my yard. You can dance if you want to.” (WWT8) と “driveway” を “yard” に書き換え、さらに中年の男と若い女性 (Carla という名前を Lish は消去している) がダンスする際の発言を “It’s my place.” に書き換え (WWT8)、自分の所有地であることを強調する改変を行っている。この改変は Carver が恐れていた政治的解釈を生み出す可能性に対し、Lish が鈍感であったことを示すものである。

## 2. 隠された意匠 (2) — 「本を読む」という行為

WDD の第 1 段落の (3) (4) の部分について分析する。まず最初に考察する必要があるのが、何故 “night stand” と “reading lamp” が二つの版に共通して繰り返し用いられているのかという基本的な問題である。

このことに関して Arthur F. Bethea は“Having sex and reading in bed seldom occur simultaneously, and the repetition emphasizes reading. The yellowness of the “muslin cloth, much too large” also suggests the relation’s decay (284).”と興味深い指摘をしている。「本を読む」という行為が男女間の不和を表すという解釈を裏付けるため、Ernest Hemingway の *In Our Time* (1925) に収録された短編“Cat in the Rain”を三番目のテキストとして導入する。この作品では「本を読む」という行為が繰り返し現れる。引用部は結末に近い部分におけるアメリカ人夫婦の会話である。

“And I want to eat at a table with my own silver and I want candles. And I want it to be spring and I want to brush my hair out in front of a mirror, and I want a kitty and I want some new clothes.”

“Oh, shut up and get something to read,” George said. He was reading again. (*In Our Time* 94)

“Cat in the Rain”に関しては様々な読みがなされているが、「本を読む」という行為が男女間のコミュニケーションを阻害するものとして描かれているという点では研究者の間で大きな見解の相違は見られない<sup>4)</sup>。Carver はインタビューの中でこの作品に繰り返して言及し、高い評価を与えている (*Conversations with Raymond Carver* 17)。

「本」について考察してみよう。WDD には“book”という語は一度も使われていない。しかし同じエピソードから発想を得、先に執筆された Carver の詩“Distress Sale”には“boxes of assorted books and records” (*All of Us* 5) “The man, my friend, sits at the table and tries to look interested in what he’s reading—Froissart’s Chronicle it is,” (*All of Us* 5) と二か所にわたる具体的な言及がある。Carver は WDD を執筆する際に Hemingway の“Cat in the Rain”を先行テキストとして意識し、既に男女間のコミュニケーションの断絶の象徴として用いられている「本を読む」という表現をあえて避け、その代わりに「本を置く」場所としての“nightstand”，「本を照らし出す」ものとしての“reading lamp”をイタリック体にして強調し、反復して用いているという解釈が成り立つ。直後の文で男は現実から目をそむけようとするかのようにウイスキーをすする。男に飲酒癖があること、さらに飲酒が現実逃避を目的に行われていることを考え合わせると，“nightstand”の上に置かれていたものは本ばかりではなく、酒の入ったグラスであった可能性もある。このように考えるならば，“nightstand and reading lamp”の表現の背後に、語りの焦点である男が思い描いていたのは、一つのベッドを共有しながらも、「本を読む」という行為によりそれぞれ別の世界に閉じこもり、コミュニケーションを断った男女の姿であることがわかる。飲酒という行為が加わることで、男女間の断絶はさらに深まる。そのように考えるならば、同じベッドに若いカップルが横になり会話する次に引用する場面は興味深い。*Beginners* 版からの引用である。

“Come here , Jack. Try this bed. ① Bring one of those pillows,” she said.

“How is it?” he said.

“Try it,” she said.

He looked around. The house was dark.

② “I feel funny,” he said. “Better if anybody is home.”

She bounced on the bed.

“Try it first,” she said.

(中略)

“Kiss me,” she said.

“Let’s get up,” he said.

“Kiss me. Kiss me honey,” she said.

She closed her eyes. ③ She held him. He had to prize her fingers loose.

He said, “I’ll see if anybody’s home,” but he just sat up.

The television set was still playing. Lights had gone on in the houses up and down the street. He sat on the



edge of the bed.

④ “Wouldn’t it be funny if,” the girl said and grinned and didn’t finish.

He laughed. ⑤ He switched on the reading lamp. (2)

(下線及び番号はすべて論者による)

下線部①より、女性が男性と一つの枕で寝るという提案をしていることがわかる。作品の冒頭部分とは対照的に、この場面では男女の肉体的・精神的な親密さが強調されている。引用文では会話が続き、冒頭の部分で暗示されている男女間の言語的コミュニケーションの欠如した状況とは対極の状況が描かれている。同時に下線部②④に見られる“funny”という形容詞を二人が別の意味で使っていること(下線部②は「変な」下線部④は「面白い」という意味であろう)から、二人の間に言葉における擦れ違いがすでに生じていることが示唆されている。二人のすれ違いは言語によるコミュニケーションのみならず、肉体によるコミュニケーションに関しても当てはまる。女性は男性にキスをせまり二人の肉体的密着度は高まるが、下線部③において男性は「指をはがす」ことにより女性のキスを拒絶する。Lishはこの部分を削除し、その結果男性が女性を拒絶する姿勢は著しく弱まる。

下線部⑤の“reading lamp”をつけるという男性の行動は、既に考察したように“Cat in the Rain”との間テクスト性を考慮するならば、言語及び肉体におけるコミュニケーションの遮断・拒絶という意味合いを帯びている。Carverはこの部分で若いカップルが年配のカップルと同じ冷めた関係に陥る可能性を、凝縮された表現で描いている。下線部⑤に関してはLishは“The boy laughed, but for no good reason. For no good reason, he switched the reading lamp on.”(WWT5)と“reading lamp”をとすという行為を強調する書き換えを行っている。この改変は下線部③の改変により弱められた、男性が女性を拒絶する姿勢を補い、強調するものである。“reading lamp”に込められた意味に関してLishはCarverの意図を理解していたと言えよう。

### 3. テクストの結束性の揺らぎ—冠詞からの考察

WDDの第1段落における定冠詞及び不定冠詞を分析することにより、興味深い事実が浮かび上がってくる。この作品におけるLishの改変はWWTに収められた他の作品に比べて約9パーセントと低いものであるが、第一段落における冠詞に関する改変はわずかに1ヵ所だけである。

Carverは興味深い冠詞の使い方をしていて、冒頭の二文において、“the kitchen”, “the bedroom suite”, “the mattress”, “the candy-striped sheets”, “the chifffonier”と初出の名詞にすべて定冠詞が用いられている。LeechとShortによると、定冠詞theの機能は、文脈によってそれとわかるものを特定化することであり、文脈のレベルにおける一貫性を表す傾向にある。その結果、語り手は背景知識を読者と共有するかのようには振舞っているとみなされ、読者は周囲の背景知識になじんでいるかのような感覚にとらわれ、すでに小説世界の住人となっているかのような感覚を持つに至るのである(24)。

しかし、そのような読者の感覚は(3)の文以降変化を余儀なくされる。(3)の“nightstand and reading lamp on his side of the bed, a nightstand reading lamp on her side of the bed”の部分において、前半では無冠詞であるのに対し、後半では不定冠詞が用いられていることは注目に値する。前半部分が無冠詞なのは“nightstand”と“reading lamp”が一对と捉えられていることによる。後半では既に言及されている“reading lamp”と“night stand”が不定冠詞を伴って、新情報として示されている。Carverは女性の側の“nightstand”と“reading lamp”を新たに立ち現われたものとして提示する。このことによって、語りの焦点である中年男の、去って行った女性に対する心の揺らぎが暗示されている。その揺らぎは(5)のウイスキーを飲むことにより一旦収まるのが(6)、(7)の文で名詞に定冠詞が用いられていることによりわかる。しかし(7)の部分で引き出しを既に空にしていることを契機に、冠詞の使い方は大きく変化する。(8)の“A portable heater was next to the chifffonier.”の部分において、既知の情報から未知の情報へという通常の流れが変化し、未知の情報から既知の情報へという逆の流れが生じている。このことにより、未知の情報



が前景化される結果がもたらされ、読者の前には物がまず未知のものとして立ち現われ、既知の物と関連付けられることとなる。同様のパターンは次の文にも引き継がれている。このような冠詞の用法は続き、(13)の文ではすべての名詞に不定冠詞が付き、あらゆるものが新情報として提示され、物と物との関係性が著しく不安定化する。直後に(14)の文があるのは興味深い。Carver は物と物との関係性の解体のベクトルが頂点に達した時点で“extension cord”という人工的な結合のベクトルを挿入している。これにより解体は停止し、(15)の文では定冠詞が復活し、(17)の文では新情報を違和感なく紹介する“there is”構文がこの作品で初めて登場する。さらに(20)の文においては、語りの焦点である男が、“yard”と“driveway”に展開される光景を、車で偶然に通り返合わせた他者の視点に自らの視点を重ね合わせて見ていることが暗示されている。このことは、自分が置かれた状況を、男が距離をとって眺める余裕ができたことを示している。以上のように考察すると、Carver の冠詞の使用は綿密な計算に基づいたものであり、描写の背後にある語りの焦点である男の心の揺らぎは、テキストを丹念に読めば、テキスト内の因果関係によって結び付けられたものであることが分かる。

Lishは(3)の文を“Except for that, things looked much the way they had in the bedroom—night stand and reading lamp on his side of the bed, nightstand and reading lamp on her side.”と書き換え、不定冠詞を取り除きバランスを重視する。この改変によって(9)の文以降におこる物と物との関係性の解体が唐突に起きることになる。さらにLishは(4)の文His side, her side.の部分を改行し強調するが、このことによりCarverのテキストに見られる思考の連続性は失われている。またLishは(14)を(18)の文の後ろに移動させ、統合する力をより強調する書き換え“He had run an extension cord on out there and everything was connected. Things worked, no different from how it was when they were inside.”(WWT4)を行い、解体と統合の力が均衡している状況を作り出す。Carverが語りの焦点である男の心の揺れを重視しているのに対し、Lishが重視するのは表現上のバランスである。この改変によって(13)の部分で示されている物と物との関係性の解体が、(15)以降の部分で再び結束の方向に向かうことの根拠が失われている。Lishのテキストでは物と物との関係性が何の前触れもなく解体し、唐突に回復されるのである。

## 結 び

間テキスト性を論ずるにあたって必ずと言って問題になるのは、テキストの作者が間テキストを実際に意識していたかどうかという問題である。David Lodgeは間テキスト性に関して、Joseph Conradの*The Shadow-Line* (1917)とSamuel Taylor Coleridgeの“The Rime of the Ancient Mariner”の間テキスト性を論じ、テキストの中にはConradがColeridgeに意図的に言及したのかどうかを示す明確な根拠はないと述べ、意図的であったかなかったかということは興味深い問題ではあるが、追究しても作品の解釈には大きな影響を及ぼさないと論じている(101)。またKleppは間テキスト性をCarverの作品の解釈に導入することの重要性を強調する一方で、間テキスト性を追求することの限界を指摘する(373)。しかし*Beginners*が刊行された同じ年に、SklenickaによってCarverに関する詳細な伝記的事実が明らかにされていることを考え合わせるならば、Carver研究において伝記的事実に配慮しながら間テキスト性を考察することの意義と可能性は、拡大しつつあると言えよう。

## 注

- 1) StullとCarrollはこの変化を“the Copernican revolution”と表現している。
- 2) 改変を本格的に論じているのはMontiである。池田は改変に言及しながらも、それぞれ別個の版を独立した作品として読むことを主張する(40)。
- 3) 先行研究としてNesset, Saltsman等を参照したが詳細な分析はない。上岡はWWT版のWDDの冒頭の部分を詳しく論じているが、家具の細かい名称にはこだわらなくてよいと述べている。
- 4) Lodgeは“Cat in the Rain”の「本を読む」という行為を“His reading of a book is a substitute for communication, and a

classic remedy for ennui.” (*Working with Structuralism* 32)と論じている。

## 引証文献

- Amir, Ayala. *The Visual Poetics of Raymond Carver*. Lanham: Lexington Books, 2010.
- Bethea, Arthur F. *Technique and Sensibility in the Fiction and Poetry of Raymond Carver*. New York: Routledge, 2001.
- Campbell, James. “The Real Raymond Carver”. *The Time Literary Supplement*, July 29, 2009.
- Carver, Raymond. *All of Us: The Collected Poems*. Ed. William L. Stull. New York: Alfred A. Knopf, 1998.
- … *Beginners*. Ed. William L. Stull and Maureen P. Carroll. London,; Jonathan Cape, 2009.
- … *What We Talk About When We Talk About Love*. New York: Random House, 1989.
- Crosby, Howard Ernest. *Swords and Plowshares*. New York: Funk & Wagnalls Company, 1902.
- Gentry, Marshall Bruce and William L. Stull. *Conversations with Raymond Carver*. Jackson: UP of Mississippi, 1990.
- Hemingway, Ernest, *In Our Time*. New York: Charles Scribner's Sons, 1925.
- Kleppe, Sandra Lee. “Raymond Carver in the Twenty-First Century”. *Companion to the American Short Story*. Ed. Alfred Bendixen and James Nagel. Malden: Blackwell, 2010. 366-579.
- Lodge, David. *Working with Structuralism: Essays and Reviews on Nineteenth and Twentieth Century Literature*. London: Routledge, 1986.
- … *The Art of Fiction*. London: Penguin Books, 1992.
- Monti, Enrico. “Il Miglior Fabbro?: On Gordon Lish's Editing of Raymond Carver's *What We Talk About When We Talk About Love*”. *The Raymond Carver Review* 1. 75-91.
- Nesset, Kirk. *The Stories of Raymond Carver: A Critical Study*. Athens: Ohio UP, 1995.
- Saltzman, Arthur M. *Understanding Raymond Carver*. Columbia: U of South Carolina P, 1988.
- Sklenicka, Carol. *Raymond Carver: a Writer's Life*. New York: Scribner, 2009.
- Stull, William L. and Maureen P. Carroll. “Prolegomena to Any Future Carver Studies”. *Journal of the Short Story in English* 46 (2006) :13-17.
- Testi, Arnaldo. *Capture the Flag: The Stars and Stripes in American History*. New York: New York UP, 2010.
- アレン, グレアム. 『文学・文化研究の新展開—間テキスト性』森田孟訳, 東京, 研究社, 2002.
- 池田孝一, 「Less is Less?: レイモンド・カーヴァーにおける二つのヴァージョン」國重純二編. 『アメリカ文学ミレニアムⅡ』. 東京, 南雲堂, 2001. 316-335.
- 大井浩二. 「米比戦争からセントルイス万博まで—アメリカの帝国主義と反帝国主義をめぐって」貴志雅之編『20世紀アメリカ文学のポリティクス』東京, 世界思想社, 2010. 25-51.
- 上岡伸雄. 『現代英米小説で英語を学ぼう』東京, 研究社, 2003.
- リーチ, ジェフリー・N. マイケル・H・ショート. 『小説の文体—英米文学への言語学的アプローチ』笥壽雄監修, 石川慎一郎・瀬良晴子・廣野由美子訳, 東京, 研究社, 2003.

## Designing Assessment Tools: The Principles of Language Assessment

Mitaka Yoneda

*Department of English Communication, Junior College Division  
Mukogawa Women's University, Nishinomiya, 663-8558, Japan*

### Abstract

This article looks at the issue of assessment in language classes, presenting the theory behind it along with three models of classroom assessment. Because assessment is not synonymous with testing, it should be continuous throughout the teaching and learning process in the classroom. Teachers can assess students in many ways other than administering tests. It is important, for example, to apply triangulation, wherein at least three performances or factors are used to formulate a grade. When teachers design assessment tools for class, they need to consider the five principles of language assessment: practicality, reliability, validity, authenticity, and washback. By applying triangulation and meeting the standards of the five principles of language assessment, I create a model to assess my students' achievement in a university Business English II class, a fourth-year course designed to enhance students' business presentation skills. The planned assessment for this class includes vocabulary quizzes, paper-and-pencil tests, and presentation of a project. Students will obtain feedback, both written and verbal, from the instructor, their peers, and themselves. Through this model, I hope to deepen the understanding of language assessment design and its application in real-life teaching situations.

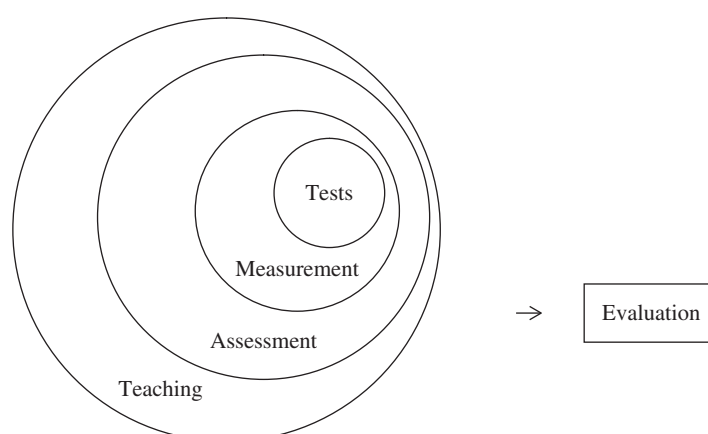
### Introduction

The method of assessing student progress is one of the vital decisions a teacher must take. In order to achieve optimal assessment results, it is important to design the assessment instrument within a theoretical framework. In this paper, I provide an overview of the theories of English language assessment presented by Brown and Abeywickrama (2010) and then apply the theories to my current teaching situation. The assessment tools used here are just one sample of such tools, but through them, I hope to present the theory of assessment and thereby enhance readers' understanding of language assessment in the classroom.

### Definition and Categories of Assessment

Assessment can be confusing and can mean different things, depending upon individual perceptions: some people think that assessment is the same as testing; some may think that grading is synonymous with assessment; and others may think that assessment equals measurement. Brown and Abeywickrama (2010, p. 6) attempted to clarify these concepts by highlighting the relationships between tests, measurement, assessment, and teaching (see Fig. 1).

Drawing from Brown and Abeywickrama (2010), we can see that assessment in educational practice is not merely testing or measurement. Rather, tests are "a subset of assessment, but they are certainly not the only form of assessment that a teacher can make" (Brown & Abeywickrama, 2010, p. 5). That is, teachers can assess students without using tests. Evaluation takes place when a value—such as that derived from grading and



**Fig. 1.** Tests, measurement, assessment, teaching, and evaluation (Brown & Abeywickrama, 2010, p. 6)

scoring—is associated with assessment (Linville, 2011, Unit 2, p. 5). It is designed to “motivate learners by giving them feedback on their progress” (Linville, 2011, Unit 2, p. 4). Cameron (2001) also explained that assessments can motivate learners, help teachers plan more effective lessons, inform the improvement of instructional programs, and support further learning with feedback (pp. 214-218). Cameron also notes that assessment must be a collaborative act between teacher and student, and that it must support the aims of the lesson. Hence, teachers should keep in mind that if students are not given appropriate feedback or if the evaluation focuses only “on what they don’t know or... [is] punitive” (Linville, 2011, Unit 2, p. 5), assessment can be discouraging. Thus, assessment, although necessary, useful, and instructive, must be well designed and implemented to be effective.

Researchers have also identified different types of assessments; Brown and Abeywickrama (2010) for example, have distinguished between informal and formal assessments (p. 6). Informal assessment can take place spontaneously in the form of “incidental, unplanned comments and responses” (p. 6) such as “Very good!” “Great!” and “Well done!” Formal assessment, on the other hand, is more planned, systematic, and content oriented. It is “designed to appraise achievement. Tests are always formal assessments” (Linville, 2011, Unit 1, p. 22). Another example is teachers’ comments by way of critiquing students’ writing.

Another way to distinguish assessment is by function, whether formative or summative. Formative assessment means “evaluating students in the process of ‘forming’ their competencies and skills with the goal of helping them to continue that growth process” (Brown & Abeywickrama, 2010, p. 7). It “helps students see their weak areas so they can learn more” (Linville, 2011, Unit 1, p. 22). It should be designed to provide learners with feedback about their progress while they are still studying a unit (Linville, 2011). A weekly quiz is a typical example of formative assessment. On the other hand, a summative assessment is conducted to “measure, or summarize, what a student has grasped” (Brown & Abeywickrama, 2010, p. 7). Thus, it usually takes place at the end of a course, where it is graded and taken into account in the overall evaluation.

## Models of Assessments

A further aspect to consider is the best time to conduct assessment during the course. Linville (2011 Unit 1 p. 15) has presented three assessment models and asks which of these models is the best. Model A shows students taking one test at the end of the course. The content of the test would cover what the students have learned during the course. Model B shows students taking two tests: mid-term and final. Each test covers the content that the

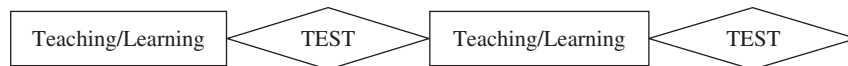


students will have learned preceding each test. Finally, Model C shows assessment as concurrent with the teaching and learning process; that is, it is conducted throughout the course. The three models are illustrated below as follows:

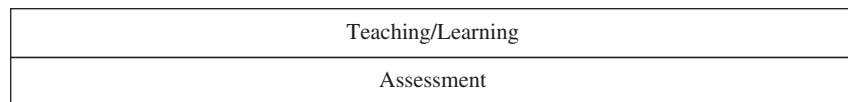
Model A)



Model B)

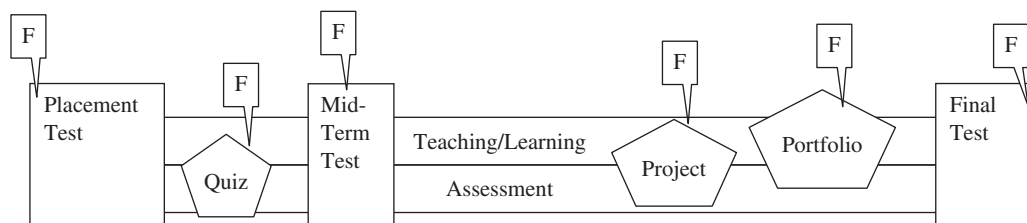


Model C)



**Fig. 2.** *Assessment Models (Linville, 2011, Unit 1 pp. 15-18)*

The best method is Model C because assessment is most effective if conducted throughout the teaching and learning process. In addition, Linville (2011) went on to explain that many opportunities for feedback must be offered and that “teachers assess students’ progress and results at different times and in different ways” (Unit 1, p. 19). Linville has offered a sample assessment cycle seen in the following diagram (F in the following diagram represents feedback).



**Fig. 3.** *A Sample Assessment Cycle (Linville, 2011, Unit 1 p. 20)*

Thus, assessment has to continue while teaching and learning is going on, and feedback on the assessment must be given to students after each assessment is conducted.

One important facet of feedback timing is a practice known as “triangulation” (Brown & Abeywickrama, 2010, p. 321). Triangulation means using multiple measures for assessment. Brown and Abeywickrama state that teachers should assign “at least two (or more) performances and /or context before drawing a conclusion” (p. 159), and Linville recommends obtaining “at least three types of information” (2011, Unit 9, p. 5). Triangulation is recommended because teachers cannot judge the abilities of students by means of only one tool, as the likelihood is too high that some abilities may remain hidden (Brown & Abeywickrama, 2010, p. 321). Thus, according to Brown and Abeywickrama, one or more of the following designs should be included in the triangulation:

- several tests that are combined to form an assessment

- a single test with multiple test tasks to account for learning styles and performance variables
- in-class and extra-class graded work
- alternative forms of assessment (e.g., journal, portfolio, conference, observation, self-assessment, peer-assessment) (p. 159).

The measuring of multiple factors also increases reliability and validity, which will be discussed in the next section.

## **The Five Principles of Assessment**

Teachers need to consider five principles of language assessment when they create assessments (Brown & Abeywickrama, 2010, p. 25):

- Practicality
- Reliability
- Validity
- Authenticity
- Washback

These principles, which are all of equal importance, may be used to evaluate a designed assessment.

Practicality refers to evaluating the assessment according to cost, time needed, and usefulness. This principle is important for classroom teachers. Brown and Abeywickrama (2010) have explained the attributes of practical tests as follows: a practical test

- stays within budgetary limits
- can be completed by the test-taker within appropriate time constraints
- has clear directions for administration
- appropriately utilizes available human resources
- does not exceed available material resources
- considers the time and effort involved for both design and scoring

(Brown & Abeywickrama, 2010, p. 26).

Reliability means that the assessment is consistent and dependable (Brown & Abeywickrama, 2010, p. 19), which means that the same score will be achieved from the same type of students no matter when it is scored or who scores it. Brown and Abeywickrama (2010) have summarized the feature of this principle as follows: a reliable test

- is consistent in its conditions across two or more administrations
- gives clear directions for scoring/evaluation
- has uniform rubrics for scoring/evaluation
- lends itself to consistent application of those rubrics by the scorer
- contains items/tasks that are unambiguous to the test-taker (Brown & Abeywickrama, 2010, p. 27).

To make the test reliable, especially for subjective and open-ended assessments, it is important to write scoring procedures clearly and to train teachers to be able to score the assessment correctly (Linville, 2011, Unit 2, p. 11).

Validity has been explained by Brown and Abeywickrama (2010) as follows: a valid test

- measures exactly what it proposes to measure
- does not measure irrelevant or “contaminating” variables
- relies as much as possible on empirical evidence (performance)

- involves performance that samples the test's criterion (objective)
- offers useful, meaningful information about a test-taker's ability
- is supported by a theoretical rationale or argument (Brown & Abeywickrama, 2010, p. 30).

"If the assessment is supposed to measure students' speaking skill, for example, it should be designed to assess only speaking" (Linville, 2011, Unit 2, p. 12).

Authenticity is defined as "the degree of correspondence of the characteristics of a given language test task to the features of a target language task" (Bachman & Palmer, 1996, p. 23). An authentic test has the following attributes:

- contains language that is as natural as possible
- has items that are contextualized rather than isolated
- includes meaningful, relevant, interesting topics
- provides some thematic organization to items, such as through a story line or episode
- offers tasks that replicate real-world tasks (Brown & Abeywickrama, 2010, p. 37).

The final principle, washback, "refers to the effects the tests have on instruction in terms of how students prepare for the test" (Brown & Abeywickrama, 2010, p. 38). It refers to the outcomes for the learner, the teacher, and the teaching context (Linville, 2011, Unit 2, p. 15). Washback can be positive or negative. Thus, the concept of washback should comprise the following features: a test that provides beneficial washback

- positively influences what and how teachers teach
- positively influences what and how learners learn
- offers learners a chance to adequately prepare
- gives learners feedback that enhances their language development
- is more formative in nature than summative
- provides conditions for peak performance by the learner (Brown & Abeywickrama, 2010, p. 38).

As mentioned above, positive washback can motivate students to learn more; this positively influences teachers, thus further improving the classroom environment (Linville, 2011, Unit 2, p. 15). Teachers should ask themselves, after designing an assessment, if the assessment is practical, reliable, valid, authentic, and evocative of positive washback (Linville, 2011, Unit 2, p. 19).

## **Application of Principles to a Real Teaching Environment**

I will use these five principles to design an assessment for a course, Business English II, taught at the university level and in a real-life situation.

### **Course**

Business English II is aimed at helping fourth-year students acquire presentation skills in English for use in the international business scene. More specifically, in this course, the students are expected to achieve the following, according to the course syllabus:

- To obtain the vocabulary and phrases required for a presentation in English in business conferences
- To brush up the skill of conveying messages effectively to an audience
- To broaden knowledge related to business by learning presentations on different kinds of matters
- To acquire presentation skills in English to express ideas logically.

Since most of the learners had taken Business English I, as well as some other courses related to business English the previous year, they already had some knowledge of business English. Therefore, Business English II is meant to build up students' skills and to deepen their understanding of English for business purposes so that they can use these skills and knowledge immediately after starting work the following year. In addition, these skills and knowledge will be an advantage when searching for jobs.

This course is one of three from which students may choose to fulfill a requirement. Thus, enrollments are usually large—that is, about 160 students are enrolled in it. Four classes of this course are taught each semester, and each class is taught by a different instructor. I am teaching one of these classes this academic year.

#### Learners

The learners in this course are fourth-year EFL students majoring in English. Most have nine years of academic background in the English language. Moreover, most have spent one semester in college in the US to take EFL programs. On the basis of these experiences, the students' English proficiency is considered about intermediate, from low intermediate to high intermediate. Because learners are not placed into the class according to their achievements, slight differences exist in their English proficiency levels.

#### Teaching context

Although this course is taught in four separate classes by four different instructors, the same course syllabus is used in each class. This is a one-year course that extends over two semesters. Since students earn credit each semester, assessment is administered in each unit. In each semester, the students meet 15 times. On the 16th day, a final examination is administered.

#### Textbooks

The following two textbooks are used in this course: *English for Presentations* (Grussendorf, M) and *Biz Eitan 600 [600 Business English Words]* (Tsuji, K and Tsuji, S).

*English for Presentation* has six units; three units are covered each semester with one unit covered over about four classes. There are 26 units with about 20 sentences each in *Biz Eitan 600*, so 10 to 13 units are covered each semester with one unit per class.

#### The purpose of the assessment

The purpose of the assessment in this class is to monitor the skills achieved in terms of business presentations, as well as achievement in vocabulary. Because “assessment is an ongoing process that encompasses a wide range of methodological techniques” (Brown & Abeywickrama, 2010. p. 3), several approaches can be employed for assessment in this course. Instead of making students take a test at the end of the course, it is the most desirable to aim for “assessment [that] continues throughout the teaching and learning process, offering many opportunities for feedback” (Linville, 2011, Unit 1, p. 19), as mentioned earlier, and to “assess student progress and results at different times and in different ways” (Linville, 2011, Unit 1, p. 19). To continue assessment throughout the course, and also to apply triangulation, the following assessment tools are suggested.

1. Vocabulary quizzes
2. Project for research and presentation
3. Paper-and-pencil tests

For the vocabulary test, I will assign memorization of vocabulary and phrases from one unit in *Biz Eitan 600* per a week. At the very beginning of each class, I will hold a quiz on the vocabulary and phrases in the unit, and then



the students will exchange answer sheets with a partner for pair work to mark the answers. In this way, the students can check the words or phrases that are wrong, thus obtaining washback, one of the five language assessment principles.

For their project, the students will give presentations, possibly during the last few class periods, so that the last few days can be used for washback, which will consist of written instructor feedback, self-feedback, and peer feedback. As this course is for students seeking employment, they will be assigned to research a company in which they are interested, summarize their research results, make PowerPoint slides, and give a presentation to the class. They will present their research on the company as if it were a real-life situation. This assignment can measure not only speaking but also reading and writing skills. When classmates listen to a student's speech, they contribute written peer feedback, which also enables the assessment of the students' listening skills. Finally, they will be required to watch their own presentations, which will be recorded, thus having the opportunity to assess their own presentations objectively.

The tests are designed to assess the reading and listening skills students learn from the textbook, *English for Presentations*. Because assessment should be done throughout the teaching and learning process, the tests will be administered at least twice. Since this course covers three units in one semester, the best and most logical time to give a test is after each unit as a summative cum achievement test to see how much students have learned in each unit. The assessment tools for this class are presented in the following diagram (F represents feedback and Q, quiz).

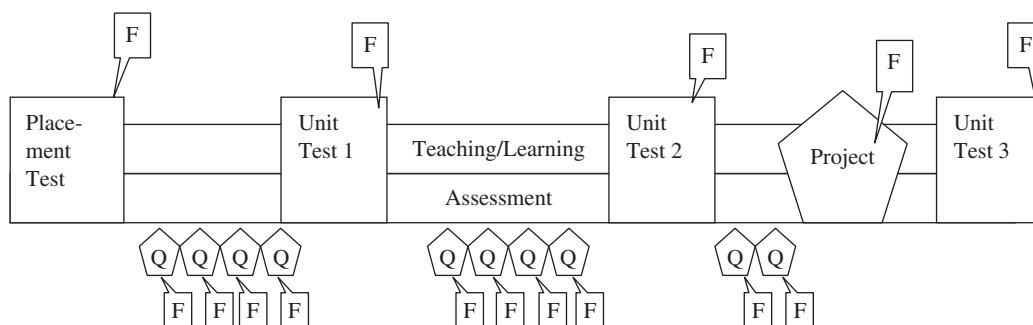


Fig. 4. Suggested Assessment Cycle

Students will be informed of the details of assessment content in writing at the beginning of the course by means of the syllabus. In particular, the students will need time to prepare for the presentation, so the project assignment will be given at the beginning with an instruction to start the research soon. Provision of a long lead time will verify that the assessment is reliable. The quizzes and unit tests are conventional in style and mostly objective. By way of contrast, the presentation includes subjective items. These make a mixture of the different assessment items.

## Summary and Conclusion

As this article has shown, teachers need to evaluate their assessment tools according to the five cardinal criteria for judging a test: practicality, reliability, validity, authenticity, and washback (Brown & Abeywickrama, 2010, p. 25). The tests, quizzes, and presentations proposed here are believed to be practical, considering the cost and administrative handling, as they are prepared by the instructor or the students. Though it takes time to design, prepare, and score the tests, the time requirement is manageable. To ensure reliability, the instructors have provided

clear administration and scoring instructions. Most of the test and quiz items will be objective, written so that they will not be ambiguous or confusing to the students. It is also relatively easy for the instructors and administration to provide a noise-free classroom with sufficient audio equipment. In terms of validity, the tests, quizzes, and presentation are valid because they are designed to measure what they need to: that is, how well the students listen to, read, and learn from the textbook. In addition, instructors will need to verify that all the questions on the tests have been introduced as activities in the classroom, that students know how they should tackle the questions, and that all questions are straightforward, not including any tricky ones. Once these items are verified, the tests and quizzes will be judged as fully valid.

The instructors need to verify whether the tests, presentations, and quizzes obviously incorporate authenticity, too; if they reflect natural use of the English language, especially with regard to business scenarios; and whether they are contextualized. The students will be able to use what they have learned in the workplace immediately after they begin their jobs in the following year. Finally, in terms of positive washback, quizzes will be checked during students' pair work, so they can verify the correct answers on the spot. For the presentations, feedback will be given by the instructor, by the students as peer feedback, and by the students themselves when they watch their own recorded presentations. Using these means, students can compare their own feedback to assessment from others. The instructor will also provide comments and feedback after each presentation. Each of these types of feedback will ensure and improve washback. As demonstrated, the assessment tools for this class will be designed according to the five language assessment principles.

The five principles of language assessment provide important guidance for designing and choosing assessment tools. Students should be clearly informed about which assessment tools will be used in class and should be assessed only on what they have learned in class. After teachers have used their assessment tools, it is important for them to evaluate the results so that they can improve their assessment tools for future use (Linville, 2011, Unit 9, p. 12). Linville also recommends that teachers "reflect on the assessment process" (p. 12) and have the students reflect as well. If employed in this way, assessment becomes a process parallel to teaching and learning, and it will surely improve the teaching environment. This paper aims to help readers deepen their understanding of the process of designing language assessments and applying them to real-life teaching situations.

## Acknowledgement

This paper is based on the EFL Assessment of the E-Teacher Scholarship Program, taught by the University of Maryland, Baltimore County. I would like to acknowledge the US Department of State, Bureau of Educational and Cultural Affairs, and the American Embassy in Japan for providing me the opportunity to study under this e-learning program and to share the teaching experience and pedagogical ideas with dedicated teachers all over the world.

## References

- Bachman, L. F. & Palmer, A. S. (1996). *Language testing in practice*. New York: Oxford University Press.
- Brown, H. D. & Abeywickrama, P. (2010). *Language assessment, principles and classroom practices* (2nd ed.). White Plains, NY: Pearson Education, Inc.
- Cameron, L. (2001). *Teaching languages to young learners*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Grussendorf, M. (2007). *English for presentations*. Oxford, England: Oxford University Press.
- Linville, H. (2011). *Assessment Principles II and Techniques for Assessment and Testing*. [PowerPoint slides]. Retrieved

from <http://blackboard.umbc.edu>

Tsuji, K. & Tsuji, S. (2012) . *Biz Eitan 600 [600 Business English Words]*. Tokyo: MacMillan Languagehouse.

## English and Discourses of Identity in Japan

Nathanael Rudolph

*Department of English, School of Letters,  
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

### Abstract

This paper situates the nature and role of English language learning, education and use in Japan, within Japan's ongoing socio-historical negotiation of identity in response to its forced opening in 1858. From the time of the Meiji period, social, economic, political and educational discourses in Japanese society have served to construct a "Japan" and notion of "Japaneseness" that focuses on a juxtaposition of Japan and the West. English language education in Japan, guided by these dominant discourses in Japan and in concert with pervading discourses within globalized English language teaching (ELT), has emphasized a focus on the West, linguistically and culturally. There are however, within Japanese society, emergent discourses challenging these dominant constructions of Japan and being Japanese, and by proxy of English language ownership, learning, instruction and use. As globalization continues, so shall the negotiation of identity and the place of English in Japan.

### Introduction

In the following paper, I will provide a brief account of the entry of English into Japanese society. I situate this account in the context of a Japan negotiating its identity -internally and internationally- and place on the global stage. In concert with this historical contextualization, I will describe some of the sociohistorically-situated discourses that have given shape to English language education and use in Japan since the Meiji period (1868-1912). In addition, I touch upon alternate constructions of Japan and Japaneseness both within Japanese society and ELT. I conclude by examining how dialogue concerning language, culture and identity is far from complete, as Japanese society continues to wrestle with globalization and by proxy, with conceptualizing the nature and role of English in Japan.

### Framing the Nature and Role of English in Japan

According to Iino (2002), English likely reached Japan first in 1600 with the arrival of an English speaker in the south of the country. English as a subject of study, however, did not occur for another two hundred years with the beginning of contact with the British in 1808. It was the signing of a treaty related to 'Amity' and 'Commerce' with Commodore Perry of the United States in 1858 that set Japan on the pursuit of English (Kitao & Kitao, 1995 paraphrased in Iino, 2002). Japan then opened its doors to the West in 1867, ushering in the Meiji period (1868-1912). Following the opening of Japan to the West, social, political, economic and educational discourses within the country intensified around the subject of the nature of Japanese identity and culture and Japan's relationship with the world beyond its shores. Japan was, "suddenly and involuntarily faced with a need to define its place in the modern world" (Heinrich, 2012, p. 3). Such discourses fuelled Japan's drive toward modernization and the rise of nationalism.

One discourse that emerged was that of "Datsu-A-Ron." In early 1885, an editorial appeared in the Japanese



newspaper *Jiji Shinpo* (‘Current Events’), detailing the steps Japan would need to make in order to confront Westernization. The author, later identified as Yukichi Fukuzawa (Fukuzawa, 1885 cited in Banno, 1981), was an influential author, educator and political theorist, who had witnessed first-hand Japan’s grappling with its new place international realm. Datsu-A Ron, Fukuzawa’s editorial, noted that in the interest of modernization and standing on equal footing with Western nations, Japan needed to leave Asia politically, socially and philosophically, focusing its attention instead on what Western civilization was offering. Fukuzawa believed that there was no time to wait for an Asia-wide enlightenment, through which Asia might modernize and develop, though he had previously been a supporter of a pan-Asian resistance to the West (Ge, 2007). This opinion was due in large part to the failure of reform in Korea, which Fukuzawa had supported (Banno, 1981). Fukuzawa’s notion of ‘leaving Asia,’ created in a time of great social and political tension, related to what he believed involved the potential death of Japanese civilization (Ge, 2007). Other scholars were thinking along similar lines as well. Arinori Mori, Japan’s ambassador to Washington and first Minister of Education, proposed in 1872 that Japan adopt English as its official language, replacing Japanese (Heinrich, 2012), with the ultimate goal of securing Japan’s viability into the future.

Debates regarding Japanese identity and Japan’s relation to the world beyond its shores were greatly influenced by neo-Confucianist<sup>1)</sup> thought firmly entrenched in Japanese society (e.g., Hawkins, 1998; Khan, 1997; Varley, 2000). Neo-Confucianism sought perfect moral and social order in the world, in humanistic fashion. This was achieved through the taming of one’s ‘ki’: “a force governed by the passions and other emotions that produce evil” (Varley, 2000, p. 171), which in turn allowed for an individual’s ‘ri’ -his or her inherently good principles or nature- to emerge (Varley, 2000). Neo-Confucianism experienced its most robust growth as an influential philosophy during the Edo period under the Tokugawa shogunate (Sawada, 1993), guiding moral and other forms of education. Its discourses focused primarily on “the conduct and affairs of people in the here and now” (Varley, 2000, p. 172). In the interest of maintaining social order and as a result conformity, neo-Confucianism focused on the five primary relationships of father-son, ruler-subject, husband-wife, older (brother) - younger (brother), and friends (Varley, 2000).

In the Meiji period, faced with the opening of Japan to the West, the Japanese government re-emphasized Confucianist thought in Japanese education via the Imperial Rescript on Education (1890). The Rescript reinforced the importance of morality and the relationships in which social order might be attained, and emphasized a commitment to the Emperor and the Nation (Khan, 1997). Neo-Confucianist therefore played a role in Japan’s drive toward nationalism in and beyond the Meiji period (Hawkins, 1998).

During the Meiji period, Law (1995) notes that English, taught primarily by native speakers, served as a conduit for the transmission of Western knowledge and philosophy into Japan. English was the property of Caucasian Westerners and was as foreign as the individuals who spoke it. In the interest of fuelling Japan’s drive toward modernization (Iino, 2002), of establishing a firm position vis-à-vis the West, and of preserving “Japanese civilization,” English was a critical subject to study. By the early 1900’s, however, English classes were being taught by Japanese instructors, as the tide of nationalism began to rise against Westernization. This continued until the Second World War, during which English was relegated to the status of an enemy language (Iino, 2002). During the early 1900’s, English became an integral part of educational assessment in Japan:

“...English was widely adopted as a screening process for elite education. As a result, the so-called Juken Eigo (English for the purpose of the entrance examination) became the main goal of learners rather than English for communication. The focus of their learning was on the memorization of grammar and vocabulary for translating English into Japanese, with little attention paid to pronunciation or use” (Kitao & Kitao, 1995, paraphrased in Iino, 2002, p. 82).

In its newfound role as a gatekeeper within Japanese society and already a vehicle for the import of linguistic and cultural knowledge from the West, English was clearly property of the “Other.” That “Other” was White and Western.

Following World War II, neo-Confucianism fell under scrutiny, as it had been shaped in a manner that promoted nationalist sentiment (Hawkins, 1998). Indeed, the National Rescript on Education was repealed at this time. Yet neo-Confucianism continued to maintain a powerful influence on the Japanese education system; an influence that continues to present (Hawkins, 1998; Wray, 2008). Neo-Confucianism in Japanese education seeks to limit individualism (Nemoto, 1999) in the interest of uniformity and consistency both on the part of students and teachers (Hawkins, 1998). This is grounded in an Edo-era emphasis on the value and pre-eminence of the ‘expository lecture,’ first established in neo-Confucian education in Japan by Ansai Yamazaki (Sawada, 1993). As such, after the War, classes were (and at present are often) taught in the Grammar-Translation method, conducted largely in Japanese, working grammar and lexis from English to Japanese and the reverse (Gorsuch, 2000). In such a classroom, the teacher is the authority, imparting knowledge to students whose role is receptive in nature (Nguyen et al., 2006).

### **Globalization, Identity and English**

During the years immediately following the War, Japan again found itself attempting to define its identity in relation to the ever-globalizing world in which it was situated. Japan focused its energy away from military affairs and set about a course of economic growth popularly referred to as the “Economic Miracle,” which lasted from around 1955 until the late 1970’s (Fujimoto-Adamson, 2006). During this period, business leaders called for the prioritization of English in the name of better communication in international business (Imura, 2003). Teachers from the U.S. entered Japan, and the government focused on English language education. Standardized testing, such as the STEP (Society for Testing English Proficiency) Test and later the TOEIC (Test of English for International Communication) test became commonplace in Japanese society (Fujimoto-Adamson, 2006). TOEIC scores became a common measure of the English proficiency of company recruits and employees. In addition, English became an integral component of high school and university entrance examinations (Kitao & Kitao, 1995).

Building upon social discourses in Japan that had sought to establish its position in the international realm vis-à-vis the West, new dominant discourses emerged related to Japan and globalization. Globalization, as in the Meiji period, related to Japan and its relationship with Western nations. Appearing immediately after World War II and building momentum in the 1960’s, *nihonjinron* (Befu, 1993, 2001; Sugimoto, 1999) sought to portray the “sociological, psychological and linguistic uniqueness” of the Japanese (Kubota, 1998, p. 300). According to Sugimoto (1999), *nihonjinron* “tends to use three concepts- nationality, ethnicity and culture- almost interchangeably” (p. 82). “Japanese culture” is the sole property of those deemed “ethnically Japanese,” which excludes not only “foreigners” but minority groups within Japan, such as the Ainu and Okinawans, who are not “ethnically Japanese” (Sugimoto, 1999). Noted politicians in the 21st Century continue to describe Japan in such a manner. In 2005, for instance, Aso Taro, then foreign minister and now a former Prime Minister, described Japan as “one nation, one language, one culture and one race” (Daily Yomiuri, 2005), unlike any other nation on earth. In addition, in 2008, Tourism Minister Nariaki Nakayama argued that Japan is an ethnically homogenous country that dislikes foreigners (Fukada, 2008)<sup>2)</sup>.

Grounded in the discourses of *nihonjinron*, another discourse -*kokusaika*, or “internationalization” (Kubota, 1998; Oliver, 2009) - emerged during the 1980’s in Japan as a result of the nation dealing with its status as a new world economic power. According to Kubota (1998) :

“Japan as a world economic power experienced a need to communicate better with its international partners in order to ensure its economic prosperity while maintaining its own identity. A strategy that Japan employed in order to fulfill this need was neither to subjugate the nation to the West nor to seek a counter-hegemony against the West; it was to accommodate the hegemony of the West by becoming one of the equal members of the West and to convince the West and other nations of its position based on a distinct cultural heritage” (p. 300).

Kokusaika involved the perpetuation of *nihonjinron* as a projected identity to the West, with the purpose of carving out a unique place at the “global” table.

In 1985, again due to concerns regarding the ability of Japanese students to use English communicatively, MEXT (called the Ministry of Education or MOE until shortly after the turn of the century, when it combined with the Ministry of Science and Technology) began to promote communicative competence and with such, interest in Communicative Language Teaching (CLT) increased. The MOE established the Japan Exchange and Teaching Program (JET) in 1985 (Riley, 2008), wherein native speakers of English are brought to Japan to work as Assistant Language Teachers (ALTs). Such was done with the goal in mind of fomenting and nurturing the communicative ability and international understanding of students (Koike & Tanaka, 1995, paraphrased in Riley, 2008). According to current statistics on the JET Programme Website (2009), 98% of participants in the Jet Programme (the overwhelming majority of these being Assistant Language Teachers, or ALTs) are from Western, English-speaking countries (other language groups are represented within the statistics as well). Of these individuals, nearly 63% are American. In addition, fuelled by *kokusaika*, English language conversation schools or “*eikaiwa*” spread rapidly across Japan (Mizuta, 2009). In *eikaiwa*, or English conversation schools and their affiliates, NSs –typically Western (Kitao & Kitao, 1995; Kubota, 2011) and often white males (Kubota, 2011) - dominate. NSs were and continue to be the selling point of such institutions (Kubota, 2011).

Once again, in 2000, debate regarding English language education emerged as a result of pressure from the business community who felt Japanese learners of English were yet ill-prepared to successfully engage in interaction (Yoshida, 2003). Such pressure, “culminated in the report of the Japan’s Goals in the 21st Century Committee (2000), in which a proposal was made to make English the second official language in Japan” (Yoshida, 2003, p. 291), though this proposal was rejected. During this period, scholars and officials discussed the study of English for purposes of taking entrance examinations vs. English for communicative ability (Butler & Iino, 2005), and an increase in English study in schools. There was much skepticism related to the potential harm an expanded role for English study would potentially perpetrate upon Japanese culture and the preservation of the status of the Japanese language (Tsui & Tollefson, 2007). In 2002, MEXT explicitly expressed its dissatisfaction with the state of English education, claiming that such instruction has not produced desired outcomes (MEXT, 2002). As such, the majority of the Japanese population studying English was unprepared for interaction with diverse populations using the language. In devising the plan, MEXT invited the input of experts related to English education, and held round-table committees which discussed the opinions of further visiting experts. These committees, “formed the basis for the attached strategic plan to cultivate “Japanese with English abilities” (MEXT, 2002).

In its ‘plan of strategy,’ MEXT (2002) revealed its intention to emphasize communicative ability in English, in order to adequately prepare the Japanese people for life in a “globalized” community. In order to do so, MEXT recommended steps including increasing the number of ALTs working in schools, and increasing required Test Of English for International Communication (TOEIC) scores for Japanese teachers<sup>3</sup>. The TOEIC test is widely used around the world to assess the English proficiency of its test takers, and Japan is no exception (ETS, 2009), with particular relation to Japanese companies. In addition, the plan called for instruction to be carried out largely in English, and for English education at the elementary level to commence. Butler & Iino (2005) further point out

that in the Action Plan proposed by MEXT, the Japanese language is explicitly established as the foundation for intellectual activities, in the presumed interest of allaying fears of a loss of Japanese language and culture.

### **English Language Education at Present**

As with a conceptualized globalization focusing on Japan's relationship with the West, multilingualism in Japan equates with 'English-Japanese Bilingualism' (Kubota, 2002, p. 12). Foreign language study in Japan is compulsory, from the 7th to 12th grades. English is the primary language offered around the country (Iino, 2002), however, as English is a major component on high school and university entrance examinations (Kitao & Kitao, 1995, paraphrased in Iino, 2002). Junior high and high school English education is meant to provide students with a grasp of written and spoken English, as well as exposure to the socio-cultural knowledge underpinning the language (Kitao & Kitao, 1995). According to Parmenter and Tomita (2001), guidelines for the contents of textbooks at the junior high and high school level are strictly outlined by MEXT, as is final textbook choices. Within these textbooks, the linguistic and cultural knowledge overwhelmingly corresponds to the West (Yamanaka, 2006). The goal of instruction at the junior high and high school level almost exclusively relates to students succeeding in passing the entrance exams. Many students, as a result, study in cram schools to supplement their secondary studies (Pettersen, 1993).

In 2002, English became an increasingly common subject of study at the elementary school level in the 5th and 6th grades, finally becoming compulsory once-a-week subject at the elementary level (Fennelly & Luxton, 2011). According to Butler (2007), discussion of English at the elementary level, "began largely as a response to pressure from business and political sectors; they had repeatedly called for changes to Japan's English education in order to be competitive in both business and politics globally" (Butler, 2007, p. 10). The responsibility for teaching English falls to the homeroom teacher, according to MEXT, though he/she may be supported by an ALT or member of the surrounding community. This has caused many elementary school teachers to complain of a lack of training and English skills to fulfill their language teaching duties (Fennelly & Luxton, 2011).

In public elementary, junior high and high schools, Japanese teachers comprise the majority of instructors, while Native Speakers largely participate as ALTs (Riley, 2008). Some companies act as intermediaries between schools and NSs, hiring "dispatch" teachers to teach in one or more locations during the week (Takahara, 2008). A small number of NSs work full-time at private schools, both Japanese and international in nature. Non-Japanese NNESTs are highly uncommon.

At the university level, departments choose the curricula in which their students will participate (there is no MEXT oversight). Students are often required by their departments to complete one to two years of language study. This may or may not include the study of another language as well; all depends upon the university and department in question (Kitao & Kitao, 1995). The primary concern of students at the university level is their achieving a "high TOEIC score" in order to secure the type of employment they desire<sup>4)</sup>. Studying for the TOEIC is a pursuit many employees embark on after graduation, whether in company classes or in private language schools (Kitao & Kitao, 1995).

In terms of full-time university professors teaching English, NSs are most often on limited-term contracts, with their Japanese colleagues more often than not on tenure (Aldwinckle, 1999). According to Hall (1997), there were more foreign professors tenured at George Washington University in Washington, D.C., than at the dozens of national public universities in Japan combined<sup>5)</sup>. Thus, the majority of faculty members are Japanese. In addition, universities rely heavily on the services of part-time NESTs and Japanese NNESTs (Aldwinckle, 1999). As with primary and secondary education, non-Japanese NNESTs are uncommon.



## **“Business” and English in Japan**

The business community continues to promote the necessity of English in sustaining Japan’s ability to compete in the global business world, as it since the end of World War II. Grounded in the belief that without a large percentage of English speakers Japan is, “at risk of losing its competitive edge in the international business and political world” (Mori, 2011, p. 68)<sup>6</sup>, Japan-based, international companies such as Kyocera and Rakuten<sup>7</sup> have prioritized the English proficiency of their employees.

In 2010, Rakuten president Hiroshi Mikitani, a Harvard Business School graduate with significant overseas experience, officially announced English as the new primary working language of the company (Neeley, 2011). Mikitani called his decision and philosophy “Englishnization,” which he explains in a book he has published on the subject (Mikitani, 2012). Mikitani’s expressed desire is not only to increase his company’s ability to grow and compete; he desires to change Japanese society as a whole, believing that Rakuten “can be the role model for a new Japan” (Neeley, 2011, p. 4). In addition to believing that English is the future for business, Mikitani also argues that English is a way to alter what he terms “the conservative customs and systems of Japan” (Neeley, 2011, p. 4). He asserts that Englishnization is a manner to do so as, “the Japanese language is a barrier to information that comes from outside Japan and to a more objective view of the world” (Neeley, 2011, p. 4). Though initially received with shock, Mikitani’s announcement has led for a push amongst employees to improve their English, both on their own and in language schools. The company uses the TOEIC test to assess reading/writing proficiency, and monitors the spoken proficiency of its employees via observations (Neeley, 2011). Overall, the Japanese media has celebrated Rakuten’s flexibility in the global market, allowing the company to hire talented individuals from around the world and enter markets where other Japanese companies might struggle to do so (Neeley, 2011).

Another push toward “globalization” occurred in 2009, when the Japanese government, with encouragement from the business community, undertook the “Project for Establishing Core Universities for Internationalization” (Mori, 2011). The fundamental purpose underpinning the project was to establish English-medium university courses to attract international students and faculty to Japan, to play a role in the internationalization of Japanese society (Mori, 2011). English was chosen as the medium instruction due to its perceived status as the global language; the language of business and of research (Mori, 2011). The Japanese government initiated the program as a result of worries regarding Japan’s declining birthrate and its ability to attract international talent, both of which affect Japan’s ability to compete on the global stage (Mori, 2011). The government voted in late 2010, however, to “abolish” and “restructure” the program, due to budget cuts and issues with finding potential participating universities (McNeill, 2010).

The Japanese government and the business community are also, at the moment, discussing decentralization. This decentralization would reform the system of 47 prefectures within the country established in the Meiji period (Niikawa, 2006), replacing it with a regional government system (“doshusei”) comprised of seven regional blocs (Yokomichi, 2008). Proponents of decentralization argue that such a move would strengthen local autonomy, render the administrative system more efficient, and would make each region more globally competitive (Yokomichi, 2008). According to Furukawa (2002), “democratization, globalization, and public-sector reform have contributed most to decentralization” (p. 23), as the relationship between the local and the global becomes increasingly intertwined.

The discourses regarding Japan’s relationship with and role in a globalizing world are also connected to another issue that has lingered in Japan since the end of World War II: territorial disputes with Russia, China, South (and North) Korea and Taiwan. These disputes are constructed by a complex web of issues related to national sovereignty, Japan’s colonial past, and specifically that of national resources including fishing and natural gas and petroleum deposits (Sylvester, 2007). In the last decade nationalist sentiment within Japan has increased, fuelled

in part by right wing groups and politicians, are challenging the Japanese government to defend Japanese sovereignty (Matthews, 2003; Bouthier, 2012; Fackler, 2012, MacKinnon, 2012). Tokyo Governor Shintaro Ishihara and Osaka Mayor Toru Hashimoto, two such influential politicians, are also integral participants in promoting decentralization in Japan (Ishihara, 2004; MacKinnon, 2012; Pulvers, 2012; Wagner, 2012).

The dominant sociohistorical discourses in Japan guiding sociocultural, political and educational approaches to identity have constructed an essentialized Japan, which has then been juxtaposed against the West. The borders around conceptualizations of what constitutes “Japan,” “being Japanese” and what is “other” have permeated Japanese society, essentializing who and what might be considered Japanese. The discourses both embedded within and shaping English language education are no different. In concert with the discourses of “us and them,” English language learning and instruction have prioritized the linguistic and cultural knowledge of an idealized, white, Western native speaker (Kubota, 1998; Oda, 1999), while reinforcing the gap between Japan and the world beyond, linguistically and culturally and eliminating space for individuals who do not fit the native speaker model and who are not Japanese (Rudolph & Igarashi, 2012).

### **Reconceptualizing Language, Culture and Identity**

Indeed, essentialized constructions of language, culture and identity related to Japan and the world beyond, permeate business, politics and society in general. Yet such constructions have not gone unchallenged. These challenges shed critical light on Japanese society, being Japanese, and as a consequence, on the nature and role of English in Japan.

Perhaps the most powerful challenge to constructions of Japanese culture and identity, are embodied in the people who do not fit nihonjinron-inspired conceptions of who is Japanese. Sugimoto (1999) argues that, “Globalization has brought into view many kinds of Japanese of whom Nihonjinron lost sight and who pose a fundamental challenge to its core assumptions” (Sugimoto, 1999, p. 88)<sup>8</sup>. This includes the indigenous Ainu minority, the people of the Ryukyus who are ethnically and linguistically distinct from “the Japanese,” Koreans and Chinese who were forcibly brought or emigrated to Japan before and during World War II, and the Burakkumin or “defiled” who have, since the Edo period, been relegated to the fringes of Japanese society marked by their occupations, lineage and where they are from (Willis & Murphy-Shigematsu, 2008).

At present, marriages between Japanese and non-Japanese now comprise one out of twenty (Ministry of Health, Labor and Welfare, 2010). These families are adding to the diverse fabric of what Japan is and what it is becoming. There are also over two million immigrants living in Japan, for the short and long term. Over 250,000 Brazilians and 50,000 Peruvians, with at least one family member on a Japanese ancestry visa, are currently living in the country. Over 500,000 Chinese and 300,000 Filipinos reside in Japan as well (Ministry of Health, Labor and Welfare, 2010). In concert with other internationals and other members of Japanese society, these individuals are redefining the nature of Japan and Japaneseness<sup>9</sup>.

As a result of the global flows of people, finances, technology, ideas and information (Appadurai, 2000), hybridization is occurring in Japan leading to “trans-local, Creole and creolized cultures” (Willis & Murphy-Shigematsu, 2008, p. 31). In their book “Transcultural Japan: At the Borderlands of Race, Gender and Identity,” Willis and Murphy-Shigematsu (2008) describe Japan in the following manner:

“The dividing lines between Japanese and Others, including conceptions of what is ‘pure’ and ‘impure,’ are no longer so clear as they were once assumed to be. These new and complex contexts reveal a transcultural world that is overlooked when we are preoccupied with conceptual dichotomies and dialectical oppositions. What we are seeing instead is a transcultural, transnational society with fluid boundaries, constant change, and often innovative cultural formations” (p. 5).

What is Japan? What is being Japanese? These are few of the questions that emerge in the deconstruction of the social discourses that have essentialized identity, language and culture in Japanese society.

Approaches to ELT seeking to move beyond the NS construct, are approaches that are concomitantly challenging essentializing discourses within Japanese society in general. Scholars have first and foremost questioned the necessity for such an intense focus on English study for the general population, as for the majority of these people English plays little or no role in their lives (e.g., Oda, 2007; Yano, 2011). Oda (2007) asserts that the “world” Japanese English learners are being prepared for is a myth; a myth that perpetuates the power of the NS construct. Other scholars including Kubota (1998, 2002, 2011) have connected the perpetuation of the NS construct in ELT to larger societal discourses related to Japan’s juxtaposition vis-à-vis the “world” (the West).

Recently, scholars have been critically examining language ownership (e.g., Matsuda, 2003a; Simon-Maeda, 2011), and language and identity (e.g., Kubota, 1998, 2002, 2011; Murahata & Murahata, 2008; Rudolph & Igarashi, 2012; Simon-Maeda, 2004, 2011; Willis & Murphy-Shigematsu, 2008), assessment grounded in a NS-centric approach (e.g., Matsuda, 2003b), curriculum and materials privileging the language and culture of an idealized NS and ignoring the Outer and Expanding Circles (e.g., Matsuda, 2003b, Yamanaka, 2006)<sup>10</sup>, and the NS-centric nature of some professional ELT organizations (Oda, 1999) in Japan. Scholars are also examining the effect of globalization on language policy in Japan, both in terms of Japanese and English (e.g., Heinrich, 2012; Seargeant, 2011). Such work is creating space for border crossing; for reimagining who Japanese learners, users and teachers of English might be or become. Yet within the larger social and academic discourses of ELT in Japan, such discussions and issues are far from mainstream and potentially threatening to those who might attempt to do so (Rudolph & Igarashi, 2012). Murahata (2008) notes that the overwhelming majority of discourse related to the NS/NNS binary takes place in the West and not in contexts such as Japan.

### **At Present, Into the Future**

The debate over language, culture and identity in Japan is far from complete. As Willis and Murphy-Shigematsu (2008) argue, “Japan is moving in two seemingly contradictory directions at the same time, one of increasing isolation... and the other of opening more doors, symbolic and real” (p. 31). In this context, via discourses within Japanese society and those embedded within a globalized ELT, the nature and role of English continues to be negotiated.

### **Endnotes**

- 1) The Confucianism that first entered Japan in the late Kamakura period (1185-1333) (Craig, 1998) is termed “neo-Confucianism,” as it was a reformed Chinese approach to Confucius’ original ideas (e.g., Hawkins, 1998; Khan, 1997; Varley, 2000).
- 2) The belief in and perpetuation of *nihonjinron* transcends social status and political affiliation in Japan. It is propagated both within and beyond Japan by Japanese and non-Japanese alike (Sugimoto, 1999).
- 3) The plan has been criticized, within the NS construct paradigm, for issues including its emphasis on TOEIC scores, which likely do not reflect an individual’s communicative proficiency (Yoshida, 2003) and for the fact that teachers and students alike may opt to focus on English for entrance examinations and tests such as the TOEIC, over communicative competence (Murphey, 2004).
- 4) Students may also take the Test of English as a Foreign Language (TOEFL), a standardized test typically used by North American educational institutions for assessing international student applicants.
- 5) The commonplace nature of limited-term contracts for foreign teachers has been a subject of discussion amongst such individuals for many years (e.g., Aldwinckle, 1999; Hall, 1994, 1997; McCrostie & Spiri, 2008), something which Hall

(1994) has labelled ‘academic apartheid.’ This is a very complex matter that is beyond the scope of this literature review, though it is directly related to the social discourses juxtaposing Japan against the West. In an Asahi Newspaper article, Shinichiro Noriguchi, a University of Kitakyushu English professor described the logic of separate academic tracks for native speaker teachers, arguing, “native speakers who have lived in Japan for more than ten years tend to have adapted to the system and have become ineffective as teachers” (Noriguchi, 2006).

- 6) The discourse of “Nihon Chinbotsu” or “Sinking Japan” is a do-or-die discourse that, like nihonjiron, prevails in Japanese society. This discourse, which takes its name from a 1973 sci-fi movie, argues that, “Japan would sink, doomed unless it changed fundamentally” (Curtis, 1999, p. 42) as a result of the forces of globalization.
- 7) Kyocera is a company specializing in electronic parts and products, while Rakuten is a global market site where a customer can search for and purchase almost any kind of item.
- 8) As Arudou (2007) notes, the members of the “foreign” community in Japan, becoming increasingly visible, have been scapegoats at times for the ills plaguing Japanese society, including issues related to crime, employment and education.
- 9) In line with discourses shaping Japan’s relationship with the “outside world,” here are a couple interesting facts according to (Ministry of Health, Labor and Welfare, 2010) : There are 570,000 Japanese in Western countries, while around 123,000 Westerners live in Japan. There are 1,371,000 Asians living in Japan, but only 193,000 Japanese living in Asia. 93% of Japanese permanent residents overseas live in North America.
- 10) Kachru (1985) proposed a three-concentric circle model attempting to explain the historical spread of English around the world and the development of new Englishes. Kachru (1985) describes an “Inner Circle” as consisting of native-speaking Western nations, the “Outer Circle” as consisting of the former colonies of English-speaking nations, and the “Expanding Circle” as including countries which had not experienced colonialization on the part of an English-speaking nation.

## References

- Aldwinckle, D. (1999). Ten+ questions for your next university employer. *The Language Teacher*, 23 (7). Retrieved October 1, 2011 from: [http://www.jalt-publications.org/old\\_tlt/articles/1999/07/aldwinckle](http://www.jalt-publications.org/old_tlt/articles/1999/07/aldwinckle)
- Appadurai, A. (2000). *Modernity at large*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Arudou, D. (2007, August 28). The blame game. *The Japan Times*. Retrieved September 7, 2012, from: <http://www.japan-times.co.jp/text/fl20070828zg.html>
- Befu, H. (1993). Nationalism and nihonjinron. *Cultural Nationalism in East Asia: Representation and Identity. Research Papers and Policy Studies*, 39, 107–135. University of California.
- Befu, H. (2001). *Hegemony of homogeneity: an anthropological analysis of “Nihonjinron”* (Vol. 5). Trans Pacific Pr.
- Bouthier, A. (2012, August 18.). Japanese nationalists land on disputed island, tensions with China intensify. *The Globe and Mail*. Retrieved September 12, 2012, from <http://www.theglobeandmail.com/news/world/japanese-nationalists-land-on-disputed-island-tensions-with-china-intensify/article4488134/>
- Butler, Y. G. (2007). Foreign language education at elementary schools in Japan: Searching for solutions amidst growing diversification. *Current Issues in Language Planning*, 8 (2), 129–147.
- Butler, Y. G., & Iino, M. (2005). Current Japanese reforms in English language education: The 2003 “action plan”. *Language Policy*, 4 (1), 25–45.
- Craig, E. (1998). *Routledge Encyclopedia of Philosophy: Volume 7*. Routledge.
- Curtis, G. L. (1999). *The Logic of Japanese Politics: Leaders, Institutions, and the Limits of Change*. Columbia U. Press.
- Daily Yomiuri. (2005, Oct. 18). Aso Describes Japan as ‘One Race Nation’. *Daily Yomiuri*, p. 2.
- Educational Testing Service (2009) TOEIC. Retrieved December 10, 2009 from: [http://www.ets.org/portal/site/ets/menuitem.fab2360b1645a1de9b3a0779f171509/?vgnnextoid=06cfd898c84f4010\\_VgnVC-M10000022f95190RCRD](http://www.ets.org/portal/site/ets/menuitem.fab2360b1645a1de9b3a0779f171509/?vgnnextoid=06cfd898c84f4010_VgnVC-M10000022f95190RCRD)
- Fackler, M. (2012, July 15). Japan Recalls Ambassador in Island Dispute With China. *The New York Times*. Retrieved September 12, 2012, from: <http://www.nytimes.com/2012/07/15/world/asia/japan-recalls-ambassador-to-china-over-taiwan-dispute.html>

- ber 12, 2012 from: <http://www.nytimes.com/2012/07/16/world/asia/japan-recalls-ambassador-to-china.html>
- Fennelly, M., & Luxton, R. (2011). Are they ready? On the verge of compulsory English, elementary school teachers lack confidence. *The Language Teacher*, (35)4, 19-24.
- Fukada, T. (2008, September 29). Tourism minister apologizes for gaffes. *The Japan Times*. Retrieved September 7, 2012, from: <http://www.japantimes.co.jp/text/nn20080927a2.html>
- Fukuzawa, Y. (1885). Datsu-A Ron (脱亜論). In Junji Banno (Ed.), *Fukuzawa Yukichi Sensyu* (福沢諭吉選集, "Selected works of Yukichi Fukuzawa") (1981, volume 7). Tokyo: Iwanami Shoten.
- Fujimoto-Adamson, N. (2006). Globalization and history of English education in Japan. *Asian EFL Journal*, 8 (3). Retrieved September 12, 2012 from <http://70.40.196.162/September 2006 EBook editions.pdf#page=259>
- Furukawa, S. (2002). Decentralization in Japan. *Japan's Road to Pluralism: Transforming Local Communities in the Global Era*. Tokyo: Japan Center for International Exchange, 21-47.
- Ge, Sun (2007). How does Asia mean? Translated by Hui-Shu Lun & Lau Kinchi. In Chen, K. H., & Chua, C.B. (Eds.), *Inter-Asia Cultural Studies Reader*, 9-65. London: Routledge.
- Gorsuch, G. J. (2000). EFL Educational Policies and Educational Cultures: Influences on Teachers' Approval of Communicative Activities. *TESOL Quarterly*, 34 (4), 675-710.
- Hall, I. (1994). *Working Paper #3: Academic apartheid at Japan's National Universities*. Tokyo: Japan Policy Research Institute. Retrieved August 19, 2011 from: <http://www.debito.org/JPRIacadapart1.html>
- Hall, I. (1997). *Cartels of the Mind*. New York: W W Norton & Co.
- Hawkins, J. (1998). Education. In R. Maidment (Ed.), *Culture and Society in the Asia-Pacific* (pp. 141-162). Routledge.
- Heinrich, P. (2012). The making of monolingual Japan: Language ideology and Japanese modernity. Bristol, UK: Multilingual Matters.
- Iino, M. (2002). English language education in Japan. In R. E. Silver, G. Hu & M. Iino (Eds.), *English language education in China, Japan, and Singapore* (pp. 81-97). Nanyang, Singapore: Nanyang Technological University National Institute of Education.
- Imura, M. (2003). 日本の英語教育 200 年 (*English education in Japan for the past 200 years*). Tokyo: Taishukan Shoten.
- Ishihara, S. (2004). Policy Speech at the 2nd Regular Session of the Metropolitan Assembly, 2004. Retrieved online from: <http://www.metro.tokyo.jp/ENGLISH/GOVERNOR/SPEECH/2004/fge6g102.htm>
- Kachru, B. B. (1985). Standards, codification and sociolinguistic realism: The English language in the outer circle. *English in the world: Teaching and learning the language and literatures*, 11-30.
- Khan, Y. (1997). *Japanese Moral Education Past and Present*. Fairleigh Dickinson Univ Press.
- Kitao, K., & Kitao, S. K. (1995). *English teaching: Theory, research, practice* (pp. 3-20). Tokyo: Eichosha.
- Kubota, R. (1998). Ideologies of English in Japan. *World Englishes*, 17 (3), 295-306.
- Kubota, R. (2002). The impact of globalization on language teaching in Japan. In D. Block & Deborah Cameron (Eds.), *Globalization and language teaching*, (pp. 13-28). London: Routledge.
- Kubota, R. (2011). Learning a foreign language as leisure and consumption: enjoyment, desire, and the business of Eikaiwa. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 14 (4), 473-488.
- Law, G. (1995). Ideologies of English language education in Japan. *JALT Journal*, 17 (2), 213 - 224.
- MacKinnon, M. (August 14, 2012). Tokyo's hawkish governor stirs the pot. *Foreign Policy*. Retrieved online at: [http://www.foreignpolicy.com/articles/2012/08/14/tokyo\\_s\\_hawkish\\_governor\\_stirs\\_the\\_pot](http://www.foreignpolicy.com/articles/2012/08/14/tokyo_s_hawkish_governor_stirs_the_pot)
- Matsuda, A. (2003a). The ownership of English in Japanese secondary schools. *World Englishes*, 22 (4), 483-496.
- Matsuda, A. (2003b). Incorporating World Englishes in teaching English as an International Language. *TESOL Quarterly*, 37 (4), 719-729.
- Matthews, E. A. (2003, November 1). Japan's New Nationalism. *Foreign Affairs*, (November/December 2003). Retrieved from: <http://www.foreignaffairs.com/articles/59369/eugene-a-matthews/japans-new-nationalism>
- McCrostie, J., & Spiri, J. (2008). Foreign university faculty face annual round of "musical jobs" | The Japan Times Retrieved



- September 7, 2012, from: <http://www.japantimes.co.jp/text/fl20081230zg.html>
- McNeill, D. (2010, September 8). Japan's Globalization Project Stalls as Some Criticize Focus on Elite Universities. *The Chronicle of Higher Education*. Retrieved from <http://chronicle.com/article/A-Slow-Start-for-Japans/124346/>
- MEXT (2002). Developing a strategic plan to cultivate 'Japanese with English abilities'. Retrieved October 4, 2009 from: <http://www.mext.go.jp/english/news/2002/07/020901.htm>
- Ministry of Health, Labour and Welfare (2010) Saikin kohyo no toukei shiryō (Statistical documentation recently made public). Retrieved September 7, 2012 from: <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suii09/marr2.html>
- Mikitani, H. (2012) Englishnization. Kobo Publishers.
- Mizuta, A. (2009). The Unchanged Images of English in Changing Japan: From Modernization to Globalization. *Intercultural Communication Studies*, 18 (2), 38.
- Mori, J. (2011). 〈Survey Report〉 G30 and its Implications for Japan. *京都大学国際交流センター論攷*, 1, 63–71.
- Murahata, Y. (2008). What do we learn from NNEST-related issues? Some implications for TEFL in Japan. *The Language Teacher*, 30 (6), 3–7. Tokyo: JALT Press.
- Murahata, G., Murahata, Y. (2008). V. Cook's Multicompetence and Its Consequences for SLA Research and L2 Pedagogy. Retrieved from: <https://ir.kochi-u.ac.jp/dspace/handle/10126/2998>
- Murphey, T. (2004). Participation, (Dis-) Identification, and Japanese University Entrance Exams. *TESOL Quarterly*, 38 (4), 700–710.
- Neeley, T. (2011). Language and Globalization: "Englishnization" at Rakuten. *SSRN eLibrary*. Retrieved from: [http://papers.ssrn.com/sol3/papers.cfm?abstract\\_id=1993062](http://papers.ssrn.com/sol3/papers.cfm?abstract_id=1993062)
- Nemoto, Y. (1999). *The Japanese Education System*. Universal Publishers.
- Nguyen, P. M., Terlouw, C., & Pilot, A. (2006). Culturally appropriate pedagogy: the case of group learning in a Confucian Heritage Culture context. *Intercultural Education*, 17 (1), 1–19.
- Niikawa, T. (2006). Decentralization and local governance: Reinforcing democracy and effectiveness of local government. *Regional Forum on Reinventing Government in Asia-Building Trust in Government: Innovations to Improve Governance*. Retrieved from: <http://unpan1.un.org/intradoc/groups/public/documents/UN/UNPAN024473.pdf>
- Noriguchi, S. (2006, September 15). English education leaves much to be desired. *Asahi Shimbun*. Retrieved January 20, 2007 from: <http://www.asahi.com/english/HeraldAsahi/TKY200609150129.html>
- Oda, M. (1999). English only or English plus? The language (s) of EFL organizations. *Non-native educators in English language teaching*, 105–121.
- Oda, M. (2007). Globalization or the World in English: Is Japan Ready to Face the Waves? *International Multilingual Research Journal*, 1 (2), 119–126.
- Oliver, C. (2009). Kokusaika, revisited: Reinventing "Internationalization" in late 1960s Japan. *Sophia Junior College Faculty Journal*, 29, 47–54.
- Parmenter, L., & Tomita, Y. (2001). Virtual intercultural competence: A programme for Japanese elementary school students. In M. Byram, A. Nichols, & D. Stevens (Eds.), *Developing intercultural competence in practice* (pp. 133–145). Clevedon: Multilingual Matters Ltd.
- Pettersen, L. (1993). Japan's cram schools. *Educational Leadership*, 50 (5), 56–58.
- Pulvers, R. (2012, July 22). Osaka Mayor Toru Hashimoto: "What Japan needs now is dictatorship." The Japan Times. Retrieved September 6, 2012, from: <http://www.japantimes.co.jp/text/fl20120722rp.html>
- Riley, P. A. (2008). Reform in English language teaching in Japan. *人間環境学会(紀要)*, 9, 105–11.
- Rudolph, N. & Igarashi, Y. (2012). Conceptualizing the Role of the Language Teacher Within and Beyond the Native Speaker Construct: A Focus on Japan. *2012 Proceedings of the IAFOR Asian Conference on Language Learning*. Aichi, Japan, 342–357.
- Sawada, J. A. (1993). *Confucian Values and Popular Zen: Sekimon Shingaku in Eighteenth-Century Japan*. University of Hawaii Press.

- Seargeant, P. (2011). *English in Japan in the Era of Globalization*. Palgrave Macmillan.
- Simon-Maeda, A. (2011). *Being and becoming a speaker of Japanese: An autoethnographic account*. Bristol, UK: Multilingual Matters.
- Sugimoto, Y. (1999). Making sense of nihonjinron. *Thesis Eleven*, 57 (1), 81–96.
- Sylvester, J. (2007). Japan's territorial disputes. *American diplomacy: Foreign service dispatches and reports on U.S. foreign policy*. Retrieved from: [http://www.unc.edu/depts/diplomat/item/2007/0709/sylv/sylvester\\_japan.html](http://www.unc.edu/depts/diplomat/item/2007/0709/sylv/sylvester_japan.html)
- Takahara, K. (2008, January 5). Assistant language teachers in trying times. *The Japan Times*. Retrieved September 12, 2012 from: <http://www.japantimes.co.jp/text/nn20080105f1.html>
- Varley, H. P. (2000). *Japanese Culture*. University of Hawaii Press.
- Wagner, A. (2012). Policy Change in a Post-Crisis Japan: An Interview with Richard J. Samuels. National Bureau of Asian Research. Retrieved online September 21, 2012 at: <http://www.nbr.org/research/activity.aspx?id=218>
- Willis, D. B. & Murphy-Shigematsu, S. (2008). *Transcultural Japan: At the borderlands of race, gender and identity*. New York: Routledge.
- Wray, H. (2008). *Japanese and American Education: Attitudes and Practices*. IAP.
- Yamanaka, N. (2006). An evaluation of English textbooks in Japan from the viewpoint of nations in the Inner, Outer, and Expanding Circles. *JALT Journal*, 28 (1), 57-76.
- Yano, Y. (2011). English as an International Language and 'Japanese English'. In P. Seargeant, P. (Ed.). *English in Japan in the Era of Globalization*, 125-142. Palgrave Macmillan.
- Yokomichi, K. (2008). The Debate on the Introduction of a regional System in Japan. *Up-to-date Documents on Local Autonomy in Japan No. 3*. Retrieved from [http://www3.grips.ac.jp/~coslog/test/activity/01/03/file/up-to-date-3\\_en.pdf](http://www3.grips.ac.jp/~coslog/test/activity/01/03/file/up-to-date-3_en.pdf)
- Yoshida, K. (2003). Language Education Policy in Japan: The Problem of Espoused Objectives versus Practice. *The Modern Language Journal*, 87 (2), 290-292.

## Kestenberg Movement Profile の記譜における 学びの過程と分析対象者への調律に関する検討

### A Study of Learning Process and Attunement to Clients in Notation of Kestenberg Movement Profile

崎 山 ゆ か り, 中 め ぐ み  
(武庫川女子大学文学部教育学科)  
(おや・こムーヴメント Atelier M)

Yukari Sakiyama, Megumi Naka

*Department of Education, School of Letters  
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

#### Abstract

It is hard to master how to notate humans' movement by Kestenberg Movement Profile (KMP) for us because there are few opportunities of learning in Japan. We have been learning the technique through personal communication with KMP specialists in the United States.

In order to know the notating method, we made our own original video clips of a two year old girl for analyzing materials. We also asked a KMP specialist to draw the KMP form and to offer all the raw data. From the inquiry of each notating data and many correspondences through email exchanges, we have noticed the following three issues. They are; difficulty of drawing rhythm lines, ambiguity of choosing movements for notation, and significance of attunement to clients as KMP analysts.

We also have found a new important idea for notation of KMP. KMP analysts need a kind of experience of attuning clients' rhythm through physical sense, as expectant mothers would attune their fetuses. The attunement should be also independent of any vision. This fact lets us know our Japanese advantages from our bodily cultural background. Actually, the KMP specialist studies Shiatsu and works as Shiatsu practitioner. Our bodily culture has many intimacies with harmonic movement and breathing from martial arts concept such as "MAAI". The concept of attunement to clients in KMP probably includes these communicative ideas. A possibility for our cultural advantage will be recognized in the process for attunement.

#### 1. はじめに

Kestenberg Movement Profile (KMP)<sup>1)</sup>は、ダンス・ムーブメントセラピーなどで用いられる精神分析的視点をふまえた動きの分析方法で、乳幼児の発達段階とその時期に多く出現する動きに関連づけた理論的基盤を有している。KMPでは、親と子の非言語レベルでの動きのリズム性から成る関係性に着目しており、コミュニケーションにおけるリズム協調の重要性を指摘する近年の乳児研究<sup>2)</sup>とも関連している。さらには、発達におけるダンスや音楽などを通じたダイナミックな体験の必要性が、乳児研究者からも論じられる<sup>3)</sup>ようになってきた。

これまで筆者らは、KMP理解を進めるために、運動分析における専門用語の検討<sup>4)</sup>や、それら用語の解釈についての検討<sup>5)</sup>、さらにKMP理論の枠組を図示した色別円形図<sup>註1)</sup>の訳出などに努めてきた。

現在, 日本国内で KMP を専門的に学べる機会は皆無であり, 文献研究を中心とせざるを得ないのが実状である。しかしながら, KMP は実際の動きのリズム性に着目し, そこから動きの特性などを分析する詳細な記録が必要である。そのためには, 実際の動きの記譜を学ばなければならない。この手技の獲得には, ダンス・ムーブメントセラピストを養成する大学院での学びに加え, 継続的な記譜のトレーニングが不可欠である。つまり現状では, 日本国内で KMP における記譜の手技を習得することは事実上不可能となる。

そこで本研究では, これまでの KMP の学びのための取り組みを概観し, アメリカ在住の KMP 分析専門家によるスーパービジョンや, KMP フォーム作成を依頼した専門家との電子メールを通じた質疑応答の記録を元に, 記譜の学びの問題点と解決への筆者らの取り組みを省察する。その上で, 分析者が分析対象者に身体のリズム性を調和させ, 意図的な調律を行いながら記譜をする必要性と, 分析者側の課題について検討する。

## 2. これまでの KMP の学び

これまで筆者らは, KMP 指導の中心であるアメリカ国内でそれぞれの学びを重ねてきた。古くは, 中が 1998 年に Antioch 大学院においてダンス・ムーブメントセラピー集中コースを受講し, また American Dance Therapy Association (ADTA) の年次大会において KMP の学びに触れたことに端を発する。その後崎山も関連文献や資料映像を集めながら, ADTA の年次大会において過去 20 年以上に渡り毎年開催される KMP 関連のワークショップに, 2007 年頃より可能な限り参加してきた。しかしこれらの学びは, Table1 が示す通り KMP 分析の全体を学ぶ系統性は乏しく, Table2 に提示した正規の KMP 分析家の資格取得のための学びとは, 大きく異なっている。

現実的には海外での継続した学びは困難であることから, 個々のアメリカでの体験をふまえ, 2009 年より文献研究に特化した取り組みを共同研究として開始し, KMP 応用法の翻訳<sup>6)</sup>を含む, 開発者の Kestenberg, J. の理論の元となった乳幼児の精神発達理論<sup>7)</sup>の読解に努めている段階である。

**Table 1.** ADTA 年次大会における KMP 関連のワークショップ(2007～11 年分)

| 年    | 発表者                                              | タイトル                                                                                            | 内容                                                                          |
|------|--------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| 2007 | Loman & Sossin                                   | KMP contributions to work with Children on the Autism Spectrum                                  | 自閉症スペクトラムの子どもへの治療に活用できる KMP のテンションフローとシェイプフローの用い方を体験的に学ぶ。                   |
| 2008 | Loman                                            | KMP Contribution to Pregnancy :Prenatal Movement, Singing and Drawing                           | KMP の幅広い活用方法の紹介として, 妊婦とのワークを紹介し, エクササイズを通して胎児の動きとの調律を学ぶ。                    |
| 2009 | Loman & Sossin                                   | Observing Children with Autism in Interaction :Clinical Implications of Sequential KMP Patterns | 自閉症児の相互性を観察方法として, KMP のリズムパターンを体験的に学び, リズムを生み出し他者と協調し合う方法を学ぶ。               |
|      | Loman                                            | KMP as a Self-Discovery Dance Exploring Personal Movement Patterns                              | KMP のリズム特性の連続した動きの体験をふまえ, 個々が持つ動きのリズム特性やその嗜好性を探る。                           |
| 2010 | Birklein & Kipnis                                | KMP in a Relational Framework: The Affective and Interpersonal                                  | KMP の精神分析的理論基盤に着目して, 自身の表現活動における特性を探る。                                      |
|      | Loman, Sossin, Birklein, Hastie & Kestenberg, A. | Clinical and Cultural Challenges and KMP                                                        | 身体の文化性をふまえた KMP のあり方を探るため, 発表者がこれまで関わった国での KMP 用語の翻訳やその理解の相違をパネルディスカッションする。 |
| 2011 | Loman                                            | Collaboration through Movement: KMP Movement Patterns Underlying Mutuality and Disconnection    | KMP のリズム性に基づく動きのパターンを体験することにより, 他者との動きの相互性や断裂性を体験し, 動きによる共同作業を体験する。         |

\* 年次大会プログラムより崎山再構成

**Table 2.** KMP 分析家の資格取得に必要な Level 1 のカリキュラム

|          |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
|----------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 概要       | 診断や治療に用いるための動きの観察、評価、分析の基礎的原理に親しむ。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
| 学習目標と時間数 | 発達段階に沿って心理学的視点を持ちながら、さまざまな動きを体験し、認知し、記譜し、解釈する。Level 1 はのべ 90 時間を要し、30 時間ずつ 3 つの枠組で構成される。                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| 到達目標     | 動きには本人の嗜好性や文化性が影響することを理解し、発達の側面を理解しながら、非言語的分析ツールである KMP が使えるようになる。                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
| 使用教材     | ・ Kestenberg-Amighi, J. & Loman, S., The Meaning of Movement Developmental and Clinical Perspectives of the Kestenberg Movement Profile, Amsterdam: Gordon and Breach Publishers, pp.1-307 (1999)<br>・ TRAINING MANUAL FOR THE KESTENBERG MOVEMENT PROFILE<br>The Sand Point Movement Study Group Child Development Research 1999 Revised Loman, S. Antioch University |
| 学習の枠組    | 1. テンションフローリズム, 両極性シェイプフロー, 単極性シェイプフロー<br>2. テンションフロー特性<br>3. 前駆エフォート, エフォート, 方向性シェイプ, 面性シェイプ, および身体的特徴<br>* 課題で示された DVD 映像の動きを観察し, KMP フォームを作成した上で解釈についてレポートを作成し, 分析結果の妥当性の審査を受ける。                                                                                                                                                                                    |

\* KMP ホームページより崎山訳出及び再構成

### 3. 記譜の実態

こうした文献研究と並行して、KMP の実際の動きの分析技法の基礎である動きの記譜の手技について、2011 年より新たな取り組みを始めた。それは KMP 研究と指導の専門家に、記譜の実態を知るための分析資料作成を依頼し、分析前の記譜そのものである生データを入手することであった。

KMP の記譜については、長期にわたる訓練による手技の獲得が必要である。Figure1 は、KMP の中の一項目であるテンションフローリズムにおける 10 種のリズムを観察した際にそれぞれ記すラインを示したものである。これらのラインの記譜は、動きの中立性を示すニュートラルラインを中央に置き、その上下の振幅で動きの大きさを示している。更にニュートラルラインに示されたそれぞれのラインの幅や形がリズム特性の違いを示すものである。これらのラインに基づく記譜は、原則として動きの観察と同時に進行でなされる。つまり、記譜者は分析対象者の動きを観察しながら、手元ではその動きに沿ってこのようなラインを記すのである。

| リズム              | ライン | リズム               | ライン |
|------------------|-----|-------------------|-----|
| Sucking          |     | Snapping & Biting |     |
| Twisting         |     | Strain/Release    |     |
| Running/Drifting |     | Stopping/Starting |     |
| Swaying          |     | Suring/Birthing   |     |
| Jumping          |     | Spurting/Ramming  |     |

\* ラインは、TRAINING MANUAL FOR THE KESTENBERG MOVEMENT PROFILE, The Sand Point Movement Study Group Child Development Research 1999 Revised Loman, S. Antioch University pp.6-8 より抜粋

**Figure 1.** テンションフローリズムの記譜のライン

従って、専門家と初学者の記譜のラインの安定性は Figure2 に示す通り大きく異なる。専門家は Sucking のリズムが変わっても一定したラインを描いている。一方初学者は、Sucking のリズムから Snapping/Biting のリズムを観察し、それをニュートラルラインに沿って記譜しようとしているが、動きの観察のため手元が十分に確認できないまま記譜を進めているため、ラインが大きく中央からずれてい





Figure 2. 専門家(左)と初学者(右)のラインの記譜の違い

Table 3. KMP フォーム作成依頼のための映像の概要

|            |                                                                                                                                                                                              |
|------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 分析対象者      | 定型発達の2歳2ヵ月女児 A                                                                                                                                                                               |
| 分析者        | Suzanne Hastie 氏 (KMP 分析有資格者で KMP 色別円形図作者)                                                                                                                                                   |
| 分析映像       | A の母親による日常場面の映像より以下の場面を抜粋したのべ 45 分<br>A と母親の非言語的交流の様子を KMP 分析からどのように把握するかを理解を意図していたため、映像はできるだけ母親とのかかわりのある場面で構成した。                                                                            |
| 女児 A の映像内容 | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 母親による絵本の読み聞かせと昼寝のための寝かしつけ (3 分)</li> <li>2. 保育園から自宅までの徒歩による母親との降園 (6 分)</li> <li>3. 自宅内でのままごと遊び (26 分)</li> <li>4. 子ども向けテレビ番組の視聴 (10 分)</li> </ol> |

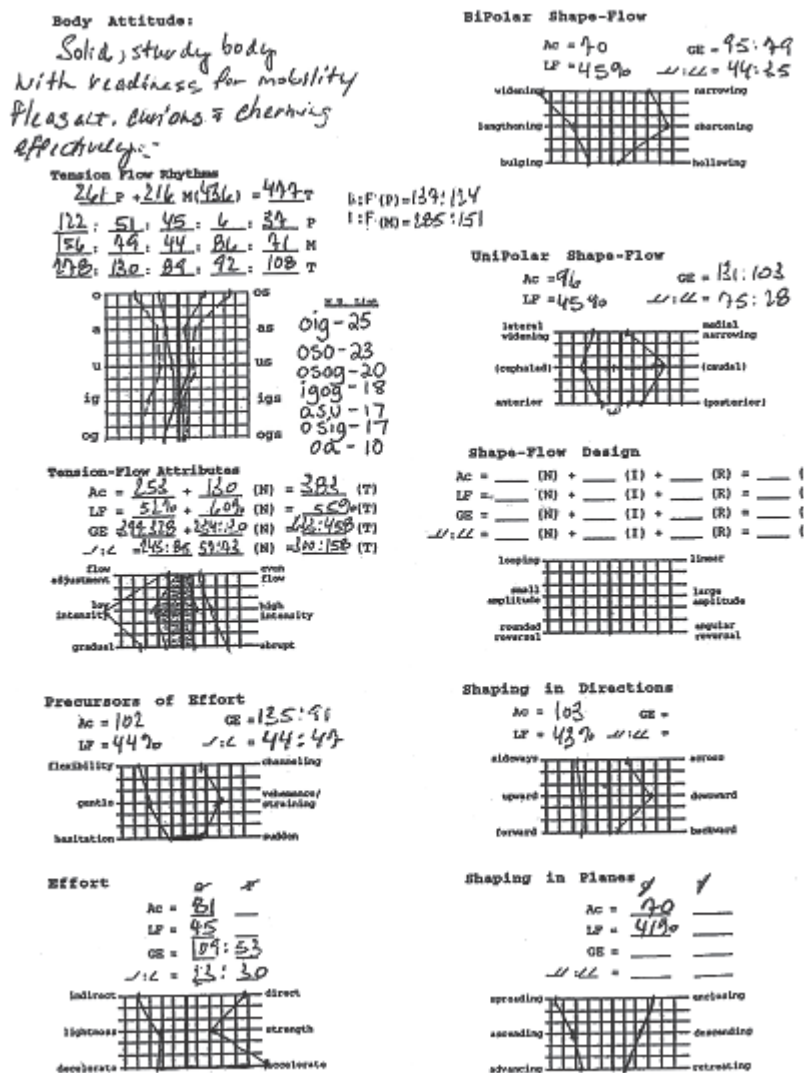


Figure 3. A の KMP フォーム

るのが認められる。さらに、ラインの一部が重なりあい、時間経過と共に動きが進行していることを示す記譜ができていない。そのため、本研究においては、KMP 分析の有資格者へ分析のための全ての生データの提供、KMP による分析結果である KMP フォームの作成を依頼し、その結果を元に記譜の実態について知ることとした。

#### 4. 映像作成と専門家による KMP 分析

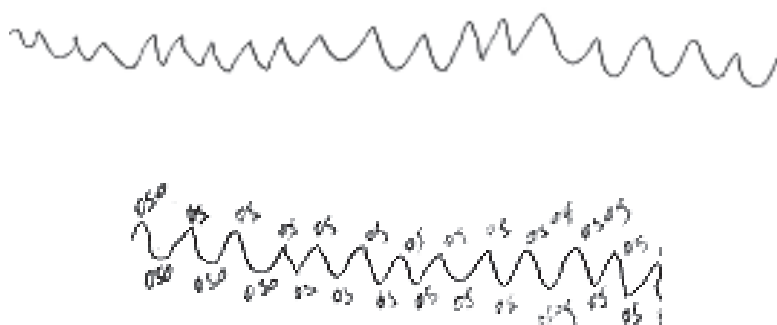
記譜の実際をより具体的な生データと共に理解するため、中が作成した幼児の動きの映像を元に、KMP 分析家へ KMP フォームの作成とその解釈を依頼し、同時に記譜に関わるすべての資料提供を求めた。その内容を以下の Table 3 に示した。

映像資料とその説明の英文を 2012 年 3 月に Hastie 氏へ郵送し、資料内容に関する質問には随時電子メールのやり取りで対応した。2 ヶ月後をめどに、KMP フォーム、A の発達に関する KMP からの解釈、これらの作成のための A の動きの記譜と統計的処理の全資料の提供を求めた。(なお、これらの依頼についてはアメリカでの KMP 分析の費用と同等の支払いを行っている。)

Hastie 氏から結果として送られた同年 5 月の KMP フォームが Figure 3 である。この図と共に送られてきた解釈には「矢状面(前後方向)の移動が可能となる身体発達途上であり、水平面(左右方向)での他者交流は可能な段階である」、「精神発達段階上では、尿道期の過程と同様に肛門期の特徴が見出せる」、「好奇心が強くチャミングで、物事に集中できる豊かな情動が認められる」などの観察コメントが寄せられた。送られてきた資料を確認しながら、内容について電子メールを活用した質疑応答を継続的に行った。

こうした一連のやりとりで明らかになった点は、動きの一部を取り出して実際の時間と同期させて、分析者が記譜をすることであった。それは、映像に映る全ての動作、つまり45分の動きの全てを対象とするのではなく、あくまでも分析者が何度も繰り返して見た映像全体から、特徴的な動きを抜粋するということである。しかしこの事実は、テキストとして用いられるトレーニングマニュアルにも、大学院における必読書である KMP テキスト<sup>8)</sup>にも記載されていなかった。ここに、記譜の手技を獲得しなければその理論をも十分には理解できない KMP 学習の困難さが認められる。

今回の分析のための生データの入手とその内容に関する専門家とのやりとりから、分析者自身の判断によって記譜の対象となる動きが選別されている事実が明らかとなった。例えば、テンションフローリズムの場合、リズム特性を実際の動きに沿って Figure 1 に示したラインを元に記譜し (Figure 4 上)、その後、具体的な分析作業としてラインの振幅のひとつひとつに、その発達段階を示す略号を書き込む (Figure 4 下)。さらに、記号ごとに個数をカウントし、最終的には比率を求めて数値化する (Figure 5)。そして、動きの特性を KMP の内容ごとに、強弱や長短など対概念で示されるような動きの特質について、その全体的なバランスを評価しているのである。



**Figure 4.** A のテンションフローリズムの記譜(一部抜粋)

(崎山，中)

Client: \_\_\_\_\_  
Exam Date: April 2012

COUNT

Observer: Elizabeth Hester

### TENSION FLOW RHYTHMS

[illegible]

**Figure 5.** A のテンションフローリズム集計表

これらの資料を元に、生データとして提供されたテンションフローリズムの無数のラインが映像のどの場面を抜粋して記譜しているのか、動きの中で見出される基本パターンのリズム特性(ピュアリズム)といくつかの特性が混じり合うリズム(ミックスリズム)との見分け方など、より具体的な質問を掘り下げ、Hastie 氏との電子メールによるフォローアップを続けている。

## 5. 調律 (Attunement) の重要性

KMP 分析の過程に関する省察はまだ課題も多く、さらなる検討が必要なのは言うまでもない。しかしながら、今回の記譜の実態の検討において、Hastie 氏も筆者らも同様に重要と考えているのが、分析者側の分析対象者への調律の問題であった。分析者が映像に移し出された分析対象者の動きの特性を瞬時に捉え、そのリズムを KMP 分類に準えて、Figure1 で示したそれぞれのラインを動きに同期させて記譜をする。確かに専門家の手技ではあるが、どこまで正確に記譜できるのかの検証は、現段階では困難である。もちろん、KMP 分析家の資格を得るためには、実際の課題映像から KMP フォームとその解釈をまとめ、指導者にその妥当性を認められなければならない。つまり、Table 2 の学習の枠組で示したように、妥当性のある分析結果を導かなければ資格は取得できないのである。

生身の人間の動きを機械的に分析するのなら、コンピュータなどの動作分析ソフトを活用するのが、その正確性において望ましいのは言うまでもないだろう。それならば、なぜ KMP 分析が他者との、特に母子間における非言語的つながりを判断するのに必要とされるのだろうか。この疑問にひとつの道筋をつけたのが、KMP における調律(attunement)の概念であった。

Kestenberg は、母子関係の成立における調律の重要性を解き、その在り方を嗜好に基づく部分的な調律から、互いに共感できた上での調律など、段階的な調律の在り方を分類<sup>8)</sup>している。二者関係の確立にはその相互性が不可欠ではあるが、母子関係を考える場合、まずは母親側が子どもへの調律を行うことが求められる。このことは、KMP の記譜においても同様であり、分析者はまず対象者の動きへの調

律が求められるであろう。これは実際の動きとしてではなく、映像の中の動きへ自身の心を寄せるということである。この点について、今回分析を担当した Hastie 氏は今回の A の分析について次のように述べている。「私はまずテンションフローを描かないで彼女の動きを観察します。そして 2 回目は彼女の動き方に自分自身を合わせます(つまり私は、彼女の動きの質を感じようとするのです)」(Hastie 氏からの電子メール 2012.7.3 より、崎山訳出)。このことは、崎山が実際の記譜のスーパービジョンを受けた折に、Loman 氏が語った「頭で考えてはいけない。対象者の動きのリズムを感じ、その感覚を腕に乗せて同期しながらリズムのラインを描くことが大切である」という内容(2011.10.21 のスーパービジョン記録より)と一致している。

このような指摘は、対象者へのある種の波長を合わせる行為とも捉えられ、分析者本人の主観に負うところが多い。目の前のある動きを見つつも、視覚に頼るだけではなく他者を感じることが求められるのである。さらに KMP における調律は、分析者と分析対象者間のみならず、妊婦と胎児との関係性の確立にも関連があると指摘されている。それはあたかも他者を自分の中に取り込み、受け入れ、感じingことを意味している。Loman<sup>10)</sup>や Tortora<sup>11)</sup>が、母親が実際には見えない胎児の動きを感じ、心を添えていくことから母子関係が始まっていると指摘するのは、まさに視覚に頼らない体感からの調律にほかならない。

しかしながら、このような感覚的とも言える他者への調律の質をどのように保証していくのかという、別の問題も同時に存在している。KMP 分析家としての質の保証のため、入門段階では 90 時間のカリキュラムの中で、KMP の項目毎に記譜を繰り返し体験できるように構成されている。さらに、資格認定のためには自身の KMP フォーム作成とその解釈についての審査があり、前述したように妥当性を欠く分析の場合は、資格が認められずフォローアップコースへ進まなければならない。

今回分析を依頼した Hastie 氏は、ダンス・ムーブメントセラピーや KMP 分析の傍ら、アメリカで Shiatsu Practitioner、すなわち指圧の専門家としても活動が続けている。この点について彼女に聞いたところ次のような返答があった。「KMP と指圧の関係については、私自身もっと考えていかなければいけないと思います。けれども、KMP も指圧も両方が人と共にあり、お互いをよりよくつなげていくことを手助けしているのです。ジャネット<sup>註2)</sup>が知っているかどうかはわかりませんが、実は彼女の母親は指圧を学んだことがあるのです(もしかすると何か発見があったのかもしれません)」(Hastie 氏からの電子メール 2012.7.27 より、崎山訳出)。KMP における調律は、他者身体を知り、それに直接触れて関わる技法である指圧とは全く別物であることは明らかである。しかし、そこに開発者である Kestenberg 自身、そして指導者である Hastie 氏が期せずして指圧を学び、動きの観察の中で他者への調律を試みたことは、偶然の一致以上の示唆を与えてくれるだろう。

## 6. おわりに

KMP 分析の詳細についての検討は、記譜の問題だけでなくその統計的処理の在り方など、これからも検討すべき点がある。さらには、KMP の理論の柱となる性的発達段階における尿道期の理解や、女性である Kestenberg が構築した男性性や女性性のとらえ方など、その概念においてもさらなる理解が望まれる。

しかしながら、西洋の精神分析理論を基盤とし、その身体文化を背景に生まれた動作分析法が、分析対象となる個の身体を、常に他者身体とのつながりやその共感性を前提として分析している事実は着目すべき点である。他者身体への共感やそのリズム特性とは、日本古来の武道の「間合い」等日本の身体文化との親和性を感じられる。今後も継続して KMP 記譜法を学びながら、KMP の調律の概念を中心に検討していきたい。



## 文 献

- 1) Kestenberg-Amighi, J. & Loman, S., The Meaning of Movement Developmental and Clinical Perspectives of the Kestenberg Movement Profile, Amsterdam: Gordon and Breach Publishers, pp.1-307 (1999)
- 2) Beebe, B., Rustin, J., Sorter, D. and Knoblauch, S., 乳児期の間主観性さまざま－視点の拡大とその精神分析への応用, 丸田俊彦監訳, 乳児研究から大人の精神療法へ－間主観性さまざま－, 岩崎学術出版社, pp.63-65 (2008)
- 3) Stern, D. N., Forms of Vitality Exploring Dynamic Experience in Psychology, the Arts, Psychotherapy, and Development, Oxford University Press, pp.73-98 (2010)
- 4) 崎山ゆかり, 子どもの動きの評価法に関する基礎的研究－ダンスセラピーにおける Kestenberg Movement Profile を手がかりにして－, 武庫川女子大学紀要人文科学編, 57, pp. 19-26 (2009)
- 5) 崎山ゆかり & 中めぐみ, Kestenberg Movement Profile における運動分析専門用語の解釈に関する検討, 武庫川女子大学紀要人文科学編, 58, pp. 13-21 (2010)
- 6) Loman, S. & Sossin, K. M., Applying the Kestenberg Movement Profile in Dance/Movement Therapy: An Introduction, Edited by Sharon Chaiklin and Hilda Wengrower *The Art and Science of Dance/Movement Therapy Life is Dance*, Routledge, 2009 pp.237-264, 崎山ゆかり & 中めぐみ訳, ダンス・ムーブメントセラピーにおけるケステンバークムーブメントプロフィール(KMP)適用法入門, ダンスセラピー研究, 6 (2012) 印刷中
- 7) Kestenberg, J., *Children and Parents: Psychoanalytic Studies in Development*, Jason Aronson, Inc. pp.3-154 (1975)
- 8) Kestenberg-Amighi, J. & Loman, S., The Meaning of Movement Developmental and Clinical Perspectives of the Kestenberg Movement Profile, Amsterdam: Gordon and Breach Publishers, pp.1-307 (1999)
- 9) 前掲書 7) pp.157-170.
- 10) Loman, S., Attuning to the Fetus and the Young Child: Approaches from Dance/Movement Therapy, Zero to Three, vol.15, pp.20-25 (1994)
- 11) Tortora, S., Join My Dance: The Unique Movement Style of Each Infant and Toddler Can Invite Communication, Expression and Intervention, Zero to Three, vol.15, pp.1-19 (1994)

## 註

- 1) KMP 指導者 Hastie, C. S. が 1998 年に作成した KMP の分析項目を円上に色分けして階層化したもの。本人からの許諾を受け、2010 年に崎山が訳出している。
- 2) Janet Kestenberg Amighi はケステンバークの娘で、現在 KMP 研究家として後進の指導に当たっている。



## 固有名詞の識別性に基づく文の構造的曖昧性の処理

井 上 雅 勝  
(武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科)

### The effect of distinctiveness of proper nouns on processing structural ambiguity in comprehending Japanese sentences

Masakatsu Inoue

*Department of Psychology and Social Welfare, School of Letters  
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

#### Abstract

The effect of distinctiveness of proper nouns on structural ambiguity resolution or retention in comprehending Japanese sentences with main-clause/relative-clause ambiguity was examined by using self-paced moving-window reading paradigm. The linear mixed-effect model revealed that the processing load of re-analysis (garden path effect) at the head nouns of relative clause was decreased when the proper nouns were more distinctive. This result suggests that the distinctiveness of proper nouns has an effect on working memory capacity in reading that decides whether the sentence processor can retain more than one interpretation or not.

文を理解する際、直面する曖昧性に文処理器がどう対処していくかという問題について、多くのモデルは、文処理器が早期に曖昧性を解消することによって効率的に理解をすすめるという即時処理(immediate processing)の観点から研究を発展させてきた(代表的なものとして、Frazier & Rayner, 1982; MacDonald, Pearlmutter, & Seidenberg, 1994)。一方、曖昧性を解消する情報が得られるまで解釈の決定を遅らせるという遅延処理(delayed processing)の観点を有する研究は少数である(e.g., Ferreira, Bailey, & Ferraro, 2002; 井上, 2006; Marcus, 1980; 坂本・吉長, 2006)。このうち、認知資源容量の立場から遅延処理の可能性を実証的に明らかにした研究として、MacDonald, Just, & Carpenter (1992)があげられる。作動記憶容量の個人差と文理解との相互作用を理論化した Just & Carpenter (1992)の考えに基づく、作動記憶容量の小さな読み手は、曖昧性に対して単独の解釈しか保持できないため、その解釈が間違っていた場合には再解釈が迫られる。一方、作動記憶容量が大きい読み手は、複数の解釈可能性を保持し、解釈の決定を一時的に遅らせることができるため、再解釈を必要としない。MacDonald et al. は、文の読み時間を測定する方法を用いて、こうした作動記憶容量の大きさの違いにより、文の構造的曖昧性への対処方法が異なるという仮説を実証した。

文理解、特に曖昧性への対処と作動記憶容量の個人差との相互作用を検証しようとするアプローチにはいくつかの研究が見られるが、語彙のなんらかの性質によって文の理解に関わる作動記憶負荷の高さが異なるという観点から研究された例はあまりみられない。作動記憶への負荷を変化させる可能性が高い語彙の性質の1つに、固有名詞-普通名詞という名詞のタイプの差異があげられる。一般に、普通名詞と比較して固有名詞は記憶されにくく、想起も困難である(Burke, MacKasy, Worthley, & Wade, 1991; Cohen, 1990)。ここで、こうした要素をより多く含む文を理解する際には、作動記憶により高い負荷がかかると仮定すると、上述の作動記憶容量が小さい読み手と同様の効果が現れると予測できる。すなわち、固有名詞を含む文では、文の理解に用いられる作動記憶容量が小さくなるため、複数の解釈候補を有する構造的曖昧性に対して単独の解釈しか保持できない。従って、その解釈が誤りである場合には、

再解釈が迫られることになる。井上(2008)は、

(1a) 小林が社員を叱った安田を呼びつけた。

(1b) 小林が平田を叱った安田を呼びつけた。

のような単文解釈 / 関係節解釈の構造的曖昧性を有する文の読み時間を測定した。これらの文で、「小林が社員を / 平田を叱った」を単文として解釈してしまうと(これをガーデンパス(GP)化とよぶ)、関係節主要部「安田を」で再解釈が必要となり、読み時間が増加する(これを GP 効果という)。一方、2つの解釈が保持され、曖昧性が解消されないままであれば、再解釈の必要はなく GP 効果も小さくなる。実験の結果、固有名詞を1つ多く含む(1b)の「安田を」の領域の読み時間が、普通名詞を1つ含む(1a)よりも有意に長くなった。このことは、固有名詞－普通名詞間の作動記憶負荷の差によって、単独の解釈が決定されてしまうか、あるいはその決定が先延ばしにされるか、言い換えると、複数の解釈可能性を保持できるかどうか決定されることを示唆している。

これに対して、固有名詞－普通名詞のなんらかの質的な差が曖昧性の解消に影響したと考えることもできる。例えば、(1a)の「小林が社員を叱る」という普通名詞を目的語に持つ表現に着目すると、「社員」は単数とは限らない。ここから、単文の意味自体に複数の可能性が生じる(e.g., 「1人の社員を叱る」, 「大勢の社員を一度に叱る」, 「社員1人1人をそれぞれ別の機会に叱る」など)。一方、固有名詞のみからなる文「小林が平田を叱った」では、解釈の可能性はほぼ1つに限られる。ここで、単文の中にさらに意味の曖昧性が含まれる場合には処理の一時的遅延が生じやすいと仮定すれば(cf., 井上, 2010)、普通名詞を含む(1a)で GP 効果が減少した理由を作動記憶負荷の差に帰属させる必要はない。本研究では、こうした複数の説明の妥当性を検討するため、名詞のタイプを固有名詞に統一し、かつ作動記憶への負荷が異なると考えられる2種類の固有名詞を含む構造的曖昧文の理解を比較する。

Stanhope & Cohen (1991)は、識別性の低い固有名詞(e.g., “John”, “Jane”のようなありふれた名前)よりも、識別性の高い固有名詞(e.g., “Felix”, “Grace”のような比較的珍しい名前)の方が、再生成績が良好であることを見いだしている。これは、相互活性化競合モデル(Interactive activation and competition model, Burton & Bruce, 1992)を修正した枠組みの中で、次のように解釈される。まず、意味ネットワーク上では多くのユニットが一度に活性化することが抑えられるため、その中にターゲットがある場合、その活性は弱くなる。識別性が低い固有名詞は、意味ネットワークの中で多くの指示対象と結合を持っていると考えられるため活性が弱く、その結果、再生も困難になる(Stanhope & Cohen, 1991, p. 65)。ここで、識別性が低く活性化されにくい固有名詞を含む文の理解では、作動記憶への負荷が高くなると仮定すると、井上(2008)と同様に、識別性が低い固有名詞だけからなる構造曖昧文(2a)では、相対的に負荷が高いため単一の解釈が選ばれやすく、GP効果が大きくなると予測される。一方、識別性の高い固有名詞(e.g., タモリ)を1つ含む文(2b)では、その負荷はより低いいため、GP効果も小さくなる。これに対し、上述の名詞のタイプに基づいて GP 効果量の差を説明する考えに従うと、ともに固有名詞が用いられている(2a), (2b)では、GP効果に差がみられないはずである。本研究では、語句毎の読み時間を測定する方法によって、以上の作業仮説を検討する。

(2a) 藤田が今井を殴った吉田を誉めた。

(2b) タモリが今井を殴った吉田を誉めた。

## 方 法

**実験参加者.** 後述する評定調査に参加していない武庫川女子大学学生 103 名が実験に参加した。すべての実験参加者は、日本語が母国語であり、正常視力を有していた。年齢は 19-21 才の範囲であった。

**刺激.** 構造的曖昧性(曖昧条件 vs. 非曖昧条件)、および主語(R1)の固有名詞の識別性(低識別条件 vs. 高識別条件)を操作する事により、1セットが4条件からなる 16 セット計 64 文の実験刺激が作成された(3a, b, c, d)。刺激文はすべて、主語(R1)、直接目的語(R2)、動詞 1 (R3)、関係節主要部(R4)、動詞 2 (R5)から成り立っている。ただし、主語を倒置させたコントロールとしての非曖昧条件では、直接目

的語、動詞 1、関係節主要部、かき混ぜ主語(R1sc)、動詞 2 の語順で構成されていた。主語、目的語、関係節主要部の名詞には、全て固有名詞が用いられた。主節の主語(R1, R1sc)のみ、識別性が高いと想定される実在の著名人物の姓名・ニックネーム・姓と役職名等(e.g., えなりかずき, タモリ, 小泉元首相)と、これよりも識別性が相対的に低い一般的な人姓固有名詞(e.g., 藤田, 今井)に分けられた。

- (3a) 藤田が今井を殴った吉田を誉めた。(曖昧・低識別)
- (3b) タモリが今井を殴った吉田を誉めた。(曖昧・高識別)
- (3c) 今井を殴った吉田を藤田が誉めた。(非曖昧・低識別)
- (3d) 今井を殴った吉田をタモリが誉めた。(非曖昧・高識別)

手続き. 主たる実験課題は, moving window display を用いた語句毎の自己ペースリーディング法であった(Just, Carpenter, & Woolley, 1982). 刺激文の呈示と語句毎の読み時間(reading time: 以下 RT)の記録は, 玄海堂 LinguaLab によって制御された。実験参加者がスペースキーを押下する毎に先行語句が消去され, 次の語句が呈示された。語句の呈示とキー押しの間の反応時間(これを RT とみなす)が記録された。本試行に先だって, 練習試行が 10 試行実施された。本試行の実験刺激として, 1 セットから 2 文ずつ(3a, 3d, ないし 3b, 3c), 各条件 8 文, 計 32 文からなる 2 つの呈示リストが作成された。なお, 1 セットから 2 文を呈示せざるを得なかったのは, 刺激作成にあたって後述する条件を満たす十分な数の人姓固有名詞が得られなかったためである。さまざまな構造をもつ 112 のフィラー文と共に, 実験刺激がランダムに呈示された。実験参加者は, 現実の話ではなくあくまでも架空の出来事と想定して各文を読むよう教示された。各刺激文の読文後, 刺激文の一部, ないし全体をパラフレーズした質問文を呈示し, yes/no で反応させる理解テストが実施された(e.g., タモリが今井を殴った: no 反応)。yes 反応文, no 反応文は全体で同数呈示された。本実験では, 反応の正誤フィードバックは与えられなかった。実験は平均して 30 分程度で終了した。

固有名詞の識別性評定. 著名人物の固有名詞は, 実験に参加していない 2 名のボランティアからの聞き取りに基づいて, 実験者があらかじめ 16 の名詞を選定した。また, 評定の際のダミー刺激として, 実験参加者には識別できないと想定される 16 の実在人物の固有名詞(国内経済団体等の役職在任者の氏名)を評定対象に含めた。さらに, 人姓固有名詞については学術的調査例がないため, NTT 電話帳等の情報にもとづく民間の資料を参考に, 登録数が上位 200 位程度以内, 漢字 2 字, モーラ数 3-4 の 48 の固有名詞を実験者が選定した。次に, 質問紙法により, 「その名前が指し示す人物をどれくらい具体的に想起できるか」(固有名詞識別性)について, 5 段階で評価させた。評定調査者は, リーディング実験に参加していない 16 名であった。著名人物固有名詞の平均評定値は 4.84 (SE: 0.0855, range: 4.56-4.94), 人姓固有名詞の平均評定値は 2.16 (SE: 0.1007, range: 1.19-3.38)であった。独立変数の条件の値は, 著名人物固有名詞を 0.5, 人姓固有名詞を -0.5 にコード化したうえ, 著名人物固有名詞と人姓固有名詞との間で, 従属変数を順序尺度に指定したロジスティック回帰分析を実施した。その結果, 名詞句のタイプの効果が有意であった( $\beta = 4.4258, z = 19.69, p < .01$ )。この結果は, 著名人物固有名詞の方が人姓固有名詞よりも識別性が高いことを示している<sup>1)</sup>。

分析. 理解テスト成績に対する構造的曖昧性と主語固有名詞識別性の影響を検討するため, 実験参加者および刺激セットについてのランダム切片とランダムスロープをもつロジスティック混合モデル分析が実施された。同様に, RT に対する構造的曖昧性と主語固有名詞識別性の影響を検討するため, 実験参加者および刺激セットについてのランダム切片とランダムスロープをもつ線形混合モデル分析が行われた。なお, 非曖昧条件では, 主語固有名詞識別性が操作される主節主語(R1)が R4 の次位(R1sc)にかき混ぜられているため, 本来ならば R2 から R4 にこの固定因子の影響は及ばない。しかし, 全体の実験計画を統一するため, 便宜的に R2 から R4 についても,  $2 \times 2$  の 2 要因の実験計画に基づいて条件を区分し, 以下の分析を実施した。

RT の線形混合モデル分析には, 構造的曖昧性と主語固有名詞識別性の固定因子に加え, 上述の評定によって得られたそれぞれの固有名詞の識別性(R1, R2, R4, R1sc), ないし天野・笠原・近藤(2008)にもとづく単語親密度(R2, R5 の動詞のみ), および各語句のモーラ数が, 共変量の固定因子として含まれた。



**Table 1** Mean reading times (ms) by each region for the four experimental conditions and Correct-answer rate (%)

| Structural Ambiguity | Distinctiveness of Subject Proper Nouns | R1 (Subject) | R2 (Object) | R3 (Verb 1) | R4 (Head noun) | R1' (Scrambled subject) | R5 (Verb 2) | Correct answer rate |
|----------------------|-----------------------------------------|--------------|-------------|-------------|----------------|-------------------------|-------------|---------------------|
| Ambiguous            | Low                                     | 799 (27)     | 890 (40)    | 819 (38)    | 1338 (76)      |                         | 736 (36)    | 84% (3%)            |
|                      | High                                    | 837 (22)     | 764 (32)    | 700 (29)    | 1080 (60)      |                         | 687 (34)    | 93% (2%)            |
| Unambiguous          | Low                                     |              | 839 (41)    | 724 (31)    | 949 (48)       | 996 (57)                | 712 (34)    | 90% (2%)            |
|                      | High                                    |              | 801 (34)    | 712 (29)    | 963 (49)       | 1054 (53)               | 660 (27)    | 93% (2%)            |

Note. Numbers in parenthesis are 95% confidence intervals.

構造的曖昧性の固定因子は、曖昧条件(3a, 3b)を 0.5 に、非曖昧条件(3c, 3d)を -0.5 にコード化した。また、主語固有名詞識別性の固定因子は、低識別条件(3a, 3c)を 0.5 に、高識別条件(3b, 3d)を -0.5 にコード化した。連続量の 2 つの共変量固定因子は、値の平均が 0 になるように中心化された。各混合モデル解析は、統計分析プログラム R (R Development Core Team, 2010) の lme4 パッケージ (version 0.999999-0, Bates, Maechler, & Bolker, 2012) を用いて実施された。

理解テスト成績に対するロジスティック混合モデル分析はラプラス近似によって、また RT に対する線形混合モデル分析は制限付き最尤推定法 (Restricted Maximum Likelihood Estimation: RMLE) によって、それぞれモデルの適合度が計算された。各分析では、まず実験変数としての 2 つの固定因子とその交互作用、ランダム切片、ランダムスロープ項、さらに RT データについては共変量としての 2 つの固定因子を含めた、最も複雑なモデル<sup>2)</sup>を作成した。この時点で、推定係数 (Estimate) の  $t$  値が 2 未満の共変量があれば、モデルに寄与しないとみなしてモデル式から削除した。次に、後進ステップワイズの様式によって、複雑なモデルとそこからランダムスロープ項を順次削除して作成したより単純なモデルとを比較する尤度比検定 (the likelihood ratio test) を繰り返した (Baayen, Davidson, & Bates, 2008; Jaeger, 2009)。検定の結果が有意でない場合、ないし単純なモデルの対数尤度 (LogLik) が有意に大きい場合は、より単純な方を選択し、さらに検定を続けた。複雑なモデルの対数尤度の方が有意に大きい場合、これを最終モデルに採用した<sup>3)</sup>。

## 結 果

全実験刺激に対する理解テストの成績が 66% 未満の実験参加者と、キー押し操作の不具合等で正常に測定できなかった参加者、計 31 名のデータが統計分析から除外された。従って、以降の混合モデル解析に用いられたのは、72 名のデータであった。理解テストの従属変数は、正答を 0、誤答を 1 のようにコード化した。理解テスト成績の平均正答率と 95% 信頼区間を、Table 1 にあげる。実験参加者および刺激セットについてのランダム切片とランダムスロープをもつロジスティック混合モデル分析を実施したところ、主語固有名詞識別性の固定因子が有意であった。また、交互作用が有意傾向であった (Table 2)。この結果は、識別性の高い著名人物固有名詞を含む文は、識別性の低い人姓固有名詞よりも、理解テストの正答率が高くなることを示している。また、限定的ではあるが構造的曖昧文でこの効果がより大きくなる傾向があることも示された。

RT データの分析にあたって、まず理解テストに不正解であった試行のデータ (10%) が分析から除外された。また、外れ値に対処するため、4000ms 以上の RT、および 200ms 未満の RT データが削除された (Roland, Yun, Koenig, & Mauner, 2012)。これらは全体の 2.5% であった。さらに、各領域・各条件毎に平均値から 2.5SD 以上の値を持つ試行のデータが削除された。これらは全体の 2% であった。その結果、72 名のデータの 85.5% が線形混合モデルの分析に用いられた。Table 1 に、条件別・語句毎の RT の平均値 (ms)、および 95% 信頼区間を示す。各語句の RT データに対して、実験参加者および刺激セットについてのランダム切片とランダムスロープをもつ線形混合モデル分析を実施した。なお、本稿では紙面の都合により、GP 効果の指標となる関係節主要部 (R4) の線形混合モデル分析結果のみを詳述する<sup>4)</sup>。

**Table 2 Parameters of the final logistic mixed regression model of Correct-answer rate**

|                                         | Estimate | Standard Error | z value | p value   |
|-----------------------------------------|----------|----------------|---------|-----------|
| (Intercept)                             | -2.6953  | 0.1804         | -14.94  | $p < .01$ |
| Structural Ambiguity                    | 0.4675   | 0.4232         | 1.11    | $p = .26$ |
| Distinctiveness of Subject Proper Nouns | 0.6712   | 0.1525         | 4.40    | $p < .01$ |
| Interaction                             | 0.5277   | 0.3046         | 1.73    | $p = .08$ |

Note. The final logistic mixed regression model of Correct-answer rate:

(4)  $\text{lmer}(\text{error} \sim \text{f1c} * \text{f2c} + (1 + \text{f1c} | \text{ss}) + (1 + \text{f1c} | \text{set}), \text{family} = \text{binomial})$

R4 領域のデータについては、まず最大のモデル式の時点で、共変量としての2つの固定因子(R4のモーラ数および R4 の固有名詞の識別性評定値)は特に効果を持たないと判断されたため、これらの固定因子がモデル式から削除された。前述の分析手順に従って順次ランダムスロープ項を削除し、最終的に得られたモデル式と各固定因子の推定係数、標準誤差および  $t$  値を Table 3 にあげる。なお、R を用いた線形混合モデル分析では、固定因子の  $t$  の絶対値が2以上であれば、5%水準で効果が有意であるとみなされる (Gelman & Hill, 2007)。ここで、 $p$  値が掲載されないのは、分析プログラム作成者の主張 (Bate, 2006) に基づく。Bates は、 $t$  値自体の有意性を問わない代わりに、マルコフ連鎖モンテカルロ (MCMC) サンプリングシミュレーションによる  $p$  値の推定を推奨している。しかし、ランダムスロープとランダム切片をもつ線形混合モデルに対する MCMC サンプリングシミュレーションが現行の R プログラムに準備されておらず、 $p$  値を求めることができない。このため、暫定的に  $t$  値に基づいて有意性を判断せざるを得ないのが現状である。R4 領域では、構造的曖昧性、主語固有名詞識別性の効果、およびそれらの交互作用が有意であった (Table 3)。Table 1 に明らかなように、R4 領域の曖昧条件の RT は非曖昧条件よりも全体に長く、GP 効果があらわれているといえる。しかし、曖昧条件の低識別条件 (3a) の RTの方が高識別条件 (3b) よりも顕著に RT が長い (+258ms)。一方、統制条件である非曖昧条件 (3c, 3d) では、全体に RT が短く、便宜的に分けられた識別性要因の条件差はわずかである (-14ms)。すなわち、低識別固有名詞を主語にもつ文の GP 効果 ((3a) - (3c) : +389ms) は、高識別固有名詞文の GP 効果量 ((3b) - (3d) : +117ms) よりも顕著に大きいことがわかる。線形混合モデル分析における有意な交互作用は、主語固有名詞識別性に基づく GP 効果の非対称性を反映しているものと考えられる。

## 論 議

本研究では、固有名詞識別性の差によって文を理解する際の記憶負荷が変化し、記憶負荷が低い高識別条件では複数の解釈候補を保持できる可能性が相対的に高まるため、構造的曖昧文で生じる GP 効果量が小さくなるという仮説が検証された。事前評定によって主語固有名詞の識別性が変化させられた2つの構造曖昧文 (e.g., 藤田が / タモリが今井を殴った吉田を誉めた。) を作成し、語句毎の読み時間を測定した。関係節主要部 (e.g., 今井を) でみられる GP 効果量を線形混合モデル分析によって比較したところ、曖昧条件では、主語固有名詞識別性が高い文の GP 量が、低い文の GP 量よりも有意に小さくなった。以上の結果は、

- (i) 固有名詞の識別性が、語の活性化の容易さに影響する。

**Table 3 Parameters of the final linear mixed regression model of RTs across the head noun (R4)**

|                                         | Estimate | Standard Error | t value |
|-----------------------------------------|----------|----------------|---------|
| Intercept                               | 1076.57  | 39.41          | 27.32   |
| Structural Ambiguity                    | 239.09   | 49.89          | 4.79    |
| Distinctiveness of Subject Proper Nouns | 126.29   | 39.42          | 3.20    |
| Interaction                             | 263.68   | 58.84          | 4.48    |

Note. The final linear mixed regression model of RTs:

(5)  $\text{lmer}(\text{r4} \sim \text{f1c} * \text{f2c} + (1 + \text{f1c} * \text{f2c} | \text{ss}) + (1 + \text{f1c} + \text{f2c} | \text{set}))$



- (ii) この活性化の容易さが、文を理解する際の作動記憶に対する負荷の差をもたらす。
- (iii) この負荷の高さに依存する作動記憶容量の差が、構造的曖昧文の理解において複数解釈を保持できるかどうか、言い換えると、曖昧性解消の決定を一時的に遅延できるかどうかを決定する。
- (iv) 最終的に、GP 効果の大きさが変化する。

という説明の妥当性を示すものである。

では、井上(2008)でみられた固有名詞と普通名詞の差に基づく GP 効果量の差も、名詞の識別性の効果といえるのだろうか。文脈がない状況で人物の普通名詞の指示対象を特定できるとは考えにくい。この差はむしろ、固有名詞よりも普通名詞の方が活性が容易である(ないしアクセスしやすい)ことが基礎になっていると考えるほうが妥当であろう。とはいえ、いずれの場合も、作動記憶に対する負荷の高さがその容量を変化させ、複数解釈候補を保持できるかどうかを決定するというメカニズム(Just & Carpenter, 1992)を共有していることにはかわりはない。一方、同じ名詞タイプであっても識別性の違いによって GP 効果が変化したことから、名詞タイプの質的な違いに基づく仮説は棄却される。また、R2, R3 では、R4 と同様の交互作用が得られており(付録 Table 5, 6)、低識別主語固有名詞が最初に現れた場合、R2, R3 で読み手により高い記憶負荷がかかっていると考えられる。そうすると、R4 における主語固有名詞識別性の条件差も、この差が単純に継続されていったものとみなしうるかもしれない。しかし、曖昧条件と非曖昧条件との差は、R2, R3, R4 の順に、低識別条件で +61ms, +95ms, +389ms, 高識別条件で -37ms, -12ms, +117ms であり、R4 の固有名詞識別性に基づく差は、前の領域と比較して格段に大きいことがわかる(Table 3)。すなわち、R2, R3 領域の交互作用には固有名詞識別性に基づく作動記憶負荷の差が反映されているが、R4 の交互作用にはさらに GP 効果の非対称性も含まれていると考えるべきであろう。

本研究の結果を説明しうる他の考えはないのだろうか。例えば、関係節主要部(e.g., 吉田を)における再解釈の段階では、冒頭の主語を既に構成した単文解釈から切り離し、関係節主要部(目的語)とともに新たな解釈を構成しなければならない。その際、よりアクセスしやすい高識別主語(e.g., タモリ)の方が再解釈しやすい、という考え方も可能である。この説明は、本研究の結果だけからは否定できないが、井上(2008)の結果を援用すると、その可能性が低いことがわかる。すなわち、井上(2008)で名詞の種類が操作された位置は目的語(e.g., 社員を vs. 平田を)であり、冒頭の主語ではない。従って、再解釈の際に主語にアクセスしやすいかどうかには帰属させて、(1a) - (1b)間の GP 効果の差を説明することはできない。また、関係節主要部における再解釈の時点で、目的語は既に構成された構造内に残しておくことができるため、もともと再解釈の必要がない。従って、目的語名詞へのアクセスのしやすさが GP 効果の差を説明できるとも考えにくい。

Gordon, Hendrick, & Levin (2002)は、人物の固有名詞ないし普通名詞を記憶する二次課題を課しつつ、文中に固有名詞ないし普通名詞を含む関係節文の読み時間を測定した。すると、二次課題の名詞タイプと文に含まれる名詞タイプが一致(固有-固有ないし普通-普通)するときには、関係節の理解の複雑さの要因とは独立に、文の読み時間が増加するという結果が得られた。この結果は、二次課題で文に現れるものと同一タイプの名詞に注意が向けられていると、作動記憶上での干渉効果が大きくなり、読みの時間や記憶成績に影響すると解釈されている。確かに、井上(2008)の刺激(1a), (1b)をみると、GP 効果が大きい条件(1b)では主語と目的語に同じタイプの固有名詞が使用されていることから、再解釈の際に Gordon et al. (2002)がいうような干渉効果があらわれたと考えることもできる。しかし、本実験で使用されたのは、識別性が異なるといっても同じ固有名詞(e.g., タモリ vs. 藤田)であり、読み手がこれらを異なるタイプの名詞であると判別したかどうかは不明である。また、例えば井上・藏藤・松井・大谷・宮田(2008)の実験には、普通名詞だけからなる構造的曖昧文(6)が含まれていたが、この文の関係節主要部(e.g., 男性を)の平均 RT を算出すると 952ms にすぎず、本実験の識別性が高い曖昧文(3b)の RT (1080ms)よりもさらに短い。この知見を見る限り、名詞のタイプが同じだからといって、必ずしも再解釈時にその干渉効果が現れるとはいえないと考えられる。

- (6) 警官が犯人を捕まえた男性を上司に紹介した。

以上見てきたように、本研究では、固有名詞の識別性によって作動記憶に対する負荷の高さが変化し、それに伴う作動記憶容量の差によって複数解釈候補を保持できるかどうかが決まることを明らかにした。これは、容量の個人差の観点から文理解と作動記憶との相互作用を論じた Just & Carpenter (1992) の考えを補完するものであると同時に、曖昧性の解消・遅延を決定づける要因のひとつを特定することにもつながっている。なお、再解釈の容易さという観点に基づく代替の説明に対しては、先行研究結果を援用した推論にとどまるため、より直接的な検証を試みる必要があるだろう。

## 引用文献

- 天野成昭・笠原要・近藤公久(編著) (2008). NTT データベース日本語の語彙特性第 4 期第 9 巻単語親密度増補 三省堂
- Baayen, R. H., Davidson, D. J., & Bates, D. M. (2008). Mixed-effects modeling with crossed random effects for subjects and items. *Journal of Memory and Language*, **59**, 390–412.
- Bates, D. (2006). lmer: p-values and all that. [Post on a mailing list] <https://stat.ethz.ch/pipermail/r-help/2006-May/094765.html>
- Bates, D., Maechler, M., & Bolker, B. (2012). lme4: Linear mixed-effects models using Eigen and Eigen++. R package version 0.999999-0 <http://cran.r-project.org/web/packages/lme4/index.html>
- Burke, D. M., MacKay, D. G., Worthley, J. S., & Wade, E. (1991). On the tip of the tongue: What causes word finding failures in young and older adults. *Journal of Memory and Language*, **30**, 542–579.
- Burton, A. M., & Bruce, V. W. (1992). I recognize your face but I can't remember your name: A simple explanation? *British Journal of Psychology*, **83**, 45–60.
- Cohen, G. (1990). Why is it difficult to put names to faces? *British Journal of Psychology*, **81**, 287–297.
- Ferreira, F., Bailey, K. G. D., & Ferraro, V. (2002). Good-enough representations in language comprehension. *Current Directions in Psychological Science*, **11**, 11–15.
- Frazier, L., & Rayner, K. (1982). Making and correcting errors during sentence comprehension: Eye movements in the analysis of structurally ambiguous sentences. *Cognitive Psychology*, **14**, 178–210.
- Gelman, A., & Hill, J. (2007). *Data analysis using regression and multilevel/ hierarchical models*. New York: Cambridge University Press.
- Gordon, P. C., Hendrick, R., & Levin, E. H. (2002). Memory-load interference in syntactic processing. *Psychological Science*, **13**, 425–430.
- 井上雅勝(2006). 日本語文の理解における曖昧性の解消と保留. 認知科学, **13**, 353–368.
- 井上雅勝(2008). 名詞句のタイプが日本語文理解のガーデンパス効果に及ぼす影響. 日本心理学会第 72 回大会発表論文集, 983.
- 井上雅勝(2010). 文の意味的曖昧性が構造的曖昧性の解消と保留に及ぼす影響 日本認知心理学会第 8 回大会発表論文集, 81.
- 井上雅勝・藏藤健雄・松井理直・大谷朗・宮田高志(2008). 全称量化表現の文理解過程 – Incremental-DRT モデルの実証的検討 – 日本認知科学会第 25 回大会発表論文集, 330–331.
- Jaeger, T. F. (2009). Random effect: Should I stay or should I go? [Web log post]. <http://hlplab.wordpress.com/2009/05/14/random-effect-structure/> Retrieved 24.07.2011.
- Just, M. A., & Carpenter, P. A. (1992). A capacity theory of comprehension: Individual differences in working memory. *Psychological Review*, **99**, 122–149.
- Just, M. A., Carpenter, P. A., & Woolley, J. D. (1982). Paradigms and processing in reading comprehension. *Journal of Experimental Psychology: General*, **111**, 228–238.
- MacDonald, M. C., Just, M. A., & Carpenter, P. A. (1992). Working memory constraints on the processing of syntactic ambiguity. *Cognitive Psychology*, **24**, 56–98.

- MacDonald, M. C., Pearlmutter, N. J., & Seidenberg, M. S. (1994). The lexical nature of syntactic ambiguity resolution. *Psychological Review*, **101**, 676–703.
- Marcus, M. P. (1980). *A theory of syntactic recognition for natural language*. Cambridge, MA: MIT Press.
- R Development Core Team (2010). R: A Language and environment for statistical computing: R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. ISBN 3-900051-07-0. <http://www.R-project.org>.
- Roland, D., Yun, H., Koenig, J-P., & Mauner, G., (2012). Semantic similarity, predictability, and models of sentence processing. *Cognition*, **122**, 267-279.
- 坂本勉・吉長美佳 (2006). 日本語における「ガ格連続文」の処理について 九州大学言語学論集, **27**, 1-36.
- Stanhope, N., & Cohen, G. (1993). Retrieval of proper names: Testing the models. *British Journal of Psychology*, **84**, 51-65.

## 注

- 1) Rにおいて、例えば‘rating’という従属変数を5段階の順序尺度に指定するには、該当するデータ列に対し次の関数による処理を施す(ordered (data = rating, levels = 1 : 5))。また、ここでのロジスティック回帰分析式は(7)の通りである。  
(7) lrm (rating ~ propernamec, x = T, y = T)  
(lrm: ロジスティック回帰モデル分析の関数。以下は本実験固有のデータ列名を示す。rating: 従属変数としての固有名詞識別性評定値, propernamec: 中心化された固有名詞の種類の要因)
- 2) 次式は、本実験の正答率(8a)およびR4のRT(8b)に対するlmer関数の仕様に基づく混合モデル解析の最大の式の例である。(8a)はロジスティック混合モデル分析、(8b)は線形混合モデル分析である。  
(8a) lmer (error ~ flc \* f2c + (1 + flc \* f2c | ss) + (1 + flc \* f2c | set), family = binomial)  
(8b) lmer (r4lg ~ flc \* f2c + (1 + flc \* f2c | ss) + (1 + flc \* f2c | set) + fam4c + mora4c)  
(lmer: 混合モデル解析を実行する関数。error: 誤答1, 正答0にコード化された正答率データセット名。R4: R4領域のRTデータセット名。flc: 構造的曖昧性の固定因子名。f2c: 主語固有名詞識別性の固定因子名。ss: 実験参加者番号のランダム因子名。set: 刺激セットのランダム因子名。fam4c: R4領域の固有名詞識別性の共変量名。mora4c: R4のモーラ数の共変量名。family = binomial: 従属変数が名義尺度データであることの指定。各固定因子末尾のc: -0.5および0.5にコード化、ないし中心化した変数であることを示す本実験固有の任意の文字。なお、lmer関数の書式で“flc \* f2c”は、flcおよびf2cの主効果と、flcとf2c間の交互作用を表す。交互作用項を含まない場合は“flc + f2c”のように記述する。(1 + \* | \*)の形式の項は、ランダム因子項を示す。)
- 3) 本実験のデータについては、構造的曖昧性と主語固有名詞識別性による2 x 2の2要因被験者内分散分析も実施された。RTデータについては、線形混合モデル分析と同様の分析結果パターンが得られた。一方、正答率については、分散分析では交互作用が有意であったが、ロジスティック混合モデル分析では有意傾向にとどまった。
- 4) R4以外の領域の線形混合モデル分析の結果については、付録Table 4-8を参照。なお、R2とR3では、R4と同様のRTパターンが得られており、交互作用が有意であった(付録Table 5, 6)。すなわち、曖昧条件で主語固有名詞が低識別条件の場合、他の3条件よりもRTが長くなる。これは、低識別主語固有名詞が最初に現れた場合、R2, R3で読み手に高い記憶負荷がかけられていることを示すと考えられる。

## 付録 (実験刺激および R4 領域以外の線形混合モデル分析結果)

1. 加藤が/ビートたけしが宮田を止めた武田を呼び出した。(2.50 / 4.94)
2. 清水が/長澤まさみが荒井を雇った大塚を笑った。(2.25 / 4.63)
3. 藤田が/タモリが今井を殴った吉田を誉めた。(1.88 / 4.88)
4. 原田が/松本人志が山田を笑った久保を叱った。(2.38 / 4.69)
5. 森田が/イチローが松井を目指した岩崎を馬鹿にした。(2.25 / 4.88)

6. 柴田が / 鳩山前首相が 上田を暗殺した桜井をかくまった. (2.89 / 4.88)
7. 工藤が / 志村けんが 石田を縛った木下を逃がした. (2.25 / 4.88)
8. 坂井が / 所ジョージが 浅野を雇った菊池を問いただした. (1.19 / 4.94)
9. 大野が / 小沢一郎が 池田を捕まえた松尾を誉めた. (3.00 / 4.75)
10. 河野が / えなりかずきが 中野をいじめた野村を殴った. (1.75 / 4.94)
11. 上野が / 岡村隆史が 田中を助けた佐野を応援した. (2.38 / 4.57)
12. 小山が / 菅首相が 浜田を守った杉本を表彰した. (1.95 / 4.94)
13. 平野が / 明石家さんまが 島田を探した水野を呼んだ. (1.75 / 4.94)
14. 渡辺が / みのもんたが 武田をだました吉川を助けた. (2.38 / 4.88)
15. 山本が / 小泉元首相が 平井を殺した山内を非難した. (1.94 / 4.94)
16. 小林が / 上戸彩が 平田を叱った安田を呼びつけた. (1.88 / 4.88) ※数値は主語固有名詞の識別性評定値を示す.

**Table 4** Parameters of the final linear mixed regression model of RTs across the subject (R1)

|                 | Estimate | Standard Error | <i>t</i> value |
|-----------------|----------|----------------|----------------|
| Intercept       | 818.77   | 20.35          | 40.23          |
| Distinctiveness | 69.71    | 29.27          | 2.38           |
| Mora1           | 35.26    | 8.49           | 4.15           |

Note. The final linear mixed regression model of RTs:  
 (9)  $\text{lmer}(r1 \sim f2c + (1 | ss) + (1 | set) + \text{mora1c})$

**Table 5** Parameters of the final linear mixed regression model of RTs across the object (R2)

|                 | Estimate | Standard Error | <i>t</i> value |
|-----------------|----------|----------------|----------------|
| Intercept       | 825.11   | 24.56          | 33.59          |
| Ambiguity       | 8.75     | 17.17          | 0.51           |
| Distinctiveness | 85.69    | 17.13          | 5.00           |
| Interaction     | 91.85    | 34.42          | 2.67           |

Note. The final linear mixed regression model of RTs:  
 (10)  $\text{lmer}(r2 \sim f1c * f2c + (1 | ss) + (1 | set))$

**Table 6** Parameters of the final linear mixed regression model of RTs across the verb1 (R3)

|                 | Estimate | Standard Error | <i>t</i> value |
|-----------------|----------|----------------|----------------|
| Intercept       | 739.24   | 19.04          | 38.83          |
| Ambiguity       | 39.03    | 23.19          | 1.68           |
| Distinctiveness | 64.73    | 18.88          | 3.43           |
| Mora3           | 42.82    | 15.67          | 2.73           |
| Interaction     | 106.56   | 45.57          | 2.34           |

Note. The final linear mixed regression model of RTs:  
 (11)  $\text{lmer}(r3 \sim f1c * f2c + (1 + f1c * f2c | ss) + (1 + f1c * f2c | set) + \text{mora3c})$

**Table 7** Parameters of the final linear mixed regression model of RTs across the scrambled subject (R1sc)

|                 | Estimate | Standard Error | <i>t</i> value |
|-----------------|----------|----------------|----------------|
| Intercept       | 1025.51  | 38.84          | 26.40          |
| Distinctiveness | 67.44    | 93.09          | 0.72           |
| Mora1sc         | 42.78    | 25.78          | 1.66           |

Note. The final linear mixed regression model of RTs:  
 (12)  $\text{lmer}(r1sc \sim f2c + (1 + f2c | ss) + (1 + f2c | set) + \text{mora1sc})$

**Table 8** Parameters of the final linear mixed regression model of RTs across the head noun (R5)

|                 | Estimate | Standard Error | <i>t</i> value |
|-----------------|----------|----------------|----------------|
| Intercept       | 699.54   | 18.22          | 38.22          |
| Ambiguity       | 19.75    | 15.83          | 1.25           |
| Distinctiveness | 48.58    | 15.81          | 3.07           |
| Mora5           | 30.45    | 11.17          | 2.72           |
| Interaction     | -9.77    | 31.73          | -0.31          |

Note. The final linear mixed regression model of RTs:  
 (13)  $\text{lmer}(r5 \sim f1c * f2c + (1 | ss) + (1 | set) + \text{mora5c})$



## 「精神保健福祉」をめぐる概念・理論研究数の推移

大 西 次 郎  
(武庫川女子大学文学部 心理・社会福祉学科)

### Shifts in Concept and the Number of Studies on Psychiatric Social Work Practices

Jiro Ohnishi

*Department of Psychology and Social Welfare, School of Letters  
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

#### Abstract

This study indicated that the number of studies on psychiatric social work practices has not necessarily been increased compared to those of social welfare since psychiatric social workers became nationally certified.

Psychiatric social work is a field of interdisciplinary studies. This interdisciplinarity has an advantage in solving problems proactively through multidisciplinary cooperation; however, this also has the disadvantage of having to gather them in one place when performing academic conceptualization and theorization of practices developed in this field.

Thus, the result showed in the beginning does not mean that studies on psychiatric social work practices have not been advanced, but rather that outcomes of psychiatric social studies have dispersed to different fields of study, and have not been systematically accumulated.

The lives of people with mental illness can be improved, if we can academically integrate psychiatric social work practices, and effectively disseminate knowledge and skills. To achieve that, much attention must be paid to improving the quality of each study as well as accumulating them.

#### 1. 問題の所在

「精神保健福祉」という用語の歴史は20年に満たず、意味と語法について6つの類型に分けられる<sup>1)</sup>など、その概念に必ずしも統一を見ていない。他方、この語を資格名称とする精神保健福祉士は、もともと精神科ソーシャルワーカーとして、精神医療の中で福祉的な関わりの必要性から1948年に国立国府台病院へ最初に配置された歴史を持つ。当事、医療機関内で国家資格のない職種ということもあり身分は不安定だった<sup>2)</sup>が、1996年に日本精神病院協会をはじめとした関係団体が参画して資格化の検討が行われ、1997年に精神保健福祉士法が制定されて、精神保健福祉士が誕生したという経緯<sup>2)</sup>がある。さらに、精神科ソーシャルワーカーの職能団体である日本精神保健福祉士協会(以下、PSW協会)は、日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会として、1964年に設立趣意書で「学問の体系を社会福祉学に置き、医療チームの一員として精神障害者に対する医学的診断と治療に協力…する専門職」<sup>3)</sup>を謳い発足して以来、50年近くにわたる組織上の実践史を有する。

そこで、本稿では国家資格名称の精神保健福祉士として衆知ではあるが、比較的歴史の浅い用語である「精神保健福祉」が、少なくとも半世紀に及ぶ精神科ソーシャルワーク実践を記録し、体系化する鍵概念として成立しているかにつき検討を試みる。その手段として、刊行された学術論文のキーワードを手



がかりに、被検索数の年次推移を分析することで、精神・保健・福祉という3つの名詞句を並べた連語である精神保健福祉と、精神保健福祉士という呼称のそれぞれが有する特質を明らかにする。

## 2. 対象と方法

ネットワーク技術の発達、情報インフラの整備にともない、電子的に閲覧可能な学術論文の数が増大した。これにより必要とする文献情報をすみやかに入手できることから、本稿ではインターネット検索を通して、特定のキーワードより抽出される学術論文数の年次推移を調査することとした。利用システムとして、わが国の領域横断的な学術論文情報を幅広く網羅するという理由から、国立情報学研究所論文情報ナビゲータ(以下、CiNii)を採択した。

まずキーワードを「精神保健福祉」とし、これに類似の表象をまとめて分類する“概念”，ないし表面上の相違を超え統合する“理論”をそれぞれ加えて、「(精神保健福祉 and 概念) or (精神保健福祉 and 理論)」の検索式へあてはめた。これに基づき、1987年から2010年までに収集された学術論文数を単年ごとに記録した。あらかじめ「精神保健福祉」に代えて「社会福祉」で同様の操作を行い、一定数が継続して得られることを確認した上で、両者を比較した。また、各年毎の総検索対象数の移り変わりを推し量る目的で、「研究」とだけ検索語指定して得られた件数を合わせて記録した。なお、誌名の一部ないし全部としての「精神保健福祉」「社会福祉」のみで収集された文献は、集計件数から除外した。以上の作業はすべて2012年5月25日に行った。

## 3. 結 果

CiNii から「(精神保健福祉 and 概念) or (精神保健福祉 and 理論)」ならびに「(社会福祉 and 概念) or (社会福祉 and 理論)」の検索語により得られた検索数(A)を表1へ示す。A値は、各年の総検索対象数の均一さが保証されていないため、そのまま年毎の値を比べることができない。また、CiNiiは何らかの検索語を指定しなければ処理を開始しないため、総検索対象数を直接知ることができない。そこで、A値の経年変化を比較しやすくするため、「研究」の検索語により得られた検索数(B)で除し、その比(A/B)の24年間の推移を1年毎に折れ線グラフで表示した(精神保健福祉：図1，社会福祉：図2)。

図1と図2を比較すると、「(精神保健福祉 and 概念) or (精神保健福祉 and 理論)」は、精神保健福祉士法が制定された1997年を過ぎて実数が現れるものの、「(社会福祉 and 概念) or (社会福祉 and 理論)」に対し、検索数の比は20分の1程度、ないしそれ以下で推移していた。

なお、「(精神保健福祉 and 概念) or (精神保健福祉 and 理論)」という検索語の、「精神保健福祉」を「精神障害者福祉」へ置き換え、「(精神障害者福祉 and 概念) or (精神障害者福祉 and 理論)」として再操作を行っても検索数は増加しなかった(年次を限定しない総検索数上は、むしろ減少した)。

## 4. 考 察

本稿において用いた比(A/B)は、あくまでキーワードの付し方に代表される、利用システムの特性に左右される値であって、その数値単独では特定の意味をなさない。他方、同一システム内の経年変化をうかがうため、2つの検索語間を参照する目的には用いることができると考える。もちろん、図1及び図2で得られた推移だけをもって、精神保健福祉関連の学術論文が、社会福祉関連のそれより直ちに少ないと断じることへは慎重でなくてはならない。文献・資料検索を十分に尽くすことは必ずしも容易でないからである。例えば、インターネット検索は情報の更新に秀でるものの、やや時間が経過した論文や、若干キーワードから外れた同趣旨の文献を見逃してしまう問題点が予想できる。しかしそれらの限界の一方で、精神保健福祉士法が制定され、1999年には第1回精神保健福祉士国家試験の実施を経て「精神保健福祉」なる語への認知が一般化していった後も、2010年に至るまで比(A/B)において、増減はあ

表1 「(精神保健福祉 and 理論) or (精神保健福祉 and 概念)」ないし「(社会福祉 and 理論) or (社会福祉 and 概念)」を検索語とした検索数

| 年    | 「(精神保健福祉 and 理論) or (精神保健福祉 and 概念)」 |                    |                            | 「(社会福祉 and 理論) or (社会福祉 and 概念)」 |                    |                            |
|------|--------------------------------------|--------------------|----------------------------|----------------------------------|--------------------|----------------------------|
|      | 検索数<br>(A)                           | 「研究」<br>検索数<br>(B) | 比<br>(A/B, $\times 10^3$ ) | 検索数<br>(A)                       | 「研究」<br>検索数<br>(B) | 比<br>(A/B, $\times 10^3$ ) |
| 1987 | 0                                    | 58,711             | 0                          | 6                                | 58,711             | 0.103                      |
| 1988 | 0                                    | 60,688             | 0                          | 19                               | 60,688             | 0.313                      |
| 1989 | 0                                    | 60,027             | 0                          | 7                                | 60,027             | 0.117                      |
| 1990 | 0                                    | 61,989             | 0                          | 12                               | 61,989             | 0.194                      |
| 1991 | 0                                    | 65,858             | 0                          | 14                               | 65,858             | 0.213                      |
| 1992 | 0                                    | 68,373             | 0                          | 18                               | 68,373             | 0.263                      |
| 1993 | 0                                    | 73,595             | 0                          | 9                                | 73,595             | 0.122                      |
| 1994 | 0                                    | 81,458             | 0                          | 20                               | 81,458             | 0.246                      |
| 1995 | 0                                    | 104,556            | 0                          | 20                               | 104,556            | 0.191                      |
| 1996 | 0                                    | 132,885            | 0                          | 32                               | 132,885            | 0.241                      |
| 1997 | 0                                    | 152,531            | 0                          | 26                               | 152,531            | 0.170                      |
| 1998 | 2                                    | 162,152            | 0.0123                     | 36                               | 162,152            | 0.222                      |
| 1999 | 2                                    | 176,234            | 0.0113                     | 39                               | 176,234            | 0.221                      |
| 2000 | 3                                    | 189,429            | 0.0158                     | 66                               | 189,429            | 0.348                      |
| 2001 | 0                                    | 189,328            | 0                          | 65                               | 189,328            | 0.343                      |
| 2002 | 1                                    | 190,204            | 0.0053                     | 59                               | 190,204            | 0.310                      |
| 2003 | 2                                    | 193,637            | 0.0103                     | 68                               | 193,637            | 0.351                      |
| 2004 | 3                                    | 195,364            | 0.0154                     | 58                               | 195,364            | 0.297                      |
| 2005 | 0                                    | 196,410            | 0                          | 67                               | 196,410            | 0.341                      |
| 2006 | 2                                    | 198,761            | 0.0101                     | 77                               | 198,761            | 0.387                      |
| 2007 | 3                                    | 194,932            | 0.0154                     | 104                              | 194,932            | 0.534                      |
| 2008 | 1                                    | 196,679            | 0.0051                     | 94                               | 196,679            | 0.478                      |
| 2009 | 4                                    | 187,633            | 0.0213                     | 74                               | 187,633            | 0.394                      |
| 2010 | 5                                    | 180,793            | 0.0277                     | 48                               | 180,793            | 0.265                      |

(2012年5月25日調べ)

るものの「精神保健福祉」対「社会福祉」で1対20に設定した縦軸の範囲に「精神保健福祉」の折れ線が納まり続けていることもまた示されている。

さて、精神科ソーシャルワーク実践は、PSW協会設立の1964年当時すでに村松<sup>4)</sup>が精神科医の立場から「Psychiatric Social Workの対象は…いわば精神衛生のすべての領域にわたるので、『求められる』ものの範囲も広く、『求められる』水準もますます高くなりましょう」と述べているように、国立国府台病院へ配置された1948年以降、日本の各地で医療機関を中心として精神科ソーシャルワーカーが採用<sup>2)</sup>されていくことでその野が広がったと思われる。精神保健福祉士法施行の前後においてもまた、「医療と保健福祉が独立に展開可能という過剰な思い入れ」<sup>5)</sup>との批判や、「精神科ソーシャルワーカーは社会福祉の理念に基づいて…対立しても医療独善の過誤を正す」<sup>6)</sup>との使命感といった、医療に対する距離感の難しさを示す表現の中で揺れながら、やはり地道な活動の足跡を残していた。

すなわち前述の検索結果は、精神科ソーシャルワーク実践それ自体が継続的に乏しいことを導くのではなく、現状報告にとどまらない、精神障害者を対象とした援助関係を討議し、理論化まで深めていく場や機会が十分でなかった<sup>7)</sup>ことを反映しているものとまず考えられる。ただし、近年は日本精神障害者リハビリテーション学会や日本精神衛生学会、日本産業精神保健学会などで、精神科ソーシャルワーカーによる堅実な研究活動も見られるようになった。それが図1へ必ずしも反映されていないことは、インターネット文献検索システムを援用した方法論の限界は無視できないにせよ、その背景を意識してみる必要があるのではなかろうか。

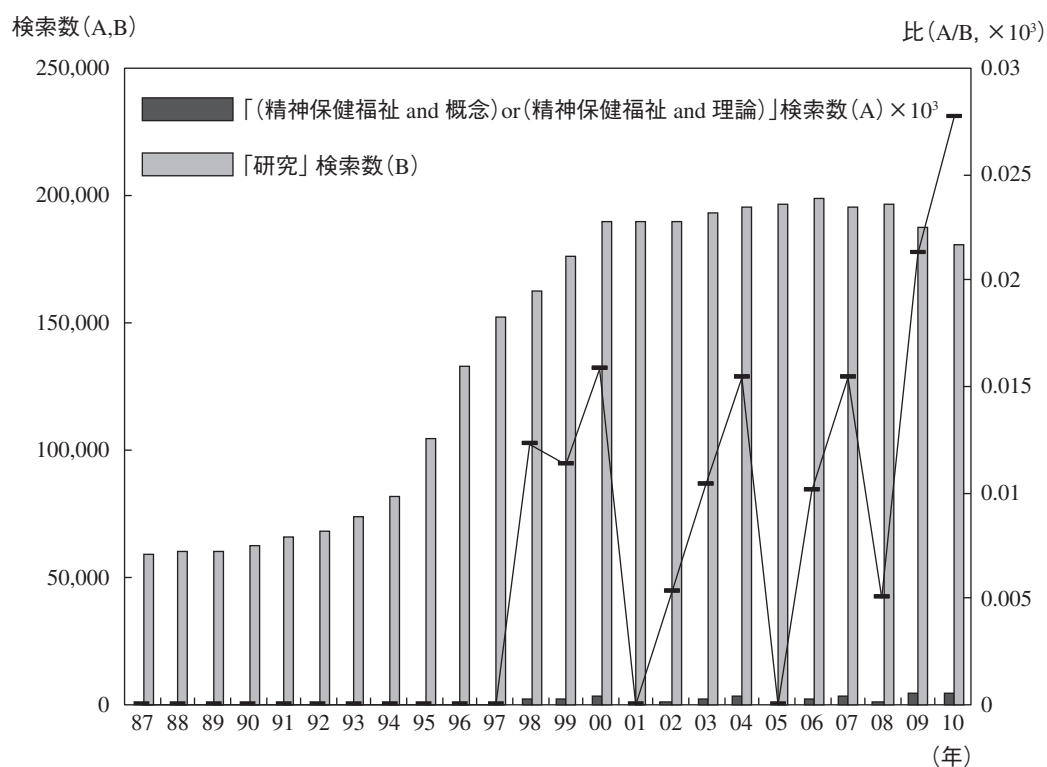


図1 「(精神保健福祉 and 概念) or (精神保健福祉 and 理論)」と「研究」検索数の経年変化

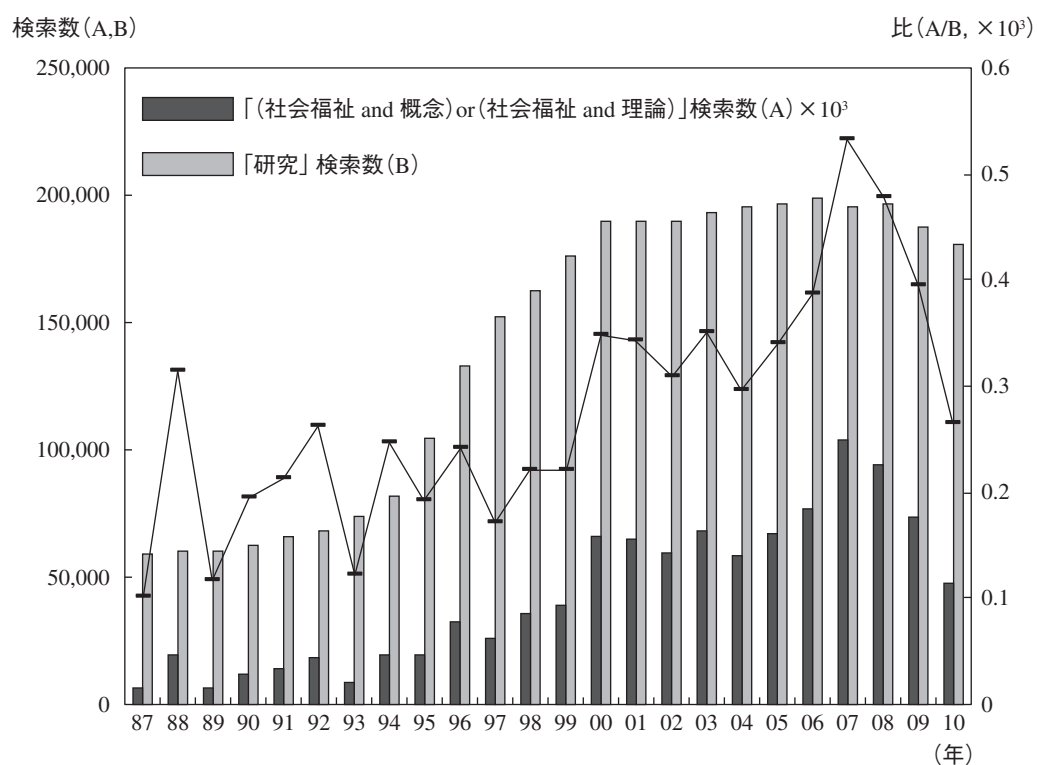


図2 「(社会福祉 and 概念) or (社会福祉 and 理論)」と「研究」検索数の経年変化

例えば、学術論文数が相対的に少ない/多いというより、精神保健福祉士が資格名称としては確立していても、「精神保健福祉」という語のもとに精神科ソーシャルワーク実践から導かれた知見を蓄積しようとする動きが必ずしも強くないとの解釈も提起し得る。つまり、精神・保健・福祉という羅列がその

まますように、社会福祉をはじめ医療、看護、作業療法、心理など多様な分野へと広がる学際の中で、研究成果を集約する難しさ<sup>8)</sup>が示されているという考えである。

もともと 1980 年代まで、精神科ソーシャルワークと、他の医療などとの関係を具体的に表現する文言としては、「精神保健医療福祉」や「精神保健と福祉」といった用語として不確定な連語や句の並列<sup>1)</sup>が、その都度特定の表現に収斂しないまま用いられてきた。その歴史的な延長線上に「精神保健福祉」があると捉えるならば、精神科ソーシャルワーカーにとって、「精神保健福祉」という語が自らの固有性を具現し、その旗のもとへ実践を学術的に統合させる鍵概念とは即座に受け入れられなくても不思議でない。隣接領域(医療など)との結びつきを示す並列的な表記であるがゆえに、固有性<sup>注</sup>とは相容れないと見なされ得るからである。

ならば、精神科ソーシャルワーク分野の実践を理論化しようとする試みに応じた、別のいくつかの語が存在するはずである。これは検索語で、「精神保健福祉」に代えて「精神障害者福祉」として再操作を行っても検索数は増えないことより、単に援助関係や対象分野を指す表現の新旧から「精神保健福祉」の検索数が少なくなっているとは考えにくい状況からもうなずける。つまり鍵概念は、並列表記ではないにせよ、やはり上記の学際性という精神保健福祉が内包する特質に沿いながら姿を現すと考えるのである。

例えば、複数職種が協働する精神障害者リハビリテーションという明確な行為の体系がある。ここはもともと「精神科医療とりわけリハビリテーション…の領域では、医療は医療専門職の独壇場であるという様相は今や全く消失しており、ソーシャルワークの果たす役割の重要性が強調されて」<sup>10)</sup>いた分野であった。そして、1995 年に発足した先の日本精神障害者リハビリテーション学会は、精神科ソーシャルワーカーがその中で重要な役割を担いつつ、福祉・保健・医療等の諸サービスを実践場面で統合させ、かつ学術的な成果へと結集させる実直な歩みを見せている。すなわち、精神障害者リハビリテーションは、精神科ソーシャルワーク実践をまとめる鍵概念の一つを構成する可能性がある。

さらに言えば、学際の中で研究成果を希求する動きとは別に、精神科ソーシャルワーカー相互の研修や社会へ向けた啓発ないし意見具申といった、一致団結した専門職集団としての活動の場を、かたや PSW 協会は提供していると捉えることができる。実際に PSW 協会は、日本精神保健福祉士学会を開催し、同学会は若手の卒後教育やスーパービジョン、中堅者以上に対する生涯教育、市民に訴える公開講座などを扱う場として機能している<sup>11)</sup>からである。すなわち、「精神保健福祉」の語は、精神科ソーシャルワークという実践行為を学術的に理論化・統合するキーワードとしての側面より、精神科ソーシャルワーカーという一つの職種の国家資格化名称として、精神科ソーシャルワーカーのアンデンティティを表象する側面が現況では勝っているのではないだろうか。

以上のように考えてみると、「精神保健福祉」という語の二面性が立ち現れる。精神保健福祉士は、「精神保健・医療と社会福祉をつなぐ…保健・医療・福祉等の諸サービスを実践場面で統合させる先鞭役」<sup>12)</sup>であるということに異存はない。つまり、もともと並列的な架橋や橋わたし行為を意味する、少なくとも人を指す用途には用いられなかった「精神保健福祉」という連語が、社会福祉学を基盤とする精神科ソーシャルワーカーという歴史的専門職の、国家資格を背景にした呼称へ採用されたという“ずれ”から生まれる二面性だ。もちろん、精神科ソーシャルワーカーと精神保健福祉士はそのまま重ねられるものでなく、国家資格化は一般への認知と職域の拡大を導くものの、制度の範疇で支援を考えるという社会問題の相対的軽視と、養成カリキュラムの画一化をもたらす<sup>13)</sup>ことは、社会福祉士の場合と大同小異であろう。

それらを踏まえてなお、「精神保健福祉」という羅列的な表現の末尾に「士」が加わったことで、並列のバランスが傾いた感は否めない。ここに、精神科ソーシャルワーカーにとっても(歴史的に架橋を現す中立表現であった流れを汲むという点で)、そうでない者にとっても(国家資格化以降は一職種の独占名称になったという点で)、学際の中で認めた知見を「精神保健福祉」の旗のもとへ集結させるに躊躇を覚えさせる特質が現出したのではないか。

筆者は、精神科ソーシャルワーク分野の学究が深まることで、何よりも精神障害者がその恩恵に浴することを期してやまない。とすれば、より円滑に実践経験を集約し、また理論構築を図る場が統合され



る状況こそ望ましい。もし、「精神保健福祉」の語に筆者の懸念するような二面性があり、知識や技術の蓄積あるいは効率的な継承を妨げかねない内実があるのなら、これを乗り越える英知の結集が待たれるところであり、筆者ももちろん、非力を理由にその責を免れるものではない。

## 5. 結 語

「精神保健福祉」をめぐる概念・理論研究数が、「社会福祉」領域に比べ、精神保健福祉士の国家資格化以降も必ずしも増えていない可能性があることを示した。この結果は、精神保健福祉士の名称からなる国家資格化より以前の、歴史的実践行為に相当する精神科ソーシャルワークが、その学際的な特質により、多職種の協働を通して積極的な問題解決を可能としてきた一方、学術的な概念化・理論化を目指す時、集約する場が定まらない難しさを併せ持つことの反映と考えた。

すなわち、概念・理論研究数の相対的低値があるとすれば、それは精神科ソーシャルワーク実践に関する研究が進んでいないというより、研究成果が各職種の専門領域へ分散し、系統的に蓄積されていないことを示唆する。精神科ソーシャルワーク実践を学術面で円滑に統合することにより、新しい知識や技術がすみやかに広まれば、なにより精神障害者の個人的そして社会的な暮らしを改善させるだろう。そのためには個々の研究の質を向上させると同時に、いかにそれらを集約するかへ関心が払われるべきである。

研究の遂行にあたり、日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究C (課題番号：24590645、研究代表者：大西次郎)からの助成を受けた。記して深謝する。なお、本稿の概要は日本精神保健福祉学会 第1回学術研究集会(2012年6月：札幌)にて発表した。

## 注

固有性(独自性)については、例えば社会福祉学においても「学問領域としての固有性を有するのか、学としての固有性は認めなくても、社会福祉という政策と実践を含めた学問分野としての固有性(あるいは相対的独自性)を有するのか」「ソーシャルワークとソーシャルポリシーのいずれを社会福祉の本質と捉えるかで政策論と技術論の対立」といった<sup>9)</sup>長期にわたる議論がある。精神科ソーシャルワーカーが、設立趣意書以来の「学問の体系を社会福祉学に置く」ソーシャルワーカーであるならば、同様にこれらの論点から離れられない(別稿<sup>8)</sup>で論じた)ばかりか、当初から「医療チームの一員」として存在することによって、いっそう固有性(独自性)の～暗黙的に既知とすることへの疑義を経た～再認識がなされなくてはならないはずである。

しかし、これらの内容が十分深められないまま、国家資格化より時を経て、既成事実(精神科ソーシャルワーカーというより精神保健福祉士としての)が援助者としての存在証明に代えられているように見えなくもない態様へは、注意を払うべきである。

## 引用文献

- 1) 堀口久五郎：「精神保健福祉」の概念とその課題 ―用語の定着過程の検証―。社会福祉学，44 (2) ; 3-13, 2003.
- 2) 竹中秀彦：精神保健福祉士誕生から10年。(特集：精神保健福祉士誕生から10年)日本精神科病院協会雑誌，28 (9) ; 707-712, 2009.
- 3) 高橋 一：わが国におけるPSWの歴史。(日本精神保健福祉士協会・編)第3版 これからの精神保健福祉，へるす出版，東京，pp.33-40, 2003.
- 4) 村松常雄：驚くべき問題の多面性 ―精神医学の立場から―。(特集：医療社会事業に求めるもの)医療と福祉，1; 7-10, 1964.



- 5) 岡崎伸郎：精神分裂病(統合失調症)患者にとって今必要なのは，医療と保健福祉の溝が埋まることである．(シンポジウム A：21 世紀の分裂病治療：その社会精神医学的実践) 日本社会精神医学会雑誌，11 (2)；261-263, 2002.
- 6) 秋元波留夫：医療・保健と福祉のあるべき関係．(秋元波留夫，調一興，藤井克徳・編) 精神障害者のリハビリテーションと福祉，中央法規出版，東京，pp.174-189, 1999.
- 7) 野中 猛：精神障害者リハビリテーションの未来 ―実践と研究の共通羅針盤づくりを目指して―．(座談会：安西信雄，池淵恵美，上野容子，荻原喜茂，野中 猛，松為信雄，田中英樹) 精神障害とリハビリテーション，1 (1)；6-18, 1997.
- 8) 大西次郎：精神保健福祉学の構築 ―ソーシャルワークに立脚する実践科学として―．精神保健福祉学，1; (印刷中)，2013.
- 9) 岩崎晋也：社会福祉理論・思想部門．(2007 年度 学界回顧と展望) 社会福祉学，49 (3)；122-134, 2008.
- 10) 堀越由紀子：保健医療と福祉のネットワーク ―「医療ソーシャルワーク」が経験してきたこと―．(特集：福祉・保健・医療のネットワークとソーシャルワーク) ソーシャルワーク研究，25 (1)；17-27, 1999.
- 11) 大西次郎：「見える」「分かる」日本精神保健福祉学会 ―新たな精神保健福祉学の構築―．精神科治療学，27 (2)；261-265, 2012.
- 12) 石川到覚：専門職性の保持と深化を求めて．(特集：精神保健福祉士の専門性と今後の課題) 精神保健福祉，30 (1)；9-12, 1999.
- 13) 岩崎晋也：序論．(岩田正美・監，岩崎晋也・編著) リーディングス日本の社会福祉 1，社会福祉とはなにか ―理論と展開―，日本図書センター，東京，pp.3-40, 2011.

## 自閉症エコラリアと健常児の音声模倣における自動性と意図 —ジャクソニズムの立場からの考察—

萱 村 俊 哉  
(武庫川女子大学短期大学部人間関係学科)

### Automatism versus intention on the autism echolalia and vocal imitations in normal children:

### A consideration from Jacksonistic point of view

Toshiya Kayamura

*Department of Human Relations,  
Mukogawa Women's University Junior College Division, Nishinomiya 663-8558, Japan*

#### Abstract

The significance of the autism echolalia and vocal imitations in 1-year-old normal children is considered from Jacksonistic point of view. In this study, through the observations of the replies or utterances in 1-year-old normal children, it was revealed that the automatic vocal imitations frequently existed immediately before the appearance of the intentional replies or utterances in them. Such automatic responses were thought to play a fixed role in language acquisition and development of communication in 1-year-old normal children. In contrast, the autism echolalia, one kind of the automatic response, in many cases, is not followed by the intentional responses possibly due to a difficulty in the access to the intentional responses or the immaturity of the intentional processes. Recently the autism echolalia seems to have some communicational functions. On the basis of the Jacksonism, such communicational functions of the autism echolalia are assumed to be the products of the lower order automatic responses (echolalia) having accomplished some developmental changes to communicate with other persons.

#### はじめに

筆者らは2人の健常乳幼児の心身の発達と生活について時系列的な観察研究を行っており、その観察において、1歳代に音声模倣が頻繁にみられる時期があることを発見した(萱村・萱村, 2012a, 2012b)。この音声模倣自体は自動的な(automatic)反応であるが、多くの場合、その直後に意図的な(intentional)反応を伴っていた。このことから筆者らは、この時期の音声模倣には言語獲得やコミュニケーションの発達において一定の役割を果たしているとの考えに至った(萱村・萱村, 2012a, 2012b)。一方、自閉症でみられる反響言語、すなわち自閉症エコラリア(autism echolalia)は従来、無意味な反応と考えられてきたが、最近では、それは決して無意味な反応ではなく、そこにコミュニケーション機能があると認識される傾向にある(たとえば, Prizant, 1983)。このように自閉症エコラリアと健常児の音声模倣とは、無意味な反応ではなく、コミュニケーション機能が想定される点において類似性があるといえる。そこで本稿では、健常児の発達の一時期にみられる音声模倣の意義について言及するとともに、このような音声模倣と自閉症エコラリアとの機能面での異同に関し、神経心理学の中心的概念であるジャクソニズム(Jacksonism)を拠り所に検討することを試みる。

ジャクソニズムは神経学者ジャクソン(Jackson, J. H.)による「神経機能の進化と解体の法則」に基づく思想(秋元, 2000)である。これはすなわち神経系を階層的に捉え、上部に位置する高次の神経系はより不安定で、より意図的であり、下部に位置する低次の神経系はより安定的で、より自動的であること(山鳥, 1985)、そして神経系が破壊される場合は、上部の、より不安定、より意図的なものが壊れやすく、下部にある、より安定、より自動的なものが残りやすいとする考え方である(山鳥, 1985)。ジャクソニズムによると、たとえば言語には知的言語(話し手の意図の伝達)と情動言語(話し手の感情の表現)があり、前者の方が後者よりも階層的に上位にあり、壊れやすいと考える。したがってジャクソニズムの立場からみると、失語症患者では、知的言語と情動言語の間に解離が起こり、自分の感情を表現できても(たとえば、退屈なときに、あ〜あなどの発声をするなど)、意図を含んだ話ができなくなると解釈するのである。

本稿では、健常な1歳代の子どもの言語において、ジャクソニズムが説くような自動性(automatism)と意図(intention)の解離(dissociation)と連関(association)があり、このことが当該年齢における言語獲得やコミュニケーション発達に一定の役割を果たしていることを指摘したい。それに続き、自閉症では、健常児の音声模倣のような自動的な反応から意図的な反応へのアクセスが困難か、あるいは意図的な過程が未熟であるため、現象的には自動的な反応(つまりエコラリア)に留まるものの、エコラリア自体は発達の变化を遂げ、コミュニケーション機能を持つようになるのではないかという見解を紹介する。

## 健常児の音声模倣(遅延模倣と即時模倣)の観察とその解釈

筆者は共同研究者とともに、生後約1ヶ月から、2名の乳幼児(To 児, Ta 児、きょうだいでともに男児)の運動、言語、睡眠、食事(授乳を含む)、排便、排尿、着替えなど心身の発達と生活について、時系列的な観察記録を行っており、この観察記録の中から、1歳半前後における音声模倣のエピソードを抽出した。その結果を以下に示す。まず、To 児による音声の遅延模倣例とそのときの状況を示す(Table 1)。

**Table 1** To 児にみられた音声の遅延模倣例

授乳の合間に、絵本(ブブちゃん)のなかの、ブブちゃんが溺れかけるシーンのときの読み聞かせのセリフや状況説明のことばをよく唐突に口にする。母親がそれに応じた(それに続く)説明をすると、それをよく聞き、「もっと」と言って、その説明の続きをせがむ。この絵本は To 児がお気に入りのもので、父親が普段からよく読みきかせをしていた。

次に、Ta 児による音声の即時模倣例を2つ示す(Table 2)。

**Table 2** Ta 児にみられた音声の即時模倣例

【例1】食事において母親が Ta 児に着席を促している場面  
母親「○○ちゃん、お椅子に座ろうか」→ Ta 児「○○ちゃん、おいすにすわろうか」→ Ta 児「おいすにすわる」→ Ta 児「おいすにすわるよ」  
【例2】母親が Ta 児を外出に誘っている場面  
母親「○○ちゃん、おんも(外)に行こうか」→ Ta 児「おんもにいこうか」→ Ta 児「おんもいこう」→ Ta 児「おんもいこう、れっつごー」

上の例に示したように、To 児は遅延模倣、Ta 児は即時模倣を主に採用しており、現象的には2人の言語模倣の間には違いがみられた。To 児が即時模倣を、Ta 児が遅延模倣を示すことももちろん観察されたが、2人が1歳代のときにはそのようなエピソードは比較的少なかったということである。このように言語模倣のタイプは2人の間で異なったが、両者ともに自動的な模倣に続いて意図的な要求や返答が認められた点は共通していた。すなわち、To 児は過去に入力されたセリフを脱文脈的に発し(自動的行為)、それに応じた母親の説明を聞き、さらにそれを促した(意図的行為)。また Ta 児は、母親の質問に対し即時模倣(自動的行為)し、それに続けて自分の要求を正しく返答した(意図的行為)のである。

反響言語 Echolalie (即時エコラリア)の症状を呈するアルツハイマー病の高齢者の症例を詳細に観察

した波多野・山岸・国立・濱中・戸田(1987)は、検査者が何かを質問すると、患者はひとまず問題をそのまま反響的に復唱し、それから自分の答えるべきことがらを簡単に答えるという症状を発見し、このメカニズムについて「意図と自動症」の戦いといったジャクソニズムの観点から考察を試みている。たとえば、検査者の「歩けますか?」との質問に対して、患者は「あるけま、すか」と反響的に発言し、それに続けて「もうあるかん」と発言したのである。波多野らはこの現象に対し、患者が何らかの返答を求められたとき、「あるけま、すか」というエコラリア、つまり自動反応と「もうあるかん」という意図的反応とが、連続的に(あるいはほとんど同時的に)競合して出現し、その結果、「あるけま、すか」という自動反応が競合に勝利を得たと解釈している。

筆者による今回の観察はこの波多野らの症例と類似している。すなわち、言語獲得期にある1歳代の2人の子どもにおいても、遅延か即時かという時間的な違いはあるものの、自動的な発語(模倣)が先行し、それに続いて意図的な発語(要求や返答)がみられたのである。ただし発達論的にみるならば、この現象について自動的発語と意図発語との「競合」という論点で解釈するだけでは充分ではなく、そこに何らかの発達の意義が見出されなくてはならないだろう。それではその発達の意義とは何であろうか。

その発達の意義について筆者は、自動的な反応が意図的な反応を促す「呼び水」的な効果を持っているのではないか、つまり発達の一時期、音声の機械的模倣が当人の意図を引き出すように作用し、結果的に言語発達を促進させている可能性を想定している。1歳児の発語の中に、まず相手の発語を自動的に模倣する段階と、それに続き、本人の意図が内包され、その場での適応性のある発語が現れる段階の2つの段階が存在するのではないだろうか。そしてこのような機械的・反響的な音声模倣と意図的な発語の両方の要素が連続的に出現するという状況は、最終的には適応的な意図的発語のみの反応へと発達していく中間移行的な現象ととらえられるのである。

筆者は、上に紹介した波多野らの症例における Echolalia にも実はこのような呼び水の機能があったのではないだろうかと考えている。症例ではアルツハイマー病という神経系の高次水準の解体が起きた結果、他者の質問に対して意図的な返答を即時に実行することは困難になったのである。しかし、それより低次である自動的で機械的な音声模倣のプロセスを活性化することにより、それを呼び水として何とか意図的なプロセス(質問に対する適切な答え)を引き出そうとする一つの戦略を症例は新たに身につけたと考えることも不可能ではないだろう。

## 自閉症エコラリアの今日的理解

自閉症の人々の多くはエコラリアを発語する。このような自閉症エコラリアは他人の言った言葉を意味もなくそのまま繰り返すこととされてきた(廣澤・田中, 2004)。つまり他者の言葉の模倣である。たとえば、その言葉が、「アイスクリームとケーキとどっちがほしい?」という質問であった場合、それに対して、「どっちがほしい?」と即座に模倣するのである。この場合、質問者、あるいはそのやりとりを聞いていた第三者に対して、このようなエコラリアは奇妙な印象を与えるものである。したがって、エコラリアは、コミュニケーションの一つの表現型と見なされることは少なく、あくまで自閉症の「症状」の一つであり、消去され、別の正しい発語に置換されなければならないものとして捉えられてきた。

しかし、近年は、エコラリアは自閉性障害児が他者に対して行うコミュニケーション手段として位置づけられ、それはほぼ一致した見解になりつつある(廣澤・田中, 2004)。エコラリアにコミュニケーション機能があるとはつまり、エコラリアの中に発話者の意図なり意思なりが含まれているということである。たとえば先ほど例に挙げた、「アイスクリームとケーキとどっちがほしい?」との問いかけに対する、「どっちがほしい?」という反応に、発話者の意図や意思が内包されているということである。普通に考えると、この「どっちがほしい?」という反応に何らかの意味を見出すことは困難だろう。しかし、想像をたくましくすれば、あるいは、その反応が生じた状況を詳細に点検すると、そこに意図や意思を検出することは不可能ではない。たとえば一つの可能性として、「どっちがほしい?」という発語には、「どっちがほしい」という言葉の意味自体がわかりづらく、その意味を問うているのかもしれないと考えるこ



ともできるだろう。もしそうであれば、「どっちがほしい？」という発語には、コミュニケーション機能があるとみなすことができる。ただ、そこに内包されているのは、他者には伝わりにくい(共有されにくい)、発話者独自の個人的な意味ということも多いだろう。

このように、最近の潮流としては、エコラリアにコミュニケーション機能があるとみることが一般的になってきている。しかし、エコラリアについて考える場合、それ単独ではなく、それに先行する質問者の発話形態と密接に絡んでいることに注意が必要である。先ほどの、「アイスクリームとケーキとどっちがほしい？」という問いかけが、それを聞く者にとって理解しづらい反応、つまり「どっちがほしい？」というエコラリアを誘発したとすれば、自閉症者に対する質問形態としては好ましいものではないといえるだろう。そもそも、アイスクリームとケーキとどちらがほしいかを知りたいのであれば、それらの実物や絵カードを提示して本人に選ばせればよいのである。つまり、エコラリアの問題を考えるとときには、それに先行する刺激(たとえば、質問形態)とユニットで捉える必要があるということである。原則的にいうと、自閉症者の意図や意思を上手に引き出すような、単純化された具体的な問いかけがよいということになるだろう。

ただ、療育の場合ならともかく、一般の家庭において親が子どもに対して問いかける場合に、単純化された具体的な問いかけ方を絶えず実行し続けることは、現実的には困難なことも多いだろう。もちろん、そうあるように心がけることは大切だが、実行するには限界があるということである。上述のように、「アイスクリームとケーキとどっちがほしい？」との問いかけは、自閉症の子どもに対する問いかけとしては好ましいものではないが、きょうだい2人のどちらかに自閉症の症状があつて、もう一人が健常であり、そのふたりに同時に問いかけるような場合、親が「アイスクリームとケーキとどっちがほしい？」と問いかけてしまっても、それは仕方のないことではないだろうか。現実にはこのような場面が多々あり、それら一つ一つの場面で、親が「治療者」として、正しい問いかけをすることはほとんど不可能なことである。

## 自閉症エコラリアの機能分類

上述したように、自閉症エコラリアにコミュニケーションとしての意味を見い出そうとするのが最近の傾向である。廣澤・田中(2004)は、エコラリアの中でも即時的なものを取り上げ、それらのコミュニケーションとしての機能を調べた先行研究をまとめている。それによると、即時性エコラリアには7種類のタイプがあり、その中で、発話順番型、叙述表現型、肯定表現型、要求表現型の4種類は意思伝達の機能を保持する型であり、焦点不定型、自己統制型、リハーサル型の3種類は意思伝達の機能を保持しない型に分類されている。ただし、焦点不定型、自己統制型、リハーサル型も、相手に何らかの意図を伝えるものではないといっても、集団の中での自己保存や自己の発言を確認(リハーサル)するなどの機能を持っているのである。つまりこれらの型も、コミュニケーションそのものとしての機能はないものの、コミュニケーションを維持するために、その下支えとしての役割を担っているのである。

このように、エコラリアにコミュニケーション機能ないしそれを支える機能があるとすれば、臨床的な見地からは、自閉症者と関わる人々は、エコラリアに直面したとき、それらを排除しようとするのではなく、それらの中に発話者の意図を積極的に見出そうとする姿勢が求められているといえるだろう。そしてもう一つ、研究面において重要なことは、自閉症エコラリアにコミュニケーション機能があるならば、同じくコミュニケーション機能があると思われる健常児の音声模倣と比べ、機能的にどのような点が同じで、どのような点が異なるのかという問である。そこで次に、このような自閉症エコラリアと健常児の音声模倣との異同について検討する。

## 自閉症エコラリアと健常児の音声模倣の異同

筆者は、健常児にみられる何らかの質問に対する即時的な音声模倣、あるいは他者の反応を誘発する

ような音声の延滞模倣は、自分の判断の結果を述べることや他者の説明を求める(意図的な反応)ことと、模倣(自動的な反応)との間に「戦い」や「競争」が発生し、意図や意思が本人にとってまだ十分に明確になっていない場合に、意図的な反応より自動的な反応が時間的に先行してしまうのではないかと解釈している。つまり健常児にみられる音声模倣の機能は、他者からの問いかけを自分の音声で再生することにより、問いかけの内容を吟味し、それに対する自らの意図や意思を確認すること、あるいは他者の説明を誘発し、自分の音声模倣の意味を吟味するという機能があると考えているのである。

それではこのような健常児の音声模倣と比べ、自閉症エコラリアにはどのような共通点と相違点があるのだろうか。自閉症エコラリアでは相手の問いかけを自動的に模倣してしまうのであり、この点は健常児の音声模倣とはほぼ同質の反応といえるだろう。しかし健常児の場合はそれに続き、意図的な反応がみられたり、他者の説明を促す反応がみられることが多いのに対し、自閉症エコラリアではそのような後続の意図的な反応が認められないのである。これが両者の主たる相違点といえる。先に挙げた例では、「アイスクリームとケーキとどっちがほしい？」と問われて、「どっちがほしい？」と反響するが、それに続き「アイスクリーム」あるいは「ケーキ」という意図的な返答は得られにくいということである。換言すれば、健常児の音声模倣に比べ、自閉症エコラリアは自動的な反応と意図的な反応の間の連関(association)が円滑ではないということである。

自閉症にみられるこのような自動性と意図性の連関の弱さの原因は、生理学的には自閉症の人の脳において指摘されている神経連結(neural connectivity)の異常(たとえば, Belmonte, et al., 2004)に求めることができると考えられる。これは、自閉症では中枢的統合の弱さ、実行機能障害、高次思考システムの障害、心の理論や共感性の障害など多様な神経心理機能の障害がみられるが、それらの障害の発生因を脳の情報伝達の異常(神経連結、すなわち脳の各部位間の連絡の脆弱さ)の結果として包括的に説明しようとする立場である。この神経連結の異常説もふまえながら、自閉症エコラリアという現象をジャクソニズムから捉え直してみると次のように説明することができよう。すなわち自閉症エコラリアとは、自動的な反応と意図的な反応の連関に弱さがあり、自動的なプロセスが賦活化されても、それに伴って意図的なプロセスが賦活化されない現象である。あるいは、自閉症では高次の意図的なプロセスが未熟であり、それゆえ、それより低次の自動的なプロセスが賦活化され、エコラリアが発生しても、それが意図的なプロセスの速やかな形成に寄与しにくいと考えることもできる。しかしながら、自動的な反応であるエコラリア自体は他者とのコミュニケーション手段として発達的な変化を遂げ、上記したようなさまざまなコミュニケーション機能あるいはそれを支持する機能を獲得するようになったのではないだろうか。

今後、イメージング法など神経科学的手法によってミラーニューロンなどの働きを探索する中で、本稿で考察された自閉症エコラリアや健常児の音声模倣の意義が確認されることが期待される。

## おわりに

健常な1歳代の子どもの言語においてジャクソニズムが説くような自動性と意図の解離と連関があり、このことが当該年齢における言語獲得やコミュニケーション発達に一定の役割を果たしている可能性が示された。相手の問いかけなどを自動的に模倣する点は自閉症エコラリアも健常児の音声模倣と同じと考えられるが、健常児ではそれに続き意図的な発話がみられることが多いのに対し、自閉症エコラリアでは、そのような後続の意図的な反応がみられないことが異なる点であった。このことは健常児の音声模倣に比べ自閉症エコラリアは自動的な反応と意図的な反応の間の連関が円滑ではない、あるいは意図的なプロセスが未熟であることを示唆していると考えられた。また、自閉症の人々では神経学的に低次の自動的な反応(つまりエコラリア)が発達的な変化を遂げ、エコラリア自体がコミュニケーション機能あるいはそれを支持する機能を保持するようになったのではないかというジャクソニズム的解釈が紹介された。

## 引用文献

- 秋元波留夫(2000). ジャクソン 神経系の進化と解体 創造出版
- Belmonte, M. K., Allen, G., Beckel-Mitchener, A., Boulanger, L. M., Carper, R. A., and Webb, S. J. (2004). Autism and abnormal development of brain connectivity. *The Journal of Neuroscience*, 20, 9228-9231.
- 波多野和夫・山岸 洋・国立淳子・濱中淑彦・戸田圓二郎(1987). 「意図と自動症との戦い」(Sittig, 1928) —反響言語のジャクソニズム的側面について—. 神経心理学, 3, 60-69.
- 廣澤満之・田中真理(2004). 自閉性障害児における即時性エコラリアに関する研究の展望. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 249-259.
- 萱村俊哉・萱村朋子(2011). 1歳児の模倣における自動性と意図 —ジャクソニズムの立場からの考察—. 日本発達心理学会第22回大会発表論文集, 184.
- 萱村俊哉・萱村朋子(2012a). 1歳児の言語獲得方略における個人差 日誌法による分析 日本発達心理学会第23回大会発表論文集, 164.
- 萱村俊哉・萱村朋子(2012b). 自閉症エコラリアと健常児の音声模倣における自動性と意図 —ジャクソニズムの立場からの考察— 日本心理学会第76回大会発表論文集, 362.
- Prizant, B. M. (1983). Language acquisition and communicative behavior in autism: Toward an understanding of the “whole” of it. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 13, 365-381.
- 山鳥 重(1985). 神経心理学入門 医学書院

付記：本稿は、萱村俊哉(2012). 自閉症エコラリアと健常児の言語模倣における自動性と意図—ジャクソニズムの立場からの考察— 武庫川女子大学発達支援学術研究センター平成19～平成23年度私立大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター研究成果報告書, 41-46. の内容を加筆・修正したものである。

## 室内装飾における西洋風の受容と葛藤

待鳥 邦会, 横川 公子  
(武庫川女子大学・生活環境学部・生活環境学科)

### Acceptance and conflict of Westernization in interior decoration

Kunie Machidori, Kimiko Yokogawa

*Department of Human Environmental Sciences,  
School of Human environmental Sciences, Mukogawa Women's University*

#### Abstract

In this paper, we took up a representative women's magazine of the era into consideration, the Fujingahou, and decided to investigate about "interior decoration" (Shitunai-sousyoku) as the term most similar to "interior design". In the timespan we investigated, the word "interior design" had not yet come into use. Using the magazine Fujingahou (1906.7~1944.4), we investigated all articles referring to interior decoration or "Shitunai-sousyoku".

In this article we analyze the references to walls, interior fabrics, furniture, interior ornaments found in the magazine. As a result of this investigation, we conclude that westernization of interior design of in middle-class homes Japan began with the introduction of the western-style furniture and the decoration of the western-style window.

#### はじめに

近年、インテリアコーディネート、トータルインテリアなどの言葉が、日常生活の中の様々な場面で登場するようになり、インテリア関連書籍や雑誌等も数多く発刊されている。西洋建築が日本に導入されたことが、日本のインテリアに及ぼした影響は大きい、日本においてこの“インテリア”が産業として認知されるようになったのは、昭和40年代であり(東京室内装飾事業協同組合, 1990, p.41)、西洋建築の受容に比較して新しい。

現在でも、インテリアは「建築の後付け」のように理解されている。つまり、設計が全て終了し、プラン変更が不可能な状態で、インテリアのプランに着手するというのが往々にして在り得るのである。ここでは、インテリアコーディネートとは、床・壁・天井の色選びであり、家具配置やそれによる建築本体との関係性は考慮されないことになる。

本来のインテリアコーディネートとは、色選びだけでなく建築との繋がりの中で、住み手の生活をつくり上げるものだと思うのだが、日本の住宅におけるインテリアは必ずしもそうではないようだ。建築の西洋化の中で、これらは具体的な生活の中にどのように浸透してきたのだろうか。

本稿では、婦人雑誌『婦人画報』(明治39年7月号~昭和19年4月号)を主な資料として、“インテリア<sup>1)</sup>”に類似の対象として取り上げられている“室内装飾<sup>2)</sup>”について、調査を行うこととする。その際に、調査対象を記事中の室内装飾関連用語とした。なぜなら、記事中の用語には時代が反映されており、その時代に関心が強い内容については幾度となく記事に取り上げられ、用語の登場頻度も高くなると考えたからである。



## 1. 近代までの室内装飾

本題に入る前に、日本在来のインテリアの状況を確認するために、『日本住宅室内装飾法』(杉本文太郎, 1911)を参照し、各時代の室内装飾の特徴をまとめた。本書によれば、近代以前の室内装飾法とその変遷の大枠がわかる。まず、それに従って各時代の室内装飾法をみていくこととする。時代の名称は本書に従っている。

I. 奈良朝時代(710-794)は、床は板敷で敷詰の畳はなく、座敷というのは今日のように室の名を示すものではなかった。

当時は簾及び几帳、屏風を立てるのみで、室内は出来るだけ飾らないことを重視したことがわかる<sup>3)</sup>。

II. 平安朝時代(794-1192)は、所謂、寝殿造に代表される時代であり、この時期に宮中において室内装飾が進歩発展した。ただし、何事もその外形の美のみに尽力し、実用性を欠いていたとされる。飾ることに関しては、主人や官位の位置や方位と装飾品の位置関係などに決まりがあり、時々に応じて設えを変えていたようである。

III. 鎌倉幕府時代(1192-1338)は、武家と公卿が隔立し、文化は依然として公卿に属していたため、武家における室内装飾は殆ど完成したものではなかった。公卿に対し、武家の室内装飾は質素なものであったが、明障子の使用に伴い、美を外部へと求めた。その結果として、庭園の発達が著しい時代であったと言われている。

IV. 足利氏幕府時代(1338-1582)は、間接的にも直接的にも茶道が室内装飾に大きく影響を与えた時代である。家屋は寝殿造から武家の家屋である書院造に一変し、その特徴は、形式的かつ実用的なことを趣旨とした。また、茶道は平民的遊藝として、香道は貴族的遊藝として装飾への影響力を持った。そして、床・掛物・座敷等全ての装飾の“調和”をもって、完全な装飾としたようである。

V. 豊臣氏時代(1582-1600)は、茶室造が発達した時代で、これは書院造に著しい進歩をもたらした。この時代の室内装飾は、自然の調和に基づいたものが良いとされ、自然は美の根本であると言われている。また、茶道の流行により、香道や生花が進歩発展した。この影響は、床脇の棚類に様々なバリエーションをもたらしたとする。その他、この時代は海外物品の交易が盛んとなり大小名の邸宅が舶来品により全美を極めたともされる。

VI. 徳川氏幕政時代(1600-1840 頃)は、平安朝と並んで文化の発達が著しい時代であったとする。建築は、前時代の書院造を継承し、茶道をはじめ、香道、花道の発達進歩は著しく、それらが室内装飾に及ぼした影響は大きかった。床や棚などの種類の増加や床柱に初めて角柱が用いられるようになったこと、また、金物細工や木細工、人形細工などの細工モノが流行するなど、技術的な進歩も確認できる。併せて、色の調和についての関心<sup>4)</sup>が強まっていたようでもある。

以上のように、時代毎に特徴がみられるが、足利氏幕政時代以降、盛んになり始めた茶道が、室内装飾の展開に大きく影響を及ぼしていることは注目できる。

また、著者が、各時代の室内装飾法のまとめとして“室内の装飾における3つの法則”を挙げていることも注目できる。すなわち「一、重複を避けねばならぬ 二、陰陽を調へねばならぬ 三、物品其物の本来を知らねばならぬ」であり、さらには、日本人が室内装飾において重んじたことが、ただ見た目に美しいものではなく、自然であり、調和であり、感触を伴う風情であるとした<sup>5)</sup>。

## 2. 『婦人画報』における室内装飾

### 2-1. 『婦人画報』について

『婦人画報』は、以下のように改題と版元変更を行なっている。

I. 『婦人画報』(近事画報社刊) 第1巻第1号 (M38.7) ～第3年第6号(M40.6)

II. 『東洋婦人画報』(東京社刊) 第1号(M40.8) ～第24号(M42.3)

- Ⅲ. 『婦人画報』（東京社刊） 第 25 号(M42.4) ～第 482 号(S19.4)  
 Ⅳ. 『戦時女性』（東京社刊） 第 483 号(S19.5) ～第 493 号(S20.9)  
 Ⅴ. 『婦人画報』（婦人画報社刊） 第 494 号(S20.10) ～第 1156 号(H11.11)  
 Ⅵ. 『婦人画報』（アシェット婦人画報社刊） 第 1157 号(H11.12) ～現在に至る

今回の研究には、明治から昭和戦前期にかけての室内装飾について DVD 版として収録されたⅠ～Ⅲ、つまり『婦人画報』（M38.7～M40.6）、『東洋婦人画報』（M40.8～M42.3）、『婦人画報』（M42.4～S19.4）の記事を用い、第一次世界大戦中までを対象とした。（以下、雑誌名を『婦人画報』とする。）『婦人画報』を取り上げた主な理由は、以下の 4 点である。

①明治末期から大正、昭和に渡り発行されていること。②都市部における中間層の家庭婦人を主な対象とすること。③ DVD-ROM により原本を確認できること。④近代化の影響を受けた時代の記事が確認できること。

目次から“室内装飾”をキーワードにして関連記事を検索した結果、明治期 6 件、大正期 8 件、昭和戦前期 28 件を入手することができた。さらに掲載記事に使用されているインテリア関連用語を抽出し、以下の表 1～4 のようにまとめた。これらの用語については、実際に DVD-ROM より原本をプリントアウトしたもので確認した。

## 2-2. 室内装飾の対象と記述

表 1～5 は、掲載記事に登場する室内装飾関連用語を現代のインテリア項目に対応する「壁面(窓装飾を含む)・ファブリック・家具関連・小物・その他」の 5 項目に分類し、各々明治期・大正期・昭和戦前期の時代順に区分したものである。カーテン関連の用語については、窓の装飾物として「壁面」と関係が深いことからそれに含むこととし、複数回記事に登場した用語については[回数]を表記した。なお、昭和戦前期に関しては出現用語数が多く、紙面の都合上、出現頻度の高かった用語と特徴的だと思われる用語のみ表中に示し、単数のものを一部省略した。

表 6 は、記事中に登場した「室名」について、他の項目と同様にまとめたものである。

以上 6 項目の対象について、用語の登場件数と種類に注目し、検討することとする。

【表 1】 壁面(窓装飾も含む)

| 明治期                                                       | 大正期                                                                 | 昭和戦前期                                                                                                            |                                                                                                    |
|-----------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 壁紙<br>紙張壁<br>壁の色<br>カーテン(窓掛)<br>レースの窓掛<br>窓<br>硝子窓<br>硝子戸 | 壁紙[4]<br>カーテン(窓掛) [4]<br>壁の色[3]<br>壁[2]<br>レースの窓掛<br>壁張<br>ステンド・グラス | カーテン(窓掛) [18]<br>壁紙[11]<br>窓[7]<br>壁[5]<br>壁の色[3]<br>フレンチ・ケースメント<br>ブラインド<br>シェード<br>バランス<br>入口飾<br>美術壁<br>壁のお化粧 | 扉<br>ドア<br>仮想窓<br>窓棚<br>ガラス障子<br>壁にかかっている幕<br>出窓<br>レースの窓掛<br>つや消しガラス<br>すかしガラスの窓建具<br>日本壁<br>ガラス戸 |

[表 2] ファブリック

| 明治期                     | 大正期                                                                                 | 昭和戦前期                                                                                                                  |
|-------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 靴拭い(マット)<br>絨毯<br>カーペット | 敷物[5]<br>絨毯[2]<br>クッション[2]<br>椅子張[2]<br>テーブル掛<br>フロアクロス<br>リノリウム<br>フェルト<br>テーブルクロス | 絨毯[7]<br>敷物[5]<br>クッション[8]<br>カーペット[5]<br>テーブル掛[3]<br>椅子張[2]<br>椅子のカバー [2]<br>テーブルクロス<br>センター・ピース<br>ティナープキン<br>ベッドカバー |

[表 3] 家具関連

| 明治期                                                       | 大正期                                                                          | 昭和戦前期                                                                                                                                                  |                                                                                         |
|-----------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|
| 椅子[3]<br>テーブル(卓子) [2]<br>本棚<br>飾棚<br>机<br>臺<br>暖炉<br>オルガン | テーブル(卓子) [5]<br>椅子[3]<br>長椅子[3]<br>肘かけ椅子<br>家具<br>棚<br>コーヒーテーブル<br>籐椅子<br>暖炉 | 椅子[15]<br>テーブル(卓子) [12]<br>家具[8]<br>ソファ [7]<br>書棚[5]<br>安楽椅子[5]<br>寝臺[4]<br>暖炉[3]<br>小椅子[3]<br>籐椅子[3]<br>長椅子[3]<br>洋服箆笥[2]<br>ピアノ[2]<br>書机[2]<br>腰掛[2] | アーム・チェア[2]<br>マントルピース[2]<br>肘かけ椅子[2]<br>ティテーブル<br>食卓<br>中心テーブル<br>圓卓子<br>サイドテーブル<br>ベッド |

[表 4] 小物

| 明治期                                                                                                                                                  | 大正期                                                                                                    | 昭和戦前期                                                                                                                                                                                                  |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 額[3]<br>姿見[2]<br>鏡[2]<br>時計[2]<br>花瓶[2]<br>花活<br>ランプ<br>額縁<br>硝子<br>盆栽<br>火鉢<br>坐蒲団<br>懸物<br>四季折々の花・枝<br>コレクション<br>置物<br>像<br>幅<br>珍像・珍書・珍器<br>洋画の掛額 | 置物[2]<br>生花[2]<br>盆栽<br>額<br>花瓶<br>植木<br>金魚<br>絵<br>陶器<br>壺<br>花卉<br>茶器<br>洋画の掛額<br>日本画<br>軸もの<br>電燈の笠 | 電燈具[7]<br>電気スタンド[5]<br>額[4]<br>額縁[2]<br>美術工芸品[2]<br>植木鉢[2]<br>電燈の笠[2]<br>姿見[2]<br>ストーブ[2]<br>ブラケット[2]<br>ガス燈<br>電気燈<br>天井燈<br>壁燈<br>シャンデリア<br>掛軸<br>置物<br>盆栽<br>花の籠<br>一輪ざし<br>切り花<br>器もの<br>ランプ<br>花瓶 |

[表 5] その他

| 明治期                                                                  | 大正期                                                                                                                                      | 昭和戦前期                                                                                                                                                                               |
|----------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 掃除[2]<br>床[2]<br>色彩(いろどり)<br>光線の具合<br>整頓<br>清掃<br>和洋折衷<br>花壇<br>訪問時間 | 住宅の改良<br>洋館<br>寄木細工の板張り<br>色彩(いろどり)<br>和洋両用建具<br>人間味<br>藝術的感受性<br>暖色<br>配列<br>日光<br>洋室の床の間<br>壁面の利用<br>震災<br>和洋折衷<br>洋風和化・和風洋化<br>個性的な趣味 | 椅子式の床<br>天井[5]<br>床[4]<br>床の間[3]<br>モダン[2]<br>団欒[2]<br>住み心地<br>お茶の間<br>押入れの改良<br>寒色・暖色<br>均等照明<br>局部的照明<br>建築化照明・光築<br>色彩<br>色の配合<br>国民性<br>アパートメント<br>ファイヤープレイス<br>単純化<br>モダン・リビング |

[表 6] 室名

| 明治期                                                                                                            | 大正期                                                                                                                                          | 昭和戦前期                                                                                                                                                                   |                                                                                                            |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 日本室[3]<br>客室[3]<br>応接室[2]<br>寝室[2]<br>西洋間<br>日本間<br>西洋室<br>座敷<br>寢床<br>食堂<br>階段<br>廊下<br>浴室<br>便所<br>台所<br>化粧室 | 西洋間[2]<br>日本間[2]<br>日本風のお座敷[2]<br>日本室<br>日本風客間<br>日本座敷<br>居間<br>洋室<br>洋風応接室<br>準西洋間(※1)<br>談話室<br>純日本風の古式な畳敷<br>古風な客室<br>洋風の室<br>縁側<br>洋風婦人室 | 居間[11]<br>書斎[6]<br>食堂[7]<br>日本座敷[6]<br>寝室[5]<br>洋室(洋間)[3]<br>応接間[4]<br>客間[4]<br>リビングルーム[2]<br>日本風の室内[2]<br>西洋間[2]<br>日本風の座敷[2]<br>食事室[2]<br>洋風の室内[2]<br>在来の座敷<br>日本間[2] | 日本室[2]<br>応接室<br>西洋室<br>談話室兼食堂<br>玄関<br>台所<br>配膳室<br>納戸<br>浴室<br>子供室<br>寝間<br>玄関広間<br>階段室<br>洋風居間<br>洋風応接室 |

※1 日本間に椅子と卓を置いた室<sup>6)</sup>

## 2-2-1. 壁面(窓装飾を含む)

表1より壁面に関する用語としては、明治期が8件、5種類、大正期が16件、5種類、昭和戦前期が72件(表中63件、その他に9件)、14種類(表中13種類、その他に1種類)を確認できた。用語を類似の種類に分類した内容(順不同)は以下に示す。

- ・明治期 : ①壁紙、紙張壁②壁の色③カーテン(窓掛)、レースの窓掛④窓、硝子窓⑤硝子戸
- ・大正期 : ①壁紙、壁張②壁の色③カーテン(窓掛)、レースの窓掛④壁⑤ステンド・グラス
- ・昭和戦前期 : ①壁紙②壁の色③カーテン(窓掛)、レースの窓掛、フレンチ・ケースメント、ブラインド、シェード、バランス④窓、出窓、すかしガラスの窓建具⑤壁、日本壁⑥入口飾⑦美術壁⑧壁のお化粧⑨扉、ドア、ガラス障子、ガラス戸⑩仮想窓⑪窓棚⑫つや消しガラス⑬壁にかかっている幕 他1種類



これによると、まず使われている関連用語が、明治期から昭和戦前期の約 40 年間に種類、数ともに増加していることがわかる。また、主要用語に関しては、どの時期においても壁紙・壁の色・カーテンであることがわかる。時代を経るにつれ、カタカナ用語も増えており、特にカーテン類については顕著で、用語としての登場頻度も高いことから、西洋風需要の室内装飾として、これらは最も関心が寄せられていた対象であったことが窺える。

昭和戦前期になると、扉やドアが登場してくる。これらについては元々日本家屋にはなかった概念であり、装飾というよりむしろ、建築そのものが西洋化してきたことがわかる。その他、ガラス障子やガラス戸のように、敢えて“ガラス”と表記している用語に関しては、従来の紙の障子や板戸などとの差別化を図ると同時に“ガラス”という新しい素材を啓蒙していこうとする意図があったと考えられる。以上より、当時の壁面装飾に関しては、窓周辺の装飾に強い関心があったといえるだろう。

## 2-2-2. ファブリック

表 2 よりファブリックに関する用語としては、明治期が 3 件、1 種類。大正期が 16 件、4 種類。昭和戦前期が 36 件、6 種類を確認できた。用語を類似の種類に分類した内容(順不同)は以下に示す。

- ・明治期 : ①靴拭い(マット)、絨毯、カーペット
- ・大正期 : ①敷物、絨毯、フロアクロス、リノリウム、フェルト②クッション③椅子張④テーブル掛、テーブルクロス
- ・昭和戦前期: ①敷物、絨毯、カーペット②クッション③椅子張、椅子のカバー④テーブル掛、テーブルクロス、センター・ピース⑤ティナープキン⑥ベッドカバー

最も特徴的なことは、どの時期においても“敷物”に関する用語が全体の半数程度を占めていることである。具体的には、明治期は全て、大正期は 16 件中 10 件(敷物、絨毯、フロアクロス、リノリウム、フェルト)、昭和戦前期は 36 件中 17 件(敷物、絨毯、カーペット)が“敷物”に関する用語ということになる。さらにその内容については、大正期に登場していたフロアクロス、リノリウム、フェルトなどが、昭和戦前期には見られなくなり、現在でも住宅の“敷物”として流通する用語、「敷物、絨毯、カーペット」に集約されていることがわかる。

また、大正期から昭和戦前期にかけて、クッションや椅子張、テーブル掛など椅子やテーブルの周辺用語の登場頻度が増加している。これは建築の西洋化による椅子やテーブルの普及によるものと考えられる。その他、カタカナ用語が多く登場していることも特徴である。

## 2-2-3. 家具関連

表 3 より家具関連の用語としては、明治期が 11 件、7 種類。大正期が 17 件、5 種類。昭和戦前期が 108 件(表中 88 件、その他に 20 件)、12 種類(表中 9 種類、その他に 3 種類)を確認できた。家具を分類した内容(順不同)は以下に示す。

- ・明治期 : ①椅子②テーブル(卓子)、机③本棚④飾棚⑤臺⑥暖炉⑦オルガン
- ・大正期 : ①椅子、長椅子、肘かけ椅子、籐椅子②テーブル(卓子)、コーヒーテーブル③棚④暖炉⑤家具
- ・昭和戦前期: ①椅子、ソファ、安楽椅子、小椅子、籐椅子、長椅子、腰掛、アーム・チェア、肘かけ椅子②テーブル(卓子)、ティテーブル、食卓、中心テーブル、圓卓子、サイドテーブル③書棚、マントルピース④暖炉⑤寝臺、ベッド⑥洋服箆⑦ピアノ⑧書机⑨家具 他 3 種類

ここでも、明治期から昭和戦前期にかけて、その件数とバリエーションが飛躍的に増加している。特にそれは、“椅子”と“テーブル”で顕著にみられ、急激な用語の増加が確認できる昭和戦前期においては、“椅子”と“テーブル”だけで 59 件(“椅子” 41 件、“テーブル” 18 件)あり、全体 108 件中の半数以上の記事で“椅子”と“テーブル”が取り上げられているのである。

また、昭和戦前期に「ピアノ」とあるが、これはこの当時ピアノが装飾品の一部として扱われており、

中流階級以上の家庭にはなくてはならない、謂わばステータスの象徴であった(福島琢郎, 1927)ようである。

更に、「家具」という用語については、大正期に1件、昭和戦前期に8件確認できたが、この内容は定かではない。恐らく家具自体にあまり馴染みがなかった日本人ゆえに、椅子やテーブル、その他西洋化に伴う装飾品全般を指して、“家具”と言ったのではないと思われる。

以上より、家具関連の項目からは、西洋風の象徴とも云える“椅子”と“テーブル”の啓蒙、そして、装飾品として扱われていた「ピアノ」の例にもみるように、当時の日本人が西洋のモノをシンボリックに取り入れることで、“見た目の西洋化”に尽力していた様子が窺える。

## 2-2-4. 小物

表4より小物に関する用語としては、明治期が28件、9種類、大正期が18件、5種類、昭和戦前期が47件(表中44件、その他に3件)、7種類(表中6種類、その他に1種類)を確認できた。用語を類似の種類に分類した内容(順不同)は以下に示す。

- ・明治期       : ①額、額縁、懸物、幅、洋画の掛額②姿見、鏡③時計  
                  ④花瓶、花活、盆栽、四季折々の花・枝⑤ランプ⑥硝子⑦火鉢⑧坐蒲団  
                  ⑨コレクション、置物、像、珍像、珍書、珍器
- ・大正期       : ①額、絵、洋画の掛額、日本画、軸もの②生花、盆栽、花瓶、植木、花卉③電燈の笠  
                  ④置物、金魚、陶器、壺⑤茶器
- ・昭和戦前期: ①額、額縁、掛軸②姿見③美術工芸品、置物、器もの④植木鉢、盆栽、花の籠、一輪  
                  ざし、切り花、花瓶⑤電燈具、電気スタンド、電燈の笠、ブラケット、ガス燈、電気  
                  燈、天井燈、壁燈、シャンデリア、ランプ⑥ストーブ 他1種類

ここでの最大の特徴として、他の4つの項目と異なり、明治期は室内装飾関連記事総数が少ない割に、用語の数・種類共に登場頻度が高いことが挙げられる。種類に着目すると、①掛け物類や④花類、⑨置物類の用語のバリエーションが合計15種類(各々①5種類、④4種類、⑨6種類)と多い。そして、大正期になると、用語はこの“掛け物類・花類・置物類”の3種類にほぼ分類できていることから、当時はこの3種類が一般的な室内装飾品であったと考えられる。

また、1928年に富山房より出版された『日本家庭大百科事彙第二巻奥付』によると、

室内装飾といふことは、(中略)室といふものを単に塗り立てるとかいふ意味ではない。(中略)装飾といふことが表面的に、さういふ風に考えられ勝ちなのはよくない事である。

とある。ここから推測すると、この当時、室内装飾とは、室空間に“飾り物”をすること、という感覚が一般的に強かったことが窺える。

ところが昭和戦前期になると、登場する用語が一変している。その内容については、“飾り物”から“照明器具関連”の用語へと移行しているのである。それまで用語の多数を占めていた“掛け物類・花類・置物類”の3種類(①, ③, ④)は合計して13種類、それに対して⑤“照明器具関連”の用語は10種類と、これだけでほぼ“掛け物類・花類・置物類”の合計に近い数を確認することができる。これより、昭和戦前期には、西洋から様々な種類の照明器具や照明技術が伝わり、それらを紹介する記事が増えたことから、照明文化が急速に中流階級の生活に広まったことがわかる。その結果として、前述の“掛け物類・花類・置物類”を取り上げる記事が減少していると思われるが、表の結果からはこれらの装飾品がこの昭和戦前期に、どのように扱われるようになったのかははっきりしない。理由としては、これらが普及し、記事として掲載する必要が少なくなったとも考えられるため、その実態については調査を別に実施することが要請されるだろう。

## 2-2-5. その他

表5より, ここでは, これまで2-2-1～2-2-4の分類に当てはまらなかったものの, 記事中より室内装飾関連用語として抜き出せたものを取り上げている. それらを分類すると, 明治期が11件, 6種類. 大正期が16件, 7種類. 昭和戦前期が31件, 7種類を確認できた. 用語を類似の種類に分類した内容(順不同)は以下に示す.

- ・明治期 : ①掃除, 整頓, 清掃, 訪問時間②床③色彩(いろどり)④光線の具合⑤和洋折衷⑥花壇
- ・大正期 : ①住宅の改良, 和洋折衷, 洋風和化・和風洋化②洋館, 寄木細工の板張り, 和洋両用建具, 洋室の床の間③色彩(いろどり), 暖色④人間味, 藝術的感受性, 個性的な趣味⑤壁面の利用, 配列⑥日光⑦震災
- ・昭和戦前期 : ①椅子式の床, 天井, 床, 床の間, ファイヤープレイス②モダン, 団欒, 住み心地, 国民性, 単純化③お茶の間, モダン・リビング④押入れの改良⑤寒色・暖色, 色彩, 色の配合⑥均等照明, 局部的照明, 建築家照明・光築⑦アパートメント

この項目の特徴は, 各時代の特色・流行・啓蒙の内容が表れていることである. それらを順にみていくと, 明治期については, 「①掃除, 整頓, 清掃, 訪問時間」に示すように, 現在では“室内装飾”としては扱われない用語が登場している. ただし, 茶人に第一に必要な条件として, 掃き, ふき清め, 洗うことに関する知識(岡倉覚三, 1991)があげられるように, ここには茶道の影響が考えられる. 大正期には, 「①住宅の改良, 和洋折衷, 洋風和化・和風洋化」, 「④人間味, 藝術的感受性, 個性的な趣味」, 「⑦震災」に特徴がみられる. ①は, まさに西洋化を表す用語で, この時代に今日の一般大衆の住宅の祖型が誕生した(内田青蔵, 1987, p.10)と言われていることから, 登場頻度が高い理由が窺える. また④は, 明治期には見られなかった, 感性的な意味の用語である. これらを合わせ見ると, この時代は西洋的手段や考え方, しつらえの際の感性などを啓蒙していこうとする意図が感じられる. 続いて⑦の「震災」であるが, これは大正12年に起きた関東大震災を示す. 記事中には, この関東大震災の復興建築が, “室内装飾”を一般に普及することに大きく寄与した(小宮山豊房, 1925, p.p.66-69)との内容が示されていたことから, 震災も西洋化の普及に一役を担っていたことがわかる. 昭和戦前期は, 「②モダン, 団欒, 住み心地, 国民性, 単純化」, 「③お茶の間, モダン・リビング」, 「⑥均等照明, 局部的照明, 建築家照明・光築」, 「⑦アパートメント」にみるように, カタカナの用語も目につくようになる. また, ②や③にあるような価値付けを表すような用語も登場するようになり, 室内装飾にも“生活する”という視点が加わってきたことがわかる. ⑥については, 2-2-4で先述したように, この時期に照明文化が中流階級の生活の中に大きな影響を及ぼしたことが, 窺われる. ⑦は, 所謂, 当時流行した都市住宅のことで, 左右上下に長屋が組み合ったようなもののことである.<sup>7)</sup>

なお, どの時期にも共通していた用語に「色彩」に関連したものがあつたことも注目したい点である.

## 2-2-6. 室名

表6より, 室名については, 明治期が22件, 5種類. 大正期が19件, 5種類. 昭和戦前期が77件, 5種類を確認できた. 用語を類似の種類に分類した内容(順不同)は以下に示す.

- ・明治期 : ①日本室, 日本間, 座敷②客室, 応接室, 寝室, 食堂, 化粧室③西洋間, 西洋室④寢床⑤階段, 廊下, 浴室, 便所, 台所
- ・大正期 : ①日本間, 日本風のお座敷, 日本室, 日本座敷, 純日本風の古式な畳敷②日本風客間, 居間, 洋風応接室, 談話室, 古風な客室, 洋風婦人室③西洋間, 洋室, 洋風の室④準西洋間⑤縁側
- ・昭和戦前期 : ①日本座敷, 日本風の室内, 日本風の座敷, 在来の座敷, 日本間, 日本室②居間, 書斎, 食堂, 寝室, 応接間, 客間, リビングルーム, 食事室, 応接室, 談話室兼食堂, 子供室, 寝間, 洋風居間, 洋風応接室③洋室(洋間), 西洋間, 洋風の室内, 西洋室④玄関, 台所, 配膳室, 浴室, 玄関広間, 階段室⑤納戸

ここではまず, 用語の数に注目したい. 昭和戦前期には明治期・大正期の3倍以上の室を表す用語が



登場していることがわかる。そこで、その内容をみると、昭和戦前期には、②において47件の用語が確認でき、同時期の総用語数に対して半数以上を占めている。中でも「居間(洋風居間を含む)」は12件と多く、これより居間を扱う記事が増加していることがわかる。(②は各時期に共通して“室用途がはっきりとした居室”を表している。)また、この時期に初めて「書斎」や「子供室」といった用語が登場することも併せて、用語数の増加は、室の機能や用途の固定化を目指していたことを表していると言える。

続いて「○○風」の表現が目立つ大正期についてである。それ以前の明治期は、客室や応接室など、接客の場を示す用語が多かったことや、以後の昭和戦前期は、先にも触れたように、「居間」を筆頭に室名のバリエーションが増加していることなど、時代の前後関係から流れを追ってみても、大正期当時は、この3つの時期区分の中で、最も西洋と日本が入り混じった複雑な時代背景のあったことが示唆される。

また、用語の登場頻度について、時代が下がるにつれ「居間」や「書斎」が「客室」や「応接室」などを上回っていることより、当時の居宅への関心が、従来の接客中心から家族中心へ(土屋元作, 1899, p.98)と移り変わりつつあることも示唆している。

なお、現代では当然のように使用している「和室」という用語が、ここで一度も登場していないことは興味深い。これについては、ここでは取り上げないが、別途調査を要することと考える。

### 3. 記事中の用語から見た室内装飾

近代日本の住宅における室内装飾について、記事中に使用された関連用語の分析により、把握できた結果を総合的に捉え、時期別に考察する。

#### <明治期>

明治期は室内装飾関連記事総数が少ない。しかし、「小物」や「その他」の項目に特徴が現れており、用語数、種類共に登場頻度が高い。“室内装飾”とは、“室空間に飾り物をする”ことという意識の強かった時期であり、また西洋の室内装飾を取り入れるに際して、現在では室内装飾とは言い難い「整頓」や「清掃」などを扱う記事が紹介されていた時期である。

明治期は、住宅の西洋化をめぐる論争が盛んに行われた時期(内田青蔵, 1992)とされているが、記事中の用語からも西洋化の導入に試行錯誤していたであろう様子を窺い知ることができる。

#### <大正期>

「その他」や「室名」の項目に特徴が現れている。この当時は、様々な住宅改良運動が活発化し、「住宅の時代」と言われた時期である(内田青蔵, 1992)。それほどに西洋風住宅の啓蒙が盛んであったが、先に挙げた2項目中の関連用語からも「住宅の改良」や「和洋折衷」、「西洋間」や「日本間」など、西洋化を意識した用語が確認でき、和と洋が入り混じった変化の時期であったことが見て取れる。

また、この頃の住宅改良運動から主婦を対象としたものも登場するようになった。例えば、1915年(大正4年)に東京上野で“家庭”をテーマとした日本初の博覧会『家庭博覧会』が開催されたことや、同年に、婦人を対象に建築の知識を説いた保岡勝也の『理想の住宅』が出版(婦人刊行会)されたことなどが確認できる(内田青蔵, 1992)。

加えて、既に2-2-5の項でみた、1923年(大正12年)に起こった関東大震災が室内装飾の普及の契機となったことなど、大正期は、婦人の間にも住宅そのものへの関心や知識が広まった時期であったと言えるだろう。

#### <昭和戦前期>

昭和戦前期は全ての関連項目で用語件数と種類が共に増加していた。このことは、2章でみた室内装飾関連の記事総数の増加に比例する。つまり、この頃に西洋風室内装飾が一般に普及・浸透し始めたと言えるだろう。

当時、時代は啓蒙の時代から実践の時代へと変化し始めていた(内田青蔵, 1992)。室内装飾においてもまた、その傾向は同様であったことは今回の結果からもわかる。特に注目したいのは、「家具関連」項目の用語の増加である。もともと家具の少ない日本の住まい(小泉和子, 1995)においては、この家具関

連用語の増加自体が西洋化の象徴であり、この時期に西洋化が急速に盛んになったことを顕著に表しているのである。

また同時に、この頃の記事では、室内装飾の在り方等が様々に論じられ始めている。その中から幾つかを次に抜粋する。

- ・ある女学校のクラスで、室内装飾の事をかいてもらつたらば、一番多いのは、その人の一番安心して坐はれる部屋であればそれでいい、といふ意味のものでした。(今和次郎, 1927)
- ・室内装飾の本義(中略)、或る藝術的の意匠に依って、其の室内の気分即ち調子や情味を巧みに整へて如何にも気持ちよくするといふこと(木檜恕一, 1927)
- ・先ず第一に考ふべきは、この室は「どんな気持ちでそこにゐたい」といふこと(清水良雄, 1928)
- ・室内装飾は、贅澤なものゝ必要はありませんが、すべて釣合ひと謂ふ事をお忘れにならない様にしたいものであります。(保岡勝也, 1931)
- ・色彩の配合、調和が、室の性質を決定するものであります。(和田順顕, 1931)

この5つの文章は、同時期に書かれた記事中の文章であるが、どれも共通して言えることは、気持ちや気分を良くするという内容が書かれていることである。

開国時より、日本が無我夢中に取り組んできた西洋化ではあるが、小泉和子が、「当時模範とした欧米には様々な様式が存在し、様式の混乱状態に陥っていた。そのような状況の中で、日本はどの様式を取り入れるべきなのかわからなかったし、基準もなかった(小泉和子, 1995).」と指摘するように、具体的な生活への導入となると、不明瞭な状況であった。そのため、ある程度西洋風が一般へ浸透・普及してきた昭和戦前期においては、より西洋らしい設えとするにはどうしたらよいか、何が必要で何が足りないか…、など西洋のものをただやみくもに取り入れる段階から、それらをどのように設え、そこでどのように生活をするのか、といった段階へと人々の関心が移り変わったのであろう。その上で、室内装飾にも定義を求め、同時に“これぞ西洋風”と言い切れる安心感を求めていたのではないだろうか。したがって、前述したように室内装飾における新しい価値観、新しい方法等が活発に論じられていたのではないかと考えられる。

## 結 論

日本の住宅におけるインテリアの西洋化は、西洋風の室内装飾の真似に始まった。この要となっていたのは“家具”と“窓装飾”であった。まず“家具”については、2-2-4 小物 の項でみたように、近代までの日本では“家具”という文化があまり存在しなかったためか、家具や装飾品が並んだ西洋の室内は、華やかで煌びやかに見えたに違いない。近代までの日本では、装飾というと床や棚に小物を飾る程度のものであったため、人々は室内を装飾することとは、モノを置いて飾ることだと感覚的に理解していたのであろう。それゆえに、家具もまた、ピアノの例にみるように装飾品の一部という感覚が強かったと思われる。そして、その中でも“椅子”と“テーブル”の導入は、起居形式の変化を伴い、日本在来の設えを大きく変化させることとなったのである。

一方で、在来の日本家屋に存在しなかった“壁”の出現によって、様々なタイプの“窓”が登場した。その結果、半ば必然的に窓の装飾が人々の関心を集めることになった。

しかし、模範とした当時の欧米の室内装飾を取り入れるにあたり、何ら基準がなかったため、そこに様々な日本的な解釈を加えることになった。近代以前より日本の室内装飾の発展に影響を与えた、“もてなしの心”や“自然との調和”のような「茶道」の理念がここに加わり、同時に、新たな西洋の品が取り入れられ、日本的に解釈をする。こうした試行錯誤の結果が、現代の和様折衷のインテリア様式といえるだろう。

導入時に基準を設けなかったこと、西洋の文化や家具の用途などより外見を整えることに腐心したこ



となど、急ぎすぎた西洋化に人々については行けなかったのではなかろうか。なぜ昭和 40 年代に至るまで日本では“インテリア”が産業として認知されなかったのか。『茶の本』（岡倉覚三著，村岡博訳，1991）には以下のような文書があった。

人は自己の感情には無頓着に世間一般から最も良いと考えられているものを得ようとかしましく騒ぐ。高雅なものではなく、高価なものを欲し、美しいものではなく、流行品を欲するのである。

日本人がどう在りたいかよりも欧米の文化に憧れ、我らもそれに倣えとした西洋化の歴史。母国の文化を度外視し、文化や歴史に無頓着に西洋の品を取り揃えていったことはインテリアにおいても同様であったのだろう。そして、21 世紀の現在、近代化の裏側で大切な日本の歴史や伝統を失ってきたことを反省し、西洋と日本、それぞれの良さを根本から学び直さなければならない次の局面に到達したのではないだろうか。

## 文 献

- 1) 内田青蔵：『あめりか屋商品住宅，住まいの図書館出版局，1987.
- 2) 内田青蔵：『日本の近代住宅』，鹿島出版会，1992.
- 3) 岡倉覚三著，村岡博訳：『茶の本』，岩波書店，1991.
- 4) 川崎衿子編，水沼淑子：『ライフスタイルで考える 4 和・洋の心を生かす住まい』彰国社，1997.
- 5) 小泉和子：『室内と家具の歴史』，中央公論社，1995.
- 6) 木曾愼一：「室内装飾の心得」『婦人画報 第 267 号』，1927.
- 7) 小宮山豊房：「夏の室内装飾」『婦人画報 第 238 号』，1925.
- 8) 今和次郎：「室内装飾の事」『婦人画報 第 260 号』，1927.
- 9) 清水良雄：「室内装飾雑観」『婦人画報 第 275 号』，1928.
- 10) 杉本文太郎：『日本住宅室内装飾法 第 5 版』，建築書院，1911.
- 11) 土屋元作：『家屋改良談』，時事新報社，1899.
- 12) 東京室内装飾事業協同組合：『室内装飾からインテリアへ インテリア業界の変遷』，東京室内装飾事業協同組合，1990.
- 13) 福島琢郎：「室内装飾としてのピアノ」『婦人画報 第 67 号』，1927.
- 14) 福良宗弘：『茶の湯空間とはなにかー成立ちと構成』彰国社，1995.
- 15) 毎日ライブラリー：『一色彩と生活一』，毎日新聞社，1958.
- 16) 森口多里：「寒い季節にふさはしい室内装飾」『婦人画報 第 178 号』，1920.
- 17) 保岡勝也：「中流應接間の装飾」『婦人画報 第 316 号』，1931.
- 18) 保岡勝也：「住家の室内装飾に就て」『建築雑誌』，1905，第 209 号，p.p.277-284，第 210 号 p.p.337-344，第 211 号 p.p.29-34，第 212 号 p.p.452-456，第 213 号 p.p.490-496，第 214 号 p.p.544-551，第 215 号 p.p.618-622，第 217 号 p.p.43-48，第 218 号 p.p.97-102，第 219 号 p.p.153-158，第 220 号 p.p.236-242，第 221 号 p.p.556-560.
- 19) 和田順顕：「部屋の氣分を左右する敷物，壁紙，窓飾の選方」『婦人画報 第 316 号』，1931.

## 注

- 1) (内部の意)室内装飾。『広辞苑 第五版』，岩波書店，1998 より。
- 2) 『日本家庭大百科事彙第二巻奥付』，富山房，1928 より“室内装飾”の意味を示す。：「室内といふ空間に於ける立体感覚の美の表現。(中略)すべての室内装飾品が，彫刻的のものにせよ，絵画的のものにせよ，悉くこの感覚のもとに統一されて取扱われるものであること，一それが室内装飾の根本精神であらねばならぬ。」
- 3) 杉本文太郎(1911) p.48 によると，「當時其装飾は常に翠簾を懸け帷を垂れ，壁代を用る屏風を建つる等の如き

に過ぎず、専ら前面の中庭に其美を借り、謂はば室内頗る清楚の趣きを重じたのであります」とある。

- 4) 杉本文太郎(1911) p.501 より、「總てのものの色の調和に注意を拂ふこと」とある。
- 5) 杉本文太郎(1911) p.541 では「更に以上の心得を以て、尚ほ一層の風情をもとめんとするもの、是ぞ實に我装飾の誇りとするところであります。」さらに「我は風情に伴ふの美を要求し、風情に依れるの美を要求するにありて、ただ美、ただ麗、ただ艶なるは、根底に感触を與ふるの力に足りないのであります。(同, p.543)と述べる。
- 6) 黒田鵬心：「春の室内装飾」『婦人画報 第 210 号』, 1923, p.47.
- 7) 『日本家庭大百科事彙第二卷奥付』, 富山房, 1928, p.66 より

## コミュニティ再編に果たす食育の役割と意義

福田 也 寸 子  
(武庫川女子大学・短期大学部・食生活学科)

### The significance of food education in the regional community

Yasuko Fukuda

*Department of diet Dietary life and Food Sciences, Junior College Division  
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

#### Abstract

In Japan, during to the explosive growth of economic condition after the war, traditional regional human relationship in the community has been considered to lose its place.

As rapid Westernization proceeds, flooding of new culture and lifestyle including sufficient supply of junk food forced Japanese traditional food culture and subsided style of human relationship to be apparently outdated and useless. However, on occasions of large-scale nationwide disasters like earthquakes, we inevitably come to recollect the importance and necessity of mutual support and collaboration in community as indispensable issues. Now people have realized that recovery of the traditional food culture and human relationship within the community to be crucial to overcome the most difficult obstacles when people suffer from such disasters. The author considers that it would be helpful to take the opportunity of conversation and communication during the common eating situation, for the restoration and preservation of human relationship. It will also harvest the sense of health, compassion and mutual understanding.

Enhancement of connection between people not only for supporting with each other but also to harbor empowerment, would contribute to the social regeneration. In this paper, some historical review and consideration of roles played by food culture among the communities are made for the restoration of human relationship in community.

A potential action plan for this end is also proposed.

#### 1. はじめに

「コミュニティ」という概念は、1969年の国民生活審議会報告「コミュニティ～生活の場における人間性の回復～」において日本で初めて公的に登場したコンセプトであると言われる<sup>1)</sup>。

コミュニティの源流は自治会・町内会(以下「自治会等」という)であるとされ、自治会等は日中戦争の頃から日本各地で組織され始め、1940年に、内務省の「部落会町内会等整備要領」により、市には「町内会」、町村には「部落会」が国によって法的に整備されることとなった。当時の自治会等は国策の徹底を図るために、行政の末端組織として整備されたものであり、本来の自治集団としての性格は薄められ、もっぱら国策遂行のための政府機関の下部組織として役割を担っていた。

第二次世界大戦の進行とともに、自治会等は、戦争に国民を総動員するための組織の性格を強めていき、戦時中は大政翼賛会の下部組織としても位置付けられた。そういう理由から、戦後、自治会等は、廃止・解散が命じられた。政令の失効後は、再び各地で自治会等が再結成されることとなるが、それらは戦前のような行政の末端組織としてではなく、住民の自治組織として、行政組織とは無関係な存在と

して位置づけられることとなった<sup>2)</sup>。

1960年代、日本は高度経済成長期を迎え、物質的・経済的に急成長を遂げることとなったが、その過程で、都市部では労働力(新住民)の流入、生活圏の広域化、核家族化・個人化の進展、生活スタイルの多様化等が進んだ。農村部では労働力(若年層)の流出、過疎化・高齢化の進展等がみられるなど地域社会が大きく変容した。

その不都合として生じた問題の一つに、地縁を基盤とした伝統的な地域共同体の崩壊があげられる。地域における帰属意識や連帯意識の希薄化が進み、これが新たな地域問題(犯罪等の増加、個人化の進行に伴う孤独死・自殺などの諸問題、新旧住民の対立等)の誘引にもつながることとなった。

1980年代後半から1990年代初頭にかけての「バブル景気」は経済優先社会をつくったが、バブル経済の崩壊後は、国内景気が急速に低迷していく中、1995年1月に、「阪神・淡路大震災」が発生することとなる。この大災害は、地域に甚大な被害を及ぼしたが、その反面では、地域のつながりや助け合いの精神を含めた地域コミュニティの機能・役割の重要性を地域内外に改めて認識させる大きなきっかけとなったとされる<sup>2)</sup>。

一方、経済の成長とともに生活は豊かさを増していったが、健康問題に目を向けると食習慣の乱れ等に起因する、生活習慣病患者及びその予備軍が増えてきている。今や、健全な食生活の実践や健康の確保等を図るために、自らの食について考える習慣や食に関する様々な知識と食を選択する判断力を養う必要性が高まってきている。食育を健康問題の一環として広く浸透させ、定着させていくことが迫られている。

筆者は、病院管理栄養士として在職中にコミュニティ機能を活用した形式で糖尿病栄養教育を行ってきた<sup>3)</sup>。糖尿病の食事療法という食育が、高齢糖尿病患者の療養意欲を維持向上させただけでなく、医療スタッフの自己成長にもつながるという成果をもたらした。そして、食育が人と人とのつながりや、コミュニティ機能の立て直しに役立つのではないかという思いに至った。

そこで、これらの問題をあわせて解決するには、地域において住民が、健康問題や生活問題の一部として食育に取り組む過程で、住民意識が醸成されていき、改めて、生活基盤としての地域社会を心の拠り所として取り戻せるのではないかと考え、コミュニティ再編に果たす食育の役割と意義について考察した。

## 2. コミュニティ型の環境下における糖尿病療養教育

筆者は、病院在職中に、高齢糖尿病患者に対し、糖尿病教室を行ってきた<sup>3)</sup>。職種や所属の壁を取り払いボーダーレスな療養環境をつくり実施してきた。患者同士あるいは患者と医療スタッフの間の境界線を取り外して、人と人がふれあいを多くもつという小さなコミュニティを設営して行った。

コミュニティの意味は、「人びとが共に生き、それぞれの生き方を尊重し、主体的に生活環境システムに働きかけていくこと」と定義されているが<sup>4)</sup>、本事例では、糖尿病の療養のしかたを学ぶという課題を設定した共同体の中で、無理なく楽しく取り組む糖尿病療養という、患者ニーズに適合したサービス・システムづくりと、食事療法の具体化として、安心安全で美味しい創作糖尿病食を提供するという積極的な行為概念を付加している点、加えて、ボーダーレスな療養環境に配慮した点から、コミュニティ型の環境下における療養教育と位置づけた。

昨今、多くの病院では、糖尿病療養教育が治療の一環として実施されている。個別指導や集団指導、講義式や討議式などさまざまな方法で工夫を凝らして行われているが、筆者は、コミュニティ型の療養教育という方法を考案した。

糖尿病治療において、自己管理は重要とされ、臨床現場では、患者教育が少なからず行われている。目的の一つは、自己管理の動機づけであるが、高齢の糖尿病患者では、種々の生理的能力(記憶力、理解力、聴力、視力、活動力など)の機能が低下し、さらに元に戻りにくいため、その動機づけが難しい。

あまつさえ、動機づけがなされても精神的背景、家族関係などの社会的条件の個人差が大きいため、



場合によっては治療が行われないことがある。そのため、長期通院患者や罹病期間が長い場合などでは、コントロール不良から合併症が発生しやすいなど問題が残されている。

また、長期慢性化した高齢糖尿病患者では、療養意欲の低下に加え、療養指導を直に経験する機会の不足が重なって、継続した療養が行われにくい。さらに、生命予後にかかわるがんや循環器などの疾患を有すると糖尿病治療が行われないことが多い。がんや循環器疾患の専門病院において、このような背景や特質をもつ高齢糖尿病患者に対し、同一患者が繰り返し実践できるコミュニティ型の療養環境下で、クリティカルパスを立ち上げ実践してきたのは、以上のような理由からである。

療養指導の主眼には、糖尿病患者の主体性を重視して、その場で成果を実感してもらい、結果的に自己管理意欲を高めて糖尿病療養を行えるように、システムを構想し、実践編として体験実食型糖尿病教室を行った。

糖尿病教室は、基礎編と実践編を行い、基礎編では、初期の知識提供や知識の整理を目的とした。専門医の講義、管理栄養士による栄養食事指導、臨床検査技師による血糖・尿糖測定の実技、看護師による運動指導、足病変を予防するためのフットケア、偶発的な病気が起こった時の対応のしかた、シックデー時の話などを講義形式で行った。

実践編では、基礎編では得られない知識の講義や実技指導の特別講義と、患者一人ひとりの個別カロリーに調整した、糖尿病食のお弁当の実食とをセットにした、体験型の糖尿病教室とした。お弁当は、健康志向のテーマを設定し、毎回内容の異なる創作糖尿病食とし、患者一人ひとりの個別カロリーに調整したものを食べて、見て、勉強して、という体験実食型の内容とした。

患者ニーズに適合した、サービス・システムという点を重視して、グループ討議ができる患者参加型の食事会とした。前後左右の人と交流がもちやすいように座席を円座に配席した。2ヶ月に1回実施し、繰り返し参加を可能とし、複数回の参加を前提とした。

指導場面では、調理現場のスタッフも複数名が参加し、患者との接点を多くつくり共有した。患者とコメディカルスタッフとのふれあいが、多くなるようなボーダーレスな環境作りに考慮した。糖尿病の食事療法という食育が、直接治療効果に表れる取り組みなので、自然に話に熱が入り、若いスタッフは患者からの質問に対して適切に応えられるよう専門的知識や技術の向上を目指して自発的に努力するようになった。

さらに、さまざまな価値観をもたれる患者からは、人生の先輩として教えられることも多く、色々なものの見方や考え方を習得する機会にもなった。世代を超えた有機的な意味空間が構築されていった。スタッフが提供する専門的知識や技術は、われわれ自身の内面に存在する価値観や倫理観というフィルターを通して患者へ提供されるので、自己成長が促され、価値観や倫理観が高まることにもつながった。

この方法は、参加する患者たちには、楽しい場を提供すること、実施するスタッフ側は、常に真摯なプロ精神に基づき研鑽を重ねる場とすることにつながり、毎回栄養学的な探索性の高いメニュー構成の中で、血糖コントロールとの関係を常に問いかけるチャンスを得た。患者側では、スタッフが患者の価値観を尊重し療養支援を行うので、エンパワメントされた患者の自立が促され、療養意欲の継続維持から病気の快復に貢献したと考えられる。

患者教育は、ひな形の押しつけ的なものではなく、個々の患者の背景や理解度に合わせて実施されることが望まれる。食事体験などを盛り込んだ体験型教室の有用性が多数報告されているが、高齢者においては、従来の方法に加えて、本事例のような体験実食型の内容と、多職種にわたる医療スタッフとのふれあう環境を追加することで高い効果が得られた。

高齢者の特質とニーズを柔軟に解決する工夫や方法が、課題とされるならば、コミュニティ型の療養環境を取り入れた本事例は、基礎的学習の繰り返しだけでなく、現実的な問題である食事療法という命題について、人と人とのふれあいのなかで自主的に反復学習が行える教育方法である。そこで提供される教材(お弁当)が、治療に積極的に役立つ栄養組成内容であれば、さらに高い効果が期待できると思われる。

未知の患者同士であっても、参加回数を重ねるごとに次第に仲間意識が芽生えて行った事実や、患者

と医療スタッフ間の精神的な壁がなくなり、ある種のコミュニティメンバー同士として、つながっていったことは、コミュニティ機能の効果として裏付けられる。これは、高齢糖尿病患者を対象とした最小単位のコミュニティ活動と言えるが、コミュニティの原理、機能、必要性を内包しており<sup>4)</sup>、それを実体験するよい場を提供できたと考えている。

さらに、一個人の偉大なリーダーシップによる主導ではなく、医師以外の多職種にわたる医療スタッフがプログラムにかかわり、何人もの等身大のリーダーになって、多くのふれあいがつくれたことも実効が得られた要因の一つと考えられる。

### 3. 地域における食育の役割と意義

地域は人の共同生活の場であり、人びとが共同してかわれる場として開かれた存在である。見知らぬ人同士であっても、地域に共に集まれば、コミュニティメンバーに変わることもあり、人と人のつながりや助け合いの精神が育まれる場が地域コミュニティである。かつて食育は、地域の中で完結されていた。親から子へという家庭内だけでなく、この開かれた存在の地域が食育に重要な機能を果たしていた<sup>5)</sup>。

食生活史をみると、人間は、食物を取捨選択しながら、おいしさを指標として食の文化と科学をつくってきた。そもそも、わが国では、食文化として和食が伝承されてきた。日常の食事には、「褻(ケ)」と「晴(ハレ)」と言われる日があり、「ケ」とは普段の和食、「ハレ」は毎月の節句や行事、慶事や法事の折の和食が出されていた<sup>6)</sup>。普段は質素な和食であるが、「ハレの日」には伝統文化や伝統食などがだされていた。「ハレの日」にだされる伝統食やご馳走は、地域や近隣において住民同士が助け合ってつくる場合もあった<sup>5)</sup>。このような食文化、食習慣をとおして家庭や地域で食育が行われていた。

しかし、周知のとおり、高度経済成長期以降、人は農村から都市へと移動し、過疎となるにしたがって、村から祭りなどの伝統行事が消えつつあり、地域から伝統文化や伝統食、郷土食などを伝承する機能が次第に低下していった。さらに、家族は、複数世代同居の大家族から核家族化、あるいは、単身世帯が増加し、女性は社会に出る、こういった理由から家庭内や地域での食育が十分にできなくなっていった。食育の基本は家庭にあることに間違いはないが、今こそ食育を側面から支える地域の役割や意義を見直す機会と考えるべきである。

現代の地域の事情に応じて、コミュニティがうまく機能している事例に話を進める。横浜市都筑区自治会や、東京都立川市の都営上砂町の大山団地のケースである<sup>7)</sup>。前者の自治会では、子育て中の母親が役員を引き受け、年配住民がサポーターに回って活動しており、夏祭りは毎年活発に行われている。後者の例では、サポーターは、過去に助け合って子育てをしてきた年配の団地住民で、保育士や看護師、栄養士の経験者も存在する。親の出産からPTAの会合で外出する際の子どもの一時預かりから、離乳食、しつけ、思春期までの育児相談、栄養相談などの支援を無料で行っている。注目したいことは取り上げられている問題として、子どもや家族の食に関すること、食育が必ず含まれていることである。食の問題には離乳食以外に、独居高齢者の食の話も話題になることがあるだろう。普段の食事の話題は、それぞれの家庭の内側を自然な形で近隣の家庭に開示していることと同一であり、それが隣保における人と人のつながりにもなる。地域における食育の役割と意義は、人と人のつながりを強めたり、改善したりする可能性を有していることに注視したい。

概ね、日本人の食生活において、戦後を通じての長期的変化として、洋風化、個人化、食事パターンの変化があげられるが<sup>8)</sup>、糖尿病やメタボリックシンドロームを中心とする生活習慣病患者の増加との関係性を否定することはできない。高度成長期以降の食生活の欧米化、孤食化が、高カロリー、高脂肪のたべものを、自由な時間に、好きな量だけ食べるという飽食や過食を創り出し、その結果として糖尿病を中心とする、多くの生活習慣病の温床を造るに至っている。厚生労働省「2007年国民健康・栄養調査」結果によると、糖尿病患者はおよそ890万人、可能性を疑われる人を合わせると2210万人<sup>9)</sup>、国際糖尿病連合(IDF)による2012年の調査報告<sup>10)</sup>では、日本の糖尿病人口は1067万4320人(世界ランキング

第6位)とされている。そしてこれらの95%が食事や運動などの生活習慣に起因する2型糖尿病であると言われている。当節、国民レベルでの健康に対して大きな懸念がもたれるゆえんである。ここに食の安全や、健康意識を盛り込んだ、新たな観点から食育の重要性が高まっている。

食育基本法は、2005年に公布された<sup>11)</sup>。近年の我が国の食をめぐる状況の変化に伴うさまざまな問題に対処していくためである。同法は、食育に関する施策を総合的かつ計画的に推進し、現在及び将来にわたる健康で文化的な国民の生活と豊かで活力のある社会の実現に寄与すること等を目的とし、2006年に施行された。

さらに、2008年度より「特定検診・特定保健指導」が開始され、食生活を含む生活習慣の改善と食育が重要項目として取り上げられた。地域では社会資源を活用した食育活動が展開されている。実践例として、食生活改善推進員による親子料理教室や、メタボリックシンドロームの知識の普及啓発など、子どもから大人までを対象に全国各地で幅広い食育活動の実践が地域ボランティアにより行われている<sup>12)</sup>。

本法は、全国民を対象とする食生活教育を体系化しようとするもので、国民一人一人が、生命を紡ぐ食の大切さに気づき、郷土の食文化や地域産業、食料供給、食の安全性などを包括的に学び、生涯にわたる望ましい食生活管理を体得し、豊かな食生活が育む健やかなところとからだをもつ人間形成を目指すとするものである。国民一人一人が食育を受ける人であり、する人であると謳われている<sup>11)</sup>。幼児期、学童期、成人期などライフステージを追って食の問題を解決すべく様々な施策が推進され、地域における食育の役割と意義が問い直されている。

#### 4. 食育と福祉活動

食は、単に身体健康づくりに重要であるだけでなく、こころを健康にし、コミュニケーションを円滑にし、ひいては人と人とのネットワークづくりに役立つ<sup>13)</sup>。さらに地域における食育は地域のあらゆる主体が、あらゆる機会にあらゆる場所において食育を側面からサポートしていくものであり、そこから人と人のつながり、地域をエンパワメントしていくことに貢献する<sup>5)</sup>。そして、コミュニティの再編の延長線上には高齢者福祉へのアプローチが見いだせるのではないかと考えられる。

食育を福祉活動と融合させて取り組み、実効をあげている、福井県小浜市の例がある<sup>14)</sup>。2001年に全国で初めて、「食のまちづくり条例」を制定して、食育活動を福祉活動としても充実させようとした連携である。その特徴は、豊富な食材という地域の特性を生かした、「生涯食育」である。本事例は、食育活動が順調に推進している成功例として紹介されており、子どもから大学生、成人に対してそれぞれのライフステージにおける食の課題の改善が行われている。その中で、高齢者に対しては、一人暮らしの高齢者の孤立を防ぐための配食サービスや料理教室が行われている。

高齢者においては、人間関係の希薄化した地域生活のなかで、孤独のなかに老後の生を追う暮らしが広がりつつある人もいれば、福井県小浜市のようにふれあいのなかで高齢期を過ごす人もいる。一人暮らし老人に食事を届けたり、ふれあい給食会がもたれたりしている地域が福井県小浜市以外にも全国的に広がっている<sup>15)</sup>。配食は、調理のできない一人暮らしの高齢者にとっては、明らかに安全網であり、会食は、人びとが集まって食べる楽しさを提供し、外出の機会ともなることから、高齢者の健康維持および自立支援に寄与することとなり、有用なサービスとなっている。調理は、業者またはボランティア、配食・会食場設営などは、ボランティアが担うことが多く、食材料費の一部を行政が補助するという体制をとっていることが多い。

しかし、現時点では食事やサービスの内容に基準はなく、スキルアップ研修や食育が必要であるとされている<sup>16)</sup>。内容は、実施者によりさまざまであるので、その質的改善が課題である。例えば、配食時の声かけは、高齢者とボランティアとのふれあいになるが、一定時間内の作業に追われて事務的な対応しかできない、ヘルパー、ケアマネージャー、友愛訪問、配食サービス事業者などと連携して、閉じこもりがちな高齢者の把握、呼びかけを行うことは、介護予防事業として有用であるが、個人情報保護



の点で実態をつかむことが現実的には難しい、などがある。会食では調理に手間と時間がとられ、せっかくの集いの場が食べるだけの場になってしまう、こともある。これらの問題の具体的な改善としては、スタッフの声かけをよりよいものに改善するための能力開発が必要であり、食育では旬の食材や行事食を取り入れることを指導援助する、季節にちなんだ食の話題や健康志向のテーマを提供する等の支援をする。さらには、保健センターとの協働による健康づくりミニ講座を併設するなどの対策も有用であろう。

地域における食育は、医療現場での食育とは異なるので、地域のさまざまな主体が有りのままの姿で参加することが望ましい。それぞれの主体において、どのような食育ができるのか、どのような食育を行えば効果的なのかを考えていく支援も必要である。併せて、コミュニティ型の環境下を構築できれば、高齢者、担い手の双方に意義ある効果が期待でき、質的改善が図られるものと思われる。また、食を主題とする支援活動が介護予防にどれだけ有効となるかを科学的な根拠をもって明らかにすることも可能となるだろう。

## 5. コミュニティ再編と食育

19世紀のドイツの社会学者フェルディナンド・テンニースは地縁や血縁、友情により自然発生した伝統的な社会形態をゲマインシャフト(共同体)と表現し、その対概念で近代国家や会社、大都市のように利害関係に基づく人為的に作られた社会をゲゼルシャフト(利害集団)と類型化して表出し、人間社会が近代化するとともにゲマインシャフトからゲゼルシャフトへと変遷していくものと考えた<sup>17)</sup>。

前近代のわが国においては、農業生産を中心に地縁や血縁等により伝統的に社会共同体が存在していた。個人よりも集団の論理が優先されていた。生活水準が低かった時代、人は一人では自分の生活に必要な生活資源のすべてをまかなえないために、複数の人間と関係をもって助け合わざるを得なかった。そこには自助とともに共助の精神が基盤にあった。

近代に至り、社会の成熟、経済の成長により、豊かな生活が享受できるようになった。かつてのように地域や近隣に共助を求めなくても貨幣を使って自由な意思で生活ができるようになった。近代社会は人びとを古い共同体から引き離し、個の確立を進めていった。伝統的共同体の掟から自由に自分自身の欲望や理想を追求できるようになった。そして、地域における人と人とのつながり意識や仲間意識が希薄化していった<sup>18)</sup>。

今後、「個」を中心とする考え方がさらに強まってくると、地域社会からの離脱、地域問題への無関心・放置から、地域コミュニティは弱体化し、連帯意識や共助意識はますます脆くなっていくのではないかと危惧する。便利で豊かになった物質文化の成長とは逆に人と人とのつながり意識が薄くなった精神文化社会との乖離を憂慮する。

新たな時代における地域コミュニティとして、旧自治省からの流れを汲む総務省においては、2007年にコミュニティ研究会を設置し、地域コミュニティ活性化に向けた取り組みを再開した。2008年には、地域コミュニティを含めた多様な地域の主体が一体となって地域課題解決に取り組む力“地域力”の強化を最重要課題に掲げ、地域コミュニティの活性化を含む各種取り組みを展開するなど、これまでとは異なる新鮮な観点(地域力の創造)から、地域コミュニティの重要性をとらえ、その活性化に向けた取り組みを急ピッチで進めている<sup>2)</sup>。

これから構築していく人と人とのつながりづくりには、人間関係が破綻しないような条件やしくみづくりが必要である。誰かが与えっぱなしだったり、受け取りっぱなしだったりすると、人間関係はうまくゆかない<sup>18)</sup>。新たな価値観に基づき、個人の尊厳を尊重し、個人情報を守秘するなどに対してもお互いに尊重し合う関係づくりが大事である。

さらに現代では、地域に密着したものではない職場や趣味のサークルなど志縁的なコミュニティが広まってきている。ボランティアやNPOなど、地域を限定することなく、特定の目的・テーマのもと「志」をもって活動を行う新たな地域づくりの担い手である。行政による取り組みも、それらの活動に対する



支援に、より重点が置かれるようになって<sup>2)</sup>。このようなコミュニティでは自由な意思に基づく人間関係やプライバシーに重きが置かれるので、理解を深め、地縁型コミュニティとバランスよく調和させていくことを理解し尊重していかなければならない。

ところで、価値観の変化は、物量の豊富さも後押しして、食生活に対する意識を必需・基礎的なものから、美味しいものを楽しむという感覚へと向かわせ、自由な食生活や孤食による飽食や過食を創り出した。その結果、糖尿病を中心とする生活習慣病の温床を造るに至った。これらの問題を改善するために食育基本法が策定されたことは先の症で述べてきたとおりである。食育を浸透させて食の問題の増大に歯止めをかけなければならない。2010年に実施された国勢調査の結果<sup>19)</sup>によると、今後、単身世帯の数が、夫婦と子どもがいる世帯の数を上回って、最も多い世帯類型になると言われている。家族が縮小されて、主婦や調理者が存在しないかもしれない。年中無休で営業時間の長いコンビニエンス・ストアで買い物ができれば、食事を摂ることに困ることはない。しかし、生活習慣病の温床を造らないように、消費者が常に安全安心の食知識をもちつづけて、長期的な健康を指向した食嗜好を身につけておく必要がある。20年後の家族構成や暮らしぶりは多様化しているかもしれないのである。

## 6. 終わりに

本稿では、地域において住民が健康問題や生活問題の一部として食育に取り組む過程で、改めて生活基盤としての地域社会の意味づけや食育の果たす役割を考えた。食は、健康を左右する重要な要因である一方、心身にわたる個人レベルのエンパワメントに寄与する要素をもつ。同時に、社会心理的機能としての共感的コミュニケーションや、人々がつながる気持ちによる社会性の活性化が期待できる。したがって、食の問題を改善する食育は、自助として自分自身の身体健康づくりに重要であるだけでなく、こころの健康やコミュニケーション、さらには人と人とのネットワークづくりなど、共助の精神を培い、地域でのつながりを強めるという社会的意義を有していると理解した。

今後の課題として、コミュニティの再編に住民自身の主体的な実践をどのように組織化できるか、食育を、住民参加を促す手立ての一つとしてどう活かし、暮らしの管理と地域社会への参加とをどう運動させるかが大事である。

最後に、現時点で最もアプローチしやすい課題は、一人ひとりがさまざまな主体の一人としての自覚をもってボランティア活動に関わっていくことである。食がテーマであれば、敷居は高くないので誰もが参加しやすいのではないだろうか。一人ひとりの小さな心がけが何より大切であり、何人ものありのままのリーダーになることを目指すのである。そして、あらゆる機会とあらゆる場所において食育推進を実践してゆく。食育を側方支援にしてコミュニティの再編に努める。コミュニティは、人びとの心の拠り所として大切であることを念頭において、地域住民一人ひとりが、自分の生活とのかかわりの中で、課題を共有・共感し、かつ具体的な活動に結びつく参加をしてゆく。とりわけ、重要なことは住民の感情の込められたコミュニティ意識を醸成させていくことである。

## 謝 辞

本稿は、筆者が神戸親和女子大学発達教育学部福祉臨床学科の卒業発表内容を元に、同大学菊池信子教授の指導のもとに執筆したものです。また、研究内容の一部は大阪府立成人病センターで中島 弘医師(当時主任部長)に指導を受けて実施しました。さらに、本学文学部心理・社会福祉学科の大西次郎教授に各種助言を頂きました。三先生に深謝いたします。

## 引用文献

1) 社会福祉士養成講座編集委員会(編)：新・社会福祉士養成講座 9 地域福祉の理論と方法 地域福祉論 第2版。

- 中央法規, 東京, 2011, 28-47
- 2) 愛知県地域振興部地域政策課：地域コミュニティの歴史的経緯. 2008  
[http://www.pref.aichi.jp/cmsfiles/contents/0000024/24554/1syoun-2\(p.17-25\).pdf](http://www.pref.aichi.jp/cmsfiles/contents/0000024/24554/1syoun-2(p.17-25).pdf)
  - 3) 福田也寸子, 竹内充代, 中島 弘：高齢患者の体験実食型糖尿病教室参加がもたらす効果について. 日本病態栄養学会誌 7：135-142, 2004
  - 4) 市川一宏・牧里毎治(編著)：新・社会福祉士養成テキストブック 11 地域福祉論. ミネルヴァ書房, 京都, 2007, 26-38
  - 5) 上岡美穂：食生活と食育 農と環境へのアプローチ. 農林統計出版, 東京, 2010, 111-130
  - 6) 笹井良隆：大阪食文化大全. 西日本出版社, 大阪, 2010, 69-80
  - 7) 2010 年 6 月 14 日朝日新聞朝刊
  - 8) 山口貴久男：食のマーケティング. 日本経済新聞社, 東京, 1981, 10-185
  - 9) 厚生労働省：19 年版国民健康・栄養の現状 平成 19 年厚生労働省国民健康・栄養調査報告より. 第一出版, 東京, 2010
  - 10) 糖尿病ネットワーク：日本は世界第 6 位の糖尿病大国 急増する糖尿病人口 - 糖尿病 NET- 資料室. 2012  
<http://www.dm-net.co.jp/calendar/2012/016536.php>
  - 11) 内閣府：食育白書. 内閣府, 東京, 2009
  - 12) 農林環境課(森田倫子)：食育の背景と経緯 - 「食育基本法案」に関連して -. 国立国会図書館：ISSUE BRIEF NUMBER 457 (Oct.29.2004)
  - 13) 佐甲隆：保健師活動と食の力 食を通じたコミュニティ・エンパワメント. 保健師ジャーナル 64 (1) 2008
  - 14) 福井県小浜市役所食のまちづくり課：小浜市の食育について. 2012  
<http://www.city.obama.fukui.jp/syoku/uptionsid/page0.htm>
  - 15) 山崎丈夫：地域コミュニティ論 地域住民自治組織と NPO 行政の協働. 自治体研究社, 東京, 2003
  - 16) 山本茂・奥田豊子・濱口郁枝(編)：栄養科学シリーズ NEXT 食育・食生活論社会・環境と健康. 講談社サイエンスフィク, 東京, 2011, 124-126
  - 17) 浅野智彦(編著)：考える力が身につく社会学入門. 中経出版社, 東京, 2010, 52-62
  - 18) 倉沢進：コミュニティ論 地域社会と住民運動. 放送大学教育振興会, 東京, 1998
  - 19) 総務省統計局：平成 22 年国勢調査 抽出速報集計結果. 統計センター, 東京, 2011

## スマートフォンの普及による若者の電車内行動の変化 —OOH への影響を考察する—

山 川 由起子, 赤 岡 仁 之  
(武庫川女子大学生生活環境学部情報メディア学科)

### The spread of smartphones and the behavioral changes of young people in a train

#### A consideration of the influence on OOH

Yukiko Yamakawa, Hiroyuki Akaoka

*Department of Informatics and Mediology, School of Human Environment Sciences,  
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

#### Abstract

When considering the lifestyle of young people in recent years, a smartphone is an indispensable tool and it can be said to have great influences on their lives. On the other hand, advertising, such as television and internet are abundant in the streets. Especially, OOH (Out Of Home media) such as transportation advertising and outdoor advertising has been the focus of attention. This is because opportunities to see outdoor media have been increasing with an increase of young people's going-out time.

Then what do young people do during going out? On weekdays, young people as students are spending a lot of school hours and the way to the school in the train. In such a situation, it will be said that a hanging poster in a train is an important advertising media.

However, we can see young people addicted to a smartphone in a train. They don't seem to be seeing a hanging poster. It is guessed that using a smartphone has a possibility to give a certain influence on advertising.

Therefore, in this thesis, we'll clarify the following two points. What kind of influence has the spread of smartphones had on young people's behavior in a train? What kind of influence has the behavioral changes in a train had on advertising in a train?

#### はじめに

近年の若者のライフスタイルを考える上で、スマートフォンは欠かせないツールである。屋外で利用されることを前提としているスマートフォンは、今まで屋内でしかできなかったインターネット接続が可能になったことや、SNS の利便性向上という追い風の中、着実に利用者数を伸ばしている。急激な勢いで、そのシェアを伸ばしているスマートフォンは我々の生活に多大な影響を与えていると言えよう。

一方、世の中にはテレビやインターネットなど、様々な広告で溢れている。その中でも、電車の中吊り広告などの交通広告や屋外広告といった OOH (Out Of Home Media) が注目されている。これは近年の若者の外出時間の増加により、屋外のメディアに触れる機会が増加したためである。では、外出している若者は外で何をしているのか。NHK 生活者調査の「2010 年 国民生活時間調査報告書」によると、平日における学生の外出時間 10 時間 46 分の内、実に 10% の 1 時間 12 分を通学時間が占めている。その内

のほとんどの時間を電車内で過ごしている可能性が高い。こういった状況下において、中吊り広告は重要な広告媒体と言えよう。

ところが、実際に電車内を見てみると、スマートフォンに没頭している若者の姿をよく目にする。彼らは中吊り広告を見ているようには思えない。スマートフォンの使用は、広告に対して何らかの影響を与えている可能性があるのではないかと推察される。

そこで、本論においては、スマートフォンの普及が若者の電車内行動に与える影響と、電車内行動の変化がOOHの中でも中吊り広告に与える影響についてアンケート及び聞き取り調査を用いて、検証していきたい。

## 1 若者の今日的ライフスタイル

### 1-1 スマートフォンと若者

2010年より携帯電話端末市場を活性化させているのがスマートフォンである。スマートフォンが普及して、若者はいつでもどこでも情報を手に入れられるようになった。2010年のスマートフォンの出荷台数は前年比365.4%の855万台へと大幅に増加した。契約数も2011年3月で995万契約となった。内約半数をiOS、つまりiPhoneが占める。Androidは386万契約で40.4%を占め、国内ではiPhone対Android連合という構図が鮮明となっている(電通総研編(2012))。電通が2011年6月に実施した調査によると、2011年6月のスマートフォン利用者数は、iPhoneが621万人、Androidが614万人であった。ともに女性よりも男性が多く、年齢層では20歳代前半が最も多くを占めている。また、既存の携帯電話(フィーチャーフォン\*)利用者と比較すると、スマートフォン利用者は、インターネットサービスをより多く利用していることが明らかになった。スマートフォンに切り替えることで、モバイルインターネットの利用時間も増加する。特に、ソーシャルメディアの利用時間が増加する傾向にある(電通総研編(2012))。以上のことから、今日の若者にとって、スマートフォンは欠かすことのできないツールになっていると推察される。

### 1-2 若者の外出行動

#### 1-2-1 外出時間

近年若者が内向き志向にあると言われる。「最近の子供は外で遊ばずに、家でゲームばかりしている」という文言も一度は耳にしたことがあるだろう。果たしてそれは事実なのであろうか。ビデオリサーチの「メディアコンタクトレポート(MCR)」によると、実は人々の外出時間は増加している。12～19歳の男女の1日の外出時間は2000年の9時間3分から2007年には9時間42分へと大幅に伸び、20代も9時間1分から9時間28分と同様の傾向を示した。これは、大都市圏を中心とした店舗・街の24時間化や魅力的なエンタテインメントの増加、さらに近年の景気の回復基調により労働時間やレジャー時間が増加したことが要因として考えられる(電通編(2008))。また、NHK生活者調査の「2010年国民生活時間調査報告書」でも同様のデータが出ている(表1)。2000年、2005年、2010年の5年間の在宅時間の推移は10代の女性で14時間12分、13時間25分、

| 【全員平均時間】<br>(時間 分) |       | 平日    |       |       |       |
|--------------------|-------|-------|-------|-------|-------|
|                    |       | 1995年 | 2000年 | 2005年 | 2010年 |
| 国民全体               |       | 15:08 | 15:18 | 15:16 | 15:13 |
| 男                  | 10代   | 13:53 | 13:41 | 13:13 | 13:06 |
|                    | 20代   | 11:56 | 12:03 | 12:07 | 12:11 |
|                    | 30代   | 11:41 | 11:12 | 11:23 | 11:58 |
|                    | 40代   | 12:01 | 12:09 | 11:36 | 11:07 |
|                    | 50代   | 12:46 | 11:54 | 12:45 | 11:59 |
|                    | 60代   | 16:07 | 16:23 | 16:04 | 15:26 |
|                    | 70歳以上 | 19:06 | 19:55 | 19:01 | 18:57 |
| 女                  | 10代   | 13:44 | 14:12 | 13:25 | 13:15 |
|                    | 20代   | 14:26 | 14:11 | 14:17 | 14:13 |
|                    | 30代   | 17:08 | 16:13 | 15:31 | 15:36 |
|                    | 40代   | 16:27 | 16:34 | 15:48 | 15:55 |
|                    | 50代   | 17:06 | 16:43 | 16:22 | 16:36 |
|                    | 60代   | 19:08 | 18:55 | 18:33 | 18:20 |
|                    | 70歳以上 | 20:19 | 20:31 | 20:19 | 19:46 |
| 有職者                |       | 13:33 | 13:14 | 13:15 | 13:13 |
| 主婦                 |       | 20:04 | 20:23 | 19:56 | 19:55 |
| 無職                 |       | 19:57 | 20:07 | 19:53 | 20:03 |
| 学生                 |       | 13:50 | 14:06 | 13:22 | 13:14 |

表1 在宅時間の変遷(男女年齢層別・職業別)



13 時間 15 分、20 代女性では 14 時間 11 分、14 時間 17 分、14 時間 13 分となっており、両世代ともに在宅時間は年々減少しているということがわかる。学生全体を見ても、14 時間 06 分、13 時間 22 分、13 時間 14 分というように、在宅時間は減少傾向にある。また、有職者や主婦、無職と比較しても、在宅時間の推移において、学生の減少率は大きいことが伺える。これらのことを見てみると、思っているよりも若者の内向き志向は進行しておらず、むしろ外出時間が増加しているのである。

## 1-2-2 電車内通学時間

では、外出している若者は外で何をしているのか。NHK 生活者調査の「2010 年 国民生活時間調査報告書」によると、学生の平日の在宅時間 13 時間 14 分、つまり外出時間 10 時間 46 分の内、学業に当てている時間は 8 時間 14 分、通学に 1 時間 12 分、社会参加に 1 時間 59 分、その他の会話・交際やレジャー活動などに 4 時間 22 分などとなっており(表 2)、外出時間の内実に 10% を通学時間が占めている。また、その内のほとんどの時間が電車内での時間となる(NHK 放送文化研究所編(2010))。これらのデータより、電車内の時間は若者にとって大事な時間になっていると考えられる。

ここで、その長い電車内時間を若者達はどのように過ごしているのかを考えてみる。よく見かける行動としては、眠る、音楽を聴く、読書、携帯端末操作などであろう。電車内で人々は多種多様な行動をとっている。中でも特に最近多いのが携帯電話やスマートフォンを操作している人である。電車に乗り込むなり鞆から携帯端末や音楽プレイヤーを取り出し、己の世界に没頭していく。携帯電話やスマートフォンは外界と自己とを遮断するためのツールと化している。こうした状況から、携帯端末、特にスマートフォンの普及により、電車内における若者の外出行動が変化してきたのではないかということが推察される。

|         | 平日<br>行為者 |              |
|---------|-----------|--------------|
|         | 比率<br>(%) | 平均時間<br>(時間) |
| 睡眠      | 99.7      | 7:15         |
| 食事      | 98.3      | 1:33         |
| 身の回りの用事 | 99.2      | 1:10         |
| 学業      | 12.9      | 8:14         |
| 通学      | 13.3      | 1:12         |
| 社会参加    | 6.5       | 1:59         |
| 会話・交際   | 18.6      | 1:43         |
| レジャー活動  | 46.0      | 2:39         |

表 2 一日の行為率・行為平均時間(平日)

## 2 広告メディアの現状

### 2-1 様々な OOH

世の中は様々な広告で溢れているが、それらの広告の一つに屋外広告がある。屋外広告とはビル上の看板やネオンサインなど、不特定多数の人々に向けて展開される広告の総称である。ビルや電柱の看板広告、ビル壁面の垂れ幕や大型ビジョン、競技場の大型スクリーンに映し出される広告映像などにまで、市場が急速に広がっている。電車やバスの車体に掲示する広告も道路を行きかう人々の目に触れるため、屋外広告として法規や条例の適用を受けるが、広告業界は車内や駅構内の広告と合わせて交通広告として扱っている。その交通広告とは、公共交通機関、民間の駅、バス停、空港などの構内、各種施設、車両などを利用した広告を指す。様々なスペースを生かして展開できる上、趣向を凝らした表現が可能といった特徴もある。近年はデジタル技術を応用して、ディスプレイ画面に広告を含む数々の情報を発信するデジタルサイネージ(電子看板)が増えている。この交通広告、屋外広告、広告展開エリアでのイベントなどを総称して、OOH (Out Of Home media)と呼ばれている(日経広告研究所編(2010))。

### 2-2 OOH の台頭と中吊り広告の有用性

OOH への関心は近年高まりを見せている。『電通広告年鑑'08—'09』によると、その要因は①生活者の変化、②広告主の変化、③ OOH 媒体の変化である。①生活者の変化とは、生活者の外出時間が増加しているという点である。1-2-2 でも述べたように、若者の 1 日の外出時間が大幅に伸びていることに伴って、OOH への接触率が高まったと言える。②広告主の変化とは、OOH が消費者の買い場に近いポイント

トで広告に接触させることが可能であるという考え方が広告主に浸透したことにより、その変化が OOH の拡大を促す結果となったことである。③ OOH 媒体の変化とは、鉄道会社の変化、行政・法令の規制緩和、行政の民間活用の活発化、都市圏における大規模再開発、技術革新により、ターゲットをより細分化した広告制作ができるようになったことである(電通編(2008))。

また、OOH の強みとして、安価なことと認知の持続性が挙げられる。OOH の露出度が 1000 世帯に到達するために必要なコストは、テレビのそれと比べると 7 分の 1 で済むので、テレビ広告よりも多くの広告を打つことが可能である。また、OOH はブランド名や企業名を 1 ヶ月、3 ヶ月、6 ヶ月と露出し続けることが中心となっており、一過性ではなく持続性があるというところから、「認知持続性」を可能にするメディアである(清水公一, 亀井昭宏(2009))。特に大都市で強いのも交通広告の特徴で、「マスメディア」としての活用も可能な点、テレビとの出稿相乗効果が期待できる点、展開する駅や手法を考慮すれば、高校生や大学生など、特定の、かなり絞り込んだターゲットに対してとても効率よくアプローチできる点などが挙げられる。最近の調査では、家にいる時間の方が外出する時間より少なくなっている。外で情報を入手あるいは発信できればインホームのメディアと対等以上の関係になりうる。こういった状況の中で、関東・関西地区で、電車で週 1 回は乗る人は 6 割強にのぼり、通勤・通学で 60 分間前後乗車している。しかも、電車の中での広告はほとんど強制視認の状態である(電通編(2008))。OOH 以外の伝統的なマス媒体は、受け手がそのメディアから情報をとろうという接触の意思をもったとき、初めて機能を発揮するメディアであるのに対し、OOH は屋外に出れば、自分の意思とは関係なしにその情報が強制的に入ってくるものである(清水公一, 亀井昭宏(2009))。これらの「長時間乗車」×「強制視認」はテレビに勝るとも劣らない効果があり、中吊り広告は OOH の中でも極めて有用な広告手段であると言える。

### 3 「スマートフォン、電車内行動、車内広告」の関係性についての調査とその考察

#### 3-1 調査目的及び調査方法

では、実際に若者は電車内でどのような行動をとっているのだろうか。電車内での若者の行動を観察してみると、携帯電話やスマートフォンを長時間使用している人が多くみられ、皆一様に個人作業をしており、広告を見ている人は少ないように思われる。こういった状況下では、前述した中吊り広告の有用性は低くなってしまう。つまり OOH への接触が低下しつつあるのではないかとということが推察される。そこで、スマートフォンの普及が現在の若者の電車内行動にどのような影響を与えているのか、電車内行動の変化が中吊り広告にどのような影響を与えているのかということを調査するために、武庫川女子大学情報メディア学科の 2 回生 112 人を対象としたアンケート及び聞き取り調査を行った。調査方法として、12～14 人の 9 つのグループを作り、グループごとに電車内の行動と携帯電話及びスマートフォンに関してのアンケートをとった後、聞き取り調査を行った(調査期間は 2012 年 4 月 17 日から 6 月 26 日で、有効回答率は 100% であった)。聞き取り調査では、アンケートの回答を掘り下げてのヒヤリングを行った。主な調査内容は以下の通りである。

- 電車通学をしているか
- スマートフォンを持っているか
- 電車でどれくらいの頻度でスマートフォンを使用しているか
- 電車に乗っている際、何をしているか
- スマートフォンを持つことによって、電車内の過ごし方は変わったか
- 広告を見ることは好きか
- 広告をよく見るか
- 中吊り広告などの電車内広告を見るか
- 電車内から車外の広告を見るか

### 3-2 アンケート及び聞き取り調査結果

122 人中、電車通学者が全体の 86% であり(表 3)、学生の中吊り広告への接触頻度は高いことが伺える。スマートフォンを持っていますかという問いに対して、全体の 83% が「持っている」と回答しており(表 3)、スマートフォン所有率は非常に高いことが判明した。現在はフィーチャーフォンを使用しているという人も将来的にはスマートフォンに替えるつもりである人が多く、スマートフォンの普及率はさらに伸びると思われる。スマートフォン所有者に、電車内ではどのくらいの頻度でスマートフォンを使用しますかという質問をしたところ、スマートフォン使用者の内、「よく使う」が 58%、「使う」が 32%、「あまり使わない」が 10% であった(表 4)。電車に乗る際、何をしていることが多いかという質問(複数回答可)に対しては、1 人で乗車している場合は「スマートフォン操作」「音楽視聴」と答えた人が 35%、33% と多く、次いで「睡眠」と回答した人が 22% となった。複数人で乗車している場合では「会話」が 72% の 91 人と突出しており、その次に「スマートフォン操作」という人が 20% となった(表 5)。1 人で乗車している場合に多くの回答のあった、「音楽視聴」「睡眠」「読書」という、他者との接触を遮断する行為は複数人で乗車する場合においては、「睡眠」という人が 5 人いる他は 0 人となっている。それに対して、複数人で乗車している場合でもスマートフォンの使用率が少なくないことから、スマートフォンはただ他者との接触を遮断するだけのツールではないということが分かる。以上のことから、若者にとってスマートフォンの普及率は非常に高く、生活の中で必要不可欠なものになりつつあると考察される。

また、スマートフォンの所有により、電車内行動に変化があったかという質問に対して、スマートフォン所有者の内 38% である、35 名が何らかの変化があったと回答している。具体的にどのような変化があったかという質問の内、多くみられた回答は「使用時間が増えた」11 人、「暇つぶしができるようになった」6 人、「twitter や mixi, facebook などの SNS の使用が増えた」5 人、「ゲームの時間が増えた」4 人となった。このことから、スマートフォンの所有により電車内行動に変化があった人は、使用時間が増える傾向が強い。つまりスマートフォンの使用に集中して、車内広告にはほとんど目を向けていないようにも考えられる。

では、若者は広告に興味をもっていないのかという、実はそうとも言えない。広告を見ることは好きですかという質問に対して 70% の人が「とても好き」「好き」と回答しており(表 6)、広告への好意度が高いことを表している。広告を見る頻度に対しての質問においても、「よく見る」「見る」と答えた人は広告全体では 87%、電車内の中吊り広告では 78% となっている。電車の中から見える車外広告は

38% で他の 2 つの頻度に関する質問とは異なった結果となった(表 7)。このことから、若者の広告への関心度は決して低くはなく、広告自体もよく見ていることが分かった。ただし、屋外広告を見ることが少ないという結果が出たのは、電車内にいる間、強制認識させられる中吊り広告と異なり、電車内から

|     | 電車通学をしているか(N=112) | スマートフォンを持っているか(N=112) |
|-----|-------------------|-----------------------|
| はい  | 96                | 93                    |
| いいえ | 16                | 19                    |

表 3 電車通学及びスマートフォンの所有状況

|         | 電車内でのスマートフォンの使用頻度<br>(スマートフォン使用者のみ) (N = 93) |
|---------|----------------------------------------------|
| よく使う    | 54                                           |
| 使う      | 30                                           |
| あまり使わない | 9                                            |
| 全く使わない  | 0                                            |

表 4 電車内でのスマートフォンの使用頻度

|           | 一人で乗る時<br>(N=93) | 複数人で乗る時<br>(N=93) |
|-----------|------------------|-------------------|
| 何もしていない   | 3                | 5                 |
| 睡眠        | 48               | 5                 |
| 読書        | 15               | 0                 |
| スマートフォン操作 | 77               | 25                |
| 音楽視聴      | 74               | 0                 |
| 会話        | —                | 91                |
| その他       | 4                | 0                 |

表 5 若者の電車内行動

|            | 好意度(N = 111) |
|------------|--------------|
| とても好き      | 14           |
| 好き         | 64           |
| どちらとも言えない  | 32           |
| どちらかといえば嫌い | 1            |
| 嫌い         | 0            |

表 6 若者の広告に対する好意度

見る屋外広告は自発的に見る必要があるため、見られる機会が中吊り広告のそれよりも少ないことが原因であると推察される。

次に、スマートフォンの使用頻度と広告の好意度や広告を見る

頻度との関係性を調べるために、広告の好意度、広告を見る頻度、中吊り広告を見る頻度、屋外広告を見る頻度を従属変数とし、スマートフォンの使用頻度を独立変数として、SPSSを用いて一元配置分析の多重比較を行った。その結果、中吊り広告を見る頻度とスマートフォンの使用頻度との間には統計的に有意な差がみられた(表8)。すなわち、スマートフォンを「よく使う」人はスマートフォンを「使う」人よりも中吊り広告を見る頻度が高いことが分かる(平均値が小さいほど中吊り広告をよく見るということを表す)。

同じように、スマートフォンを持つことによる電車内行動の変化と広告の好意度及び広告を見る頻度との関係性を調べるために、広告の好意度、広告を見る頻度、中吊り広告を見る頻度、屋外広告を見る頻度を従属変数とし、スマートフォンを持つことによる電車内行動の変化を独立変数として、SPSSを用いて一元配置分析の多重比較を行った。その結果、広告への好意度と電車内行動の変化との間には統計的に有意な差がみられた(表9)。すなわち、スマートフォンを持つことによって、電車内行動が「変化した」人は「変化しない」人よりも広告への好意度も高いことが分かる(平均値が小さいほど広告への好意度が高いということを表す)。

|        | 広告全体<br>(N = 112) | 電車内の<br>中吊り広告(N = 111) | 電車内からの<br>車外広告(N = 111) |
|--------|-------------------|------------------------|-------------------------|
| よく見る   | 31                | 29                     | 3                       |
| 見る     | 66                | 58                     | 39                      |
| あまり見ない | 15                | 23                     | 66                      |
| 全く見ない  | 0                 | 1                      | 3                       |

表7 広告を見る頻度

| 記述統計  |         |    |      | 多重比較  |         |         |                |          |          |
|-------|---------|----|------|-------|---------|---------|----------------|----------|----------|
|       |         | 度数 | 平均値  | 従属変数  | (I)使用頻度 | (J)使用頻度 | 平均値の差<br>(I-J) | 標準<br>偏差 | 有意<br>確率 |
| 広告好意度 | よく使う    | 53 | 2.13 | 広告好意度 | よく使う    | 使う      | -0.135         | 0.152    | 0.379    |
|       | 使う      | 30 | 2.27 |       |         | あまり使わない | -0.090         | 0.240    | 0.708    |
|       | あまり使わない | 9  | 2.22 |       | 使う      | よく使う    | 0.135          | 0.152    | 0.379    |
|       |         |    |      |       |         | あまり使わない | 0.044          | 0.253    | 0.861    |
|       | 合計      | 92 | 2.18 |       | あまり使わない | よく使う    | 0.090          | 0.240    | 0.708    |
| 広告頻度  | よく使う    | 54 | 1.81 | 広告頻度  | よく使う    | 使う      | -0.019         | 0.141    | 0.896    |
|       | 使う      | 30 | 1.83 |       |         | あまり使わない | -0.185         | 0.222    | 0.407    |
|       | あまり使わない | 9  | 2.00 |       | 使う      | よく使う    | 0.019          | 0.141    | 0.896    |
|       |         |    |      |       |         | あまり使わない | -0.167         | 0.235    | 0.479    |
|       | 合計      | 93 | 1.84 |       | あまり使わない | よく使う    | 0.185          | 0.222    | 0.407    |
| 中吊り頻度 | よく使う    | 54 | 1.85 | 中吊り頻度 | よく使う    | 使う      | -0.348         | 0.168    | 0.041    |
|       | 使う      | 30 | 2.20 |       |         | あまり使わない | 0.074          | 0.266    | 0.781    |
|       | あまり使わない | 9  | 1.78 |       | 使う      | よく使う    | 0.348          | 0.168    | 0.041    |
|       |         |    |      |       |         | あまり使わない | 0.422          | 0.281    | 0.136    |
|       | 合計      | 93 | 1.96 |       | あまり使わない | よく使う    | -0.074         | 0.266    | 0.781    |
| 屋外頻度  | よく使う    | 53 | 2.53 | 屋外頻度  | よく使う    | 使う      | -0.205         | 0.134    | 0.130    |
|       | 使う      | 30 | 2.73 |       |         | あまり使わない | -0.249         | 0.212    | 0.241    |
|       | あまり使わない | 9  | 2.78 |       | 使う      | よく使う    | 0.250          | 0.134    | 0.130    |
|       |         |    |      |       |         | あまり使わない | -0.044         | 0.223    | 0.842    |
|       | 合計      | 92 | 2.62 |       | あまり使わない | よく使う    | 0.249          | 0.212    | 0.241    |
|       |         |    |      |       |         | 使う      | 0.044          | 0.223    | 0.842    |

表8 スマートフォンの使用頻度と広告の好意度、広告を見る頻度との関係



| 記述統計  |               |    |      | 多重比較  |           |           |          |                |          |          |
|-------|---------------|----|------|-------|-----------|-----------|----------|----------------|----------|----------|
|       |               | 度数 | 平均値  | 従属変数  |           | (I)電車内変化  | (J)電車内変化 | 平均値の差<br>(I-J) | 標準<br>偏差 | 有意<br>確率 |
| 広告好意度 | 変化した          | 34 | 2.03 | 広告好意度 | 変化した      | 変化しない     |          | -0.349         | 0.540    | 0.023    |
|       | 変化しない         | 37 | 2.38 |       |           | どちらともいえない |          | -0.066         | 0.180    | 0.716    |
|       | どちらとも<br>いえない | 21 | 2.10 |       | 変化しない     | 変化した      |          | 0.349          | 0.154    | 0.026    |
|       |               |    |      |       |           | どちらともいえない |          | 0.283          | 0.177    | 0.114    |
|       | 合計            | 92 | 2.18 |       | どちらともいえない | 変化した      |          | 0.066          | 0.180    | 0.746    |
|       |               |    |      |       |           | 変化しない     |          | -0.283         | 0.177    | 0.114    |
| 広告頻度  | 変化した          | 35 | 1.74 | 広告頻度  | 変化した      | 変化しない     |          | -0.176         | 0.145    | 0.228    |
|       | 変化しない         | 37 | 1.92 |       |           | どちらともいえない |          | -0.114         | 0.170    | 0.502    |
|       | どちらとも<br>いえない | 21 | 1.86 |       | 変化しない     | 変化した      |          | 0.176          | 0.145    | 0.228    |
|       |               |    |      |       |           | どちらともいえない |          | 0.062          | 0.168    | 0.714    |
|       | 合計            | 93 | 1.84 |       | どちらともいえない | 変化した      |          | 0.114          | 0.170    | 0.502    |
|       |               |    |      |       |           | 変化しない     |          | -0.062         | 0.168    | 0.714    |
| 中吊り頻度 | 変化した          | 35 | 1.97 | 中吊り頻度 | 変化した      | 変化しない     |          | 0.053          | 0.179    | 0.770    |
|       | 変化しない         | 37 | 1.92 |       |           | どちらともいえない |          | -0.029         | 0.209    | 0.892    |
|       | どちらとも<br>いえない | 21 | 2.00 |       | 変化しない     | 変化した      |          | -0.053         | 0.179    | 0.770    |
|       |               |    |      |       |           | どちらともいえない |          | -0.081         | 0.207    | 0.696    |
|       | 合計            | 93 | 1.96 |       | どちらともいえない | 変化した      |          | 0.029          | 0.209    | 0.892    |
|       |               |    |      |       |           | 変化しない     |          | 0.081          | 0.207    | 0.696    |
| 屋外頻度  | 変化した          | 34 | 2.47 | 屋外頻度  | 変化した      | 変化しない     |          | -0.205         | 0.139    | 0.143    |
|       | 変化しない         | 37 | 2.68 |       |           | どちらともいえない |          | -0.291         | 0.162    | 0.076    |
|       | どちらとも<br>いえない | 21 | 2.76 |       | 変化しない     | 変化した      |          | 0.205          | 0.139    | 0.143    |
|       |               |    |      |       |           | どちらともいえない |          | -0.086         | 0.160    | 0.590    |
|       | 合計            | 92 | 2.62 |       | どちらともいえない | 変化した      |          | 0.291          | 0.162    | 0.076    |
|       |               |    |      |       |           | 変化しない     |          | 0.086          | 0.160    | 0.590    |

表9 スマートフォンの使用による電車内行動の変化と広告好意度・頻度との関係

以上2つの解析結果より、スマートフォンの使用頻度が高く、スマートフォンを持つことによって電車内行動が大きく変わる人ほど、広告への好意度や広告を見る頻度が高いということが言える。

### 3-3 スマートフォンの普及による電車内行動の変化と広告に対する影響

アンケート結果から、近年の若者のスマートフォンの普及率は高く、電車内における使用率も高いことが分かった。スマートフォンを持つことで電車内行動に変化を及ぼしていることも伺えた。それは、使用時間の増加という量的変化と、twitter や facebook などの SNS の使用増加という質的变化に大きく分けられる。新たなアプリケーションの提供、クラウドシステムなどによる複数媒体とのデータ共有概念の拡充、スマートフォン市場の拡大に伴い、若者のスマートフォンへの接触度は増加し、電車内行動はさらに変化していくと考察される。また、聞き取り調査において、一番落ち着く場所はどこかという質問に対し、ヒヤリング対象 29 人の内自宅と答えた人が 28 人で、その内自分の部屋が一番落ち着くという意見が半数、残り半数が家の中ならどの部屋でも落ち着くという意見だった。外では他人がいる場という意識が強いのにに対し、家の中は他人がおらず、人に気を遣わなくても済むため、リラックスできるという声が多かった。では、電車内という、閉鎖された空間内での居心地は良いのか、電車内という空間にどういったイメージや意味をもっているのか。回答者 29 名の内、居心地が悪いという意見が 11 人、逆に居心地が良いという意見が 9 人あった。電車内空間に対して持つイメージは多種多様であると言える。しかし、居心地の善し悪しについて意見の差はあるが、電車内が他人の集まる公共の場であるという認識は共通しているようである。スマートフォンを操作したり、音楽を聴いたりすることは、他人との接触を避けたいという意思表示でもあるようだ。一方、電車内行動が大きく変わりつつある中で、スマートフォンへの依存が電車内広告の効果に悪影響を及ぼしているのではないかと思われた。しかし、

聞き取り調査において、若者はスマートフォンを使用して SNS を利用する以外にも、インターネットを利用する、乗換案内情報を検索するなどの行動を頻繁にとっている。スマートフォンを使用していない場合も、中吊り広告や屋外広告を見る、人間観察をするなどの回答が得られた。つまり若者はスマートフォンを主体としながら、外出先で積極的な情報探索行動をとっているのである。また、3-2 で述べた SPSS の解析結果より、広告が好きでよく見る、中吊り広告もよく見るといった好奇心の強い学生ほど、スマートフォンをメールや SNS などを通じて外とコミュニケーションをとる手段として使いこなしている。以上の点より、スマートフォンの普及により、中吊り広告の影響力が低下しているという仮説は正しいとは言えない。

## おわりに

近年の若者のライフスタイルを語る上で、スマートフォンが欠かせないツールとなっている。電車内の行動においてもスマートフォンの存在が多大な影響を与えており、スマートフォンを触っているときは電車内という閉鎖された空間にしながら、SNS、メール、インターネットを通じて外と繋がっている状態である。また、スマートフォンは外の情報と繋がる一方、リアルに身を置いている電車内では他者との接触を断つ補助となり、自分だけの空間を作ることができるツールとなっている側面も有している。

よって、スマートフォンの使用頻度が高い人ほど情報への感度が高い傾向があると言えよう。近年の若者の車内広告への関心は高いという現状から考察すると、OOH とスマートフォンは両立できる可能性を有しているのである。

\*フィーチャーフォンとは、ガラパゴス携帯と同義である

## 引用文献

清水公一、亀井昭宏(2009)「OOH メディアの可能性を探る」『AD STUDIES』Vol.27, pp.28-29.

日経広告研究所編(2010)『広告白書 2010』, pp.45-49.

日経広告研究所 NHK 放送文化研究所編(2010)『国民生活時間調査 2010』, p.52.

電通総研編(2012)『情報メディア白書 2012』ダイヤモンド社, p.219, p.222.

電通編(2008)『電通広告年鑑'08-'09』電通, pp.233-238.

## 桐園蔵版『御代の花』について

管 宗 次

(武庫川女子大学文学部日本語日本文学科)

## 一、はじめに

明治の御代となつて、明治二十年代後半から明治三十年代の頃から、ちようど文芸機関紙「明星」が発刊される明治三十三年四月というのは目安ともいえそうであるが、旧派歌人の存在が薄れて、新派歌人たちがこそが時代の呼吸をしているのだという世評を追い風に、各々の歌人たちが近代自我の個性を強く發揮して創作に打ち込んだのに対して、旧派歌人たちが旧時代の高趣味に遊ぶ富裕人たちというとりわけかたをしてきた。

伝統的和歌の作法の訓練に馴れた旧派歌人には、奇を衒い造語や文法的破格をねらっているようにしか思えぬ新派歌人の歌集にアールヌーボーによる装丁や挿絵があることも違和感があったのは当然であろう。しかし、時代の空気は確実に皆をつつんでおり、大阪朝日新聞の投稿欄、連載の和歌逸話をまとめた本『古今歌話』(1)は、旧派歌人たちの寄稿をまとめたものとは思えぬアールヌーボー風装丁挿絵の洒落た本である。

桐園は旧派歌人の中心人物の一人であつた弾琴緒の雅号で、弾琴緒経営の和歌中心(句集も出版している)の出版社名ともされたものである。桐園蔵版では、和装にこだわりの続け、和装活版は明治三十年台には珍しいものとなつていたが、和綴や大和綴という和装に雅味なり風格を楽しむ歌人がいて歌集も私家版であればこそ、ほそぼそながらも旧派と呼ばれる歌人の出版は続けられたのである。

『御代の花』(管宗次蔵)は、明治十七年を第一巻として、和装中本一冊、表紙は空型押(エンボス)白表紙、序文二丁・本文四十二丁の洒落た歌集であるが、これを第一巻として毎年一冊ずつ発刊することとなる。『御代の花』は、勅撰への詠進和歌を集めたものだが、『御代の花』(明治十

七年刊)は勅題「晴天鶴」の題詠で、旧派がこだわった題詠のお手本集ともいえるので初心の人には便利な本でもあつたろう。古歌の知識があつても、古歌からだけでは明治の和歌は作れない。やはり、生きた現今の歌人の和歌に触れるということが創作には必要となつていくこと新派歌人も旧派歌人もリズム・歌調は異なるが、現代を生きる人の創作としては当然である。

弾琴緒の桐園蔵版が出版した歌集のほとんどは私家版の依頼出版や社中歌集、個人歌集の非買品になるものなど販売に苦労のないものが多い。本の販売には苦労したようで、『和歌千種の花』(管宗次蔵)(明治二十五年一月刊)巻末の広告には、次のようなものが載る。

## ○ 特別半価ニテ発売書

正六位近藤芳樹大人撰 明治年代歌人の秀歌を撰み類題とす

明治七年六月上梓

## ● 類題月波集

木版摺上下二冊定価二十五銭ナレ共  
半金郵税共十四銭五厘

贈從四位伴林光平大人家集

(大和十津川。天の辻陣中にて詠せし  
歌及其他慷慨悲憤の歌を多く載す)

明治二十五年六月十五日再版

美濃紙摺美製上下合本一冊定価  
三拾五銭半金郵税共拾九銭五厘

## ● 笹の屋五百首

光平翁ハ勤王の志厚く終に国事に斃れたるを以て辱も朝廷より  
從四位を贈り賜ふは実に名誉といふべし抛て今回聊祝意を表せ  
んため此家集五百部を再刊し定価の半金を以て発売す

以下の七書は当方に於て発売す御望野方は前金御送付を乞

一郵便為替は大阪郵便局振込とし。郵便切手は式銭にて金高一割増とし。

通運会社便は賃銭は勿論大阪市内配達料共払済とする事

一当地に幸便ある際は現金御差送の時は直に其人に冊子を渡す

へし

但其分に限り郵便税を返上すべし

発売所 大阪市東区高麗橋三丁目五十九番邸

彈琴平

「七書」とあるのは前の広告に『類題秋草集 初編』(2)・『御代の花』・『桐園月次集』・『月瀬記行』・『標柱にこ草』の書名があたり、『類題月波集』・

『笹の屋五百首』をいれて七書となる。『類題月波集』(明治七年六月刊)(同書は板木刷り立ての本)は売れ行き不調で在庫も多くあったかとみえて思い切った半値、出版事業の難しさに苦しんでいるのが窺える。

## 二、『御代の花』の出版

『御代の花』には、四百六十四名の和歌を載せている。明治天皇が和歌を好まれ宮中の正式な行事の一つとして歌御会始が身分を問わずに設けられて、以来国民から数多くの詠進のあることが御代の栄えの証とも捉えられて、歌人たちには時代の寿ぎに参加できることを喜びともとらえることができた。

『御代の花』を上梓した弾琴緒は、本居宣長の鈴屋門流の学統を引く学徒という自負を強くもち、伴林光平の孫弟子にあたる。伴林光平の交流に中村良臣(3)がおり、中村良臣の子である中村良頭の弟子(4)(5)であったため、弾琴緒は幕末に盛り上がりを見せた伊丹の国学の熱意を受け継いだ。当然のこととして、宮中歌御会への詠進には頗る熱心で『御代の花』はそうしたなかで出版された本であった。弾琴緒については、さきに拙論「弾琴緒―明治期旧派歌人による出版事業―」(6)、「弾琴緒歌集『桐園歌集』三点について」(7)、「『桐園詠草附録』―明治期旧派歌人の歌書―」(8)などに、その伝記と著書についてまとめている。

はじめに『御代の花』の序文をあげる。序文は佐々木弘綱の一丁分のものであり、出版の経緯なども書かれている。

年々新年に勅題を給ひて高き賤しき歌をとらしめ給ふ事は往昔も例なき事にて開けゆく大御代の御恵いともくかしこうなん其なりたる歌ともを国風集と名つけてえり巻となれるか国所なといとしとる也とて橋ぬし勅題集を物せられけるに猶世にあまねからすとてこたひ又弾ぬしの御代の花を撰はるさてこそよもの国人のこのの葉あめのしたにはひみちて残るかたもあらさらめといと、おむかしうめてたうおほゆるまにくひとことそふるは

明治十とせあまりな、とせの一月 東京大学御用係 佐々木弘綱  
新時代では、東京大学を頂点とする中央集権行政の機構のなかでは、「東京大学御用係」という佐々木弘綱の肩書きは、目新しくも重みがあった

であろう。今上陛下、皇后宮の御詠を巻頭に歌集は編まれているが、題者・点者や読師や講頌の和歌が貴顕の和歌に続き、身分を問わぬ預撰歌がある。ここまでが公式の詠進歌で、あとの詠進和歌は、そのまま活字にされないものを歌集にして広めようとする企画は東京では幾つも現れたが、一個人である弾琴緒が大阪で成したことに意義がある。

「御代の花」附言を次にあげる。

御代の花 附言

一 此集は明治十七年の御題を世の人々のよみてたてまつられたるをみきくまにくよしあしのわいためなく書つめたるなれはその中には天爾遠波のみたれか、りむすひのたかひなきにしもあらねとわたくしにあらためむも作者の本意にそむきかつはおほやけに奉られたるにたかはむことのかしこければとてそかま、にうつしとりて載せつ

一作者のついでには有位の人々をはしめに載せ其外は三府五畿七道の国々にわかつてり

一作者の住所は何地何町或何郡何村のことくた、そのあらましをしるせりくわしくは明治歌人氏名録を別にものすへし

桐園のあろししるす

## 三、『御代の花』の所収和歌

『御代の花』には、今上陛下、皇后陛下の御作から載ることは先に述べたが、ここでは預撰歌までをあげる。

御代のはな

晴天鶴 明治十七年御題

御製

富士の根もはるかにみえて蘆田鶴の立まふ空そのとけかりける

皇后宮

あふきみる朝日はゆき大空にたつか音たかくきこえけるかな

皇太后宮

朝日かけくらぬ空をまちいて、うれしけになくあしたつの声

陸軍中将 二品大勲位 彰仁親王 小松宮

くもりなくはれたる空をうちむれてなきゆく鶴の声のさやけさ

陸軍少佐 二品勲一等 貞愛親王 伏見宮



二品貞愛親王妃 利子

ゆたかなる御代のさかえのみゆる哉はれたる空に遊ぶたつむら

太政大臣 従一位大勲位 藤原朝臣実美 三条

のとかにもみえわたるかな朝日影はれたる空のたつのむらとり

参議工部卿 正四位勲一等 源朝臣高行 佐々木

久方のそらにはさはる雲もなしむれゆくたつのかけはかりにて

宮内卿 正二位勲一等 藤原朝臣実則 徳大寺

くもりなきおほそらたくまふ鶴の声にそこもる君かちとせは

題者 点者 参事院議官 従四位勲二等 源朝臣美静 福羽

さしのほる朝日につれて翅さへこゑさへたかしたつのひとむら

宮内大輔 従四位勲三等 平朝臣孫七郎 杉

朝日かけにほへるそらに大君のちとせをよはふあしたつこのゑ

宮内少輔 正五位勲三等 源朝臣敬三 香川

あまつ日の光のとけきおほそらにたつか音たかくきこえける哉

元老院議官 式部頭 従三位勲三等

青雲のはれたるそらに千代よはふたつかね高くきこゆなるかな

読師 正二位 藤原朝臣実徳 正親町

あしたつのたちまふみそらはれたり翅にさはるうき雲もなし

点者 宮内省四位出仕 従五位勲五等

空高くなりけらしもまふたつの影はみえなから声のきこえぬ

賛者 侍従 従四位勲四等 藤原朝臣公業 西四辻

あら玉のとしたちかへる大空にあさ日か、やきたつなきわたる

講頌 正三位 源朝臣有仲 慈光寺

おほそらに千年よはひてまふたつのつはさに匂ふ朝日かけかな

講頌 従四位 藤原朝臣基正 石山

朝日影のほる雲井にまふたつはいかにはれたるこゝろなるらん

発声 従四位 藤原朝臣有良 綾小路

はれわたる空にたちまふあしたつの声のさやかにきこえける哉

賛者 従四位 中原朝臣高潔 藤堂

山松のねくらはなれてあしたつはおなしみとりの空にまふなり

講師 従四位 藤原朝臣功長 堤

はれわたる雲井の空にうちむれて君か代よはふともつるのこゑ

講頌 従四位 源朝臣重朝 大原

いつる日の光さやけきおほそらに声ものとかにたつなきわたる

講頌 従四位 藤原朝臣光昭 竹屋

ひさかたの天津日かけのくもりなき空にたちまふ鶴のゆたけさ

講頌 従四位 藤原朝臣為柔 冷泉

こゝろよくはれたる空にまひあそふ鶴の声こそたかくきこゆれ

講頌 正五位 藤原朝臣公康 四辻

晴わたる空さやかにきこゆなり千年をよはふあしたつこのゑ

続いて、名譽の預撰歌が七首載る。宮中女官に交じって「山形県平民」

の和歌と氏名があるところに、明治の御世と皇室とともにある近代日

本の国民の喜びが表されているようである。

預撰歌

権典侍 正五位 柳原愛子

朝日影つはさにうけてまふたつはくもらぬ御代を空にしるらん

かきりなくはれたる空にまふたつの声ちさとまできこゆへき哉

命婦 三上文字

かきりなくはれたるそらにきこゆなり君か千年のとも鶴のこゑ

宮内省御用係 小出榮

まふたつのはねも動かす成にけりいかにのとけき雲井なるらん

鉄砲洲神社祠官 辻光賢

青雲のかきりもしらぬおほそらをひとりしめたるたつの声かな

山形県平民 井上利輔

はれわたるみそらをおのかものにしてこゝろ広くも遊ぶたつ哉

東京府 伊東三代女

あさ日かけのとけき空にまふたつをわか門松のうへにみるかな

預撰歌はわずかに七首であるから、いかに預撰歌に入集することが難

しく尊ばれたかであるが、預撰歌は宮中調度品に和歌がデザイン化され

たりしてもはやされもしたが、預撰歌の作者は撰歌を表歌として、染

筆の依頼が処方から大量に来て大変であったともいう。堺の国学者高山

慶孝(9)の調査をした折、高山慶孝が預撰歌に選ばれてからは、和歌短冊の以来が預撰歌ばかりであったので預撰歌を書いた短冊ばかりあらかじめたくさん書き溜めておき書体用字の好きなものを欲しがる人に好きにまかせて取らせたという話を御子孫からうかがうことがあった。

ここから、詠進歌の所載がはじまるが、ここからが『美代の花』の発刊の要であろう。巻末の「○各国人員表」には「総計四百六十四名」という、今上陛下に奉げられた多くの国民の和歌を一冊の本に出版したこと、一国民としての誇らしい自負が弾琴緒にはあったであろう。前言も含めて、詠進歌の冒頭をあげる。

いとかしこきおほむわたりをの御歌会などのさまはおのかとちのか、ひしるよしなけと官報また新聞紙などにも此御歌ともを載せたれはそかま、にうつしとりてかく巻のはしめに加へつるになむ

#### 詠進歌

宇佐神社宮司 従五位 至津公誼

をさまれる御代をくもらぬ大空に鶴さへうれしとまひあそふらん

同 神官 従五位 至津公熙

くもりなき御代は鶴さへおほそらに翹みたさすまひあそふなり

出雲大社権宮司 従五位 北島齋孝

大空はくもなくはれてあしたつのゆくへに千代の道もみえけり

住吉神社 従五位 津守国美

あしたつの千代よひかはす声すなり雲もはれたる天津にそらに

河内国道明寺 華族 今園国映

くもりなき空にしつゆくまふたつの姿や御代のすかたなるらん

東京 従五位 真島冬道

もとよりも濃きくれなゐの頂にあさ日をうけてたつなきわたる

東京 三十三間堀 議官西周妻 西升女

うらくと朝日かをりてあしたつのなく音のとかにあくる空哉

同 麹町区 下二番町 水谷義豊

雲はれしみそらにたかくきこゆなり千年をよはふたつのもろ声

同 神田区 雉子町 矢田猪平

はれわたる雲井はるかにたちまふは千代をは君にゆつる也けり

同 神田区 小川町 佐々木弘綱

むさし野の雪をつはさにかけてまふたつの姿のとはしろきかな

同 弘綱妻 佐々木光女

武蔵野のみとりのそらに若草のつまよふたつのこゑそうらなき

同 弘綱長男 十三歳 佐々木信綱

はれわたるみそらに千代をよふたつの翅にさはるうき雲もなし

同 弘綱次男 七歳 佐々木昌綱

青雲のあちらこちらへとひあるく鶴まつしろにみえにけるかな

同 神田町区 猿楽町 秋山政常

これで、東京の頃のすべてであるが、平民や華族などもあわせて四十名というのは、大阪の四十五名や伊勢の六十七名に比して数が少ない。「間島冬道」を「真島冬道」に誤るなど活字ならではの誤植誤記もあり、惜しまれる点がある。序文を寄せた佐々木弘綱一族の和歌がまとまって見えるのも、おもしろく「十三歳 佐々木信綱」や「七歳 佐々木昌綱」といった幼年の人の和歌をみると、竹柏園では大人が代作したりもせず、もとの和歌がわからぬまでの添削というものをしなかったというが、そのことを納得させる年齢相応な幼い和歌である。和歌に年齢を添書するのは高齢な歌人のものが多いなかで、短冊上部の題のみ大人の見事な筆跡で和歌本文は、たどたどしい幼ない懸命な筆致でしたためられたものは、佐々木信綱の幼な書き短冊として短冊蒐集コレクター垂涎の一つとされている。序文を草した佐々木弘綱の姿勢も垣間見える。「七歳 佐々木昌綱」などの幼児が大人に交じり歌会に鎮座する微笑ましい姿が浮かぶ。

西京(京都)では、わずか十二名という少なさには驚かせられるが、邦光社が明治二十年代から旧派歌人の人々の勢力を集中させる運動として『邦光社歌会』を年々歌集として上梓させるのも、機運の停滞していたことと思わぬところからわかるという点からも興味深いが、むしろ京都に現存歌人が多くがいても、弾琴緒とはまったく交流交際の無かったことが所載の無い大きな理由であろう。西京の十二名の筆頭が赤松祐二祐以とも(10)で、北辺門の最後の歌人でこの人も帝国大学講師に招聘されたが固辞したという。幕末からの学統に繋がる国学者や歌人は近代学校教育行政のなかに組み込まれていくことでのみ存在が保たれていたもので、佐々木弘綱の肩書き「東京大学御用係は象徴的であるし、佐々木家では明治十五年に家族の東京移居をしており、明治十七年四月に刊行の『御代の花』は時代の象徴を様々に読み取ることができる。赤松祐二の和

歌をあげる。

西京 下京区 稲荷町 赤松祐二  
雲もなくみとりにはる、大空にちとせにちりとたつのまふみゆ

さすがに、『御代の花』出版者弾琴緒の本拠地の大阪では、和歌の数も多いが、佐々木春夫、中村良顕、加藤小自在などがおり、旧派の重鎮らの人々の健在ぶりをみせている。大阪の部からいくつかを抜き出すと以下のような和歌と歌人が拾える。

大阪 東区 伏見町 佐々木春夫

千代よはふたつか音たかし亀岡のまつのいろなるおほ空にして

同 同区 瓦町 中村良顕

あさ日さすあつまをさしてゆくみれは田鶴も都の空やゆかしき

同 同区 本町 加藤小自在

まふ鶴の外にくまなすものもなしなへてみとりにはる、おほ空

同 同区 東区 狩野章元

いとまある大宮ひとをこゝろにてたつも雲井にむれあそふらん

同 同区 章元妻 狩野三津女

あさ日さす雲井のとかにゆくたつは御代の姿をうつすなるらん

同 北区 天満神社 滋岡従長

沢水にみそらのたつの移れるは千代をふたつにわけてゆくらん

同 東区 高麗橋 笠原正春

ことほきてたつる御旗のしろたへをそらにもうつすたつの毛衣

同 同区 正春父 七十歳 笠原百春

くもりなき空にあそふは君か代のなかみの浦にすみしたつかも

同 同区 北浜 井上景明

松の葉のみとりのそらにまふ鶴はみよを常盤とうたふなるらん

同 同区 道修町 吉田業忠

しつかなる御代にならひてむらたつの羽袖ゆたけき九重のそら

同 同区 鞆中通 上田徳翁

友鶴のみとりのそらになく声はきみかちとせをいはふなりけり

ここでは、弾琴緒の妻の父笠原百春と笠原正春(百春の子)という船場の富裕な場所に医科を開業していた血族、加納元章や滋岡従長など文化サ

ロンの中心人物、井上景明や吉田業忠という弾琴緒歌会の常連たち、上田徳翁のように大阪朝日新聞の連載記事の常連投稿者で、『古今歌話』(11)は、この時代の旧派歌人の動向や交流も窺える大阪朝日新聞連載記事をもとめたものである。「晴天鶴」という勅題に、大阪と東京では、とらえ方がちがうようでどこまでも大阪の詠進歌がのびやかな叙景の題詠で、東京は御世の寿ぎに眼目が集中しているようである。

#### 四、『御代の花』という歌集

『御代の花』の書誌をあげる。

書誌 ○書名 「御代の花」

○ 版型 中本一冊

○ 丁数 序文二丁(佐々木信綱序一丁・附言一丁)・本文四十丁・○

桐園出版目録二丁(版心の丁附は四十二)・○諸歌集詠草差立

方成規二丁(版心に丁附は四十二)

○ 奥付 明治十七年四月中瀬刊行

禁売買 以活字代謄写

頒出詠之諸君

桐園蔵版

印刷製本料金式拾銭

巻末の「○各国人員表」には、

東京四十名 西京十二名 大阪四十五名 山城四名 大和十三名

河内十五名 和泉二名 摂津二十五名 伊勢六十七名

尾張六名 三河二十八名 伊豆五名 下総四名 常陸七名

近江十一名 美濃七名 飛騨九名 信濃十七名 上野四名

陸奥十七名 羽前二名 羽後三名 越前二名 越後二名

因幡七名 出雲六名 播磨十六名 美作二十六名

備前八名 紀伊十三名 讃岐七名 伊予七名 土佐五名

筑後七名 豊前二十二名 肥前七名 肥後十三名

総計四百六十四名

不思議なことに鹿児島などの桂園派歌人が多数いた所の詠進歌が、まったくとられていないのは、『御代の花』が出版費用に歌人からの費用徴収



に宛てていたことがあって、資金の用立てに賛助者でなければ『御代の花』には載せないというためである（預撰歌などは別である）。詠進和歌集という形式をとりながら、桐園への投稿でなければ収録しないし、著名歌人の秀歌でものせられぬ和歌もあったということである。やはり、商業的経営の含みをもつて出版された歌集ということからは離れられなかったということを知ることができる。

『御代の花』の「○桐園出版目録」に載る「明治十八年御題 御代のはな 二輯一冊 是は前集のこく明治十七年以後としく詠進の歌をあつむ毎年一月二十日までに御詠草おくりたまへ」という勅題をもつて歌集を編むという編集形式で（桐園が当時の流行に乗り、さかんに出版した類題和歌集よりも編集ははるかに容易であつたろう、ただ一つの題詠の和歌しかないのだから）、和歌を公募して出版事業として商業的にも大規模展開を確立するのは、明治十八年『御代の花』の出版からであつた<sup>(12)</sup>。こうして、東京で出版されていた勅題歌集とは、別物といつていい、独自の勅題歌集の年々刊行スタイルが確立して、大阪の旧派歌人の定期刊行物としての『御代の花』所載和歌の作者は現存者ばかりで故人はいない、幽霊のいない現存歌人の詠進和歌集であるから、大阪旧派歌人たちの消長のわかる資料を残すことともなつた。『御代の花』の編者、弾琴緒の詠進和歌は、大阪の項には載らず、歌集巻末の追加に載る。誇らしくも勅題歌集編者となつた自負あふれる一首でもあつた。

# ○ 追加

大阪 高麗橋 三丁目 弾琴緒  
大御代をちよとうたひてまふ鶴のこゝろも空にはれわたるらむ

## （付記）

本稿に関わる論考『武庫川国文』八十六号（平成二十四年十一月十日刊）に『明治三十年 御題共進歌集』について「諒闇と旧派歌人」を書いたが、同論考は『御代の花』が諒闇に際して年々歌集でもあつた同集が、なんとか歌集の刊行にこぎつけた苦衷の作案でも『御代の花』という書名は使うわけにはいかず、『明治三十年 御題共進歌集』という長い書名になって、この年には『御代の花』というめでたい名の歌集は刊行していないことにしたのだつた。あわせての論考一覽を希う。末尾ながら、弾琴緒の御子孫である弾泰幸氏には研究に御協力いただけることを

感謝申し上げる。不自由な体ながらリハビリしつつゼミ指導などの教育活動とともに論考執筆にあたることができるのを、ご配慮くださる方々に心から感謝している。また、いつも大学紀要に論考活字化の御協力くださる佐藤勝之先生や資料集め・原稿整理に働いてくれる身近な人にも感謝申し上げる。寸紙を使い感謝の気持ちを伝えたい。

## 注

- (1) 西村天四・磯野秋渚編『古今歌話』（明治三十九年十月十日刊、発行柳原喜兵衛・篠崎純吉）
- (2) 管宗次『弾琴緒再撰 類題秋草集 初編』について（『武庫川女子大学生活美学研究』所紀要20号、二〇一〇年十一月一日刊）
- (3) 木村三太郎『浪華の歌人』（昭和十八年四月三十日刊、全国書房）
- (4) 森繁夫・中村莊次補訂『名家伝記資料集成』（昭和五十九年二月一日刊、思文閣出版）
- (5) 国学院大学日本文化研究所編『和学者総覧』（平成二年三月二十日刊、汲古書院）
- (6) 管宗次『京大坂の文人 続々々』（『弾琴緒——明治期旧派歌人による出版事業——』、二〇一〇年二月六日刊、和泉書院）
- (7) 管宗次『弾琴緒歌集 桐園歌集 三点について』（『武庫川国文』七十四号、平成二十二年十一月十日刊）
- (8) 管宗次『桐園詠草附録——明治期旧派歌人の歌書——』（七十五号、平成二十三年十一月十日刊）
- (9) 馬場憲二・管宗次編『関西黎明期の群像』（管宗次『堺の国学者 高山慶孝』、二〇〇二年四月刊、和泉書院）
- (10) 管宗次『京大坂の文人』（『北辺門最後の学者 赤松祐二』一九九一年七月一〇日刊、和泉書院）
- (11) (1)に同じ。
- (12) 熊谷武至『類題和歌集私記（東海学園国語国文叢書第四篇）』（昭和四十七年八月一日刊、熊谷武至発行）所収「明治類題集篇 一、弾琴緒」



## On *Miyo no Hana* published by Tōen

Shuji Suga

*School of Letters,  
Mukogawa Women's University*

In this paper I will consider what activities waka poets of the old school developed in Osaka by taking up a poet Dan Kotoo, who lived in the Meiji period when the center of culture moved from Kyoto and Osaka to Tokyo. Dan Kotoo held waka parties, conducted a group of waka poets, and ran a publishing company, whose name was Tōen and copies published by the company were called Tōen Zōhan. *Miyo no Hana* published by Tōen in the 17th year of Meiji was a collection of poems compiled from various waka made by ordinary people in Japan and dedicated to the Emperor Meiji. I will examine the details and reasons that the publishing was done in Osaka with reference to poets of the old school and the conditions of publishing management.

---

# 本学教員の他学術雑誌掲載論文抄録

(人文・社会科学系)

2012 年 4 月～2013 年 3 月

---

## 英語文化学科

グリム童話における 7 の数字について－不運な 7 の出現を巡って

野口芳子

ドイツ文学論攷 53 号, 7-29 (2011)

グリム童話に出現する 7 は、幸運よりむしろ不運と結びつく場合が多い。それは何故なのか。その謎を解くために、キリスト教以前の古代宗教、数秘術、聖書などにあたりながら、魔術的神秘的 7 が伝承文学に頻出する理由について考察した論文である。

白雪姫の固定観念を覆す

野口芳子

日本ジェンダー研究 第 15 号, 27-41 (2012)

グリム童話「白雪姫」を手書き原稿から考察すると、決定版とは異なる解釈が可能である。鏡という法や月(ディアナ)の象徴に照らし合わせて自分の美を確認する王妃は、中世における美が「豊穡」を意味するものであることを考慮に入れると、固定観念を覆す解釈が可能となる。

## 心理・社会福祉学科

高齢者福祉における社会学とソーシャルワークのすれ違い

大西次郎

保健医療科学 61(4), 374-375 (2012)

社会科学上の調査研究が、ソーシャルワーク実践からは高齢者福祉における現況の改革へ結びつくとは必ずしも受けとめられていない。研究者と実務者の協働が課題である。

心理学ないし社会福祉学を専攻する大学生の終末期医療へ向けた意識－2011 年度と 2009 年度における 1 および 2 年生の比較調査－

大西次郎

人間学研究 27, 1-13 (2012)

大学入学後日が浅くとも、心理学や社会福祉学を修める学生にとって終末期医療への関心は高い。医療、介護福祉領域に做った教育的試行を積極的に取り入れる必要がある。

社会福祉援助技術としての葬儀－ターミナル・グリーフケアの狭間に－

大西次郎

佛教大学大学院紀要 社会福祉学研究科・篇 / 社会学研究科・篇 40, 1-17 (2012)

葬儀に関する遺体や遺骨の処置、埋葬といった具体的な話題を、ターミナル・グリーフケアへ携わる援助者は、生の延長線上の事象として高齢者本人と語り合うべきである。

精神保健福祉学の構築－ソーシャルワークに立脚する実践科学として－

大西次郎

精神保健福祉学 1, 印刷中(2013)

精神保健福祉学の存立を、社会福祉学における「脱」医療化、ならびにソーシャルワークへの重点化から距離をとった、精神科ソーシャルワークの学際化の観点より検証した。

(以上)

# 武庫川女子大学紀要投稿細則

平成20年4月1日 紀要編集委員会決定

## I 総 則

1. 投稿資格 本紀要に投稿できるものは、委嘱を含む本学専任の教授、准教授、講師、助手および副手とする。上記以外からの寄稿掲載は本委員会の審査の結果による。ただし、本学専任講師以上との共同研究者を含むことはさしつかえない。
2. 原稿内容 学術的研究領域における原著論文とする。ただし、価値ある調査報告および研究資料はこの限りではない。また、抄録(和文)もあわせて巻末に掲載する。
3. 受 理 原著論文には受理年月日を掲載すること。受理日は論文の受付日とする。原稿に手続き上不備のあるときは、これを受理しないことがある。
4. 著 作 権 掲載された論文の著作権は武庫川女子大学に帰属する。
5. 用 語 日本語または英語とする。
6. 編 集
  - a) 形態 人文・社会科学編および自然科学編として編集する。
  - b) 書式 人文・社会科学編は横書きを原則とし、編集委員会が必要と認める場合には縦書きも可とする。横書きは横一段として、縦書きは上下二段として組む。また、自然科学編はすべて横書き、横二段として組む。
7. 投 稿 原稿はこの細則に従って、作成しなければならない。これに従っていない原稿は作成のし直しを著者に求めることがある。投稿にあたっては、正副原稿(コピーでも可)各一部を提出することとする。なお、写真はコピーとしないこと。原稿は、一編につき、刷り上がり9頁以内とする。
8. 審 査 投稿にあたっては、あらかじめ、著者がその領域の専門家(2～1名、講師以上)にその論文の価値判断を依頼したうえで、その採否の決定は原則として本委員会が行う。  
その領域の専門家(審査員)は論文の内容、文章などについて、必要により加除修正を求めることができる。著者は審査員の意見の諾否を明確にし否の場合はその理由をつけて原稿とともに提出期限内に担当編集委員に提出し、委員会がその原稿の採否を決定する。
9. そ の 他
  - a) 提出期限を過ぎた原稿は、その理由を問わず、これを受理しない。
  - b) 著者の校正は原則として2校までとする。校正に際しては、印刷上の誤り以外の字句の訂正、挿入、および削除は、担当委員の許可なく行うことは、許されない。
  - c) 編集上、やむをえず投稿原稿の修正および返却をすることがある。また、本委員会の指示に従わない場合は、原稿提出後においても返却することがある。
  - d) 別刷りは50部とする。これを超過する場合は研究費負担とする。
  - e) その他の必要事項は本委員会が定める。
  - f) この細則の改正は学部長会構成員、図書館長および編集委員長からなる紀要検討委員会の議を経たうえで、学長がこれを定める。
  - g) 紀要検討委員会の開催は、紀要編集委員長が発議し、学長がこれを招集する。

## II 原 稿

### 1. 原 稿

- 1) 原稿は原則として写植方式で作成する。すなわち、原稿の1枚がそのまま刷り上がりの1頁とな

- るよう、図や表、写真なども、著者自身がアレンジして、原稿の中に組み込みいれておく。
- 2) 提出原稿は A4 判で作成する。
  - 3) 将来の完全写植式への経過処置として、当面は図や表の入るべき所を白抜きとし、図、表を別に添付して提出することを認める。
  - 4) 原稿の第 1 頁は次の順に従って作成する。
    - i) まず、表題(表題は正確、かつ簡潔に論文内容を表すものであること。また、副題は行を改めて書くこと)、著者名(さらに行を改めて中央に書くこと)、所属(学部、学科、研究室を、さらに行を改めて中央に書く)の順に書く。
    - ii) 和文原稿の場合、原則として、表題、著者名、所属は欧文を添える。
    - iii) 次に欧文要旨(200 字前後)を置き、以下本文を続ける。
    - iv) ただし、人文・社会科学編においては、欧文の表題・著者名・所属および欧文要旨は別紙(A4 判)に作成し、本文の後ろに添える。
  - 5) 緒言、方法、結果、考察、謝辞及び文献などの大見出しは 2 行取りとする。
  - 6) 原稿はワープロを用いて以下の要領で打つ。
 

|            |                 |                 |     |
|------------|-----------------|-----------------|-----|
| i) 和文原稿では  | 人文・社会科学編の場合     | 1 頁 46 字×45 行   | 1 段 |
|            | ただし、縦書きが認められた場合 | 1 頁 32 字×31 行   | 2 段 |
|            | 自然科学編の場合        | 1 頁 22 字×45 行   | 2 段 |
| ii) 欧文原稿では | 人文・社会科学編の場合     | 1 頁 96 字前後×45 行 | 1 段 |
|            | 自然科学編の場合        | 1 頁 46 字前後×45 行 | 2 段 |
  - 7) 和文原稿の場合、文章は原則として簡潔にし、常用漢字、ひらがな、新かなづかいを用いること、外国語音訳、生物の和名等はカタカナを用い、外国人名、生物学名などは原綴りを用いる。
  - 8) 脚注は、関係する本文中の語の右肩に\*、\*\*などをつけ、その頁の下に横線を引き、その下側に挿入すること。行間は 1 スペースとする。
  - 9) 活字書体の指定は別添資料に従うこと。
- ## 2. 図・表・写真
- 1) 同じデータを図と表の両者で示すことは許されない。
  - 2) 図、表およびそれらのタイトルならびにその説明文は、和文原稿においても、原則として欧文で書くこと。
  - 3) 写真は図として取り扱い、図(写真)、表にはそれぞれ番号(Fig.1, Fig.2, Table 1, Table 2 など)と見出しを記入すること。
  - 4) 図の番号(Fig.1, Fig.2 など)および見出しは図の下方に、表の番号および見出しは表の上に記入すること。
  - 5) 式は、原則としてワープロを用いて印書すること。
  - 6) 図や表、写真など別添原稿にして提出する場合。
    - i) 原稿(写真の場合台紙)は本文と同じく A4 に合わせる。
    - ii) 図は、印刷に直接使用できるよう、白紙又は青色方眼紙に墨書きとし、文字を活字で入れる場合は、鉛筆書きで記入すること。
    - iii) 原図は 1 / 2 に縮尺されることを考慮して作図すること。なお他の縮尺を希望する場合はその仕様を朱書きで明示すること。
  - 7) 写真は鮮明なるものとし、必ず台紙(A4)に貼ること。
  - 8) 写真、図等を台紙に貼る時は、製版上必要な場合に簡単に剥がれるよう配慮すること。
  - 9) 写真中の文字などは写真の上に薄紙をかけ、指定する位置、文字などを青鉛筆(または青インク)で明示し、委員にその旨伝えること。
- ## 3. 参考文献
- 1) 雑誌および単行本の引用の仕方



- i)本文中の各引用箇所には語句の右肩に 1), 2)・・・の引用番号を付けること.
- ii)文献はこの引用番号の順に, 論文末尾に一括すること.
- iii)参考(引用)文献の記入は次の順に従うこと.

(a) 雑誌の場合

- 1. 著者名, 2. 誌名(欧文誌名はイタリック), 3 巻(和欧ともゴシック) (号), 4. ページ(始め-終わり), 5. 発行年次

なお, 号と発行年次には( )をつける.

[例] 3) Mukogawa, H., Nishinomiya, S. and Mukogawa, T., J.Biochem., 57, 456-461 (1994)

8) 武庫川花子, 武庫川太郎, 栄養誌, 40, 1213-1215 (1993)

(b) 単行本の場合

- 1. 著者名, 2. 書名(書名はイタリック), 3. 発行所と発行場所(初版の場合は, 第 版は記さない), 4. ページ(始め-終わり), 5. 発行年次( )をつける.

[例] 12) Epstein, E., Mineral Nutrition of Plant, John Wiley and Sons. Inc., New York, pp.187-205 (1986)

15) Geddes, R., in The Polysaccharides, ed. by Aspinall, G.O., Academic Press, London, vol 3, pp.283-336 (1985)

17) 小林 悟, 実験医学, 共立出版, 東京, vol 1, pp.51-63 (1987)

23) 仁田 勇, X線結晶, 仁田 勇ら編, 朝倉書店, 東京, 第 2 版. pp.937-954 (1980)

2) 文献には原則として, 論文タイトルは付けないが, 必要な場合はこの限りではない.

3) 書物の書名は二重カギカッコを, 論文タイトルは一重カギカッコをつけてもよい.

4) 自然化学篇の投稿論文では, 「*ibid*」や「同上」の省略形は用いず, 所載誌(書)名を繰り返し記載すること. ただし, 人文・社会科学篇はこの限りではない.

[例] 1) ヴァルデンフェルス, H., (松山康国・川村永子訳)『絶対無』, 法蔵館, 京都, pp.85-88 (1986)

2) 同上, p.121 (1986)

3) 高橋 進「老・荘における自然」日本倫理学会・金子武蔵編『自然倫理学的考察』以文社, 東京, pp.104-106 (1979)

4) 中村 元『原始仏教の思想 上』(中村 元選集第13巻), 春秋社, 東京, pp.254-260 (1970)

5) 前掲 1), pp.225-241 (1986)

4. その他

1) 本文原稿の各頁の下, 中央部に, 下記の要領で頁数(仮)を書き入れること.

例) 5 / 8 (8 頁の原稿の 5 頁目)

2) 細則によることが著しく困難である場合は, 著者の所属する学会の方式に従っても差し支えない.

3) 原稿は正本, 副本各一部にフロッピーを添え, 必要事項を記入した投稿申込書(193 ページ)とともに提出する.

活字指定一覧表

|                                       | 和 文 論 文               | 欧 文 論 文               |
|---------------------------------------|-----------------------|-----------------------|
| 主 題                                   | 16 P 並体(明朝)           | 16 P Cent. (頭のみ Cap.) |
| 副 題                                   | 14 P 並体               | 14 P Cent. (頭のみ Cap.) |
| 著 者 名                                 | 12 P 並体               | 12 P Cent. (頭のみ Cap.) |
| 大 見 出(緒言など)                           | 12 P 太字体(ゴシック)        | 12 P Gothic           |
| 小 見 出                                 | 10.5 P 太字体            |                       |
| 本文                                    | 10 P 並体               | 10 P Cent.            |
| 本文中の欧語, 数字                            | 10 P Century          | ---                   |
| 本文右肩へ添付の引用番号<br>本文 <sup>1, 3-5)</sup> | 06 P 並体               | 06 P Cent.            |
| 受理年月日脚注題見出                            | 08 P 並体               | 08 P Cent.            |
| 文 献 欄                                 | 09 P 並体               | 09 P Cent.            |
| 欧 文 項                                 | (欧文)                  | (和文)                  |
| 主 題                                   | 16 P Cent. 頭のみ Cap.   | 16 P 並体(明朝)           |
| 副 題                                   | 14 P Cent. 頭のみ Cap.   | 14 P 並体               |
| 著者名                                   | 12 P Cent. 頭のみ Cap.   | 12 P 並体               |
| 本文(要約文)                               | 10.5 P Cent. Boldface | 10.5 P 並体             |
| 図表の表題                                 | 09 P 並体               | 09 P Cent. Boldface   |

|             |                                     |
|-------------|-------------------------------------|
| 欧文人名        | 頭のみ Cap. 後は小文字 Cent. (Rayan.R=Cap.) |
| 学名その他ラテン語   | Italic                              |
| 文献欄         |                                     |
| 欧文雑誌及び書名    | Italic                              |
| 雑誌の巻数(和欧とも) | Gothic                              |

活字書体の指定(原稿に朱書きでアンダーライン)

|               |       |                |       |
|---------------|-------|----------------|-------|
| Capital       | ===== | Italic Capital | ===== |
| Small Capital | ===== | Gothic Italic  | ===== |
| Italic        | ===== | Githic Capital | ===== |
| Gothic        | ===== |                |       |

本文は句読点にする.

## 武庫川女子大学紀要第 巻投稿申込書

紀要編集委員会殿

下記のとおり、紀要  $\left\{ \begin{array}{l} \text{人文・社会科学} \\ \text{自然科学} \end{array} \right\}$  編に投稿したいので申し込みます。(投稿する方に○印)

投稿者氏名

所属(学科・研究室)

内線

メールアドレス

### 1 表題

和文:

欧文:

### 2 著者名(共同執筆の場合のみ。次頁に投稿者を含め全員記入)

### 3 用語(該当語に○印)

和文

欧文

### 4 原稿枚数

合計 枚

内訳 1) 本文 枚

2) 図 枚

3) 写真 枚(台紙の枚数)

4) 表 枚

### 5 提出メディア

FD, CD

USB, その他

### 6 別刷り希望部数

公費負担分 50 部 + 研究費負担分( )部

計 部

審査員承認

1) 氏名 印

2) 氏名 印

切り取り線

割印

投稿論文受付票

殿

受付日 年 月 日

紀要編集委員会

## 紀要論文共同執筆者一覧

[illegible]



平成 25 年 3 月 10 日 印刷

平成 25 年 3 月 31 日 発行

編 集 者 武 庫 川 女 子 大 学  
紀 要 編 集 委 員 会

委 員 長 山根木忠勝

副委員長 野口 芳子

委 員 倉石 哲也 鞍田 三貴

山田 和子

発 行 者 武 庫 川 女 子 大 学  
西宮市池開町 6 番 46 号

印 刷 所 大 和 出 版 印 刷 株 式 会 社  
神戸市東灘区向洋町東 2 - 7 - 2